

## 東町遺跡（2次調査）

－防災集団移転促進事業（小川町地区）に伴う発掘調査－

令和3年3月

南相馬市教育委員会



## 序 文

令和3年(2021)3月をもって、平成23年(2011)に発生した東日本大震災から10年の歳月が流れました。この間に、さまざまな復旧・復興事業が南相馬市内で進められてきました。

南相馬市教育委員会では、文化庁や福島県教育委員会と協議を重ね、これら復旧・復興事業を円滑に推進することと埋蔵文化財の保護を両立させることを第一に取り組み、復興交付金を活用しながら、市内各地における発掘調査を実施してきました。これらの発掘調査には、県内はもとより全国各地から優秀な埋蔵文化財専門職員が被災地の支援のために大勢駆けつけ、被災地の埋蔵文化財の保護に尽力していただきました。

本書で報告する東町遺跡2次調査も、津波・地震により被災された方々の住宅再建を行う防災集団移転促進事業(原町区小川町地区)に伴う発掘調査です。この調査では当初、縄文時代中期の堅穴住居跡が重なって数多くの遺構が確認されたことから、限られた期間内で終了することが困難な状況でした。このため、調査は南相馬市教育委員会の職員に加え、茨城県教育委員会や高知県教育委員会、福島県教育委員会、福島県文化振興財団の専門職員が主体となって実施することになり、さらに、奈良文化財研究所のほか、福島県内の市町村職員の方々にもご協力をいただきました。本調査に関わる他組織の職員はのべ25名にもなります。これらのご支援により、本市の復興事業に大きな影響を与えることなく、調査を完了することができました。皆さまの暖かい支援にあらためて深く感謝を申し上げます。

本市では本書の刊行をもって、復興交付金を用いた埋蔵文化財発掘調査事業が完了となります。今後は、これらの成果をもとに、市内外を問わず、本市の地域文化のすばらしさを広く伝え、守っていくことが大きな責務と感じております。

最後に、発掘調査から報告書作成までご協力いただいた文化庁、福島県教育委員会、埋蔵文化財専門職員を派遣いただいた各所属機関、防災集団移転促進事業関連部局をはじめとする関係機関ならびに関係各位に対し、深く感謝の意を表し、序文といたします。

令和3年3月

南相馬市教育委員会  
教育長 大和田 博行



## 例 言

1. 本書に記載した内容は、平成25～令和2年度にかけて南相馬市教育委員会が実施した防災集団移転促進事業(小川町地区)にかかる東町遺跡の発掘調査の成果報告である。
2. 試掘調査・確認調査にかかる経費は、復興庁による復興交付金の交付を得ている。
3. 発掘調査ならびに報告書刊行は、以下の体制で実施した。

調査主体：南相馬市教育委員会

事務局：南相馬市教育委員会文化財課

調査期間：平成25年4月1日～平成25年7月29日

整理期間：平成25年4月1日～令和3年3月31日

### 【平成26年度】

教 育 長：青木 紀男

事 務 局 長：小林 総一郎

文化財課長：堀 耕平

文化財係長：川田 強

主 査：佐藤 友之

主任文化財主事：荒 淑人

主任文化財主事：藤木 海

主任文化財主事：佐川 久

文化財主事：岩崎 勉

### 【平成27年度】

教 育 長：阿部 貞康

事 務 局 長：小林 総一郎

文化財課長：堀 耕平

文化財係長：川田 強

主 査：佐藤 友之

主任文化財主事：藤木 海

主任文化財主事：佐川 久

文化財主事：岩崎 勉

主任文化財主事：吉岡 弘樹(山梨県支援)

埋蔵文化財調査員：濱須 脩(嘱託)

主任文化財主事：荒 淑人

### 【平成28年度】

教 育 長：阿部 貞康

事 務 局 長：木村 浩之

文化財課長：堀 耕平

文化財係長：川田 強

主 査：佐藤 友之

主任文化財主事：藤木 海

主任文化財主事：佐川 久

主 査：林 紘太郎

埋蔵文化財調査員：濱須 脩(嘱託)

埋蔵文化財調査員：横田 克己(嘱託)

主任文化財主事：荒 淑人

【平成29年度】

教 育 長：阿部 貞康  
事 務 局 長：木村 浩之  
文化財課長：堀 耕平  
文化財係長：川田 強  
主 査：佐藤 友之  
主任文化財主事：荒 淑人

主任文化財主事：藤木 海  
主任文化財主事：佐川 久  
主 査：林 紘太郎  
埋蔵文化財調査員：濱須 脩(嘱託)  
埋蔵文化財調査員：小椋 紗貴江(嘱託)

【平成30年度】

教育長：大和田 博行  
文化財課長：堀 耕平  
文化財係長：川田 強  
主 査：佐藤 友之  
主任文化財主事：荒 淑人

主任文化財主事：佐川 久  
主 査：林 紘太郎  
埋蔵文化財調査員：濱須 脩(嘱託)  
埋蔵文化財調査員：小椋 紗貴江(嘱託)

【平成31年度・令和元年度】

教 育 長：大和田 博行  
事 務 局 長：羽山 時夫  
文化財課長：堀 耕平  
文化財係長：齋藤 直之  
埋蔵文化財担当係長：川田 強  
主 査：荒 淑人

主任文化財主事：藤木 海  
主任文化財主事：佐川 久  
主任文化財主事：佐藤 友之  
埋蔵文化財調査員：濱須 脩(嘱託)  
埋蔵文化財調査員：小椋 紗貴江(嘱託)

【令和2年度】

教 育 長：大和田 博行  
事 務 局 長：羽山 時夫  
文化財課長：鈴木 悦子  
文化財係長：齋藤 直之

埋蔵文化財担当係長：川田 強  
主任文化財主事：藤木 海  
主任文化財主事：佐川 久  
埋蔵文化財調査員：濱須 脩(嘱託)

【整理補助員】

阿部千恵・泉田あずさ・岩崎美和子・岡本ミツ子・岡田光生・加藤恵美子・亀田真由美・  
小泉達彦・佐藤淑子・土屋和美・寺島千尋・飯崎健二・山本樹里・渡部定子

4. 福島県教育委員会の市町村技術支援として、以下の職員が発掘調査に従事した。

福島県教育委員会

齋藤貴史(平成26年度 茨城県教育委員会支援)

中山 晋(平成26年度 沖縄県教育委員会支援)

山崎孝盛(平成26年度 高知県教育委員会支援)

中居和志(平成26年度 京都府教育委員会支援)

門脇秀典(平成26年度 公益財団法人 福島県事業財団出向)

公益財団法人 福島県文化振興財団

松本 茂

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所(当時)

青木 敬、諫早直人、栗山雅夫、芝康二郎、玉田芳英、馬場 基、森川 実、森先一貴、

和田和之輔

福島県内市町村職員(当時)

白河市 鈴木一寿、松林秀和

田村市教育委員会 逸見克己

北塩原村教育委員会 布尾和史

二本松市教育委員会 佐藤真由美、吉田陽一

湯川村教育委員会 梶原文子

会津美里町教育委員会 阿部健太郎、梶原圭介

5. 試掘調査の方法は、以下のとおりである。

- ・表土除去作業：層序を確認しながら0.7mのバックホーを使用した。
- ・遺構検出作業：唐クワ・草ケズリ等を用いて人力作業で行った。
- ・写真記録の作成：35mm判の一眼レフデジタルカメラを用いて作成し、必要に応じてカラーリバーサルフィルム・カラーネガフィルム・モノクロネガフィルムを使用した。
- ・図面記録の作成：平面図はCubic社製「遺構くん」を用いて作成し、微細図等はグリッドに基づいて作成した。遺構検出面に到達する間の基本土層については、堆積土の色調・土質・含有物を観察した上で分層し、各層の層厚・特徴を記録し、遺構を断ち割った場合は、水平基準線を設定して断面図を作成した。
- ・遺物の取り上げ：基本土層から出土したものはトレンチ番号、層位、日付を記録して取り上げ、遺構から出土したものは、遺構番号・層位・日付を記録した上で取り上げた。

6. 発掘調査に際しては、次の機関及び個人から協力を得た。記して感謝の意を申し上げる。

復興庁福島復興局、文化庁文化財部記念物課、独立行政法人文化財機構奈良文化財研究所、福島県教育庁文化財課、公益財団法人福島県文化振興事業団、福島大学、東北大学、福島県相双建設事務所、福田住男、近江俊秀、国武貞克、内田和伸(文化庁文化財部記念物課)、千葉正彦(岩手県教育委員会)、山本 誠・甲斐昭光・渡瀬健太(兵庫県教育委員会)、福島孝行・古川 匠・中居和志(京都府教育委員会)、野村信生・業天唯正(青森県教育委員会)、若林 卓・藤原直人(長野県教育委員会)、杉崎茂樹・堀口智彦(埼玉県教育委員会)、妹尾 聡・橋本玲未(さいたま市教育委員会)、萩野谷正宏(和歌山県教育委員会)、高橋保雄・加藤 学(新潟県教育委員会)、橋本正春・岡本淳一郎・島田修一(富山県教育委員会)、中山 晋(沖縄県教育委員会)、

作山智彦・齋藤貴史(茨城県教育委員会)、武田寛生(静岡県教育委員会)、柴田亮平(山梨県教育委員会)宮地聡一郎(福岡県教育委員会)、内田和典(北海道教育委員会)、山田佑生・千葉勇二・齋木巖(神戸市教育委員会)、木川正夫(愛知県教育委員会)小口英一郎・福島雅儀(鳥取県教育委員会)、山梨千晶(長崎県教育委員会)宮崎敬士(熊本県教育委員会)、真鍋貴匡(香川県教育委員会)、山崎孝隆(高知県教育委員会)、荒木 隆・青山博樹・五十嵐敏裕・岡部睦美・小野忠大・大栗行貴・門脇秀典・木村裕之・木田寿憲・豊田克史・今野 徹・佐藤耕三・佐藤 啓・津田直子・長島雄一・西戸純一・福田秀生・村木 亨・山岸英夫・山本友紀・吉野 滋・渡部 紀(福島県教育委員会)、鈴木 功(白河市)、本間 宏(福島県文化振興財団)、堀江 格(福島市振興公社)、鈴木 雅(蔵王町教育委員会)、田村正樹(七ヶ浜町教育委員会)

7. 本報告書に掲載した第Ⅲ章第2節第1～3項、第3節第1・2項は、齋藤貴史(福島県派遣：茨城県教育委員会)・山崎孝盛(福島県派遣：高知県教育委員会)・松本 茂(福島県文化振興財団)が執筆し、荒 淑人・川田 強(南相馬市教育委員会)が加筆・修正を行った。第Ⅰ・Ⅱ章、第Ⅲ章第1節は荒 淑人、川田 強が執筆した。第Ⅲ章第2節第4～7項、第3節第3項、第Ⅳ章は川田強が執筆した。
8. 本報告書に掲載した遺構図は齋藤貴史が作成し、荒 淑人、川田 強が加筆・修正した。
9. 本報告の編集は川田 強が行った。
10. 調査で得られた資料は、南相馬市教育委員会が保管している。

## 凡 例

1. 図中の方位は真北方向を示し、断面図に記した標高値は海拔高度を示す。
2. 掲載した遺構・遺物の縮尺率は、挿図下方にスケールを付している。
3. 本文並びに図作成に使用した記号・略号は、以下の内容を示す。

T：トレンチ SB：掘立柱建物跡 SI：竪穴住居跡 SK：土坑 P：ピット  
SM：土器埋設遺構 L：基本層位

4. 土層説明に使用した土色は小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局他監修「視標準土式帖」に基づいている。
5. 出土遺物写真図版の番号は遺物図版の番号を示す。
6. 図版に用いたトーンは、以下の内容を示す。

	内面黒色処理		須恵器断面	
	石器磨面		石器付着物	 焼土



# 目次

例	言	i
凡	例	iv
第Ⅰ章	南相馬市を取り巻く環境	1
第1節	遺跡を取り巻く環境	1
第1項	地理的環境	1
第2項	歴史的環境	2
第3項	遺跡の地形と環境	10
第2節	これまでの調査	10
第Ⅱ章	調査に至る経過	12
第1節	復興事業に伴う発掘調査に至る経過	12
第1項	復興事業にかかる調査体制	12
第2項	復興事業推進関連発掘調査事業	13
第2節	事業概要	15
第3節	調査に至る経過	16
第Ⅲ章	調査成果	17
第1節	遺跡の概要	17
第1項	発掘調査の基本方針	17
第2項	基本土層	18
第3項	遺構の分布状況	18

第2節 縄文時代の遺構と遺物	24
第1項 竪穴住居跡	24
第2項 炉跡	77
第3項 土器埋設遺構	83
第4項 土坑	86
第5項 縄文土器	97
第6項 土製品	175
第7項 石器・石製品	179
第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物	193
第1項 竪穴住居跡	193
第2項 掘立柱建物跡	199
第3項 土師器・須恵器	205
第IV章 まとめ	208
第1節 縄文時代の調査成果	208
第2節 奈良・平安時代の調査成果	227
引用・参考文献	229
観 察 表	231
写 真 図 版	252
報 告 書 抄 録	332

## 図版目次

### 【図】

図1 福島県と南相馬市の位置	1	図46 30号竪穴住居跡	77
図2 南相馬市の地形	2	図47 32号竪穴住居跡	78
図3 南相馬市の地質	3	図48 1号炉跡	79
図4 南相馬市遺跡位置図	4	図49 2号炉跡	81
図5 東町遺跡位置図	11	図50 3号炉跡	82
図6 復興事業推進関連発掘調査事業位置図	12	図51 埋設土器遺構	85
図7 防災集団移転促進事業位置図	14	図52 土坑(1)	87
図8 基本土層	18	図53 土坑(2)	88
図9 遺構全体図(1)	19	図54 土坑(3)	89
図10 遺構全体図(2)	20	図55 土坑(4)	90
図11 縄文時代遺構全体図	22	図56 土坑(5)	91
図12 良・平安時代遺構全体図	23	図57 土坑(6)	92
図13 5号竪穴住居跡	25	図58 土坑(7)	93
図14 6号竪穴住居跡(1)	27	図59 土坑(8)	94
図15 6号竪穴住居跡(2)	28	図60 5号竪穴住居跡出土遺物(1)	106
図16 6号竪穴住居跡(3)	29	図61 5号竪穴住居跡出土遺物(2)	107
図17 7号竪穴住居跡	31	図62 6号竪穴住居跡出土遺物(1)	108
図18 9号竪穴住居跡a(1)	33	図63 6号竪穴住居跡出土遺物(2)	109
図19 9号竪穴住居跡a(2)	34	図64 6号竪穴住居跡出土遺物(3)	110
図20 9号竪穴住居跡a(3)	35	図65 6号竪穴住居跡出土遺物(4)	111
図21 9号竪穴住居跡b(1)	37	図66 6号竪穴住居跡出土遺物(5)	112
図22 9号竪穴住居跡b(2)	38	図67 6号竪穴住居跡出土遺物(6)	113
図23 10号竪穴住居跡	40	図68 6号竪穴住居跡出土遺物(7)	114
図24 11号竪穴住居跡	42	図69 6号竪穴住居跡出土遺物(8)	115
図25 12号竪穴住居跡(1)	44	図70 6号竪穴住居跡出土遺物(9)	116
図26 12号竪穴住居跡(2)	45	図71 6・7・8号竪穴住居跡出土遺物	117
図27 13号竪穴住居跡(1)	47	図72 9号竪穴住居跡出土遺物(1)	118
図28 13号竪穴住居跡(2)	48	図73 9号竪穴住居跡出土遺物(2)	119
図29 28号竪穴住居跡	50	図74 9号竪穴住居跡出土遺物(3)	120
図30 14号竪穴住居跡(1)	52	図75 9号竪穴住居跡出土遺物(4)	121
図31 14号竪穴住居跡(2)	53	図76 9号竪穴住居跡出土遺物(5)	122
図32 29号竪穴住居跡(1)	54	図77 9号竪穴住居跡出土遺物(6)	123
図33 29号竪穴住居跡(2)	55	図78 9号竪穴住居跡出土遺物(7)	124
図34 15号竪穴住居跡(1)	57	図79 9号竪穴住居跡出土遺物(8)	125
図35 15号竪穴住居跡(2)	58	図80 9号竪穴住居跡出土遺物(9)	126
図36 16号竪穴住居跡	60	図81 10・11号竪穴住居跡出土遺物	127
図37 17号竪穴住居跡	62	図82 11号竪穴住居跡出土遺物	128
図38 24号竪穴住居跡(1)	64	図83 12号竪穴住居跡出土遺物(1)	129
図39 24号竪穴住居跡(2)	65	図84 12号竪穴住居跡出土遺物(2)	130
図40 18号竪穴住居跡	68	図85 12・13号竪穴住居跡出土遺物	131
図41 19号竪穴住居跡	70	図86 13号竪穴住居跡出土遺物(1)	132
図42 20号竪穴住居跡	71	図87 13号竪穴住居跡出土遺物(2)	133
図43 25号竪穴住居跡	73	図88 13号竪穴住居跡出土遺物(3)	134
図44 26号竪穴住居跡	75	図89 13号竪穴住居跡出土土器(4)	135
図45 27号竪穴住居跡	76	図90 13号竪穴住居跡出土土器(5)	136

図91	14号竪穴住居跡出土土器	137	図139	石器(6)	185
図92	14・29号竪穴住居跡出土土器	138	図140	石器(7)	186
図93	29号竪穴住居跡出土土器	139	図141	石器(8)	187
図94	15・28号竪穴住居跡出土土器	140	図142	石器(9)	188
図95	15号竪穴住居跡出土土器	141	図143	石器(10)	189
図96	15・16号竪穴住居跡出土土器	142	図144	石器(11)	190
図97	17号竪穴住居跡出土土器(1)	143	図145	石器(12)	191
図98	17号竪穴住居跡出土土器(2)	144	図146	1号竪穴住居跡	193
図99	24号竪穴住居跡出土土器(1)	145	図147	2号竪穴住居跡	194
図100	24号竪穴住居跡出土土器(2)	146	図148	3号竪穴住居跡	195
図101	24号竪穴住居跡出土土器(3)	147	図149	4号竪穴住居跡(1)	196
図102	18・24号竪穴住居跡出土土器	148	図150	4号竪穴住居跡(2)	197
図103	18号竪穴住居跡出土土器(1)	149	図151	23号竪穴住居跡	199
図104	18号竪穴住居跡出土土器(2)	150	図152	1号掘立柱建物跡	200
図105	18号竪穴住居跡出土土器(3)	151	図153	2号掘立柱建物跡	202
図106	18号竪穴住居跡出土土器(4)	152	図154	3号掘立柱建物跡	203
図107	18号竪穴住居跡出土土器(5)	153	図155	4号掘立柱建物跡	204
図108	18・19・20号竪穴住居跡出土土器	154	図156	5号掘立柱建物跡	205
図109	20号竪穴住居跡出土土器	155	図157	奈良・平安時代出土土器(1)	206
図110	25・26・30・32号竪穴住居跡出土土器	156	図158	奈良・平安時代出土土器(2)	207
図111	2号炉跡出土土器	157	図159	縄文土器集成図(1)	209
図112	1号炉跡出土土器	158	図160	縄文土器集成図(2)	210
図113	1～3号炉跡出土土器	159	図161	縄文土器集成図(3)	212
図114	1・3・5・6号埋設土器	160	図162	縄文土器集成図(4)	213
図115	4号埋設土器・土坑出土土器(1)	161	図163	縄文土器集成図(5)	214
図116	土坑出土土器(2)	162	図164	縄文土器集成図(6)	215
図117	土坑出土土器(3)	163	図165	縄文土器編年表	216
図118	土坑出土土器(4)	164	図166	縄文時代竪穴住居跡集成図(1)	220
図119	土坑出土土器(5)	165	図167	縄文時代竪穴住居跡集成図(2)	221
図120	土坑出土土器(6)	166	図168	縄文時代竪穴住居跡・複式炉集成図(1)	222
図121	土坑出土土器(7)	167	図169	縄文時代複式炉集成図(2)	223
図122	土坑出土土器(8)	168	図170	縄文時代遺構変遷図(1)	224
図123	ピット群・遺構外出縄文土器(1)	169	図171	縄文時代遺構変遷図(2)	225
図124	遺構外出縄文土器(2)	170	図172	奈良・平安時代遺構変遷図	228
図125	遺構外出縄文土器(3)	171			
図126	遺構外出縄文土器(4)	172			
図127	遺構外出縄文土器(5)	173			
図128	遺構外出縄文土器(6)	174			
図129	遺構外出縄文土器(7)	175			
図130	土製品図面(1)	176			
図131	土製品図面(2)	177			
図132	土製品図面(3)	178			
図133	土製品図面(4)	179			
図134	石器(1)	180			
図135	石器(2)	181			
図136	石器(3)	182			
図137	石器(4)	183			
図138	石器(5)	184			

## 【表】

表1	東町遺跡周辺の遺跡	5
表2	文化財係の体制	13
表3	土坑一覧表	95
表4	石器・石製品出土位置集計表	192
表5	縄文土器観察表	232
表6	土製品観察表	247
表7	石器・石製品観察表	249
表8	奈良・平安時代出土遺物観察表	251

【写真】

写真1	遺跡遠景(南東から)	252	写真48	SI11(南から)	263
写真2	全景(南東から)	252	写真49	SI11焼土範囲(南から)	263
写真3	全景(西から)	253	写真50	SI11土層断面(東から)	263
写真4	全景(北西から)	253	写真51	SI11北西部集石(東から)	263
写真5	全景(南から)	254	写真52	SI11埋設土器出土状況(北から)	263
写真6	遺構検出状況全景(北から)	254	写真53	SI11複式炉土層断面(南から)	264
写真7	SI5複式炉(南から)	255	写真54	SI11複式炉土器埋設部(東から)	264
写真8	SI6(南から)	255	写真55	SI12土層断面(北東から)	264
写真9	SI5複式炉(南西から)	256	写真56	SI12P3・SK88土層断面(東から)	264
写真10	SI5土層断面(南西から)	256	写真57	SI12複式炉土層断面(西から)	264
写真11	SI5複式炉(東から)	256	写真58	SI12複式炉埋設土器(東から)	264
写真12	SI5複式炉土層断面(東から)	256	写真59	SI12複式炉(東から)	264
写真13	SI6覆土集石出土状況(北東から)	256	写真60	SI2P1土層断面(東から)	264
写真14	SI7土層断面(南から)	256	写真61	SI12(南から)	265
写真15	SI6土層断面(東から)	256	写真62	SI12複式炉(南から)	265
写真16	SI6堆積状況(南から)	256	写真63	SI13(南から)	266
写真17	SI6土器出土状況(南から)	257	写真64	SI13複式炉(東から)	266
写真18	SI6土器出土状況(南東から)	257	写真65	SI13(南東から)	267
写真19	SI6土器出土状況(南から)	257	写真66	SI13複式炉検出状況(南西から)	267
写真20	SI6土器出土状況	257	写真67	SI13土層断面(東から)	267
写真21	SI6土器出土状況	257	写真68	SI13複式炉土層断面(南から)	267
写真22	SI9完掘(南から)	258	写真69	SI13複式炉(南から)	267
写真23	SI9(南から)	258	写真70	SI13複式炉(南から)	267
写真24	SI6複式炉土器埋設部(東から)	259	写真71	SI13土層断面(南東から)	267
写真25	SI6複式炉(南から)	259	写真72	SI13複式炉土器埋設部(北東から)	267
写真26	SI6複式炉(東から)	259	写真73	SI13複式炉土器埋設部(東から)	268
写真27	SI6複式炉(南東から)	259	写真74	SI13複式炉完掘(南から)	268
写真28	SI6複式炉断面(南東から)	259	写真75	SI28複式炉土層断面(北西から)	268
写真29	SI9複式炉集石出土状況(北から)	260	写真76	SI28複式炉(南から)	268
写真30	SI9複式炉土層断面(東から)	260	写真77	SI28複式炉(南から)	268
写真31	SI9複式炉a(南西から)	260	写真78	SI13・14・28・29(南西から)	269
写真32	SI9複式炉a(南から)	260	写真79	SI13・14・28・29(南から)	269
写真33	SI9複式炉a土層断面(南西から)	260	写真80	SI14土層断面(南東から)	270
写真34	SI9複式炉b土層断面(西から)	260	写真81	SI14複式炉土層断面(東から)	270
写真35	SI9複式炉b埋設土器	260	写真82	SI14複式炉土層断面(東から)	270
写真36	SI9複式炉b(南西から)	261	写真83	SI14複式炉土器埋設部(東から)	270
写真37	SI9P5	261	写真84	SI29複式炉土層断面(南東から)	270
写真38	SI9P4土器出土状況(南から)	261	写真85	SI29複式炉土(南東から)	270
写真39	SI9P4土器出土状況(南から)	261	写真86	SI29複式炉土器埋設部(南東から)	270
写真40	SI9P4土層断面(南から)	261	写真87	SI14P1土層断面(南から)	270
写真41	SI9焼土(東から)	261	写真88	SI29複式炉埋設土器(南西から)	271
写真42	SI9複式炉検出状況(南から)	261	写真89	SI29複式炉(西から)	271
写真43	SI9北東部集石検出状況(北から)	262	写真90	SI29複式炉土層断面(西から)	271
写真44	SI9土層断面(東から)	262	写真91	SI14・29複式炉埋設土器(西から)	271
写真45	SI10(南から)	262	写真92	SI29複式炉土器(南西から)	271
写真46	SI10土層断面(南東から)	262	写真93	SI14・29壁溝土層断面(東から)	271
写真47	SI10(南から)	262	写真94	SI29北端壁柱穴土層断面(東から)	271

写真95	SI14・29複式炉完掘(南から).....	271	写真141	SI24複式炉(南から).....	283
写真96	SI13・14・28・29(南東から).....	272	写真142	SI24複式炉土層断面(東から).....	283
写真97	SI13・14・24・28・29(東から).....	272	写真143	SI24複式炉土層断面(南から).....	283
写真98	SI15(南東から).....	273	写真144	SI24複式炉土層断面(南東から).....	284
写真99	SI15(南東から).....	273	写真145	SI24複式炉土器埋設部(東から).....	284
写真100	SI15複式炉検出状況(南から).....	273	写真146	SI24複式炉(北東から).....	284
写真101	SI15複式炉(西から).....	273	写真147	SI24複式炉土器埋設部(南から).....	284
写真102	SI15複式炉(南から).....	273	写真148	SI24複式炉埋設土器(南東から).....	284
写真103	SI15複式炉(南西から).....	273	写真149	SI24複式炉完掘(南から).....	285
写真104	SI15複式炉土層断面(南東から).....	273	写真150	SI24P7(東から).....	285
写真105	SI15複式炉(東から).....	273	写真151	SI24P3土層断面(南西から).....	285
写真106	SI15複式炉土器埋設部(南東から).....	274	写真152	SI24P7土層断面(西から).....	285
写真107	SI15複式炉(東から).....	274	写真153	SI24P7土層断面(東から).....	285
写真108	SI15複式炉土層断面(南東から).....	274	写真154	SI25(南東から).....	285
写真109	SI15複式炉完掘(東から).....	274	写真155	SI25土層断面(南から).....	285
写真110	SI15複式炉完掘(南から).....	274	写真156	SI25複式炉(西から).....	285
写真111	SI15(南から).....	275	写真157	SI25(南から).....	286
写真112	SI15複式炉(南東から).....	275	写真158	SI25複式炉(南から).....	286
写真113	SI16(南東から).....	276	写真159	SI25複式炉(土層断面)(東から).....	287
写真114	SI16(北東から).....	276	写真160	SI25作業風景(東から).....	287
写真115	SI17土層断面(南から).....	276	写真161	SI25複式炉完掘(南から).....	287
写真116	SI17(南西から).....	276	写真162	SI5・26・27(南から).....	287
写真117	SI17複式炉(南東から).....	276	写真163	SI5・26・27(東から).....	287
写真118	SI17(南から).....	277	写真164	SI26土層断面(南東から).....	287
写真119	SI17複式炉(南から).....	277	写真165	SI5・26・27(北から).....	287
写真120	SI17複式炉埋設土器(南から).....	278	写真166	SI30(北東から).....	288
写真121	SI17複式炉埋設土器(東から).....	278	写真167	SI30P1(東から).....	288
写真122	SI18 1層除去状況(南東から).....	278	写真168	SI30P2(東から).....	288
写真123	SI18土器出土状況(北西から).....	278	写真169	SI32塹土範囲(南から).....	288
写真124	SI18土層断面(地山断層)(東から).....	278	写真170	SI32(南から).....	288
写真125	SI18(南東から).....	279	写真171	SI32土層断面(南西から).....	289
写真126	SI18土層断面(南東から).....	279	写真172	1・2号炉跡検出状況(南から).....	289
写真127	SI18土器出土状況(北西から).....	280	写真173	1号炉跡隣接地点土器出土状況(南から).....	290
写真128	SI18土器出土状況(北から).....	280	写真174	1号炉跡(南東から).....	290
写真129	SI18土器出土状況(北から).....	281	写真175	SI32土層断面(南東から).....	291
写真130	SI19土層断面(南東から).....	281	写真176	1号炉跡隣接地点土器検出状況.....	291
写真131	SI19P1土層断面(南から).....	281	写真177	1・2号炉跡検出状況(南西から).....	291
写真132	SI19P3土層断面(南から).....	281	写真178	1号炉跡(南西から).....	291
写真133	SI20(南西から).....	281	写真179	1号炉跡石組部(南から).....	291
写真134	SI19(南東から).....	282	写真180	1号炉跡土層断面(南から).....	291
写真135	SI20(南西から).....	282	写真181	1号炉跡石組部土層断面(東から).....	291
写真136	SI20P2土層断面(南から).....	282	写真182	1号炉跡土器埋設部土層断面(東から).....	291
写真137	SI20P6土層断面(南から).....	282	写真183	1号炉跡土層断面(東から).....	292
写真138	SI24(南から).....	282	写真184	1号炉跡完掘(南東から).....	292
写真139	SI24(北から).....	283	写真185	1号炉跡隣接地点土器出土状況.....	292
写真140	SI24(南東から).....	283	写真186	2号炉跡(新)(南から).....	292

写真187	2号炉跡(新)(南から)	292	写真233	SK19・55土層断面(南東から)	301
写真188	2号炉跡(新・旧)(東から)	293	写真234	SK19・55(南から)	301
写真189	2号炉跡(新・旧)(南東から)	293	写真235	SK19・55土器出土状況(南から)	301
写真190	2号炉跡(新・旧)(北から)	293	写真236	SK21土層断面(南東から)	301
写真191	2号炉跡(旧)土層断面(東から)	293	写真237	SK21完掘(南から)	301
写真192	2号炉跡(新・旧)土層断面(東から)	293	写真238	SK25・26土層断面(南東から)	301
写真193	2号炉跡(旧)完掘(南東から)	294	写真239	SK24土層断面(北東から)	302
写真194	2号炉跡(新)完掘(東から)	294	写真240	SK24(南から)	302
写真195	SM1(東から)	294	写真241	SK44土層断面(東から)	302
写真196	SM1完掘(東から)	294	写真242	SK47(北から)	302
写真197	SM1(東から)	294	写真243	SK46土層断面(西から)	302
写真198	3号炉跡土層断面(南から)	295	写真244	SK46(西から)	302
写真199	SM2土層断面(南東から)	295	写真245	SK48(東から)	302
写真200	SM3土層断面(南西から)	296	写真246	SK49土層断面(南から)	302
写真201	SM2土層断面(東から)	296	写真247	SK50土層断面(北東から)	303
写真202	SM3土層断面(西から)	296	写真248	SK53土層断面(東から)	303
写真203	SM5(北西から)	296	写真249	SK51・52土層断面(南東から)	303
写真204	SM5土層断面(西から)	296	写真251	SK54土層断面(東から)	303
写真205	SM4土層断面(南東から)	297	写真250	SK51・52(東から)	303
写真206	SM4土層断面(南から)	297	写真252	SK54土器出土状況(東から)	303
写真207	SM4完掘(南東から)	297	写真253	SK54土器出土状況(東から)	303
写真208	SM5検出状況(西から)	297	写真254	SK56土層断面(北東から)	303
写真209	SM5断割り状況(西から)	297	写真255	SK57土層断面(東から)	304
写真210	SM6(西から)	298	写真256	SK58土層断面(南から)	304
写真211	SM6検出状況(西から)	298	写真257	SK59・60土層断面(南から)	304
写真212	SM6土層断面(西から)	298	写真258	SK61土層断面(東から)	304
写真213	SM6完掘(西から)	298	写真259	SK62土層断面(南から)	304
写真214	PG1-P73(東から)	298	写真260	SK62土層断面南(東から)	304
写真215	SK1・2・3土層断面(北から)	299	写真261	SK64土層断面(東から)	304
写真216	SK5・6土層断面(北から)	299	写真262	SK64(東から)	304
写真217	SK5・6土層断面(南東から)	299	写真263	SK66土層断面(西から)	305
写真218	SK5・6完掘(北東から)	299	写真264	SK67・68土層断面(南から)	305
写真219	SK5・6土器出土状況(東から)	299	写真265	SK67土層断面(西から)	305
写真220	SK7土層断面(東から)	299	写真266	SK67(北東から)	305
写真221	SK7土器出土状況(東から)	299	写真267	SK67土器出土状況(北東から)	305
写真222	SK7完掘(北東から)	299	写真268	SK69土層断面(北東から)	305
写真223	SK08・11土層断面(東から)	300	写真269	SK70土層断面(北から)	305
写真224	SK09土層断面(南東から)	300	写真270	SK71土層断面(北西から)	305
写真225	SK10土層断面(北から)	300	写真271	SK72土層断面(北から)	306
写真226	SK11土層断面(西から)	300	写真272	SK72(北西から)	306
写真227	SK13土層断面(南から)	300	写真273	SK73土層断面(南から)	306
写真228	SK14土層断面(南東から)	300	写真274	SK74土層断面(南から)	306
写真229	SK15土層断面(東から)	300	写真275	SK75土層断面(北から)	306
写真230	SK16土層断面(東から)	300	写真276	SK76土層断面(南東から)	306
写真231	SK17土層断面(南東から)	301	写真277	SK77土層断面(南から)	306
写真232	SK18土層断面(東から)	301	写真278	SK78土層断面(南から)	306

写真279	SK79土層断面(南から).....	307	写真325	技術支援(白河市職員).....	313
写真280	SK80土層断面(南西から).....	307	写真326	技術支援(奈良文化財研究所職員).....	314
写真281	SK81土層断面(北西から).....	307	写真327	技術支援(奈良文化財研究所職員).....	314
写真282	SK82土層断面(南から).....	307	写真328	技術支援(奈良文化財研究所職員).....	314
写真283	SK85・86土層断面(東から).....	307	写真329	技術支援(奈良文化財研究所職員).....	314
写真284	SK85・86(南東から).....	307	写真330	技術支援(奈良文化財研究所職員).....	314
写真285	SK87土層断面(東から).....	307	写真331	技術支援(茨城県職員).....	315
写真286	SK87(東から).....	307	写真332	文化庁・福島県教育委員会現地視察.....	315
写真287	SI01土器出土状況(東から).....	308	写真333	現地説明会.....	316
写真288	SI01土器出土状況(東から).....	308	写真334	原町第一小学校生徒見学風景.....	317
写真289	SI01(北から).....	308	写真335	現地説明会.....	318
写真290	SI03(北西から).....	308	写真336	縄文土器(1).....	319
写真291	SI02(北西から).....	308	写真337	縄文土器(2).....	320
写真292	SI04(北から).....	308	写真338	縄文土器(3).....	321
写真293	SI04P1土層断面(北西から).....	308	写真339	縄文土器(4).....	322
写真294	SI04P5土層断面(東から).....	308	写真340	縄文土器(5).....	323
写真295	SI04土層断面(南から).....	309	写真341	縄文土器(6).....	324
写真296	SI23(北西から).....	309	写真342	縄文土器(7).....	325
写真297	SB01柱穴列(北東から).....	309	写真343	縄文土器(8).....	326
写真298	SB02検出状況(西から).....	309	写真344	縄文土器(9).....	327
写真299	SB02(北から).....	309	写真345	縄文土器(10).....	328
写真300	SB02(北から).....	310	写真346	石器(1).....	329
写真301	SB02(北西から).....	310	写真347	石器(2).....	330
写真302	SB03(北から).....	310	写真348	奈良・平安時代遺物、土製品.....	331
写真303	SB03(西から).....	310			
写真304	SB03検出状況(北から).....	310			
写真305	SB04(北東から).....	311			
写真306	SB04検出状況(北から).....	311			
写真308	SB05土層断面(北西から).....	311			
写真307	SB04(北から).....	311			
写真309	SB05(北西から).....	311			
写真310	SI09作業風景.....	312			
写真311	SI06作業風景.....	312			
写真312	3号炉跡3作業風景.....	312			
写真313	SI18周辺作業風景.....	312			
写真314	1・2号炉跡作業風景.....	312			
写真315	SI24周辺作業風景.....	312			
写真316	SI18作業風景.....	312			
写真317	SI13作業風景.....	312			
写真318	SI01作業風景.....	313			
写真319	1・2号炉跡作業風景.....	313			
写真320	SI24作業風景.....	313			
写真321	SI6作業風景.....	313			
写真322	技術支援(奈良文化財研究所ほか).....	313			
写真323	技術支援(二本松市職員).....	313			
写真324	技術支援(二本松市職員).....	313			



# 第I章 南相馬市を取り巻く環境

## 第1節 遺跡を取り巻く環境

### 第1項 地理的環境

福島県南相馬市は、福島県太平洋岸の中央部やや北寄りに位置する。行政境としては、北は相馬市、南は双葉郡浪江町、西は相馬郡飯館村と接する。

福島県太平洋側にあたる浜通り地方の地質は、阿武隈高地東縁部と浜通り低地帯、双葉断層(岩沼-久之浜構造線)により明瞭に区分される。西部域は南北方向に連なる阿武隈高地、東部域は太平洋に向かって派生する低丘陵と海成・河成段丘、沖積平野で構成される。西側の阿武隈高地にかかる丘陵の標高は100～150m、海岸部に近い市中心付近では標高50～60m、海岸部では20～30mとなる。丘陵地の地質は主に第三紀の凝灰岩を基盤としている。

東町遺跡が位置する原町区は南相馬市の中部にあたり、阿武隈高地から東の太平洋に向かって新田川、太田川が流れる。河川流域には沖積地が広がり、それを取り囲むように樹枝状に丘陵・段丘が存在する。段丘は大きく3段階に分別され、中位段丘が特に発達し、比較的広い平坦面を形成する。

東町遺跡は、新田川中流域の南岸域にあたり、新田川とその支流水無川との合流地点付近にあたる。標高20m以上を測る広大な平坦面を呈する中位段丘の縁辺に位置する。この段丘は江戸時代の野馬追の野馬が放牧されていた「野馬追原」に相当する。段丘の北側には新田川等の氾濫原としての沖積地が広がる。東町遺跡から北側の沖積地の南北幅は1.3kmを測る。

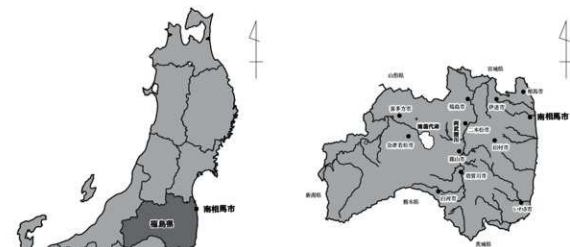


図1 福島県と南相馬市の位置

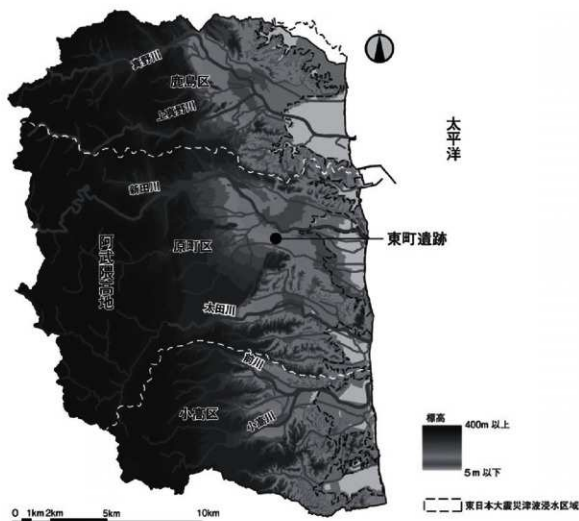


図2 南相馬市の地形

## 第2項 歴史的環境

南相馬市内には、旧石器時代から近代にかけての遺跡が743遺跡登録されている。真野古墳群・桜井古墳・羽山横穴・浦尻貝塚・薬師堂石仏・観音堂石仏・泉官衙遺跡・横大道製鉄遺跡の8遺跡は国史跡に、横手廃寺跡・横手古墳群・泉廃寺跡・小高城跡の4遺跡は福島県史跡に指定されている。指定史跡の時代、種別が多岐にわたっていることが特徴的である。また、奈良・平安時代の製鉄遺跡が数多く存在し、丘陵・段丘の多くに遺跡が分布している。

東日本大震災後の復興事業が計画され、多くの表面調査、試掘調査が実施された。これらの調査により、震災後から現在まで82遺跡が新規登録されている。開発は市内全域にわたっており、これまで調査が及び切れなかった、沖積地や丘陵部において新たに遺跡が発見されている。

東町遺跡周辺でも丘陵部においては谷地中遺跡(205)、天化沢A遺跡(208)、天化沢B遺跡(209)、

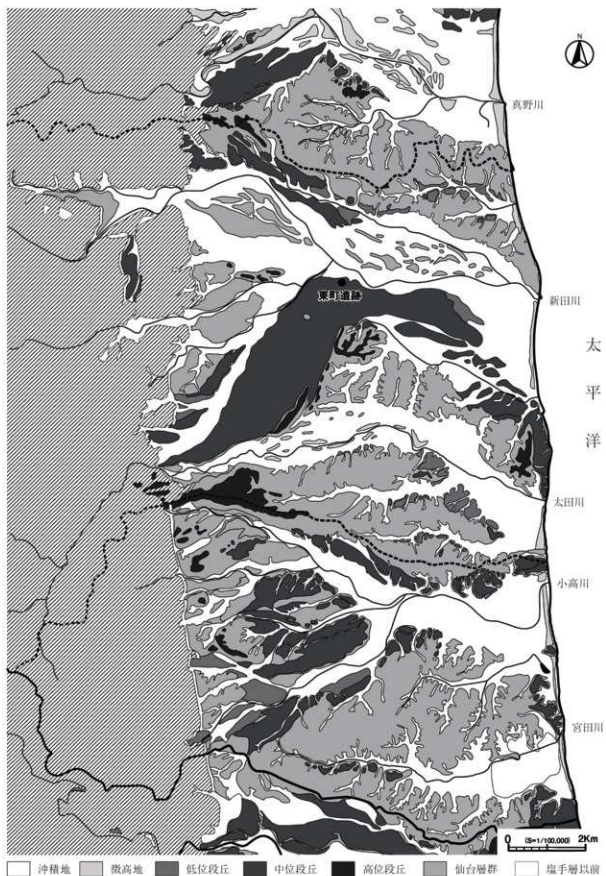


図3 南相馬市の地質

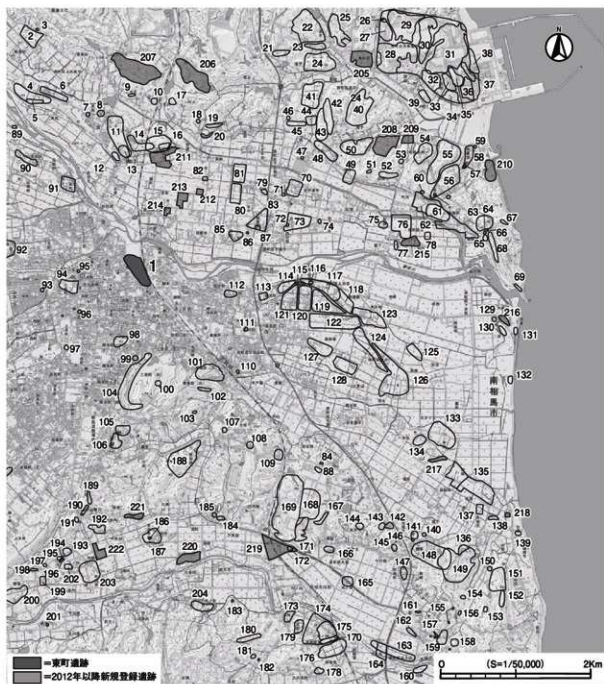


図4 南相馬市遺跡位置図

比丘尼沢遺跡(207)、比丘尼沢B遺跡(206)の製鉄遺跡、沖積地においては太鼓田B遺跡(212)、上北高平西谷内遺跡(213)、芦ノ口前遺跡(214)などの縄文、奈良・平安の集落跡が確認されている。

ここでは、東町遺跡の所在する原町区の新田川・太田川中下流域の遺跡を中心に概観する。

#### 旧石器時代

市内の旧石器時代の遺跡はナイフ形石器や彫刻型石器などを含む後期旧石器が中心である。新田川中下流域では高松遺跡(6)、南町遺跡(96)、橋本町B遺跡(99)で石刃、橋本町A遺跡(98)で彫刻型石器、尖頭器が出土している。太田川流域では、熊下遺跡(201)で尖頭器が出土している。

表1 東町遺跡周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	東町遺跡	集落跡	40	道金沢遺跡	散布地
2	入道迫火葬墓	その他の墳墓	41	広平遺跡	散布地
3	西高松遺跡	製鉄跡	42	堤下A遺跡	製鉄跡
4	高松C遺跡	散布地	43	荷渡B遺跡	散布地
5	北新田の御壇	その他の墳墓	44	北山遺跡	散布地
6	高松遺跡	散布地	45	北山横穴墓群	横穴墓
7	高松台遺跡	散布地	46	北山古墳群	古墳
8	山田迫遺跡	散布地	47	荷渡遺跡	散布地
9	北沢横穴墓群	横穴墓	48	荷渡古墳群	古墳
10	植松新田遺跡	散布地	49	法輪寺跡	寺社跡
11	植松B遺跡	集落跡	50	堤下B遺跡	集落跡
12	植松C遺跡	散布地	51	寺前遺跡	散布地
13	植松庵寺跡	寺社跡	52	山辺古墳群	古墳
14	植松A遺跡	散布地	53	町池横穴墓	横穴墓
15	寛徳寺城跡	城館跡	54	浦頭遺跡	製鉄跡
16	堂坂遺跡	散布地	55	脇遺跡	散布地
17	北沢遺跡	散布地	56	西走B遺跡	製鉄跡
18	穀木沢A遺跡	製鉄跡	57	地藏堂古墳群	古墳
19	新山前B横穴墓群	横穴墓	58	地藏堂B遺跡	集落跡
20	新山前横穴墓群	横穴墓	59	地藏堂遺跡	散布地
21	物見山B遺跡	窯跡製鉄跡	60	町池窯跡	窯跡
22	追合B遺跡	集落跡	61	泉長者第跡	城館跡
23	物見山遺跡	散布地	62	泉官衙遺跡	官衙跡
24	追合遺跡	散布地	63	泉館跡	城館跡
25	追合C遺跡	製鉄跡	64	館前古墳A	古墳
26	烏井沢遺跡	製鉄跡	65	惣ヶ沢遺跡	散布地
27	烏井沢B遺跡	製鉄跡	66	館前古墳B	古墳
28	烏打沢A遺跡	製鉄跡	67	地藏堂横穴墓群	横穴墓
29	烏打沢B遺跡	製鉄跡	68	鎮塚古墳群	古墳
30	長壽遺跡	製鉄跡	69	大磯横穴墓群	横穴墓
31	大船迫A遺跡	製鉄跡	70	下北高平館跡	城館跡
32	前田B遺跡	製鉄跡	71	古館遺跡	散布地
33	前田C遺跡	製鉄跡	72	下高平川原の板石塔婆	石造物
34	前田A遺跡	製鉄跡	73	荒井前遺跡	寺社跡
35	船沢B遺跡	製鉄跡	74	牛渡前遺跡	散布地
36	船沢A遺跡	製鉄跡	75	泉平館跡	城館跡
37	大船迫C遺跡	製鉄跡	76	広畑遺跡	集落跡
38	大船迫B遺跡	製鉄跡	77	正福寺跡	寺社跡
39	金沢館跡	城館跡	78	町遺跡	集落跡

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
79	杉内遺跡	散布地	118	桜井C遺跡	散布地
80	天神谷地遺跡	散布地	119	桜井D遺跡	散布地
81	貝餅遺跡	散布地	120	桜井B遺跡	散布地
82	太鼓田遺跡	散布地	121	高見町B遺跡	散布地
83	谷中遺跡	散布地	122	上洪佐原田遺跡	散布地
84	東原遺跡	窯跡	123	上洪佐原屋敷遺跡	集落跡
85	沢田館跡	城館跡	124	原山遺跡	散布地
86	下高平堂後の板石塔婆	石造物	125	赤沼遺跡	散布地
87	東殿跡	城館跡	126	菅浜原畑遺跡	散布地
88	川内迫C遺跡	散布地	127	栗掛場遺跡	散布地
89	台遺跡	散布地	128	栗掛場B遺跡	散布地
90	五反田遺跡	散布地	129	下洪佐赤沼遺跡	散布地
91	北新田本町遺跡	散布地	130	湊遺跡	散布地
92	牛越城跡	城館跡	131	大身遺跡	散布地
93	東町場遺跡	散布地	132	北萱浜遺跡	散布地
94	三島町遺跡	散布地	133	南才ノ上遺跡	散布地
95	三島町B遺跡	散布地	134	愛原遺跡	散布地
96	南町遺跡	散布地	135	五畝田・大這遺跡	集落跡
97	夜ノ森遺跡	散布地	136	京塚沢F遺跡	製鉄跡
98	橋本町A遺跡	散布地	137	大這瓦窯跡	窯跡
99	橋本町B遺跡	散布地	138	五畝田B遺跡	散布地
100	折ヶ沢瓦窯跡	窯跡製鉄跡	139	京塚沢遺跡	散布地
101	大塚遺跡	製鉄跡	140	鶴崎遺跡	散布地
102	大塚横穴墓群	横穴墓	141	菅山館跡	城館跡
103	石橋横穴墓群	横穴墓	142	梨木下東館跡	城館跡
104	折ヶ沢遺跡	散布地	143	梨木下西館跡	城館跡
105	出口遺跡	製鉄跡	144	戸屋下館跡	城館跡
106	出口B遺跡	散布地	145	藤迫館跡	城館跡
107	東谷地遺跡	散布地	146	鶴崎B遺跡	散布地
108	小原遺跡	散布地	147	明神館跡	城館跡
109	川内迫遺跡	散布地	148	鶴崎館跡	城館跡
110	磐城無線電信局原町送信所跡	その他	149	京塚沢瓦窯跡B	窯跡
111			150	京塚沢瓦窯跡A	窯跡
112	桜井原畑遺跡	散布地	151	京塚沢C遺跡	製鉄跡
113	高見町C遺跡	散布地	152	京塚沢C遺跡	窯跡
114	桜井古墳群高見町支群	古墳	153	上作田遺跡	散布地
	高見町A遺跡	集落跡	154	京塚沢E遺跡	製鉄跡
115	桜井荒屋敷遺跡	散布地	155	田堤遺跡	製鉄跡
116	桜井A遺跡	散布地	156	京塚沢D遺跡	製鉄跡
117	桜井古墳群上洪佐支群	古墳			

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
157	袖原古墳群	古墳	190	羽山横穴墓群	横穴墓
158	袖原A遺跡	散布地	191	新橋横穴墓群	古墳横穴墓
159	袖原C遺跡	散布地	192	与太郎内古墳群	古墳
160	米々沢古第跡	城館跡	193	上太田前田A遺跡	散布地
161	坂下横穴墓群	横穴墓	194	上太田前田古墳	古墳
162	水押遺跡	散布地	195	重風公御壇	その他の墳墓
163	谷地畑遺跡	散布地	196	前田横穴墓群	横穴墓
164	広徳寺跡	寺社跡	197	上太田前田B遺跡	製鉄跡
165	芦ノ坪遺跡	散布地	198	後田横穴墓群	横穴墓
166	烏古館跡	城館跡	199	坂下遺跡	散布地
167	西迫・東迫横穴墓群	横穴墓	200	塚場遺跡	散布地
168	蛭沢遺跡群	製鉄跡	201	熊下遺跡	散布地
169	川内迫B遺跡群	製鉄跡	202	上ノ内遺跡	集落跡
170	高古館跡	城館跡	203	町川原遺跡	集落跡
171	西迫横穴墓群	横穴墓	204	益田館跡	城館跡
172	塚田遺跡	散布地	205	谷地中遺跡	製鉄跡
173	古内遺跡	散布地	206	比丘尼沢B遺跡	製鉄跡
174	城ノ内遺跡	散布地	207	比丘尼沢遺跡	製鉄跡
175	高館跡	城館跡	208	天化沢A遺跡	製鉄跡
176	大久保遺跡	散布地	209	天化沢B遺跡	散布地
177	竹花A遺跡	集落跡	210	地藏堂C遺跡	その他の生産遺跡
178	高野館跡	城館跡	211	竹下遺跡	集落跡
179	枝の上遺跡	散布地	212	太鼓田B遺跡	集落跡
180	権現壇横穴墓群	横穴墓	213	上北高平西谷内遺跡	集落跡
181	高林遺跡	散布地	214	芦ノ口前遺跡	集落跡
182	高林横穴墓群	横穴墓	215	前向遺跡	集落跡
183	姫塚古墳	古墳	216	平遺跡	集落跡
184	道内迫横穴墓群	横穴墓	217	愛原B遺跡	その他の生産遺跡
185	藤沼館跡	城館跡	218	平北畑遺跡	集落跡
186	別所古墳	古墳	219	塚田B遺跡	集落跡
187	別所館跡	城館跡	220	下太田高田遺跡	集落跡
188	石橋遺跡	窯跡	221	八重畑遺跡	散布地
189	中畑横穴墓群	横穴墓	222	八重草遺跡	散布地

## 縄文時代

縄文時代になると各地域を代表する河川に沿って遺跡が分布している。新田川・太田川中下流域では、山田迫遺跡(8)、上渋佐原屋敷遺跡(123)、桜井A遺跡(116)、高見町A遺跡(114)等で早期から前期にかかる遺構、遺物が確認されている。新田川流域の海岸部にあたる五畝田・犬這遺跡(135)では、近年、本調査が実施され、大木2a式期を中心とし、大木1～4式の堅穴住居跡が確

認されている(福島県教育委員会2017b)。標高7m前後の低位段丘上に立地しており、当時の汀線に隣接する位置にある立地にもかかわらず、貝塚を伴わず、堅穴住居跡の重複もほぼ認められないことから、一時的な居住が想定されている。しかしながら、前期を通じた土器が出土しており、場としての継続性があり、海岸部の前期集落の一類型を呈するものとして注目される。なお、赤沼遺跡(125)で大木2a式の土器が出土しているが、近年の調査によりこれらは二次堆積の土器群であることが明らかとなった(南相馬市2017b)。

新田川北岸にあたる植松C遺跡(12)では、前期末から中期初頭にかけての遺物包含層が確認され、多量の土器が出土している(福島県教育委員会2018b)。中期の遺跡としては、阿武隈高地裾部にある新田川北岸の高松遺跡(6)・高松C遺跡(4)で大木7～10式の土器が出土しているほか、新田川中流域の植松A遺跡(14)では大木9・10式期の複式竈を伴う堅穴住居跡が調査されている。太田川流域では町川原遺跡(203)で中期末葉の堅穴住居跡が確認されている。

後期から晩期の遺跡は、上流域に比較し、遺跡数は少ない。太田川流域では、後期前半の堅穴住居跡が中流域の上ノ内遺跡(202)において、後期前半の集落跡が確認されている。新田川流域では後期前葉として、折ヶ沢遺跡(104)などの丘陵・段丘上の遺跡のほか、沖積地に天神谷地遺跡(80)から後期中葉から晩期にかけての遺跡が認められる。隣接する太鼓田遺跡(82)と合わせ、その立地に時期的な特徴を指摘できる。

### 弥生時代

弥生時代の前期から中期初頭にかけては、遺構や遺物の出土例が少なく、具体的な様相は不明である。

中期中葉以降になると遺構や遺物の出土例が増加する。新田川下流域南岸には桜井式の標識遺跡として知られる桜井遺跡がある。竹島国基の採集により著名な桜井遺跡は現在、桜井A～D遺跡、桜井荒屋敷遺跡、高見町A・B遺跡等に分別されている。各遺跡からは当該期の土器棺墓を検出している他、鹿島区天神沢遺跡と同じく、石庖丁などの豊富な石器群が採集されている。丘陵を広範囲に調査した金沢製鉄遺跡群(26～38)では、複数遺跡・地点で堅穴住居、土坑墓、遺物包含層を確認している。堅穴住居は長瀬遺跡(30)などで丘陵頂部を中心に存在するが、検出例は多くはない。しかし、丘陵谷部に多くの遺物包含層が形成されており、本来、この遺物包含層に住居が伴っていた可能性が高い。時期は中期後半の桜井式期を主体とし、わずかに後期の天王山式のみみられる。

太田川中流域の川内迫B遺跡群F地点(169)では柵形囲式土器とともに石包丁や大型蛤刃石斧などの石器群が出土している。丘陵頂部にはピット群があり、建物を構成していたとみられる。

この他、植松新田遺跡(10)、小原遺跡(108)、五畝田・犬遺跡(135)、大久保遺跡(176)、泉官衛遺跡(62)など、遺構検出例は少ないものの、多くの丘陵・段丘上で土器棺墓などのほか、中期後半の桜井式を中心とした土器、石器などの遺物が確認されており、丘陵・段丘域を中心に多くの集落が存在していたと考えられる。

後期から終末期になると遺構や遺物の出土例が激減する。高見町A遺跡(114)からは北関東地方



を中心に分布する十王台式期の土器が出土しており、続く古墳時代前期への変動と関連するものと考えられる。

### 古墳時代

前期古墳として、新田川下流域南岸の河岸段丘上に桜井古墳群上洪佐支群(117)が上げられる。1号墳(桜井古墳)は主軸長74.5mの前方後方墳である。珠文鏡が出土した7号墳は1辺30mを測る方墳であり、これらは新田川流域の首長墓と評価できる。同時期の集落としては、桜井古墳と同じ段丘上にある高見町A遺跡(114)や桜井B遺跡(120)がある。また、原山遺跡(124)から塩釜式土器が出土している。この他、五畝田・犬這遺跡(135)、湊遺跡(130)、荒井前遺跡(73)など海岸部、沖積地への立地が認められる。

中期古墳としては、新田川河口域の鎮塚古墳群(68)が可能性あるものとして挙げられる。後期古墳は各流域で多く分布しており、新田川北岸では北山古墳群(46)、荷渡古墳群(48)、山辺古墳群(52)、南岸域では桜井古墳群高見町支群(114)、壹浜原畑遺跡(126)、太田川流域の与太郎内古墳群(192)などがある。古墳時代終末期になると装飾横穴墓として知られる羽山横穴墓群(190)など、後期古墳以上に多くの横穴墓群が確認されている。太田川流域では他に、中流域北岸に西迫横穴墓群(171)や西迫・東迫横穴墓群(167)、南岸では権現壇横穴墓群(180)や高林横穴墓群(182)などが認められる。新田川流域においても、北岸では大磯横穴墓群(69)、北山横穴墓群(45)、新山前横穴墓群(20)など下流域から中流域の丘陵に全体的に分布している。

中後期の集落は、古墳群、横穴墓群に対応するように分布しており、新田川下流域の地藏堂B遺跡(58)、上洪佐前屋敷遺跡(123)、原山遺跡(124)、太田川流域の梨木下西館跡(143)で堅穴住居跡が調査されている。

### 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡では行方郡家とされる泉官衙遺跡(泉寮寺跡)(62)があり、郡庁院・正倉院・館院などが確認されている。泉官衙遺跡に関連する遺跡としては、瓦供給窯跡として、京塚沢瓦窯跡A・B(150・149)、瓦製作が関連する植松庵寺跡(13)、「寺」「厨」などの墨書土器とともに灰釉陶器が出土する広畑遺跡(76)などがある。

このほか、当該期では、丘陵域全体に渡って製鉄遺跡が多数確認されている。市内の製鉄遺跡の分布をみると海岸部から内陸部にかけての丘陵の広範囲で鉄滓や羽口の散布が確認されており、丘陵の大部分が鉄生産に関連して利用されていたものと考えられる。新田川流域では、大規模製鉄遺跡群である金沢製鉄遺跡群(26～38)のほか、天化沢A・B遺跡(208・209)、比丘尼沢遺跡(207)、比丘尼沢B遺跡(206)、南岸では京塚沢瓦窯跡A・B(150・149)、大塚遺跡(101)、折ヶ沢瓦窯跡(100)などがある。

集落遺跡では、製鉄遺跡の広がりと同様に市内全域の丘陵、段丘に分布している。中でも新田川南岸の高見町A遺跡(114)、桜井D遺跡(119)、原山遺跡(124)、上洪佐原田遺跡(122)では多数の堅穴住居が確認されている。太田川流域では梨木下西館跡(143)、町川原遺跡(203)で調査例がある。

## 中・近世

主な中世の遺跡としては城館跡が挙げられ、下総国から下向した相馬氏の最初の居城とされる別所館跡(187 現太田神社)のほか、一時的に相馬氏の居城であった牛越城跡(92)などがある。しかし、発掘調査例は少ない。発掘調査された泉平館(75)では、14～17世紀に至る遺物が出土している。

近世の野馬追に用いる野馬の放牧地を土手で囲む野馬土手は東町遺跡が所在する段丘を大きく取り囲んで築かれていた。東西約10km×南北約2.6kmの範囲に築かれており、土手内外の出入り口となった羽山岳の木戸跡は南相馬市指定史跡に指定されている。また、近世の墓域として、法幢寺跡(49)や正福寺跡(77)の調査がある。

### 第3項 遺跡の地形と環境

東町遺跡は新田川、その支流の水無川の合流地点付近、河川の南岸にあたる段丘の縁辺に位置する。標高は約20mを測り、調査地点の北側ならびに西側に段丘崖が認められ、沖積地に至る。沖積地との比高差は4～5mを測る。現在市街地となっていることから、旧地形の把握は困難である。しかし、調査地点の西側には段丘が東に挟まれる形状で段丘崖があり、調査地点の東側に埋没谷が存在する可能性がある。

## 第2節 これまでの調査

東町遺跡は昭和35年(1960)の竹島國基による埋蔵文化財包蔵地調査カードに、大正年間の土器出土が記録されている。その後、昭和42年(1967)に東町陸橋建設時に福島県立原町高等学校郷土史研究会による発掘調査がされた(南相馬市2011)。その際の出土資料は大木8b式を主体とし、縄文時代中期中葉から後葉、晩期に相当する土器が出土している。

その後、調査例は長らくなかったが、本報告に先立つ試掘調査が平成25年(2013)に行われた(1次調査 南相馬市教育委員会2017b)。その後、同年に集合住宅に伴う試掘調査が実施され、縄文土器がわずかに出土している(3次調査)。平成26年(2014)には1次調査の結果に基づき、本報告となる2次調査が実施されている(南相馬市教育委員会2019a)。平成29年(2017)には個人住宅建設に伴う試掘調査が実施され、古墳に相当するカマドを持つ堅穴住居跡を確認した(4次調査)。この際は工事により遺構の損壊がないことから、本調査は実施しなかった。



図5 東町遺跡位置図

## 第Ⅱ章 調査に至る経過

### 第1節 復興事業に伴う発掘調査に至る経過

#### 第1項 復興事業にかかる調査体制

南相馬市は、東日本大震災発生後、しばらくの間は震災対応ならびに復旧への対応に追われることとなり、同時に被害状況の把握とともに復旧・復興への計画立案が喫緊の課題となった。

南相馬市の震災発生以前の文化財保護体制には南相馬市教育委員会事務局文化財課と南相馬市博物館の2課3係で課長職を含めた人員配置は合計35人であった。このうち埋蔵文化財を所管していたのは文化財課文化財係で、係長職を含む人員体制は11人(臨時職員を含む)であった。しかし、震災発生後の平成23年度(2011)には文化財係員の4人が、震災対応のために市長部局への配置換えが行われ、事務局体制も1課3係の総数5人の人員になり、通常の文化財保護行政は対応が困難であった。このため、平成23年度は復旧・復興事業計画に対する埋蔵文化財の取り扱いの調整・協議が中心となり、試掘調査等の本格的な対応は平成24年度(2012)から開始された。

平成24年度には、市長部局へ配置換えとなった文化財係職員4人のうち2人が文化財係へ再配置され、7人(嘱託職員・臨時職員を含む)の人員体制となった。このうち埋蔵文化財に関連する業務に対応する職員は係員2人という人員体制で市内各所にて計画される多種多様な復興事業ならびに一般開発事業に対応するのは困難な状態であった。

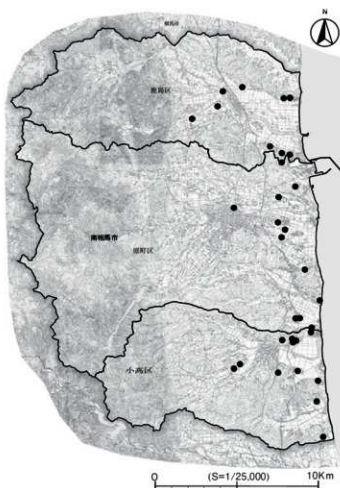


図6 復興事業推進関連発掘調査事業位置図

表2 文化財係の体制

年度	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	R2
課長職	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
文化財係	係長職	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2
	係員	5	1	3	5	5	5	5	5	5	4
	嘱託 (会計年度フル)						1	2	2	2	4
	臨時職員 (会計年度パート)	4	0	2	5	9	8	8	7	6	5
合計	11	3	7	12	16	16	17	16	15	17	15

このことから、福島県教育委員会と関連事業の取り扱いについての協議を行った。協議の結果、当面は福島県を事業主体とする農業基盤整備事業ならびにその付帯事業、被災県道等の復興事業については福島県教育委員会が所管対応すること、市町村教育委員会は市町村を事業主体する開発事業や市町村内で計画されるその他の開発事業を所管することとなり、復興事業に対する当面の役割分担が決定した。

続く平成25年度(2013)には、市長部局へ移動となっていた2人の係員が再配置され、復興事業等の市内開発への本格的な試掘調査が行われることとなった。また、自治体派遣により福島県支援となった長野県教育委員会と富山県教育委員会職員の2県4人が、福島県市町村技術支援で南相馬市の復興関連調査に従事した。この体制は平成26年度(2014)には拡充され、茨城県教育委員会、京都府教育委員会、高知県教育委員会、沖縄県教育委員会の1府3県の4人が南相馬市の復興関連調査に従事した。その他、独立行政法人国立文化財研究機構奈良文化財研究所や福島県内の市町村教育委員会等の専門職員から調査支援を受けている。

## 第2項 復興事業推進関連発掘調査事業

文化庁は復旧・復興事業に対して埋蔵文化財について弾力的な取り扱いを求める通知(平成23年4月28日付け23町財第61号)、ならびに復興事業を円滑に行うための迅速な本発掘調査などの通知(平成24年4月17日付け24庁財第62号)をした。福島県は、文化庁通知に基づき、復旧・復興事業に伴う調査は、原状回復を行う復旧事業については原則として本発掘調査の実施は要しないこと、復興等の新たな施設整備を行う場合は工事により掘削が及ぶ範囲のみ本発掘調査を実施することを柱とした調査方針を、各市町村と関係機関へ通知した(平成24年6月1日付け24教文第65号)。

南相馬市では、防災集団移転促進事業と災害公営住宅建設事業にかかる試掘調査について、平成23年度1月の第1回復旧交付金事業申請において、「復興事業推進発掘調査事業」として申請し、交付決定を得た。第1回申請では、事業地を鹿島区、原町区、小高区の3地区に区分して計画を策定し、鹿島区内10地点、原町区内11地点、小高区12地点の合計33地点(事業地面積405,000㎡)を見込んだ。試掘調査は平成24年(2012)から実施した。

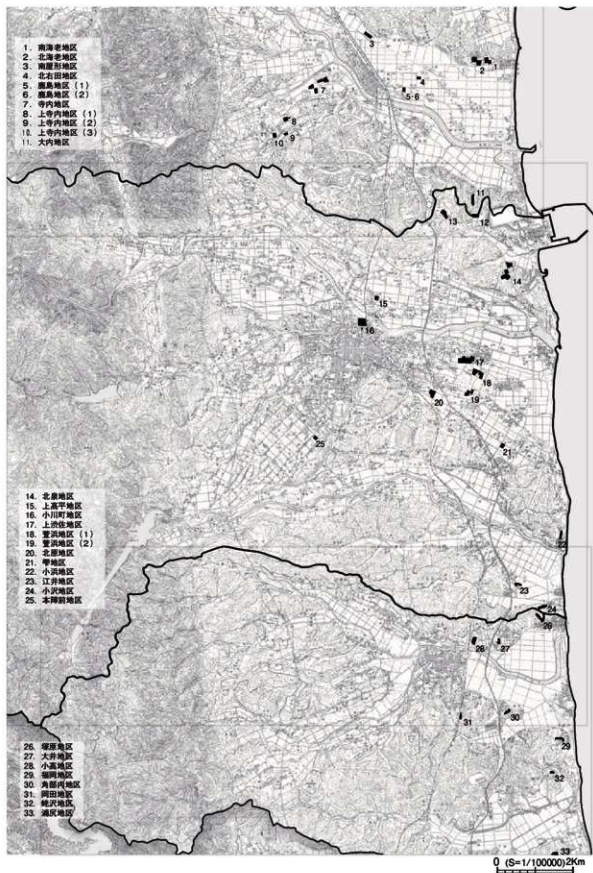


図7 防災集団移転促進事業位置図 ※計画予定地も含む。

試掘調査に先立ち、文化庁ならびに福島県の復旧・復興事業に対する埋蔵文化財の取り扱いに関する通知に基づき、関係機関との調整・協議を行った。事前協議では、事業地の選定段階で、可能なかぎり周知の埋蔵文化財包蔵地内の計画を除くことを第一優先とし、加えて周辺の埋蔵文化財包蔵地の分布状況から事業予定地内に埋蔵文化財が広がる可能性のある地区での計画についても、可能なかぎり事業地選定段階で除外する協議を行った。

これらの事前協議により、防災集団移転促進事業に関しては21地点、総事業地面積279,000㎡が計画されたものの周知の埋蔵文化財包蔵地内における計画は東町遺跡、大森遺跡と上渋佐原田遺跡の3地点に止まり、試掘調査件数が大幅に削減された。災害公営住宅建設事業では、市内7地点の建設が計画された。当該事業においても、事前協議の結果、最終的には予定された7地点すべてが周知の埋蔵文化財包蔵地外の地点で建設することとなった。

南相馬市教育委員会では防災集団移転促進事業ならびに災害公営住宅建設事業は、対象範囲が広大であることから、周知の埋蔵文化財包蔵地外でも、遺跡の存在する可能性が否定できない場合は、事前の試掘調査を実施した。これは周知の埋蔵文化財包蔵地外の地区で、埋蔵文化財が不時発見され、緊急的な発掘調査が発生し、復興事業に遅延することを回避するためであった。試掘調査は開発部局の協力も得て、各事業の設計段階において実施し、平成26年(2014)にはすべて終了した。

これらの試掘調査の結果、防災集団移転促進事業においては本報告となる東町遺跡と上渋佐原田遺跡の2遺跡、災害公営住宅建設事業では新発見の中才遺跡1遺跡の合計3遺跡が本発掘調査を実施することとなった。多くの復興事業が実施されたにも関わらず、本調査数の縮減が図られたと考えている。本調査も平成26年度にすべて終了し、復興事業に大きな影響を与えることなく現地での作業を完了することができた。この復興事業の円滑な推進を図りながらの埋蔵文化財保護を遂行することができたのは、文化庁ならびに福島県教育庁文化財課の指導・支援、全国からの埋蔵文化財専門の派遣職員の協力、そして開発主体である部局の埋蔵文化財保護への理解・協力が得られたことが大きい。

## 第2節 事業概要

東町遺跡の調査は防災集団移転促進事業のうち、「小川町地区」に伴う発掘調査である。事業計画の照会に基づき、平成25年(2013)4・5月に開発計画に伴う試掘調査(1次調査)を実施した。調査対象面積は44,131㎡、試掘調査面積は175㎡を測り、調査対象範囲で7箇所のトレンチを設定して実施した。この試掘調査の結果、東町遺跡範囲内(埋蔵文化財包蔵地内)の調査区において、縄文時代、奈良・平安時代の遺構・遺物が確認されたことにより、当該地区については、要保存区域として回答を行った(南相馬市教育委員会2017b)。

この調査結果に基づき、開発協議を行ったところ、建物の建設範囲においては遺跡の破壊が免れないことから、本調査(3次調査)を実施することとなった。調査対象面積は832㎡である。

文化財保護法第94条第1項に基づく発掘届は平成25年12月27日付で提出され、現地での本調査は平成26年(2014)4月7日から7月29日まで実施した。整理調査は平成26年度から令和2年度(2020)まで断続的に実施した。なお、出土した遺物・図面等はすべて南相馬市教育委員会で保管している。

### 第3節 調査に至る経過

発掘調査は平成26年(2014)4月7日に機材を搬入し、4月8日から重機を用いて表土掘削を4月9日まで実施した。表土掘削後、奈良・平安時代の遺構から調査をすすめ、4月24日には奈良平安時代の遺構の調査が完了した。

遺構確認状況から、遺構の重複が激しく、多大な作業量があり、調査期間の確保が困難である見通しとなったことから、文化庁ならびに福島県教育委員会と協議し、奈良文化財研究所、公益財団法人福島県文化振興財団、福島県教育委員会の専門職員の派遣に加え、福島県内市町村教育委員会への支援を得ることとなった。南相馬市教育委員会から福島県教育委員会への調査支援の依頼を5月2日付で提出し、以後、断続的ながらも調査終了まで県内市町村教育委員会の派遣を受けて調査を実施した。

6月21日は同時に調査していた上渋佐原田遺跡とあわせて現地説明会を開催し、270人と多くの来場者があった。7月24日にはほぼすべての調査作業を終了し、7月29日に機材を撤収し、現地の作業は完了した。



## 第三章 調査成果

### 第1節 遺跡の概要

#### 第1項 発掘調査の基本方針

今回実施した東町遺跡の発掘調査は、東日本大震災の復興事業の最重要課題である被災者の居住環境整備のための防災集団移転促進事業に伴って開始された。東町遺跡が所在する範囲は小川町工区とされた防災集団移転区域であった。試掘調査では、現地表面から深さ約1.2mの地点で、縄文時代中期後葉の土器を含む遺物包含層が確認された。一般的な住宅建設では、総地業(ベタ基礎)の建物であっても、遺構確認面までは掘削が達することはなく、現状保存は可能な状況であった。

しかし、震災以降の住宅建設にあつては総地業の下層にコンクリート等の地業材を柱状に埋設して、基礎を立ち上げていくといった「柱状改良」という手法が取られることが一般化してきた。柱状改良の多くは原則として安定基盤に達する深さまで一定規格の地業を建物構造の要所に配置するもので、場合によっては直径60cmの土壌改良を、1間隔で配置する設計も見受けられ、遺構が存在する場合、柱状改良ではほぼ全壊してしまう状況となっていた。

小川町工区では発掘調査対象地に4戸の住宅が建設される区割りとなっていた。しかし、発掘調査を実施する段階では、造成計画は決定していたものの、具体的に建設される建物の配置、設計が完成していなかった。造成では遺構が損壊しない一方、住宅建設において柱状改良を行うこととなった場合、造成後改めて記録保存の調査を実施することが必要な状況となっていた。このことにより、住宅再建において、基礎の工法対応を行う条件を設定するか、改めて事前の発掘調査を行うこととなり、被災者に大きな影響を与える可能性があった。

このような状況の中で、被災者へ埋蔵文化財保護による影響を軽減するとともに、早期に防災集団移転を促進するために、造成工事前に事前に本発掘調査することとした。このような特殊な条件における調査であるため、発掘調査の基本方針を以下のように定めて作業を実施した。

- ・ 防災集団移転促進事業地(造成地)における遺構全容を把握し、位置・性格等の記録を作成する。
- ・ 確認された遺構の重複関係を把握し、先後関係を明らかとしたうえで、発掘調査の優先順位を確定する。
- ・ 防災集団移転促進事業による分譲区割りを現地に明示し、確認された遺構との関係を把握する。
- ・ 区画内に建設される建物については、分譲区画の北側に配置され、南方については庭や駐車場となる場合が多いと考えられることから、建物の建設が行われる可能性の低い区画南側の遺構については、記録保存の対象からは除外する。

・建物の建設が及ばないと想定される範囲であっても、遺構間の重複関係の検討の結果、先行する古い時期の遺構が記録保存の対象となった場合には、掘削を受けない範囲にある新しい時期の遺構については、記録保存の対象とする。

・上記のケースにあてはまらず、掘削を免れる遺構については、遺構確認の段階で保存する。

このことにより、結果的に本事業において、記録保存を行わなかった遺構が損壊することではなく、埋蔵文化財保護の影響はなく、被災者が住宅を再建することができた。また、確認した遺構は、当初すべてに遺構番号をつけたが、先述の方針により保存対象となった遺構も多くある。本報告では調査対象となった遺構のみ記載していることから、遺構の欠番が存在する。

## 第2項 基本土層

基本土層は調査区北西部で観察し、6層に区分した。L Iは碎石を敷いた現代の整地層である。L IIは縄文時代や古代の遺物を含む黒褐色土の遺物包含層で、層厚は22～28cmを計測する。L IIIは縄文時代中期を主体とする遺物を含む黒褐色土の遺物包含層であり、層厚は24～33cmを計測する。奈良・平安時代の遺構は基本的にこのL III層の上面を掘り込み面としている。

L IVはにぶい黄褐色土層の基盤層で、層厚は18～26cmである。縄文時代の遺構はこのL IV上面で検出している。L Vは黄褐色土のローム層の基盤層である。調査区南部ではL Vの層厚が薄い部分もあり、その下の黄褐色砂層のL VIが露出している箇所が確認されている。

調査区内で確認されたL I～L VIの各層は、概ね南方から北方の河岸段丘の縁辺に向かって緩やかに標高を減じる堆積状況を示している。

## 第3項 遺構の分布状況

本調査では、調査区全面にわたって遺構が確認されている。主な時代は縄文時代中期後半、奈良・平安時代の2時期である。

縄文時代の遺構は調査区南側を中心に確認した。特に複式炉を伴う堅穴住居跡が密集かつ重複して検出しており、住居分布域の中心と考えられる。集落の中心域は東側に想定する埋没谷に向けてあるものと推測している。検出した堅穴住居跡は26軒で、炉跡のみ確認された3基を堅穴

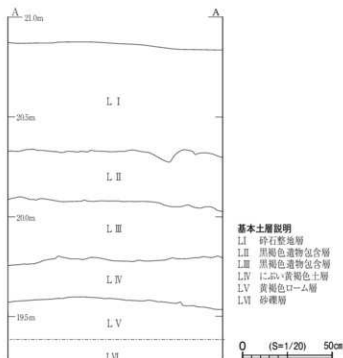


図8 基本土層

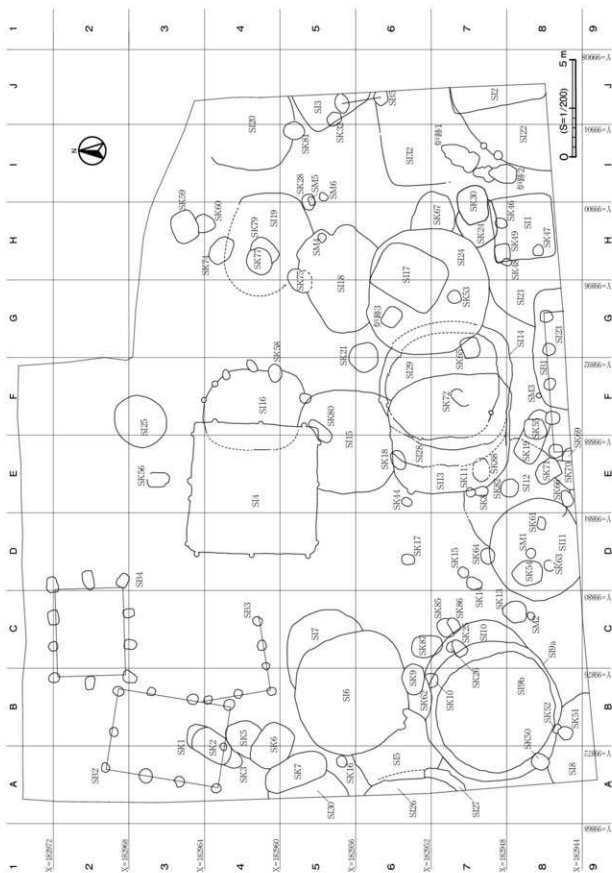


図9 遺構全体図(1)



図10 遺構全体図(2)





図11 縄文時代遺構全体図

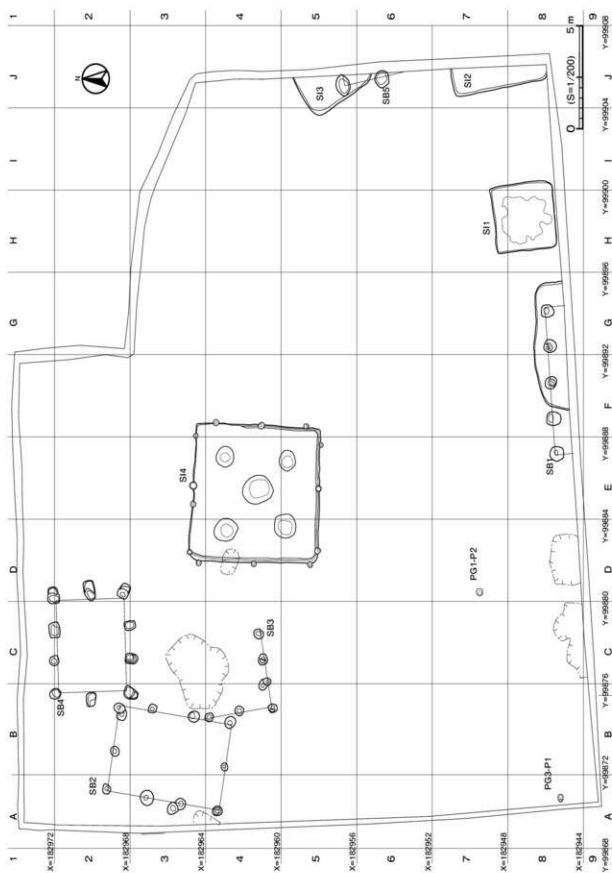


図12 奈良・平安時代遺構全体図

住居跡として含めると合計29軒を数える。これらは縄文時代の大木8b式～10式期に相当し、複式炉の多くは南側に入口方向を向けている。

検出した縄文時代と考えられる遺構のうち、SI08・21・22の3軒は、協議の結果、保存が図られることとなり、上面確認にのみ留めている。また、SI31は炉跡1・2の位置に想定したが、掘り込みが確認できず、竪穴住居跡として把握できなかったため、結果的に欠番とした。その他、埋設土器遺構ならびに土坑が竪穴住居分布域を中心に多数確認した。

奈良・平安時代の遺構は、調査区北西側と南東側に偏在している。いずれの集中域でも竪穴住居跡と掘立柱建物跡を検出している。大きく8世紀段階と9世紀段階の2時期に分別することができる。いずれの竪穴住居跡もカマドが確認できない。上面の削平ならびに調査区外に遺構が分布するものが多いことから、本来、カマドの有無については不明である。

## 第2節 縄文時代の遺構と遺物

### 第1項 竪穴住居跡

#### 5号竪穴住居跡(図13)

5号竪穴住居跡は、A・B-5・6・7区の調査区南西部で確認した竪穴住居跡である。竪穴住居跡は、標高20.2mを計測する平坦な段丘面に立地する。検出した時点では、基盤層のLIV上面において、黒色土の不整形のプランとして確認した。

他の遺構との重複関係を示すと、当初は直接的な重複関係にある6・9号竪穴住居跡が5号竪穴住居跡よりも新しいと判断して調査を進めた。しかし、断面観察の結果、6・9号竪穴住居跡は5号竪穴住居跡に切られている状況が確認されたため、5号竪穴住居跡が新しいと判断された。また、5号竪穴住居跡は26・27号竪穴住居跡、62号土坑とも重複関係にあり、結果的には26・27号竪穴住居跡よりも古く、6・9号竪穴住居跡、62号土坑よりも新しい。

竪穴住居跡の堆積土は最終的に4層に細分された。1層は全体に砂粒を多く含む黒褐色土、2層は黄褐色土ブロックを所々まばらに含む黒色土、3層は1cm大の黄褐色ブロックを含むオリーブ褐色土である。層厚が薄く明確ではないが、全体的に黄褐色ブロックを含んでいることから人為的な堆積土と判断している。

竪穴住居跡の平面形と規模を見ると、西側は26・27号竪穴住居跡により失い、加えて北東部・南部は、先述の6・9号竪穴住居跡との重複関係の誤認により失ってしまっているけれども、残存する状況より、炉を中心とした不整形円形を呈しているものと考えられる。規模は遺存する上端で計測すると4.5mを測る。

竪穴住居跡の構造を見ると、床面は南東部付近では南側に向かって緩やかに下る傾向がみられる。全体としては、ほぼ平坦と言って良い。周壁は床面から緩やかに傾斜して約10cm前後の高さまで



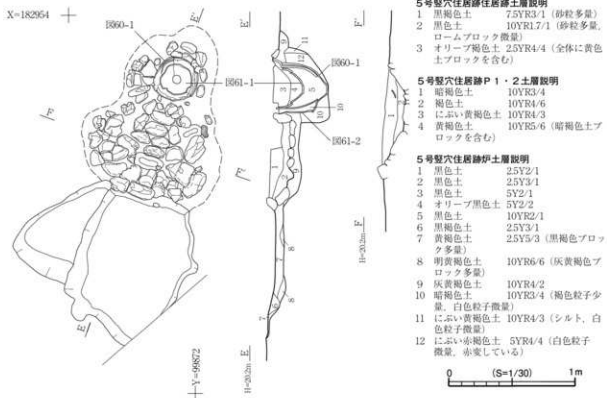
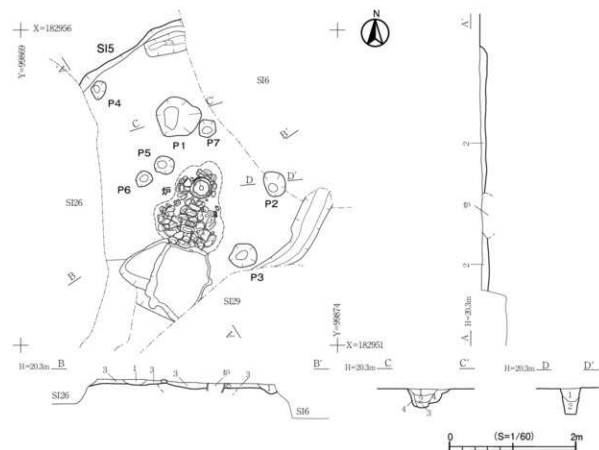


図13 5号竪穴住居跡

## 5号竪穴住居跡住居跡土層説明

- 1 黒褐色土 7.5YR3/1 (砂粒多量)
- 2 黒色土 10YR1.7/1 (砂粒多量、ロームブロック微量)
- 3 オリーブ褐色土 2.5YR4/4 (全体に黄色土ブロックを含む)

## 5号竪穴住居跡P1・2土層説明

- 1 暗褐色土 10YR3/4
- 2 褐色土 10YR4/6
- 3 にぶい黄褐色土 10YR4/3
- 4 黄褐色土 10YR5/6 (暗褐色土ブロックを含む)

## 5号竪穴住居跡伊土層説明

- 1 黒色土 2.5Y2/1
- 2 黒色土 2.5Y3/1
- 3 黒色土 5Y2/1
- 4 オリーブ黒色土 5Y2/2
- 5 黒色土 10YR2/1
- 6 黒褐色土 2.5Y3/1
- 7 黄褐色土 2.5Y5/3 (黒褐色ブロック多量)
- 8 明黄褐色土 10YR6/6 (灰黄褐色ブロック多量)
- 9 灰黄褐色土 10YR4/2
- 10 暗褐色土 10YR3/4 (褐色粒子少量、白色粒子微量)
- 11 にぶい黄褐色土 10YR4/3 (シルト、白色粒子微量)
- 12 にぶい赤褐色土 5YR4/4 (白色粒子微量、赤変している)

立ち上がって上端に達する。周溝は遺存する壁の下端や南東部の一部で確認できた。幅は20～46cm、床面からの深さは30～32cmである。竪穴住居跡中央から南側には、複式炉が構築されている。

複式炉の遺存状態は良好で、土器埋設部、石組部、隅丸長方形の前庭部で構成されている。複式炉の全長は231cm、最大幅は98cmを計測する。複式炉の中軸線の方位はN-14°-Eを指しており、真北から若干東に振れている状況が確認できた。複式炉内の堆積土を見ると1・2層は石組部、3～5層は埋設土器内に堆積した黒色土である。6～8層は前庭部の掘方覆土、9～12層は石組部・土器埋設部の掘方に堆積した埋土である。

土器埋設部は、開口した直径37cmの埋設土器に接するように、長さ10cmの偏平な角礫を並べ緑石としている。土器埋設部の南北長は49cmを計測する。埋設土器は、当初完形の深鉢形土器1個体(図60-1)と見られたが、土器埋設部の断ち割り土層を観察の結果、内側に別個体の深鉢形土器の下半部(図61-1)が二重に埋設されていた。

石組部は、掘方内に偏平な礫を敷き並べて底面とし、その上に板状の礫を楕円形の掘方に合わせて立て並べ、上方に向かって大きく開口するように側壁が設置されていた。石組部の最大幅は98cmを計測し、南北長は77cmである。前庭部は長方形に掘り込まれ、断面形は浅い箱形を呈する。底面からの上端までの高さは4～14cmである。前庭部底面の標高は、石組部とほぼ同じである。

床面を検出した時点で確認された主柱穴は、P1～3の3基である。いずれも長軸41～61cm、深さ16～43cmを計測する円形のプランを示し、柱掘方内の堆積土は4層に細分される。1～3層は柱抜き取跡で、4層が柱埋土と考えられる。主柱穴以外にはP4～7の小型のピットが確認されている。P4は直径26cm、深さ22cmを計測し、竪穴住居跡の壁際に配置されていることから壁柱穴の一部と考えられる。P5～7は直径28～32cm、深さ28～39cmを計測する。

5号竪穴住居跡の調査では、縄文土器、石器などが複式炉周辺の覆土から出土している。図60-1、図61-1・2は複式炉の炉体に用いられた縄文土器である。

5号竪穴住居跡は複式炉を有する直径4.5mの竪穴住居であることが確認された。主柱穴は26号竪穴住居跡との重複に伴い3基しか確認できなかったが、本来は4基で構成されていた可能性が高い。5号竪穴住居跡の建設時期は、埋設土器からは判断できないが、覆土中から大木10式に属する深鉢の口縁部が出土していることや、6号竪穴住居跡を掘り込んでいることから大木10式期と考えられる。

### 6号竪穴住居跡(図14～16)

6号竪穴住居跡は、調査区西部付近のA・B・C-5・6区で確認した竪穴住居跡である。竪穴住居跡は、標高20.2mを計測する平坦な段丘面に立地している。竪穴住居跡のプランは、基本土層LⅣ上面において内側には黒色土、外側には黄褐色土が円形に分布する状況で確認された。

他の遺構との重複関係では、5号竪穴住居跡、9号土坑よりも古く、7号竪穴住居跡や62号土坑よりも新しいことを確認した。

竪穴住居跡の堆積土は、最終的に11層に分層された。1～6層はレンズ状に堆積していること

から、竪穴住居が廃絶した後のくぼ地に堆積した自然堆積土である。11層は黄褐色粒子を多く含む褐色土で、壁溝に三角堆積した初期流入土と考えている。7～10層はにぶい黄褐色土を主体とする土層で、周縁よりも中央が盛り上がる不自然な堆積状況を示していることから人為的な堆積土の可能性が高い。

6号竪穴住居跡の平面形は、竪穴住居跡のプランの西側部分は5号竪穴住居跡が、南側部分は9号土坑が重複していることから詳細な形状は不明である。しかし、炉を中心とした円形を呈してい

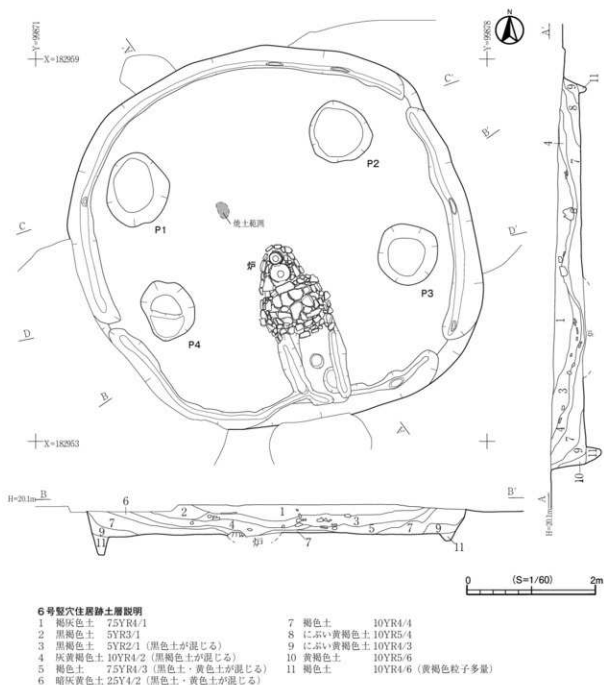
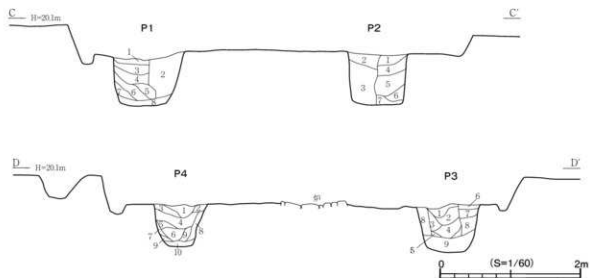


図14 6号竪穴住居跡(1)



**6号竪穴住居跡P1土層説明**

- 1 褐色土 10YR4/4 奉貼床土
- 2 灰黄褐色土 10YR4/2
- 3 黒褐色土 10YR2/3
- 4 暗褐色土 10YR3/4
- 5 褐色土 10YR4/4
- 6 暗褐色土 10YR3/3
- 7 黄褐色土 10YR5/6 (砂質土)
- 8 褐色土 10YR4/4 (砂質土)

**6号竪穴住居跡P2土層説明**

- 1 黒褐色土 10YR2/2(暗褐色土10YR3/3が礫状に入る)  
※廃棄後の堆積土
- 2 褐色土 10YR4/4
- 3 褐色土 10YR4/6
- 4 褐色土 10YR4/4 奉貼床土
- 5 暗褐色土 10YR3/3
- 6 黄褐色土 10YR5/6 (砂質土)
- 7 褐色土 10YR4/4 (砂質土)

**6号竪穴住居跡P3土層説明**

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (暗褐色土10YR3/3が礫状に入る)  
※廃棄後の堆積土
- 2 褐色土 10YR4/6 (明黄褐色土ブロックが混じる)
- 3 褐色土 10YR4/4
- 4 暗褐色土 10YR3/3
- 5 褐色土 10YR4/4 (暗褐色土10YR3/3が礫状に入る)
- 6 褐色土 10YR4/4 奉貼床土
- 7 褐色土 10YR4/6
- 8 黄褐色土 10YR5/6 (砂質土)
- 9 黄褐色土 10YR5/8 (砂質土)

**6号竪穴住居跡P4土層説明**

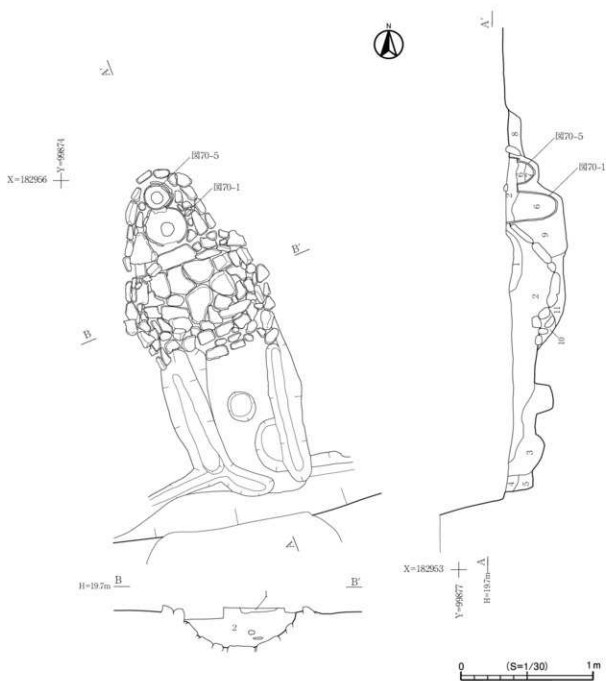
- 1 褐色土 10YR4/6
- 2 暗褐色土 10YR3/4 (炭化物を含む)
- 3 褐色土 10YR4/4 (黄褐色土粒子を含む)
- 4 暗褐色土 10YR3/3 (炭化物粒子を含む)
- 5 褐色土 10YR4/4 (黄褐色土10YR5/6が礫状に入)
- 6 黄褐色土 10YR5/6
- 7 褐色土 10YR4/4
- 8 黄褐色土 10YR5/6 (砂質土)
- 9 黄褐色土 10YR5/6 (暗褐色土10YR3/3が礫状に入)
- 10 明黄褐色土 10YR6/8 (砂質土)

**図15 6号竪穴住居跡(2)**

るものと考えて良い。竪穴住居跡の規模は遺存する上端で計測すると、長軸6.08m、短軸6.00mを測るほぼ正円形のプランを有する。

竪穴住居跡の構造を見ると、床面はほぼ平坦で、中央部やや北西に寄った付近では床面が被熱した痕跡が確認されたことから複式炉とは異なる地床炉が存在していた可能性がある。竪穴住居跡の壁は床面から外傾気味に立ち上がる形状を示し、住居壁の高さは38～56cmを計測する。竪穴住居跡の下端には途切れながらも壁周溝がめぐっている。壁周溝の幅は16～33cmを計測し、床面からの深さは12～28cmを測る。

竪穴住居跡の中央やや南側には複式炉が構築されている。遺存状態は良好で、楕円形の土器埋設部に2基の埋設土器(図70-1・5)を設置し、三角形の石組部、隅丸長方形の前庭部で構成されている。複式炉全体の長軸は2.68m、最大幅は1.17mを計測する。複式炉本体の中軸線はN-21°-Wを指し、真北から若干西に振れている。



## 6号竪穴住居跡炉土層説明

- |    |         |                                  |
|----|---------|----------------------------------|
| 1  | 黒色土     | 10YR2/1 (炭化物主体)                  |
| 2  | 黒褐色土    | 7.5YR3/2 (炭化物・焼土ブロック微量)          |
| 3  | 黒褐色土    | 10YR3/2 (黄褐色砂ブロック中量, 2~4cm大の礫少量) |
| 4  | 褐色土     | 7.5YR4/3                         |
| 5  | 黒褐色土    | 7.5YR3/2 (黄褐色細砂ブロック少量, 炭化物微量)    |
| 6  | 灰黄褐色土   | 10YR4/2 (黄褐色細砂主体で, 炭化物が帯状に入る)    |
| 7  | 褐色土     | 10YR4/4 (黄褐色細砂微量)                |
| 8  | 黒褐色土    | 10YR3/2 (黄褐色砂粒微量)                |
| 9  | 褐色土     | 10YR4/4 (黄褐色砂粒微量, 部分的に赤変)        |
| 10 | 黒色土     | 10YR2/1 (黄褐色土小ブロック微量)            |
| 11 | におい黄褐色土 | 10YR5/4 (黄褐色砂粒微量)                |

図16 6号竪穴住居跡(3)

複式炉内の堆積土は、1～5層は土器埋設部と石組部、前庭部に堆積した覆土である。各層に焼土やロームのブロックを含むことから人為的な堆積土の可能性が高いと判断した。6・7層は埋設土器に堆積した褐色土である。8層は土器埋設部の掘方の覆土、9～11層は石組部の掘方に堆積した覆土である。覆土上層からは集石も認められる。

土器埋設部には、南北中軸線上に沿うように2個体の埋設土器が設置されている。南側の埋設土器(図70-1)に接して6～13cmの不整な角礫を敷き、さらにその外側と北側にある埋設土器(図70-5)を囲むように、長さ9～18cmの長方形や不整な角礫などを並べて縁石としている。埋設土器(図70-5)は底部から胴部上半にかけた範囲が遺存しており、埋設土器(図70-1)はほぼ完形の深鉢である。いずれも正位の状態で設置されていた。土器埋設部の長軸は63cmを計測し、埋設土器周辺の土壌は激しく焼土化している。

土器埋設部の南側に接する石組部は、石組部の掘方に偏平な礫を敷き並べて底面とし、その上に板状の礫を石組部の掘方に合わせて立て並べ、上方に向かって大きく開口する側壁を造っている。土器埋設部と接する部分には、意図的に大形の板状の礫が用いられている。石組部の長軸は1.17m、短軸は91cmを計測する。石組部を構築している石材を見ると、表面を強い火熱を受けてもろくなり、赤色変化したりしているものが認められる。

前庭部は南北方向に長い隅丸長方形で、断面形は浅い箱形を呈している。東側部分と西側部分には南北方向に深さ1～5cmを測る浅い溝が掘り込まれている。底面からの前庭部の上端までの深さは11～21cmを計測する。前庭部の中央には、長軸24cm、短軸21cm、深さ6cmの楕円形のピットが確認されている。

主柱穴はP1～4の4基である。4基のピットは複式炉を挟んだ東西に位置している。各主柱穴間の距離は、P1-2間が2.1mを計測し、P2-3間では3.4mを測る。P3-4間では2.2m、P4-1の間隔は3.5mとなっており、総体的には東西に長軸を持つ長方形の配置となっている。主柱穴の柱掘方は長径94cm～1.13m、深さ72～85cmの円筒形である。P1～3では柱抜取痕や掘方埋土、貼床土が確認されている。

6号竪穴住居跡の調査では、縄文土器の深鉢・浅鉢・壺形土器・瓢箪形土器・台付鉢・ミニチュア土器等の土器群、土製円盤、石鏃・尖頭器・石匙・打製石斧・棒状石器・玉状砥石・浮子・剥片などの石器群といった多量の遺物が、竪穴住居跡全面の覆土上層から下層にかけての範囲から出土している。特に覆土上層から中層(1～6層)の黒色土から多量の遺物が出土する傾向があり、覆土下層(7層以下)の褐色土からは出土量が激減するといった傾向が確認されている。黒色土を掘り下げて検出された7層の褐色土上層からはほぼ完形の壺形土器(図69-1)が逆位、台付鉢の台部(図69-2)のみが正位の状態で出土している。また深鉢形土器の破片が中央部からまとまって出土している。いずれも廃絶後のくぼ地に廃棄された可能性が高い。

6号竪穴住居跡は、直径約6mの円形を呈する竪穴住居跡で、住居跡の南側には複式炉を有し、複式炉のほかにも地床炉の痕跡が認められた。主柱穴は4本で構成され、やや東西に長い台形の配

置をとっている。覆土上層から中層かけての黒色土中から多量の遺物が出土していることから、廃絶後には地となった部分に廃棄している可能性が高い。6号竪穴住居跡の時期は、複式炉に埋設されている埋設土器が大木10式に属することから、大木10式期と考えられる。

### 7号竪穴住居跡(図17)

7号竪穴住居跡は、B・C-5・6区の調査区西部で確認した竪穴住居跡である。竪穴住居跡は、標高20.2mの平坦な段丘面に立地する。竪穴住居跡は、基盤層となるLIVの上面、6号竪穴住居跡の東側に広がる黒色土の不整半円形のプランとして検出した。他の遺構との重複関係では、6号竪穴住居跡との重複関係にあり、7号竪穴住居跡のほうが古いことを確認している。

竪穴住居跡に堆積した覆土は黒色土の単一層であり、層厚が薄いため明確ではないものの、黄褐色土ブロックや褐色土ブロックをまばらに含んでいることから、人為的な堆積土の可能性はある。竪穴住居跡の平面形と規模は、竪穴住居跡の西半部が6号竪穴住居跡との重複により失っており明確

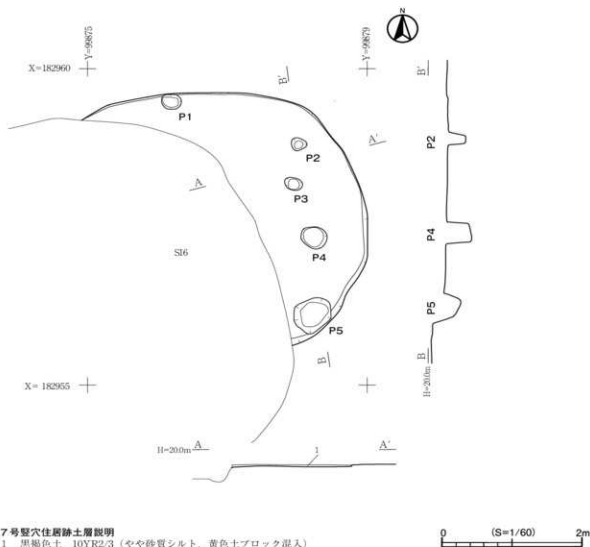


図17 7号竪穴住居跡

ではない。残存状況からは、平面形は東西方向が長い楕円形と推定される。竪穴住居跡の規模は遺存する上端で計測した場合4.0mを測る。

竪穴住居跡の構造を見ると、床面はほぼ平坦で、竪穴住居跡の壁は北壁から東壁、南壁に向かって遺存状態は良くなる傾向がある。住居壁は床面から外傾して立ち上がる傾向を示し、底面から上端までの高さは、南壁で18cm、北壁で4cmである。竪穴住居跡の床面を精査してみたものの壁周溝は確認できなかった。壁際にピットが数基確認できることから、これらのピットは壁柱穴の可能性がある。

複式炉は、竪穴住居跡の西半部の大部分を掘削した6号竪穴住居跡で失われているため検出できなかった。主柱穴は、床面を掘り下げてみたものの柱穴等の痕跡は確認できなかった。これ以外の施設としてはピット5基がある。P1は直径28cm、深さ27cm、P5は直径58cm、深さ23cmで壁際に配置されていることから壁柱穴と考えられる。P2～4は直径22～38cm、深さ12～32cmを計測するが、性格等の詳細は不明である。

7号竪穴住居跡の調査では、東側の覆土中から縄文土器、土器片製円盤、石器などが散在した状態で出土している。深鉢形土器や土器片製円盤は床面から出土している。

7号竪穴住居跡は、東西方向に長い楕円形の竪穴住居であり、建設時期は床面から出土した深鉢が大木9式に属することや、縄文時代中期末葉の6号竪穴住居跡に掘り込まれていることから大木9式期と考えられる。

#### 9号竪穴住居跡a (図18～20)

9号竪穴住居跡aは、A・B・C-7・8区の、調査区南西部で確認した竪穴住居跡である。竪穴住居跡は、標高20.0mを計測する平坦な段丘面に立地し、基盤層としたLIVの上上で、内側に黒色土が分布し、外側にオリーブ褐色土が円形に広がるプランとして検出した。他の遺構との重複関係を示すと、5号竪穴住居跡、52号土坑よりも古く、8・10号竪穴住居跡、10・25・50・62号土坑よりも新しいことを確認している。

竪穴住居跡の堆積土は4層に細分した。1層は黒色の砂質土で、2層は黒褐色の砂質土である。1・2層にはいずれも3～20cm大の礫や土器を含んでいる。3層は全体に砂粒を均一に含むオリーブ褐色土である。4層にはぶい黄褐色ブロックを含む暗褐色土で、壁周溝の堆積土である。3層は竪穴住居廃絶後に何らかの理由で持ち込まれた人為堆積土で、1・2層は人為堆積後のくぼ地に堆積した自然堆積土と考えられる。また、1・2層堆積時に土器等が廃棄されるとともに集石が検出されている。

9号竪穴住居跡の平面形は、竪穴住居跡中央やや南側に配置された複式炉を中心とした円形を呈している。竪穴住居跡の規模は、遺存する上端で計測すると直径7.2mを測る。

竪穴住居跡の構造を見ると、床面はほぼ平坦で、中央部からやや北寄りに被熱の痕跡を確認したことから、複式炉とは別に地床炉が存在していた可能性がある。また、床面の精査の結果、竪穴住居跡の南部を除く範囲で壁周溝の内側で異なる周溝を確認したことから、9号竪穴住居跡には新旧



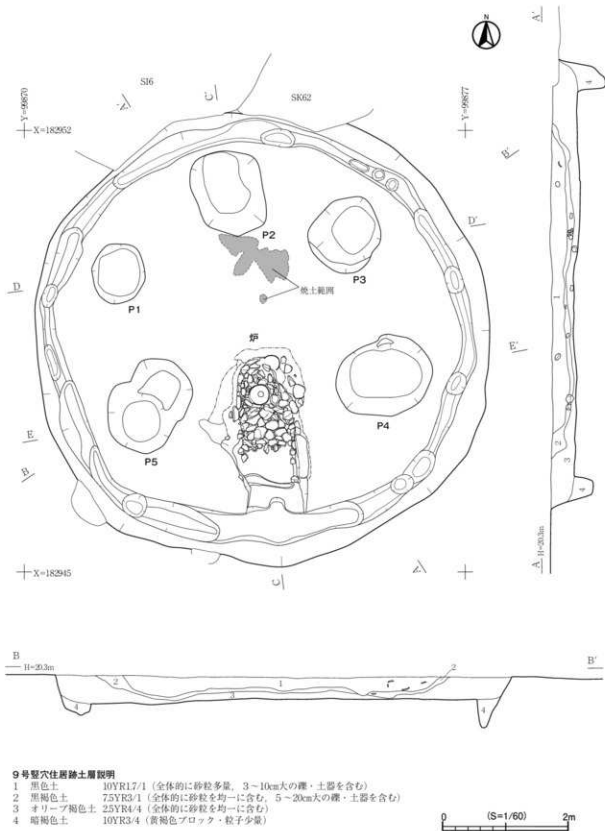
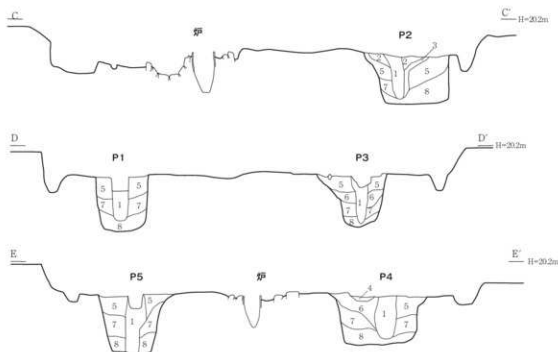


図18 9号竪穴住居跡a(1)



9号竪穴住居跡P1～5土層説明

- |          |                               |
|----------|-------------------------------|
| 1 黒褐色土   | 10YR2/2 (炭化物少量、黄褐色粒子微量)       |
| 2 黒褐色土   | 10YR2/1 (白色粒子少量、炭化物微量)        |
| 3 暗褐色土   | 10YR3/4 (炭化物・黄褐色粒子微量)         |
| 4 暗褐色土   | 10YR3/3 (黄褐色粒子・白色粒子微量)        |
| 5 暗褐色土   | 10YR3/4 (白色粒子少量、炭化物小・黄褐色粒子微量) |
| 6 暗褐色土   | 10YR3/4 (黄褐色粒子少量)             |
| 7 灰黄褐色土  | 10YR4/2 (黄褐色小アロック・粒子少量)       |
| 8 赤い黄褐色土 | 10YR4/3 (黄褐色粒子中量、黄褐色アロック少量)   |



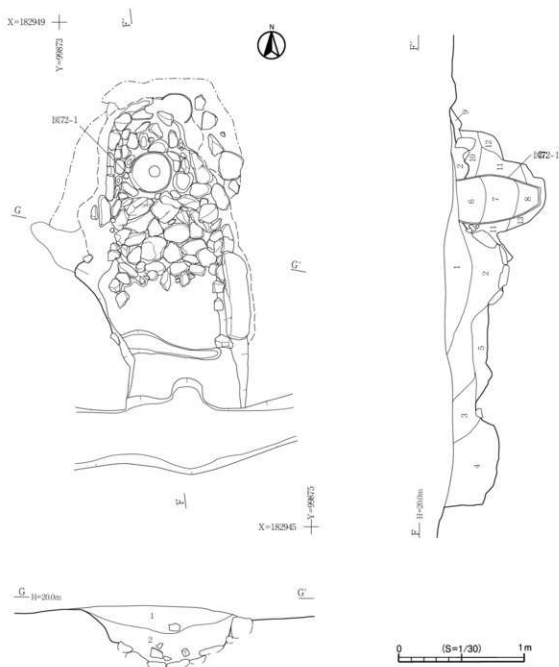
図19 9号竪穴住居跡a (2)

2時期あることが判明した。

竪穴住居跡の壁は、床面から外傾して立ち上がっており、床面から上端までの高さは38～46cmである。竪穴住居跡の下端には壁周溝がめぐっており、竪穴住居の下端を全周している。壁周溝の幅は17～52cm、床面からの深さは20～48cmである。

複式炉は南側で確認された。遺存状態は良好である。平面形は南北に長い楕円形で、土器埋設部、石組部、前庭部で構成されている。複式炉の全長は2.58m、最大幅1.38mを計測し、複式炉の中軸線はN-7°-Wで、真北からやや西に振れている。複式炉内の堆積土は、1・2層は土器埋設部と石組部の堆積土で、3～5層は前庭部の堆積土である。各層に小礫や炭化物・炭化粒子が含まれていることから、人為的堆積土の可能性がある。6～8層は埋設土器内に堆積した黒色土で、8層は炭化物層である。10～13層は土器埋設部・石組部の掘方に堆積した埋土である。9層は黄褐色粘土で土器埋設部の北部から東部、そして前庭部の底面に貼り付けた施設土である。

土器埋設部は、口径33cm、深さ67cmの埋設土器の口縁部に接するかたちで、10cm前後の礫を円形に敷き詰め、さらに外側に15cm大前後の礫を一回り大きな範囲に敷き並べて縁石としている。



## 9号竪穴住居跡炉土層説明

- |            |                                    |
|------------|------------------------------------|
| 1 黒色土      | 10YR17/1 (炭化物多量、小礫少量、土器含む)         |
| 2 暗褐色土     | 10YR3/3 (炭化物少量、小礫微量)               |
| 3 にぶい黄褐色土  | 10YR4/3 (砂礫少量、炭化粒子微量)              |
| 4 暗褐色土     | 10YR3/4 (小礫少量、炭化粒子微量)              |
| 5 暗褐色土     | 10YR3/3 (ローム粒子多量、炭化粒子微量)           |
| 6 黒色土      | 10YR17/1 (小礫微量)                    |
| 7 黒褐色土     | 10YR2/2 (小礫少量)                     |
| 8 黒色土      | 10YR17/1 (炭化物の層)                   |
| 9 黄褐色粘土    | 10YR5/6 (黄褐色粒子多量)                  |
| 10 暗褐色土    | 10YR3/4 (焼土ブロック・粒子微量、炭化物・黄褐色粒子微量)  |
| 11 にぶい赤褐色土 | 5YR4/3 (焼土ブロック・粒子少量、黄褐色ブロック・砂粒子微量) |
| 12 にぶい赤褐色土 | 5YR4/4 (焼土粒子中量、焼土ブロック・黄褐色粒子微量)     |
| 13 暗褐色土    | 10YR3/4 (黄褐色粒子・小礫少量、砂質土)           |

図20 9号竪穴住居跡a (3)

土器埋設部の南北方向の長さは75cmで、埋設土器周辺の土は著しく赤色硬化している。

石組部の平面形は楕円形を呈し、断面形はすり鉢状である。底面には扁平な礫を敷き、側壁には中礫を敷き並べ、その空いた部分に小礫を詰めて構築されている。特に土器埋設部と接する部分には、意図的に大形の板状の礫が用いられている。石組部の最大幅は98cm、南北長は77cmを測る。

前庭部は、南北方向に長い長方形で、断面形は箱形を呈している。東側の側壁では大形の直方体の礫を敷いている。中央には東西方向の深さ1～4cmの浅い溝が掘り込まれている。底面からの前庭部上端までの高さは14～25cmである。

主柱穴として判断したのは、P1～5の5基である。P2は北壁の壁際、P1・3・4・5は複式炉を挟んだ東西に位置している。各主柱穴間の距離は、P2と1の間が22mで、P1と3の間が2.1m。P3と4の間が2.2mを計測し、P4と5の間が3.9m、P5と1の間が2.3mを計測し、全体的に五角形の配置である。柱掘方は長軸98cm～1.56m、深さ86～94cmの円筒形を呈する。柱掘方の堆積土は8層に細分され、1層は柱痕跡、2～8層は柱掘方埋土である。

9号堅穴住居跡aからは縄文土器の深鉢・浅鉢・小形浅鉢・注口土器・壺形土器・台付鉢・ミニチュア土器や、土製円盤、石匙・磨製石斧・打製石斧・石皿・磨石・敲石・凹石・浮子・剥片の石器類のほか混入した土師器片、須恵器片が堅穴住居の覆土上層から下層にかけての範囲から出土している。特に覆土上層から中層(1・2層)の黒色土中からは、多量の縄文土器片が出土し、3層上面の北西部から中央部にかけての範囲には10～20cm大の礫や土器片がまとまって出土した。

複式炉は堅穴住居跡の中央やや南側に検出した。土器埋設部には完形の深鉢が正位の状態で据えられていた。図72-1は複式炉の土器埋設部に据えられていた埋設土器である。

9号堅穴住居跡aは、円形で複式炉を有する堅穴住居跡である。南端を起点に北・東・西方向に拡張された堅穴住居跡であり、直径7.2mを測る発掘調査区内では最も大きな堅穴住居跡である。複式炉のほかには、床面が被熱した部分が認められており、複式炉とは異なる地床炉が設けられていた可能性がある。主柱穴は5基が確認されており、全体的に五角形の配置を構造となっている。

堅穴住居跡の覆土上層から中層にかけて分布する黒色土からは、多量の遺物が出土していることから、堅穴住居廃絶後のくは地にこれらの遺物を廃棄した可能性が高い。堅穴住居跡の建設時期は、炉周辺から出土した土器が大木10式に属することや、他の遺構との重複関係から縄文時代中期末葉と考えられる。

### 9号堅穴住居跡b (図21・22)

9号堅穴住居跡bは、調査区南西部のA・B・C-7・8区に展開する堅穴住居跡である。堅穴住居跡は、標高20.0mの平坦な段丘面に立地する。9号堅穴住居跡bは9号堅穴住居跡aの壁周溝の輪郭の内側約5～20cmの位置、南端では重複するようにめぐる壁周溝が検出されたことで認識した。

他の遺構との重複関係では、9号堅穴住居跡aよりは古い。堅穴住居跡の堆積土は、9号堅穴住居跡aの構築に伴ってほとんど遺存しておらず、わずかに壁周溝と複式炉の堆積土が残るだけとなっている。

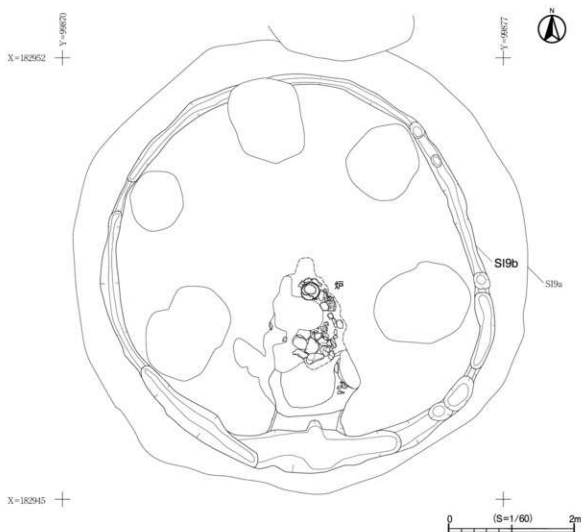


図21 9号竪穴住居跡 b (1)

9号竪穴住居跡 bの平面形は、住居壁が9号竪穴住居跡 aの建設により失われたため詳細は不明であるが、壁周溝の輪郭から復元すると複式炉を中心とした円形で、遺存する壁周溝の上端で計測した場合の直径は6.0mを測る規模の竪穴住居跡であったと考えられる。

竪穴住居跡の構造を示すと、壁周溝の外側を除いた床面は、9号竪穴住居跡の床面と基本的に同一面であった可能性が高い。9号竪穴住居跡 bの壁は、9号竪穴住居跡 aの建設の時にすべて失われてしまったために確認することができなかった。壁周溝は、先述のとおり9号竪穴住居跡 aの壁周溝内側の約5～20cmの地点で、9号竪穴住居跡 bに伴う壁周溝が確認された。しかし、9号竪穴住居跡 bの壁周溝の南端は、9号竪穴住居跡の壁周溝と重複する関係にあり、明確に区別することは困難であった。確認できた壁周溝の幅は14～34cmを計測し、床面からの深さは18～41cmである。壁周溝の堆積土は、黄褐色砂粒や白色粒子をわずかに含む黒褐色土を主体とした人為堆積土と判断しており、9号竪穴住居跡 bは aの建設に際して、埋められた可能性が高い。したがって、9号竪穴住居跡は bから aへ建て替えが行われたものと考えられる。

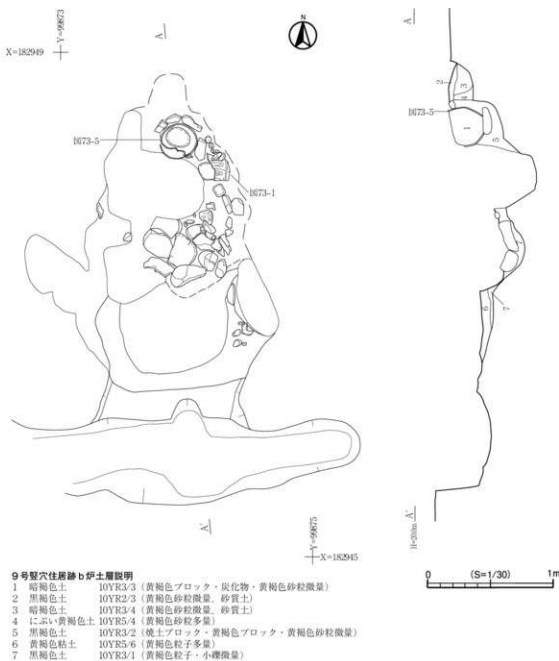


図22 9号竪穴住居跡 b (2)

9号竪穴住居跡 b の複式炉は、竪穴住居跡床面の南側で検出した。複式炉は9号竪穴住居跡 a の複式炉と重複した状況にあり、複式炉の西側半分が9号竪穴住居跡 a に伴う複式炉により失われている。残存する範囲で9号竪穴住居跡 b の複式炉の構造を示すと全長は2.42m、残存する範囲の最大幅は79cmを計測する。複式炉の中軸線方位はN-1°-Wを指しており、真北から微妙に西側に振れている。複式炉の堆積土のうち1層は埋設土器内に溜まった暗褐色土で、黄褐色ブロックを微量含んでいることから人為的な堆積土と考えられる。2～5層は土器埋設部掘方に堆積した土で、6・7層は石組部・前庭部の掘方内部に堆積した埋土である。いずれの堆積土も人為的な埋土

であると判断している。

土器埋設部は、口径28cmを計測する埋設土器(図73-5)の周囲に、直径15cm前後の直方体の礫や角礫を敷き並べて縁石としているが、確認できたのは北半部だけである。底面には偏平な礫を敷き、その上に底の抜けた埋設土器を設置している。土器埋設部の掘方の東西規模は58cmを計測し、底面からの上端までの高さは30cmである。埋設土器周辺の土は被熱のため赤色硬化している。さらに、埋設土器の南東側には、東側から押しつぶされた状態で別個体の埋設土器(図73-1)が設置されていた。底面には偏平の礫が敷かれていることから、9号堅穴住居跡bの土器埋設部と同じ構造の複式炉と考えられ、9号堅穴住居跡bには新旧2時期の複式炉が存在していることが確認された。

石組部は9号堅穴住居跡aの底面で、敷き並べた礫の下から25cm前後の大きさの偏平な礫で底面を構築していた。側面は15cm前後の直方体の礫で構築されている。石組部を構築している礫は、強い火熱を受けて表面が剥離し、赤色変化した状況が見られる。前庭部の底面は、9号堅穴住居跡aの複式炉とほぼ同じ面を用いている。

9号堅穴住居跡bに確実に伴う主柱穴は確認されなかったことから、9号堅穴住居跡aの柱位置と同じであったか、再利用された可能性が高い。9号堅穴住居跡bに確実に伴う遺物は複式炉の埋設土器となっていた深鉢に限られる。図73-1・5は9号堅穴住居跡bの埋設土器である。

9号堅穴住居跡bは、円形で複式炉を有する堅穴住居跡である。壁周溝や複式炉の重複関係から、9号堅穴住居跡bは9号堅穴住居跡aへ拡張された堅穴住居跡と判断される。9号堅穴住居跡bが建設された時期は、複式炉に埋設されている埋設土器が9号堅穴住居跡aと同じく大木10式に属することから縄文時代中期末葉と考えられ、極めて短期間のうちに9号堅穴住居跡bから9号堅穴住居跡aへ建て替えが行われたものと考えられる。

#### 10号堅穴住居跡(図23)

10号堅穴住居跡は、調査区南西部付近のC-6・7・8区で確認した堅穴住居跡である。堅穴住居跡は標高20.6mを計測する平坦な段丘面に立地し、基本土層のLⅣ上面で9号堅穴住居跡の東側において褐色土の不整半円形の輪郭として確認した。

他の遺構との重複関係を示すと10・25・26・85～87号土坑よりも新しく、9号堅穴住居跡、9・62号土坑よりも古い。

堅穴住居内の堆積土は4層に分層した。1～3層は暗褐色土や褐色土で、にぶい黄褐色土ブロックを所々まばらに含んでいることから人為堆積土と考えられる。4層は黄褐色土砂質土で、壁溝に堆積した初期流入土である。

堅穴住居跡の平面形と規模を示すと、中央部から西部の大部分が9号堅穴住居跡aと重複していることから明確ではないが、平面形は円形を呈するものと推定される。規模は遺存する上端で5.4mを測る。床面はほぼ平坦で、堅穴住居跡の壁は床面からはほぼ直立して立ち上がっており、残存する堅穴住居跡の壁の高さは約30cmである。壁周溝は堅穴住居跡の下端にめぐっており、幅は25～

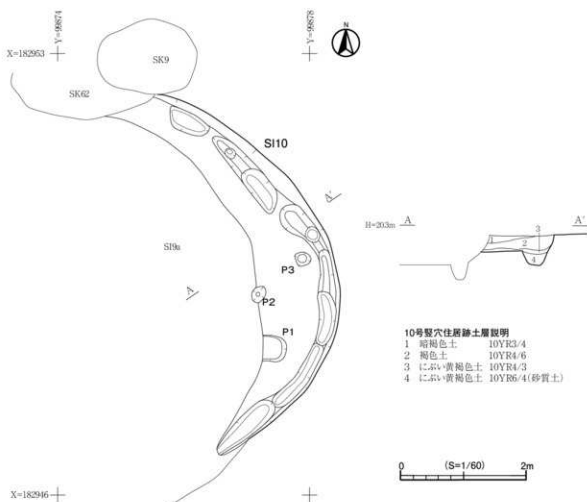


図23 10号竪穴住居跡

58cm、床面からの深さは約20cmを計測する。

複式炉は、中央部から西部の大部分を9号竪穴住居跡aと重複しているために失っており、遺存していなかった。主柱穴は、床面を精査してみたが確認することができなかった。床面にはピット3基(P1～3)がある。ピットは直径28～40cm、深さ9～31cmで性格は不明である。調査では、縄文土器・石器などが覆土土層を中心に散在した状態で出土している。

10号竪穴住居跡は、遺構の大部分が9号竪穴住居跡aに掘り込まれているため明らかではないが、円形の竪穴住居と想定される。時期は、覆土中から出土している土器片が大木9式に属していることから大木9式期の所産と考えられる。

#### 11号竪穴住居跡(図24)

11号竪穴住居跡は、調査区南部付近のC・D・E-7・8区で確認した竪穴住居跡である。竪穴住居跡は、標高20.0mの平坦な段丘面に位置し、基本土層LIV上面において、焼土混じり黒色土の円形の輪郭として確認した。ただし、竪穴住居跡の南部は調査区外へ延びているため、正確な形状・規模は不明である。他の遺構との重複関係を示すと64号土坑よりも新しく、1号埋設土器・12号



堅穴住居跡、54・61・63号土坑よりも古い。堅穴住居跡の堆積土は10層に細分した。

堅穴住居跡の壁際には焼土を多く含む4層が堆積している。各層には焼土やロームブロックを含み、不規則な堆積状況から人為堆積土と考えられる。堅穴住居跡の平面形と規模を見ると、複式炉中心とした円形を呈しているものと想定される。南半が調査区外に延びるため不明であるが、規模は計測できた上端で計測した場合、直径5.3mである。床面はほぼ平坦で、堅穴住居跡の壁は床面から外傾して立ち上がり、上端から床面までの高さは17～26cmを計測する。床面を精査してみたが、壁周溝は確認できなかった。

堅穴住居跡の中央付近には、複式炉が構築されている。11号堅穴住居跡の複式炉は土器埋設部のみが遺存し、石組部と前庭部は後世の攪乱によって壊されていた。1・2層は炭化物や焼土粒子を含む埋設土器内の堆積土で、3・4層は土器埋設部掘方に堆積した埋土である。埋設土器東側の土は焼土化している。

土器埋設部には、口径36cm、深さ42cmのほぼ完形の埋設土器(図82-1)の口縁部に接するかたちで、15cm大前後の礫が円形に敷き並べて縁石としている。土器埋設部の東西方向の長さは48cmである。

床面からは主柱穴と思われるピット3基(P1～3)を確認したが、残りの1基については後世の攪乱により失われており検出することはできなかったが、本来は4基で構成されていたものと考えられる。各主柱穴間の距離は、P1～2間が2.6m、P2～3の間が1.8mで四角形の配置になっていたものと考えられる。柱掘方の規模は、長軸36～48cm、深さ42～63cmの円筒形を呈する。柱掘方の堆積土は3層で、1層は柱痕跡、2層は柱埋土である。床面では主柱穴の他に小規模なピットが11基(P4～14)確認された。P4～10は径19～35cm、深さ7～33cmで、壁際に配置されていることから壁柱穴と考えられる。他のピットは径18～32cm、深さ12～46cmを計測するが、性格は不明である。

堅穴住居跡からは、縄文土器、石器のほか、後世に混入した土師器や須恵器片が出土した。これらの遺物は、堅穴住居跡の覆土下層を中心とした広範囲に散在した状態で出土している。

複式炉の土器埋設部には完形の深鉢が正位の状態で見出されている。

11号堅穴住居跡は、直径約5mの円形の堅穴住居跡で、複式炉を伴う。主柱穴は4本で構成されていたものと想定される。時期は、複式炉に埋設されている埋設土器が大木10式に属することから大木10式期の所産と考えられる。

#### 12号堅穴住居跡(図25・26)

12号堅穴住居跡は、調査区南部付近のD・E-7・8区で確認した堅穴住居跡である。堅穴住居跡は、標高20.2mの平坦な段丘面のLIV上面で弧を描くように壁溝の輪郭を検出した状態で把握した。検出した時点では、床面がほぼ露出した状態で、複式炉の土器埋設部の礫も確認できた。なお、南東部において重複する19号土坑を先に調査したが、出土遺物の検討の結果、12号堅穴住居跡が新しいことが明らかになった。他の遺構との重複関係を示すと11・13号堅穴住居跡、66・69・71・

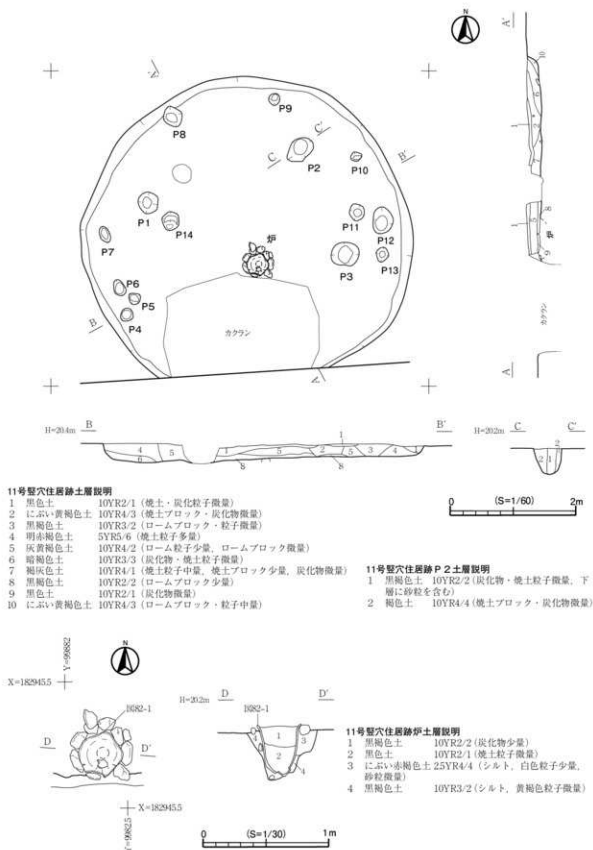


図24 11号竪穴住居跡

82号土坑よりも古く、8・11・19・88号土坑よりも新しい。

竪穴住居跡の堆積土は2層に分層できる。1層は焼土粒子や炭化粒子をわずかに含む黒褐色で、厚さが薄いため堆積状況は不明である。2層は黄褐色土ブロックを所々まばらに含む黒褐色土で、壁周溝の堆積土である。

竪穴住居跡の平面形は、東側を13号竪穴住居跡、西側を11号竪穴住居跡、南側を71号土坑によって失われたため判断としないが、炉を中心とした円形を呈するものと想定される。また、ほぼ床面が露出した状態で確認されたため、竪穴住居跡の規模は遺存する壁周溝の上端で計測した場合5.4mを測る。床面はほぼ平坦で、壁周溝の幅は20～40cm、床面から壁周溝の底面までの深さは約10cmである。

複式炉は床面南側に構築されていた。複式炉の西部の一部は11号竪穴住居跡によって失われているが、遺存状態はおおむね良好で、土器埋設部、石組部、前庭部とからなることが確認された。土器埋設部が2箇所あり、造り替えがあったと考えられる。前庭部が伴う炉を炉1とし、炉1より古い土器埋設部・石組部からなる炉を炉2とする。

炉1は、全長2.28m、最大幅93cmを計測し、炉の長軸は南北方向を向き、炉の中軸線の方位はN-6°-Wを指し、真北から若干西に振れている。複式炉内の堆積土は、1～4層は土器埋設部、石組部、前庭部の上部に堆積する層で、炭化物や焼土粒子を含むことから人為的な堆積土と考えられる。5～9層は土器埋設部、石組部の掘方に堆積した埋土である。土器埋設部は、直径30cmの埋設土器(図83-5、図84-2)に接して長さ15cm程度の直方体状の礫を並べ緑石としている。

また、埋設土器の北側に石組部が構築されている。底面には偏平な礫、側壁には20cm大前後の直方体状の礫を敷き並べて構築している。特に北側壁に敷かれた礫は37cmを測る板状の礫で、被熱を受けて強く赤色変化している。複式炉の構築は、まず埋設土器を埋設し、北側に礫を敷き並べて石組部を構築したものと考えられる。

土器埋設部の南北方向の長さは、北側の石組部も含めて76cmである。石組部の平面形は楕円形をなし、その断面形はすり鉢形を呈する。側面、底面には15cm前後の礫を敷き並べ、特に土器埋設部との間には大形の板状礫が用いられており、火熱を受けたため強く赤色変化している。石組部の最大幅は93cm、南北方向の長さは70cmである。

前庭部は長方形に掘り込まれて造られており、断面形は浅い箱形を呈している。底面からの前庭部上端までの高さは2～4cmである。前庭部の底面南部には径29cm、深さ8cmの不整形円形のピットが確認された。

炉2の石組部は炉1に大きく削られているが、径約30cmを測り、壁際に緑石が認められる土器埋設部は径40～50cmの土器(図84-2)が埋設され、緑石は伴わない。

12号竪穴住居跡の主柱穴はP1～4の4基であることを確認した。主柱穴の柱掘方は長軸66cm～1.22m、床面から柱掘方底面までの深さは49～75cmを計測し、断面形は円筒形を呈する。柱掘方の堆積土は5層に細分され、いずれの堆積土も柱抜取った後に堆積した自然堆積土と推測される。

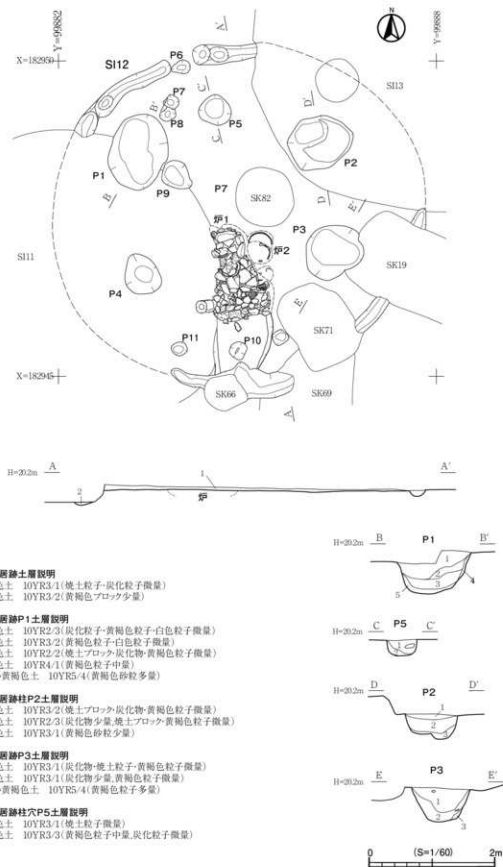
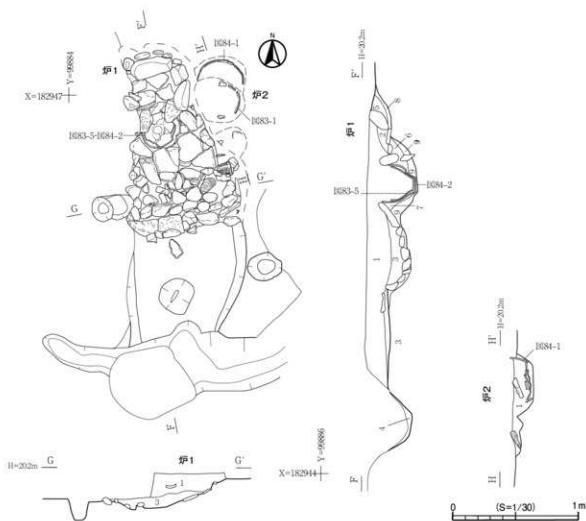


図25 12号竪穴住居跡(1)



## 12号竪穴住居跡炉1土層説明

- 1 黒褐色土 10YR2/3(焼土ブロック・炭化物微量)
- 2 黒褐色土 10YR2/2(炭化粒子少量)
- 3 黒褐色土 10YR2/2(焼土粒子・炭化粒子微量)
- 4 暗褐色土 10YR3/3(焼土粒子微量)
- 5 黒褐色土 10YR3/1(炭化粒子微量)

- 6 灰黄褐色土 10YR4/2(黄褐色ブロック少量・焼土粒子微量)
- 7 にがい赤褐色土 5YR4/4(黄褐色粒子中量 赤変部)
- 8 にがい黄褐色土 10YR5/4(黄褐色粒子中量)
- 9 明黄褐色土 10YR6/6(黄褐色粒子多量)

## 12号竪穴住居跡炉2土層説明

- 1 黒褐色土 10YR3/1(焼土粒子・炭化粒子微量)

図26 12号竪穴住居跡(2)

そのほかには、主柱穴以外に小ピット8基を確認した。P5は直径52cm、深さ25cmで、複式炉軸線上の北壁際に配置されていることから補助柱と考えられる。P11・12は直径16cm・18cm、深さ16cm・12cmで、前庭部の東と西に配置されていることから、複式炉に関連する施設のピットの可能性がある。

調査では縄文土器、土器片円盤、石器等が複式炉周辺の堆積土の下層や、主柱穴、ピットの堆積土から出土している。P1の覆土中からは、磨石が出土している。

12号竪穴住居跡は、円形で複式炉を有する竪穴住居跡である。時期は、炉1の埋設土器が大木

9式に属することや重複関係から大木9式期と考えられる。

### 13号竪穴住居跡(図27・28)

調査区中央のE・F-6・7・8区に位置し、複雑に重複して造られた竪穴住居の1軒である。住居西半は基盤の黄色土上面、その他は重複する住居の堆積土上面である。当初は1層とした黒色土の不整形の広がりとしてその範囲をとらえた。

重複関係は、15・28・29号竪穴住居跡、8・11・88号土坑と重複し、15号竪穴住居跡より古く、他の遺構よりも新しい。

堆積土は5層に区分した。基本的にはレンズ状の堆積が確認できることから、自然堆積土と考えられる。2層には基盤に由来するシルト塊が多量含まれていることから、人為堆積土と考えている。4層は古い時期の複式炉を埋めている土である。

平面形は整った隅丸方形で、北東コーナー部は、やや北に張り出している。規模は一辺6mほどで、炉の中軸線はほぼ南北を指す。床は貼床で、平坦である。検出面からの深さは25cmほどで、確認できた北壁の立ち上がりは急である。

複式炉の遺存状態は良く、土器埋設部・石組部・前庭部で構成される。前庭部末端は住居南壁中央にはほぼ取り付き、住居中央に向かって延びている。平面形はいわゆるこけし形に分類できる。

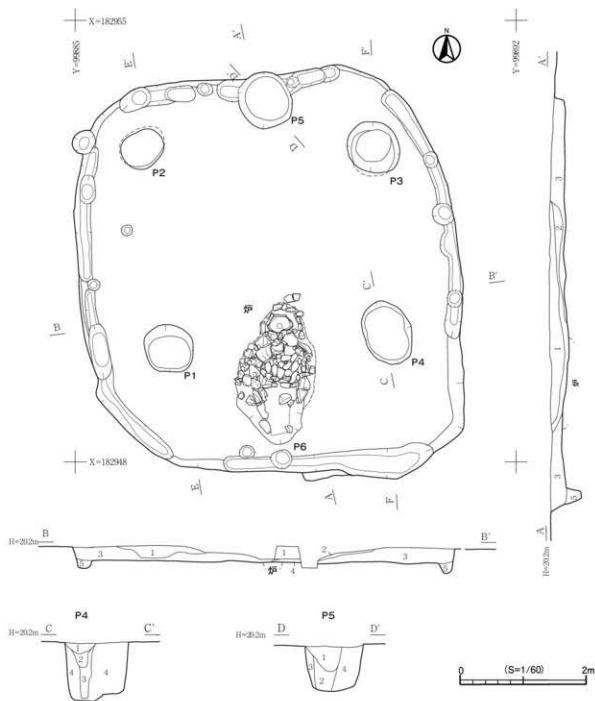
複式炉の規模は土器埋設部先端から前庭部末端までが275cm、最大幅は石組部で125cmである。土器埋設部の平面形は円形で、高さ60cmほどの深鉢(図86-1)を埋めている。埋設土器の周りには長さ10～20cmほどの川原石を、土器を囲むように1列配している。その間には隙間がみられるが、西側は土器に接して板状の石を2個立てて据えている。

石組部は、平面形は台形で、主軸方向の長さは85cmである。床面からの深さは26cmで、底面には扁平な川原石を隙間なく敷き、土器埋設部と接する部分には大きな平石を斜めに立てている。断面形は縦断面が台形、横断面形は鍋底状である。前庭部は底面の平面形は長方形で、床面からの深さは15cmである。堆積土は埋設土器内を3層、石組部と前庭部の堆積土を4層に区分した。6層は掘方の堆積土である。埋設土器は先行する14号竪穴住居跡P1内に据えられていた。

複式炉を取り囲むように、ほぼ方形に配置されたP1～4と、北壁中央に位置するP5を本住居の柱穴と考えている。複式炉の埋設土器は、P1と4を結んだ線のほぼ中央に位置する。規模はP1～5が直径70～80cm、床面からの深さはP1～4が85～89cm、P5はやや浅く68cmで、間隔はP1・2とP3・4間が3.2m、P2・3・5間が2mである。この他、南壁中央に位置するP6も浅く小さな穴であるが、その位置から炉周辺の上屋と関わる柱穴と考えている。P4については堆積土から2個の小穴が重複しているものと考えられる。

壁溝は住居各コーナー部を除き、壁際に認められた。幅20cmほど、床面からの深さは東西壁際の壁溝が数cm、南北壁際の壁溝は20cmと深い。壁溝内には部分的に直径30cmほどで、底面からの深さが15～40cmほどの小さなピットが認められる。

出土遺物は土器が主体を占め、その大半が住居内から破片が散在した状態で出土した。



## 13号壑穴住居跡土層説明

- 1 黒色土 7.5YR1.7/1  
(砂質シルト、複式炉石西部に堆積する黒色土とはほぼ同じ)
- 2 黒褐色土 10YR2.2(砂質シルト、砂質土ブロック多量)
- 3 暗褐色土 10YR3.3(砂質シルト)
- 4 暗褐色土 10YR3.4(砂質シルト、別住居の複式炉上部に堆積)
- 5 暗褐色土 10YR3.3(砂質シルト)

## 13号壑穴住居跡P4

- 1 黒色土 10YR2.1(砂質シルト)
- 2 黒褐色土 10YR2.2(砂質シルト)
- 3 暗褐色土 10YR3.3(砂質シルト)
- 4 暗褐色土 10YR3.4(砂質シルト、黄色ブロック含む)

## 13号壑穴住居跡P5

- 1 黒色シルト 10YR2.1
- 2 黒褐色シルト 10YR3.2(炭化物を含む)
- 3 濃い黄褐色シルト 10YR4.3
- 4 褐色シルト 10YR4.4

図27 13号壑穴住居跡(1)

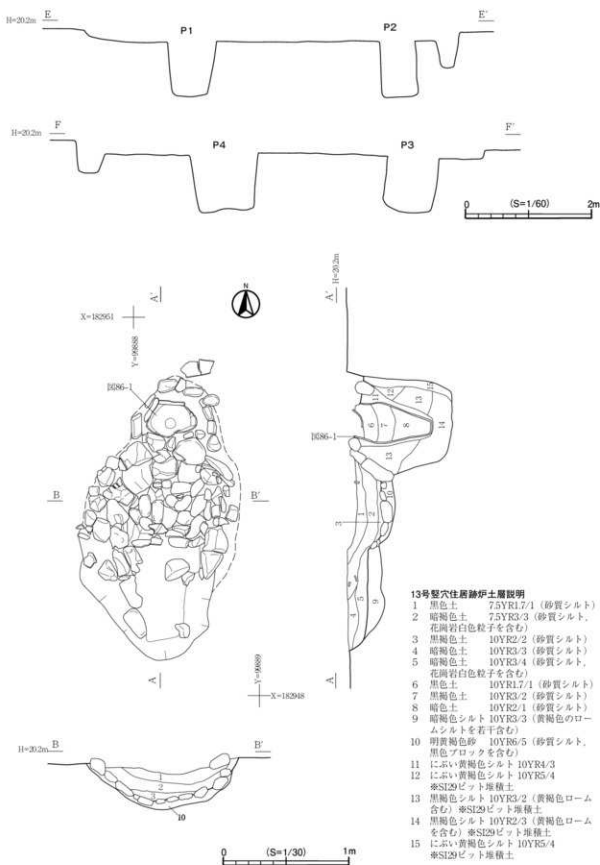


図28 13号壁穴住居跡(2)



本住居は一辺6mほどの隅丸方形の住居で、柱穴は亀甲状に配置された6基が確認できた。本住居の東壁は重複するSI28と共有する可能性が高いことから、SI28を西側に拡張したものと考えている。所属時期は、出土遺物から大木10式期と考えている。

### 28号竪穴住居跡(図29)

調査区中央のE・F-6・7・8区に位置し、複雑に重複して造られた竪穴住居の1軒である。検出面は13号竪穴住居跡の床面で、同住居の西壁から13mほど東に、これと並行して南北に走る壁溝を確認し、これを28号竪穴住居跡とした。本跡の北・東壁については、壁溝等の施設が認められないことから、13号竪穴住居跡と共有していたと考えている。

重複関係は、1・13号竪穴住居跡より古く、14・29号竪穴住居跡、88号土坑より新しい。

13号竪穴住居跡と床面を共有するため、本住居の堆積土は確認できなかった。平面形は西側壁溝の状態から、南北が長い隅丸長方形と考えられる。南壁を検出された複式炉前庭部南端に設定すると、本住居の規模は東西約4.2m、南北約5.5mと想定している。軸線はほぼ南北に一致する。床は貼床で、平坦である。また、周壁の立ち上がりは確認できなかった。

複式炉は土器埋設部・石組部・前庭部で構成される。13号竪穴住居跡複式炉の東に接し、これによって壊されている。遺存状態は悪く、埋設土器は失われ、石組部の石もほとんど残っていない。確認できたのは、土器埋設部・石組部の掘方と前庭部、石組部底面の石の一部で、炉の軸線は住居と共通する。前庭部末端は住居南壁中央に取り付き、住居中央に向かって延びている。平面形はこけし形に近かったと考えられる。

複式炉の全長は土器埋設部先端から前庭部末端までが240cm、幅は石組部掘方で80cm、前庭部で130cmと推定している。

土器埋設部の掘方の平面形は円形で、規模は直径50cm、深さは約40cmである。埋設土器の周りを囲む石列等は確認できなかった。石組部の掘方の平面形は不整な楕円形で、規模は主軸方向の長軸で約90cmである。床面からの深さは29cmで、底面には敷かれていた平石の一部が残っている。前庭部の平面形は不整長方形で、住居床面から深さは13cmである。複式炉の堆積土は3層に区分した。3層は石組部掘方の埋土である。

P1～3はL字状に配され、P1・2間が210cm、P1・3間は290cmである。複式炉の土器埋設部がP1と3のほぼ中央に位置していることから、28号竪穴住居跡の柱穴と考えている。柱穴の平面形は方形を基調とし、規模は一辺50cmほど、床面からの深さは53～70cmである。北東部にも柱があったと考えているが、これについては新しい時期の柱穴、13号竪穴住居跡P3によって壊されたと考えている。その他、P4・5についてもその位置から柱穴の可能性がある。それぞれの径が25cm・30cm、深さは42cm・25cmである。

住居西壁際に壁溝が確認された。幅は20cmで、底面には凹凸があり、床面からの深さは11～24cmである。

出土遺物は土器が主体を占め、その大半が住居内から破片が散在した状態で出土した。遺物の出

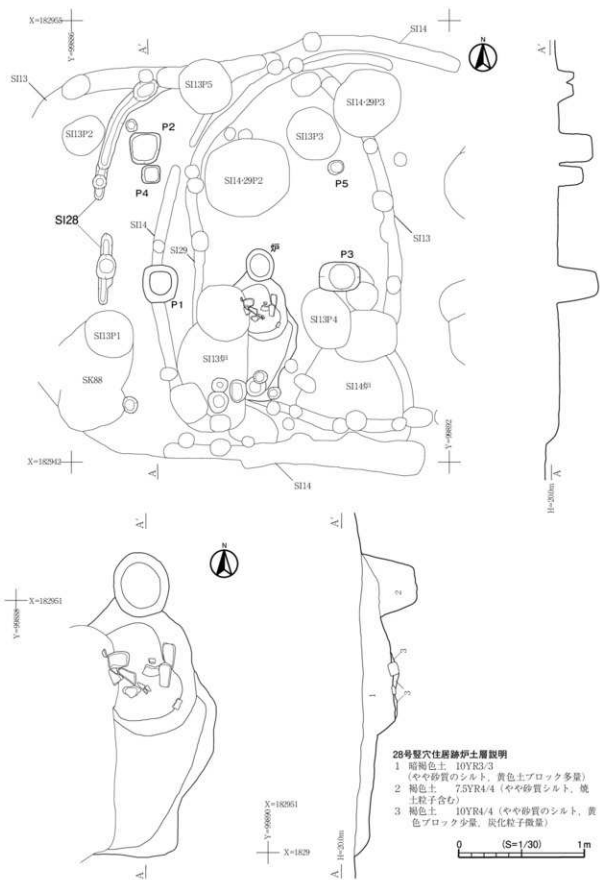


図29 28号竪穴住居跡

土はごく少ない。

本住居は4.2×5.5mの竪穴住居で、西側壁溝の状態から、本住居を西側に拡張して、SI13が造られたものと考えている。本住居の時期は不明であるが、13・14号竪穴住居跡との関係から、大木10式期の所産と考えている。

#### 14号竪穴住居跡(図30～32)

調査区中央のE・F・G-6・7・8区に位置し、複雑に重複して造られた竪穴住居の1軒である。検出面は住居の西半部が13号竪穴住居跡の床面、北・南壁は基盤の黄色土上面である。住居の東側は24号竪穴住居跡によって壊されている。13・24・28・29・65号土坑と重複し、13・24・28号竪穴住居跡、65号土坑より古く、29号竪穴住居跡より新しい。

土層断面は図32の29号竪穴住居跡の図面に示した。基本的にレンズ状の堆積が確認できる6～9層は自然堆積土と考えられる。住居南東コーナー付近に堆積する1～5層は、新しい時期の65号土坑に関連する堆積土である。平面形は隅丸方形で、各壁は緩やかなカーブを描いている。規模は一辺7mほどで、炉の中軸線はほぼ南北である。床は貼床で、平坦である。確認できた北壁の立ち上がりは急で、周溝の検出面からの深さは15cmほどである。壁溝内には部分的に直径20～50cmほどで、底面からの深さが20～40cmほどのピットが認められる。

複式炉は、先行する29号竪穴住居跡の複式炉の上に、これと重なるように造られている。炉の中軸線の延長は住居南壁中央にと直行して交わる。土器埋設部・石組部で構成され、平面形は二等辺三角形である。前庭部の立ち上がりは明確にできなかった。炉土器埋設部と石組部の西側は、13号竪穴住居跡P4や28号竪穴住居跡P3によって壊され、遺存状態は悪い。埋設土器と石組部の間の石は失われている。土器埋設部先端から石組部末端までが約170cmで、住居南壁から80cmほど離れている。石組部末端の幅は約100cmである。

土器埋設部の平面形は円形で、深鉢2個(図91-1・4)を軸線上に並べて埋めている。その周りには長さ10～15cmほどの楕円形の川原石を、土器を囲むように1列配している。石組部は、平面形・縦断面形はほぼ台形で、主軸方向の長さが60cmである。床面からの深さは20cmほどで、底面には15～20cmほどの平石を敷き、土器埋設部と接する部分には、長さ30cm弱の大形の平石を斜位に置いている。現況で緩やかにくぼみとして範囲を確認したが、掘り込みは明らかではない。

1～3層が本複式炉の堆積土で4～7層は先行する29号竪穴住居跡複式炉の堆積土である。埋設土器内には炭化物を含む黒色土が堆積していた。また、複式炉の北側60cmの床面には、規模が35×45cmの焼土が認められた。

複式炉を取り囲むように、ほぼ等間隔に配置されているP1～5と、前庭部末端付近に見られる、深さ25～40cmほどの小穴が本住居の柱穴と考えている。各柱穴の間隔は220cmほどで、複式炉の埋設土器は、P1と5を結んだ線のほぼ中央に位置する。規模はP1～5が直径75～110cm、床面からの深さは60～88cmである。P2～4の柱穴については、平面形状から2個の小穴が重複し、先行する29号竪穴住居跡とほぼ同じ位置に柱が建てられていたと考えている。P5を切る65号土

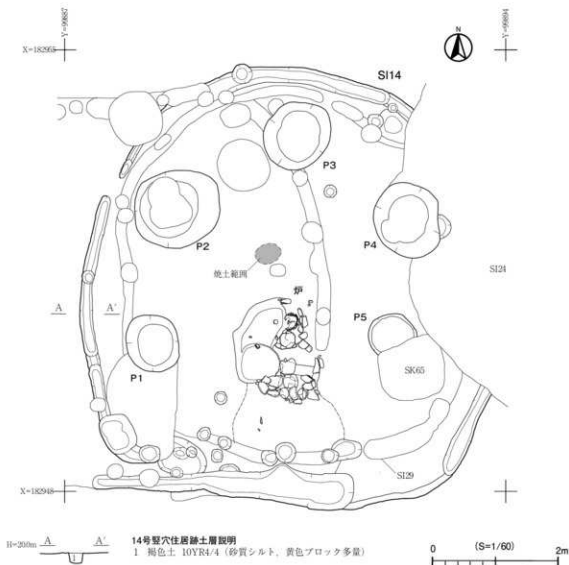


図30 14号竪穴住居跡(1)

坑は本住居跡に伴う柱穴である可能性がある。

出土遺物は土器が主体を占め、その大半が住居内から破片が散在した状態で出土した。

本住居は1辺7mほどの住居で、複式炉や柱穴の位置が29号竪穴住居跡と共通することから、同住居を同心円状にひと回り拡張したものと考えている。複式炉の他に、北側に焼土面が見られるが、これについては、29号竪穴住居跡のどちらに伴うものか判断できなかった。本跡の時期については、複式炉の埋設土器から、大木10式期の所産と考えている。

#### 29号竪穴住居跡(図32・33)

調査区中央のE・F・G-6・7・8に位置し、複雑に重複して造られた竪穴住居である。13・14号竪穴住居跡の床面から壘溝を確認し、これを29号竪穴住居跡とした。13・14・24・28号竪穴住居跡と重複し、この中では最も古い。床面が14号竪穴住居跡と同じため、本住居の堆積土は確認できなかった。

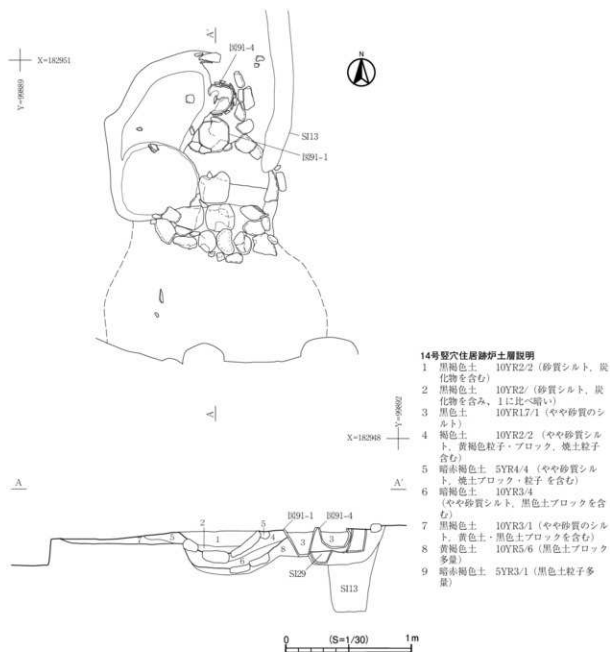


図31 14号竪穴住居跡(2)

平面形は隅丸方形で、各壁は緩やかなカーブを描いている。規模は14号竪穴住居跡より小さく、一辺6mほどで、炉の中軸線はほぼ南北である。床は貼床で、平坦である。周壁の立ち上がりは確認できなかった。

複式炉は土器埋設部・石組部・前庭部で構成される。14号竪穴住居跡複式炉の真下から検出され、炉の中軸線や各施設の配置もほぼ一致している。遺存状態は悪く、埋設土器の上部は14号竪穴住居跡の炉により壊されている。前庭部末端は住居南壁中央に取り付き、住居中央に向かって延びている。平面形は二等辺三角形である。土器埋設部先端から前庭部末端までが250cm、幅は石組部南端で110cmほど、前庭部の末端で180cmほどである。土器埋設部の平面形は円形で、深鉢を軸

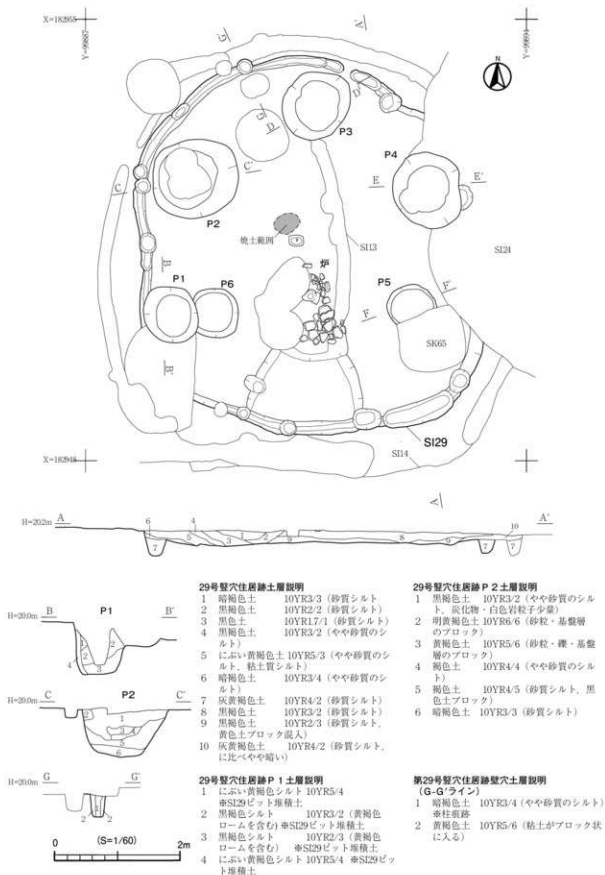


図32 29号竪穴住居跡(1)

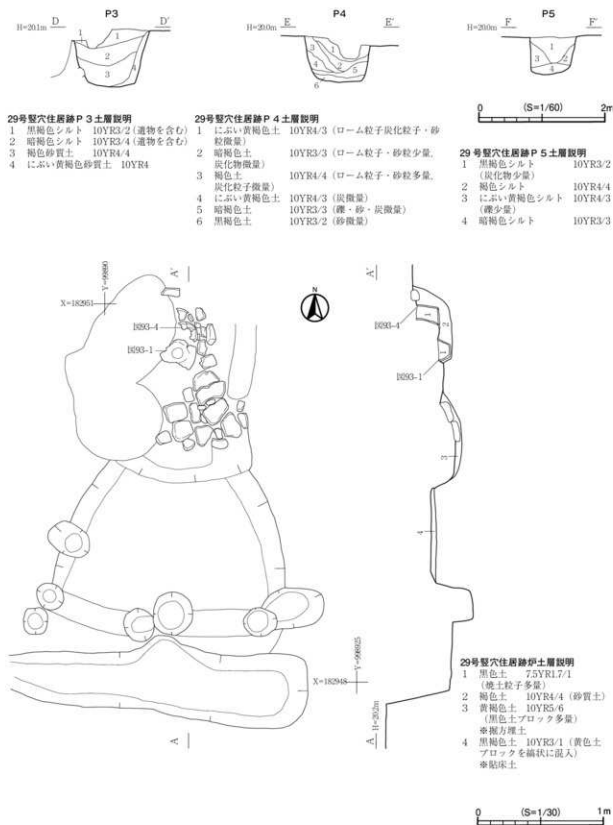


図33 29号竪穴住居跡(2)

線上图93-1と同一個体である図92-1・2、図93-3・4が並べて埋められている。

埋設土器の周りを囲む1列の石列については、14号竪穴住居跡に伴うもので、本炉との関係は不明である。石組部の平面形・縦断面形はほぼ台形で、主軸方向の長さが約160cm、幅は土器埋設部側で約80cmある。床面からの深さは25cmで、底面には敷かれていた平らな石の一部が残っている。前庭部の平面形は側壁が緩い曲線を描く台形で、住居床面から深さは10cmである。堆積土は4層に区分した。2・3層は掘方の埋土、4層は前庭部の貼床土である。

29号竪穴住居跡の柱穴のうち、平面形状から2個の小穴が重複しているものと考えられるP2-4と第14号竪穴住居跡P1の東側に接して造られたP6は、複式炉を取り囲むように、ほぼ等間隔に配置されていることから、本住居の主柱穴と考えている。各柱穴の間隔は約220cmである。複式炉前庭部の末端付近に位置する、深さ27・35cmほどの小穴も複式炉周辺の上屋に関連する柱穴と考えている。P6の深さは床面から60cmである。

壁溝は東壁際と南西コーナー部を除き、ほぼ住居壁際に認められた。幅20cmほど、床面からの深さは5～20cmほどである。壁溝内や壁際には部分的に直径20～40cmほど、底面からの深さが15～40cmの小穴が認められる。

出土遺物は土器が主体を占め、その大半が住居内から破片が散在した状態で出土した。

重複して造られた竪穴住居の中で最も古い住居である。14号竪穴住居は、平面形状や住居施設の位置から、本住居を同心円状に拡張したものと考えている。複式炉の埋設土器から、大木9式期の所産と考えている。

#### 15号竪穴住居跡(図34・35)

15号竪穴住居跡は、調査区中央付近E・F-5・6のLⅢ層上面で、楕円形のプランとして把握した竪穴住居跡である。検出面の標高は20.0mである。竪穴住居跡は北側を、4号竪穴住居跡と6号竪穴住居跡と重複し、南側は13号竪穴住居跡と重複している。遺構の重複関係から15号竪穴住居跡は、4号竪穴住居跡より古く、13・16号竪穴住居跡よりも新しいと判断される。竪穴住居跡の堆積土は、灰黄褐色土、黒褐色土、暗褐色土などの5層に細分した。

竪穴住居跡の平面形は方形に近い楕円形で、竪穴住居跡の南北両端は他の遺構と重複していることから、正確な全長は不明であるが、調査で確認された範囲で計測した規模は、南北4.8m、東西幅5.3mである。検出面から住居床面までの深さは10cm程度が残るのみである。床面はほぼ平坦で、硬化面および貼土は確認されていない。竪穴住居跡の壁は大幅に削平されるため全体的に残りが悪いが、最も残存する部分で竪穴住居跡上端から床面までの高さは8cmである。

壁周溝は竪穴住居跡南西隅および東端で部分的に途切れる状態で確認した。壁周溝は残存する範囲で計測すると、幅10～20cm、床面から壁周溝の底面までの深さは5cm前後を測る。

複式炉は竪穴住居跡南面の中央付近に位置する。平面形はいびつな瓢箪形を呈し、北側から土器埋設部、石組部、前庭部で構成されることが判明した。

前庭部は竪穴住居跡の南壁に接するように構築されている。複式炉の全長は2.45m、東西幅は1.08



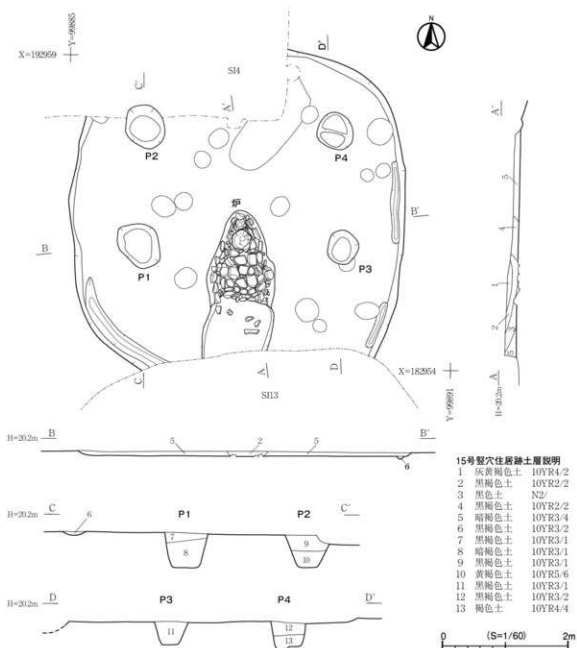
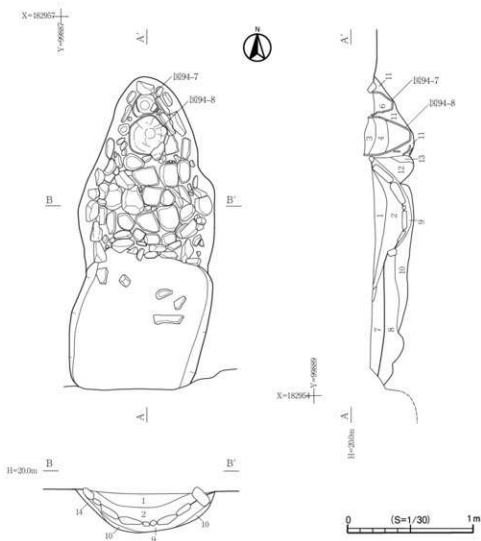


図34 15号竪穴住居跡(1)

mを測る。炉跡の主軸方向は南北方向を指す。土器埋設部は長軸60cm、短軸60cmを計測し、地山を部分的に掘りくほめて2個体の深鉢を埋設し、その周辺を裏込め土および礫で固定する。

土器内の堆積土は、黒褐色土やぶい黄褐色土、暗褐色土等の4層に細分した。埋設土器の堆積土からは、炭化物や焼土が確認された。なお、埋設土器は2個体(図94-7・8)とも内面には被熱した状況が確認された。加えて、埋設土器の取り上げの際に土器の外面に張りついた土を観察したところ、土が被熱し、赤く変色した状況を確認した。石組部は長軸80cm、短軸1.07mを計測し、断面形はすり鉢状に掘りくほめ、こぶし大から人頭大の大きさの礫をもって構築している。



15号竪穴住居跡伊土層説明

1 黒色土	10YR2/1	8 にぶい黄褐色土	10YR4/3
2 灰黄褐色土	10YR4/2	9 黒褐色土	10YR2/3
3 黒褐色土	10YR3/1	10 褐色土	10YR4/4
4 黒褐色土	10YR2/2	11 褐色土	10YR4/6
5 にぶい黄褐色土	10YR4/1	12 褐色土	10YR4/4
6 褐色土	10YR3/3	13 にぶい黄褐色土	10YR4/3
7 暗褐色土	10YR3/4		

図35 15号竪穴住居跡(2)

石組部の埋土は、上位から黒色土、灰黄褐色土の2層に細分した。石組部の裏込め土は黒褐色土である。石組部内からは炭化物に混じって縄文土器片が出土している。また、石組部の表面は被熱している状況を確認した。前庭部は長軸1.05m、短軸1.08mを計測する。地山面を一度平坦に掘り込み、その上に黄褐色土で整地を行うことで平らな床面を構築している。前庭部内の堆積土からは、石組部の石材の一部が散乱する状況で分布していた。なお、前庭部内では被熱等の痕跡は確認されなかった。

15号竪穴住居跡の床面からは、4基の柱掘方を確認した。これらの柱掘方の配置から判断して、15号竪穴住居跡の主柱穴と考えて良い。P1から4の柱掘方は、複式炉の主軸線を挟んで四方に

配置されている。P 1は直径69cm、深さ54cmを計測し、平面形はいびつな楕円形を呈する。柱掘方埋土は黒褐色土と暗褐色土の2層に細分された。P 2は直径70cm、深さ50cm、平面形はいびつな楕円形を呈し、柱掘方の埋土は黒褐色土と黄褐色土の2層に分かれる。P 3は直径50cm、深さ38cm、平面形は楕円形を呈する。埋土は黒褐色土の単層である。P 4は直径54cm、深さ46cm、平面形は楕円形を呈し、柱掘方の埋土は黒褐色土と褐色土の2層に細分した。その他のピットでは15号竪穴住居跡内には竪穴住居跡に重複する状況で土坑およびピット15基を確認した。ピットの多くは遺物を含まず時期を確定することは難しい。加えて、15号竪穴住居跡より上層から掘り込まれるものがあり、ピットの大部分は15号竪穴住居跡の埋没後に掘削されたものと考えられる。

15号竪穴住居跡は遺構上部の大部分を削平されており、竪穴住居跡の埋土は検出面から10cmほどしか遺存しておらず全体的に残りが悪かったことから、遺構に伴う明らかな遺物の出土は無かった。このような状況でも、複式炉上面付近で焼土や炭化物に混ざるかたちで縄文土器が出土した。

15号竪穴住居跡は直径約5m、深さ10cmの楕円形の竪穴住居跡である。同住居跡は上部を大きく削平され、埋土はほとんど残っていなかった。竪穴住居跡には主柱穴となる4本の柱掘方および住居南面には複式炉、壁溝が確認できる。複式炉の平面形は瓢箪形で、土器埋設部、石組部、前庭部で構成される。土器埋設部・石組部の上面からは炭化物および焼土に混じって縄文土器が出土した。竪穴住居跡は、北端および南端を他の竪穴住居跡により失われているが、複式炉自体の残りは良く、炉のほぼ全体が判別できる状況であった。

15号竪穴住居跡からの出土土器は、いずれも大木10式に属することから大木10式期に位置付けられる竪穴住居と考えられる。

#### 16号竪穴住居跡(図36)

16号竪穴住居跡は、調査区中央やや東より付近E・F-3・4・5で検出した竪穴住居跡である。遺構は、基本土層L IV上面で半楕円形のプランとして認識した。16号竪穴住居跡の西側は4号竪穴住居跡ならびに後世の削平により失われている。また、竪穴住居跡南端の一部は15号竪穴住居跡と重複したため失われている。

竪穴住居跡を検出した標高は198～199mの平坦な段丘面である。他の遺構との重複関係では、21基のピットと土坑との重複が確認されているが、大多数は16号竪穴住居跡が埋没してから掘り込まれており、16号竪穴住居跡よりも新しい時期のものと考えられる。また、16号竪穴住居跡は重複関係から15号竪穴住居跡よりも古い時期の竪穴住居跡と考えられる。

竪穴住居跡の堆積土については、埋土の遺存状況は悪く褐灰色土と暗褐色土の2層に細分できた程度である。調査で確認できた平面形は、他の遺構との重複関係や後世の削平により西面半分が削られているため半楕円形となっているが、本来は楕円形の平面形を有する竪穴住居跡であったと想定される。

遺存する範囲で計測される竪穴住居跡の規模は、南北5.3m、東西4.1mである。床面はほぼ平坦であるが、貼床等の有無は確認されなかった。竪穴住居跡の立ち上がりは平坦な床面からなだら

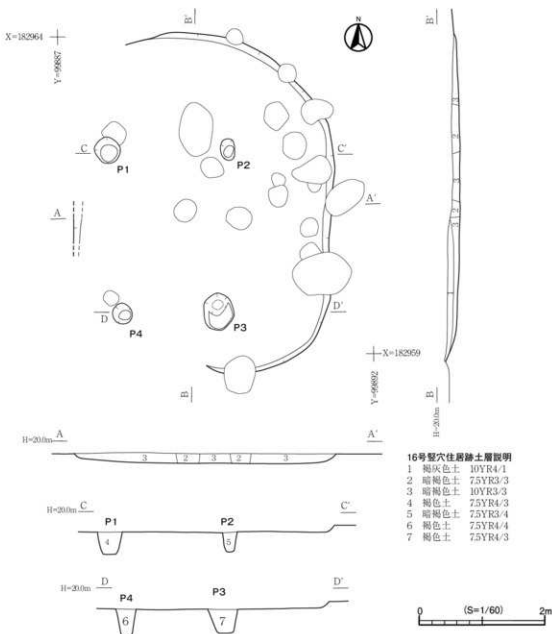


図36 16号竪穴住居跡

に立ち上がって竪穴住居跡の壁を形成している。竪穴住居跡の高さは残りの良い部分で計測した場合約14cmである。

床面の精査を行ったものの床面には壁周溝を確認することはできなかった。また、複式炉等の施設も確認することはできなかった。ただし、調査の過程では埋土中に焼土が含まれていることを確認しており、地床炉のような簡易な炉が竪穴住居跡内に存在していた可能性はある。

主柱穴は、重複する多数のピットのなかから、配置や深さ、形状、埋土が類似する4基を主柱穴として位置付けた。4本の柱掘方は住居内の4箇所配置しており、P1は直径40cm、深さ38cmを計測し、柱掘方の埋土は褐色土である。P2は直径24cm、深さ30cmを計測し、埋土は暗褐色

土である。P 3は直径48cm、38cmで埋土は褐色土を呈する。P 4は直径30cm、深さ42cmを計測し、埋土は褐色土である。

調査の過程では堅穴住居跡の埋土からは、縄文土器の小片がまばらに出土した。

16号堅穴住居跡は、直径約5.3mを計測する楕円形の堅穴住居跡と推定されるが、堅穴住居跡の西側が後世の削平により消失しており、本来の堅穴住居跡の形状は不明である。堅穴住居跡に伴う遺構としては、主柱穴と判断した4基の柱掘方だけであり、複式炉や壁周溝等の施設は確認されていない。出土した土器には大木8b式があることから、本遺構は大木8b式の所産と考えられる。

#### 17号堅穴住居跡(図37)

17号堅穴住居跡は、調査区南東部付近G・H-6・7の、24号堅穴住居跡の埋土上面に重複する状況で堅穴住居跡のプランを確認した。堅穴住居跡の検出面の標高は20.10mを計測する。他の遺構との重複関係では、直接重複する24号堅穴住居跡が埋没した後、同じ場所に17号堅穴住居跡が築かれる。

堅穴住居跡の堆積土は黒褐色土および黒色土の3層に細分した。堅穴住居跡の平面形は隅丸長方形を呈し、南北3.68m、東西2.8mを計測した。堅穴住居跡全体のプランが、24号堅穴住居跡におさまる程度の小型の堅穴住居跡である。床面はほぼ平坦で硬化面および貼床は確認されていない。

堅穴住居跡の壁面は、床面から角度を持って立ち上がり堅穴住居跡の上端に達する。堅穴住居跡の壁は残りの良い部分で計測した場合約20cmを測る。壁周溝の痕跡は確認することはできなかった。

堅穴住居跡のほぼ中心には複式炉が位置する。複式炉は小規模である。平面形はいびつな長方形を呈し、土器埋設部、石組部、前庭部が確認された。複式炉は南北1m、東西45cmを計測し、炉の主軸方向は北東を指す。

土器埋設部は、南北34cm、東西幅35cmを計測する。基盤層を部分的に掘りくぼめ、そこに土器を並べ、その上に壺形土器(図97-1)を倒位の状態で設置していた。埋設土器内の埋土は黒褐色土で、土器を設置した際の裏込め土は黒褐色土である。埋設土器内からは炭化物・焼土に混じって遺物がわずかに出土した。

石組部は、南北37cm、東西45cmを計測する。石組部は、基盤層を方形に掘り込み、掘り込み内に底面が平坦になるようにこぼし大の礫を並べて構築している。埋土は小褐色土の単層で炭化物を含む。石の裏込め土は黒褐色土である。

前庭部は、南北29cm、東西40cmで、ゆがんだ方形の掘方を有し、掘方の主方位にはこぼし大の石を並べ円形の堰堤部を作っている。埋土は黒褐色土で埋没している。床面の精査を行ったが、主柱穴およびピットとなるような痕跡は確認されなかった。遺物は複式炉周辺を中心に、縄文土器などが出土した。

17号堅穴住居跡は、南北3.8m、東西2.8mの隅丸長方形の小規模な堅穴住居跡である。上部は大幅に削られ埋土の遺存状況は悪く、住居床面の精査では柱痕跡等の施設は確認されなかった。堅穴住居跡中央には全長1m程度の小規模な複式炉が構築されていた。土器埋設部に使用された土器には

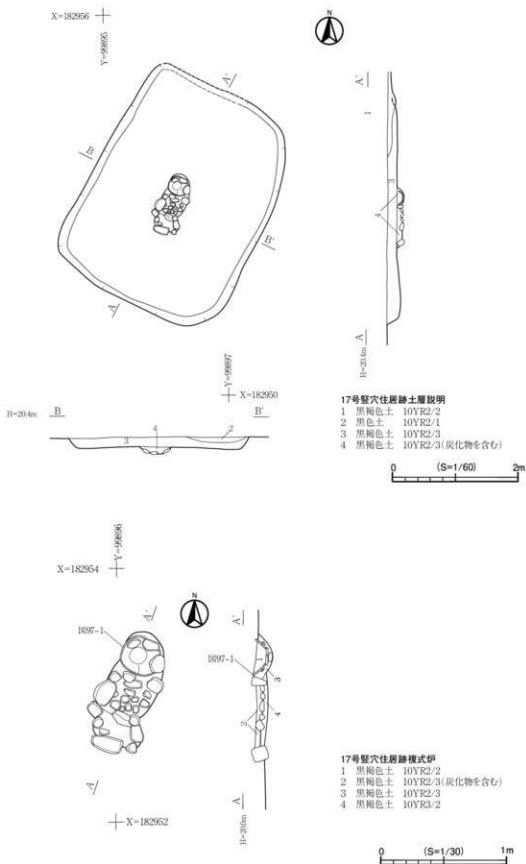


図37 17号竪穴住居跡

壺形土器が用いられていた点に特徴がある

埋設土器に用いられた壺形土器は、大木10式段階に属する土器であり、24号竪穴住居跡が埋設された後に建設された、大木10式期の竪穴住居跡と考えられる。

#### 24号竪穴住居跡(図38・39)

24号竪穴住居跡は、調査区南東部付近G・H-6・7の標高20.0mを計測する、段丘面の基本土層LIV上面で確認した。他の遺構との重複関係では竪穴住居跡の北端が18号竪穴住居跡、西端が14号竪穴住居跡と重複し、新旧関係は24号竪穴住居跡が14号竪穴住居跡・18号竪穴住居跡よりも新しい。また24号竪穴住居跡の埋設後に南東部上面に17号竪穴住居跡が建設される。

竪穴住居跡の堆積土は、黒褐色土、暗褐色土、黒褐色シルトなどの8層に細分した。竪穴住居跡の平面形は円形で、直径6m前後を測る。竪穴住居跡の輪郭は14号竪穴住居跡や18号竪穴住居跡、土坑と重複するため、ややゆがんだ形状となっている。

竪穴住居跡の床面は平坦に整えられている。貼床等の痕跡は確認されなかった。床面の中央付近には部分的に被熱面を確認したことから、床面中央付近に地床炉が存在した可能性がある。竪穴住居跡の壁は、床面から角度を持って立ち上がって上端に達する。竪穴住居跡上端から床面までの高さは低いところで30cm程度、残りの良い部分で高さ50cm程度を測る。

床面の輪郭に沿うように壁周溝が確認されている。壁周溝は竪穴住居跡の下端部分を途切れることなく一周する。周溝幅は50～80cm、床面からの深さは20～30cmを測る。竪穴住居跡床面から壁周溝の底面までの深さは60～70cmを測る。壁周溝の底面は概ね平坦に整えられているが、部分的にピットと重複する部分や、底が基盤層の砂礫層にあたる部分があり、場所によっては凹凸面が見られる。

複式炉は住居南面の中央付近に構築されていることを確認した。平面形は南北に細長い卵形を呈する。複式炉は北から土器埋設部、石組部、前庭部で構成されており、前庭部南端は住居の南壁に接している。複式炉の全長は2.7m、幅は1.35mを測る。炉の主軸方向はほぼ南北方向を指す。土器埋設部は、南北80cm、東西80cmを測る。土器埋設部では、南北に隣接するように配置された埋設土器3個体を確認した。南側の埋設土器(図99-1・2、図100-1)は直径35cm、残存高35cmの深鉢である。土器の埋設に際しては、地山を掘りくぼめたのち暗褐色土を土器の裏込めとして用い、さらに土器の周囲に石を充填して固定している。この埋設土器は同一個体の土器を上下に分割し、組み合わせた状態であること確認した。埋設土器内の埋土は、黒褐色土、黒色土の2層に分かれる。埋土からは、炭化物や焼土に混じって土器片が若干出土した。土器の内外面には被熱した状況が確認された。

さらに北側に埋設された土器(図99-9)は、直径25cm、残存高10cmの深鉢の底部片のみを確認した。また、さらに北側に深鉢底部である図99-10が縦列して埋設されている。

石組部は、南北85cm、東西は1.35mを測る。石組部はすり鉢状に掘りくぼめた範囲に、こぶし大から人頭大の大きさの礫を並べて、石組部を構築している。礫の配石は大ぶりの石を並べ、その

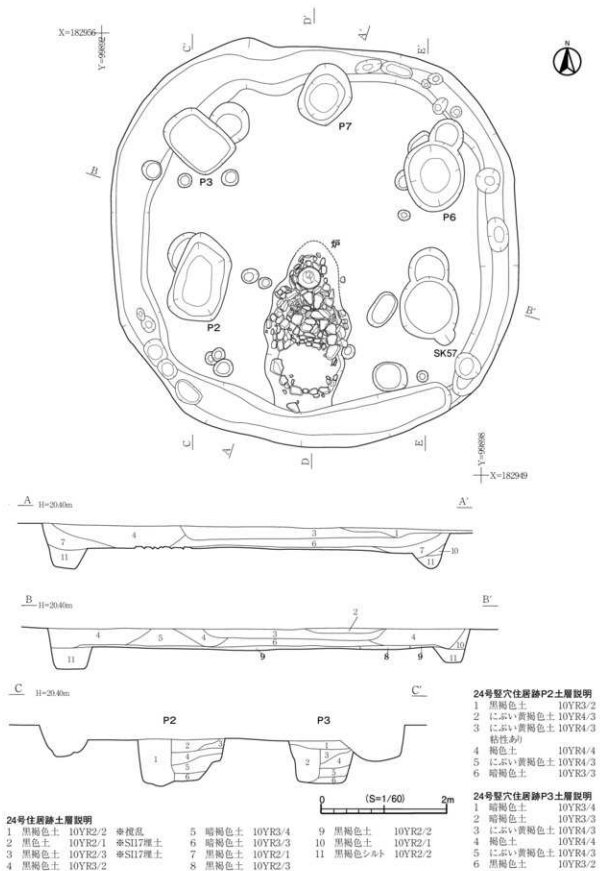


図38 24号竪穴住居跡(1)



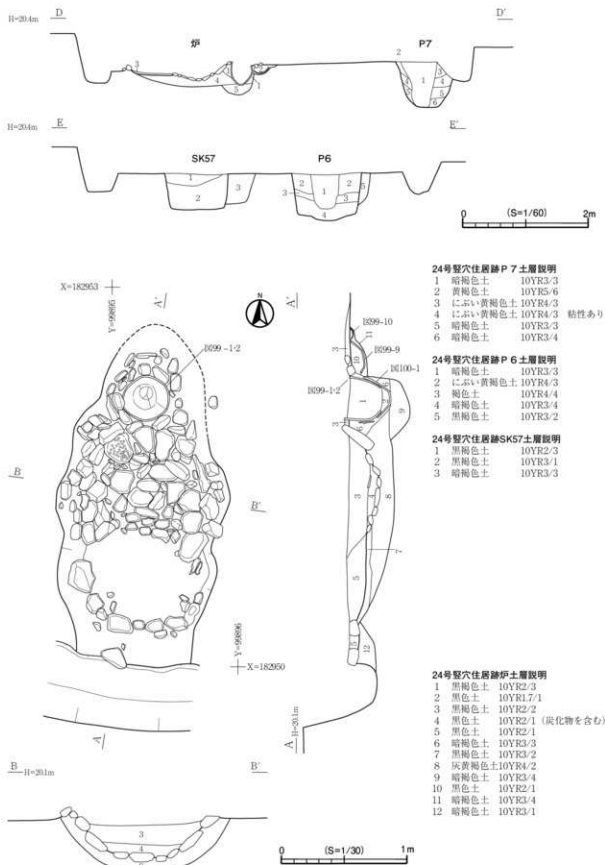


図39 24号竪穴住居跡(2)

隙間を小ぶりの石で埋めるように構築している状況を確認した。石組部の底は平坦で、石組部底面から立ち上がる壁面はなだらかに傾斜している。使用された石材は、主として自然の円礫であるが、中には石皿の転用も見られた。また、使用された石の上面はいずれも被熱している状況を確認した。被熱の状態は、埋設土器に近い石組内の北面部分の方が強く被熱している傾向がある。石組部の埋土は黒褐色土および黒色土の2層に分かれる。埋土からは、炭化物や焼土に混じって深鉢小片などが出土した。石組部の裏込めには、灰黄褐色土を用いている。前庭部は、南北1.05m、東西1.25mを測る。

前庭部は、地山を一定の深さに掘り込み、灰黄褐色土や黒褐色土を用いて貼土を行い、作業場としての平坦面を造作している。前庭部は、貼土を行った後に周辺に石を並べ、作業場と認識できるような円形状の空間を作っている。なお前庭部では、土器埋設部および石組部のような被熱痕跡は確認されていない。

24号竪穴住居跡では、P2・3・7・6、SK57の5基の柱掘方を主柱穴と位置付けた。この5基の柱掘方は、住居内に五角形を描くように複式炉を囲んで配置している。P2は平面形がいびつな長楕円形を呈し、南北1.38m、東西1.36mを計測し、床面からの柱掘方底面までの深さは74cmである。埋土は、地山のローム土を含むにぶい黄褐色土、褐色土、暗褐色土などの6層に細分した。また、P2では柱の採取痕跡が確認されている。採取痕跡は直径50cm、埋土は黒褐色土を呈する。P3は平面形が長方形で長軸1.08m、短軸78cmを計測し、床面からの柱掘方底面までの深さは68cmである。埋土は、暗褐色土、にぶい黄褐色土、褐色土などの6層に分けた。主柱穴は抜き取られており、柱採取痕跡を確認した。柱採取痕跡は直径46cm、埋土は暗褐色土の自然堆積土である。P6は平面形が長楕円形を呈する柱掘方である。長軸1.1m、短軸94cmを計測し、床面から柱掘方の底面までの深さは74cmである。柱掘方埋土はにぶい黄褐色土、褐色土、暗褐色土等の4層に細分した。柱穴の採取痕跡は柱穴のほぼ中心で確認された。柱採取痕跡は直径40cmで、埋土は暗褐色土を呈する。P7は平面形がいびつな楕円形を呈する柱掘方である。長軸1.0m、短軸80cm、床面から柱掘方底面までの深さは70cmを計測する。柱掘方の埋土は地山のローム土を含む黄褐色土、にぶい黄褐色土、暗褐色土の6層に分かれる。柱採取痕跡は、柱穴内の中心よりやや南よりで確認した。柱採取痕跡は直径60cmで、埋土は暗褐色土である。SK57は平面形が円形を呈する柱掘方である。長軸96cm、短軸92cm、検出面から柱掘方底面までの深さは58cmを計測する。埋土は上から黒褐色土、暗褐色土の2層に細分された。他の柱穴と異なり柱の採取痕跡はない。

その他、住居内からは、合わせて大小34基の土坑とピットを確認した。各々の直径は、20cm未満から60cmのものまで大きさ・深さともに多様である。そのうちのいくつかは住居の補強や内部施設時の補助杭の設置ないしは建て替え等に際して重複して掘られた可能性があると考えられる。

竪穴住居跡の埋土からは、縄文土器や石鏃等の剥片石器、磨石、石皿などが出土した。遺物は、黒褐色土(4層)、暗褐色土(5・6層)の上層堆積から炭化物に混じって多く出土する傾向があった。その他では、複式炉の上面から、縄文土器深鉢等の破片が炭化物や焼土とともに出土した。

24号竪穴住居跡は、直径6m前後の円形の竪穴住居跡である。直径1m前後を計測する5基の主柱穴をもって建設されている。竪穴住居跡の中には壁面に沿うように、幅0.6m、深さ0.3mの周溝がめぐる。住居の床面は平坦で、住居内の南面には平面形が卵形の複式炉を有している。複式炉は、土器埋設部、石組部、前庭部から構成され、炉内は火の使用に際しての被熱痕跡が確認された。また、床面の一部でも焼土化した部分が確認されたことから、住居内には複式炉とは別に地床炉が存在した可能性がある。出土遺物には縄文土器や石器等があるが、埋設土器に使用された土器が大木10式に属するものから、大木10式期の竪穴住居と考えられる。

#### 18号竪穴住居跡(図40)

18号竪穴住居跡は、調査区北東部付近G・H-5・6の基本土層LIV層上面でいびつな隅丸方形のプランとして確認した遺構である。検出面の標高は20.0mを計測し、他の遺構との重複関係では遺構の南端部分が24号竪穴住居跡、北端部を19号竪穴住居跡と重複している。重複する遺構との先後関係は、18号竪穴住居跡は19号竪穴住居跡よりも新しく、24号竪穴住居跡よりも古いと判断される。

竪穴住居跡の堆積土は、黒色土、黒褐色土等の3層に細分した。竪穴住居跡は黄褐色のローム層を掘り込んで、部分的にはその下の砂礫層上面まで達している。

遺構周囲は隣接する住居跡や土坑などに部分的に削平され、平面形はいびつな円形を呈しており、遺存する範囲で計測した遺構の規模は南北4.0m、東西5.5mである。遺構の底面は10～20cm程度の起伏が見られ、一般的な竪穴住居跡のように平坦には整えられていない。遺構の壁は底面からやや角度を持って立ち上がって上端に達する。遺構の壁の高さは残りの良い部分で計測した場合、約32cmを測る。遺構底面には、壁周溝や炉跡、柱掘方等の施設は確認することができなかった。

発掘調査で出土した遺物は、堆積土の1層の黒色土から炭化物に混じって縄文土器が比較的多まって数が出土した。また、遺構内の西面付近では土器が集積した状態で出土している。2・3層の黒褐色土からは遺物の出土は少ない。

18号竪穴住居跡は直径5m前後のいびつな円形を呈する遺構で、断面形は浅い椀状に掘り込まれた遺構である。遺構の底面は掘削を途中で中断したかのような起伏面を残しており、複式炉や柱掘方などの住居に関連するような施設は伴わない。掘削状態は隅丸方形の竪穴住居に類似する特徴を持っている。また、遺構の掘削は黄褐色ロームの下の固い礫層にあたる部分で中断しているといった様子がかがえる。そうした、掘削の規模や形状、出土遺物等の状況および調査時の状況から、本遺構の性格は未完成のまま廃棄された竪穴住居跡の可能性が高いと判断した。出土土器により遺構の時期は、構築時期は大木9式期、埋没時期は大木10式期と考えられる。

#### 19号竪穴住居跡(図41)

19号竪穴住居跡は調査区北東部付近H・I-4・5で確認した竪穴住居跡である。検出状況は基本土層LIV層上面で半円形に分布する黒色土で竪穴住居跡の輪郭を把握した。19号竪穴住居跡の西側は、後世に削平を受け失われている。検出面の標高は19.84mを計測し、平坦な段丘面に位置する。

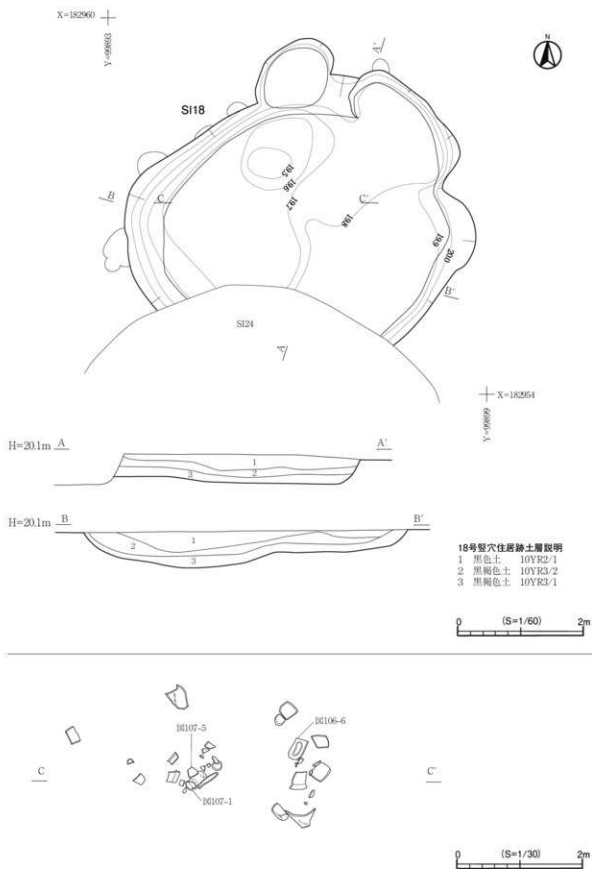


图40 18号竖穴住居跡

他の遺構との重複関係では、竪穴住居跡の南側は18号竪穴住居跡により失われており、19号竪穴住居跡のほうが18号竪穴住居跡よりも古いと判断される。また、19号竪穴住居跡の周辺には重複するように、13基の土坑とピットが分布している。これらの遺構は19号竪穴住居跡が埋没した後掘削されたものと考えられる。

竪穴住居跡の堆積土は、竪穴住居跡の上部の大部分を大幅に削平されたために残りが悪く、確認された埋土は暗褐色土の1層のみである。調査で確認された埋土の残りは半円状を呈し、北東から南西までは4.2m、東西は1.7mを測る。竪穴住居跡の床面はほぼ平坦であるが、残存状況からは貼床等の有無は判別できなかった。

竪穴住居跡の壁面は床面よりやや角度を持って立ち上がって上端に達する。竪穴住居跡の壁が最も良く残る部分で床面から上端までの高さは12cmである。その他の竪穴住居跡に伴う壁周溝や複式炉等の施設は確認できなかった。竪穴住居跡の埋土を掘り上げていく中で、住居の中央付近から部分的に焼土の分布が確認できたことから、住居中央付近に地床炉を有した可能性がある。

主柱穴は、周辺に分布するピットのうち、配置状況、形状、深さ、埋土の類似点から住居内にP1から4の掘方を主柱穴に位置付けた。P1は直径60cm、深さ26cm、柱掘方の埋土は黒褐色土である。P2は直径60cm、深さ28cm、柱掘方埋土は黒褐色土である。P3は直径38cm、深さ34cm、埋土は黒褐色土とにぶい黄褐色土である。P4は直径44cm、深さ40cmを計測し、柱掘方埋土は黒褐色土となる。遺物は竪穴住居跡の埋土から、縄文土器片がまばらに出土した程度である。

19号竪穴住居跡は、竪穴住居跡の西側半分が後世の削平を受け失われているため、全体の形状は不明である。遺存状況から復元すると全長4m前後の長楕円形の竪穴住居跡であったと推定される。竪穴住居跡の床面には4基の主柱穴を設ける。壁周溝や炉跡等の施設は確認できなかった。19号竪穴住居跡の出土土器は大木8b～9式が認められるものの、大形破片の出土から、大木8b式期の竪穴住居跡と考えられる。

#### 20号竪穴住居跡(図42)

20号竪穴住居跡は、調査区北東隅付近I・J-4・5の基本土層LIV上面で確認した竪穴住居跡である。竪穴住居跡の東側は調査区外に広がり、北側は削平により失われている。竪穴住居跡は、標高19.8mを計測する平坦な段丘面に位置する。

20号竪穴住居跡の堆積土は灰黄褐色土の単層であり、その下は地山の黄褐色砂質土となる。平面形は楕円形を呈し、調査区内においては南北4.4m、東西3.7mを計測した。床面は平坦に整えられている。

竪穴住居跡の壁は、床面からやや角度を持って立ち上がり上端に達している。今回確認されたのは住居の西壁および南壁部分であるが、竪穴住居跡の底面から上端までの高さは、最も残りの良い部分で計測した場合20cmである。

竪穴住居跡床面の西側と南側では途切れながらめぐる壁周溝を確認した。周溝の幅は15～20cmを計測し、床面から壁周溝底面までの深さは6cmほどである。12号竪穴住居跡の調査では複式炉

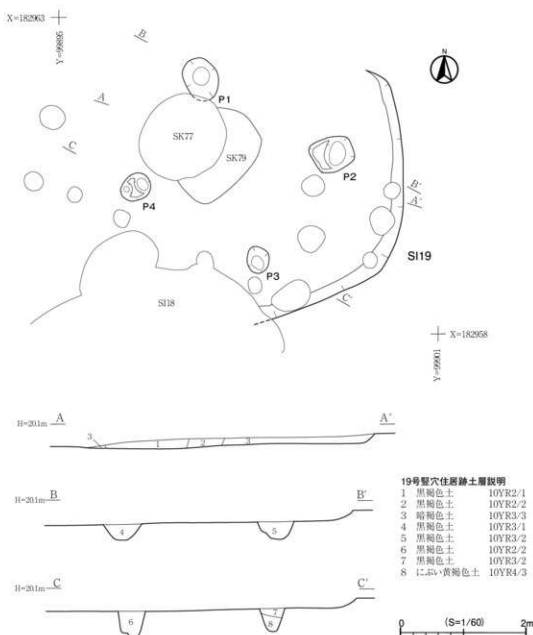


図41 19号竪穴住居跡

等の跡は確認されなかったが、竪穴住居跡の調査の過程において、竪穴住居跡の中央付近では部分的に炭化物や焼土が確認されたことから、竪穴住居跡の中央付近に地床炉を有していた可能性がある。

竪穴住居跡床面からは、12基(P1～12)のピットを確認した。すべてが住居に対応するかは定かではないものの、住居の支柱穴としては、南からP1・2・5・9・12・11の多角形に配置されたピットを支柱穴として想定した。P1は直径36cm、深さ20cm、埋土は褐色土である。P2は直径38cm、深さ18cm、埋土は黒褐色土である。P5は直径38cm、深さ16cm、埋土は暗褐色土である。P9は直径30cm、深さ14cm、埋土は黒色土である。P9は直径30cm、深さ12cmで、埋土は黒色土

である。P 11は直径30cm、深さ16cm、埋土は黒色土を呈する。P 12は直径32cm、深さ16cmで、埋土は黒色土である。主柱穴と想定した柱穴について示したが、それ以外のピットも直径や深さがP 1～12に近い大きさを示しており、埋土も類似しているため、正確な主柱穴は他にもある可能性が残る。

遺物は住居埋土から、散発的に縄文土器が出土した。

20号竪穴住居跡は、確認できた範囲で想定すると4.2m前後の楕円形の竪穴住居跡と考えられる。竪穴住居跡の床面には多角形に配置された6本の主柱穴、および周溝を部分的に確認した。調査では複式炉などの炉跡は確認されていないものの、埋土下層から炭化物や焼土の堆積が確認されたことから、住居中央部には地床炉などの炉跡が存在していた可能性は考えられる。

出土土器は大木8b式段階に属し、本遺構は大木8b式期の竪穴住居跡であると考えられる。

### 25号竪穴住居跡(図43)

25号竪穴住居跡は、調査区北側中央付近E・F-2・3で確認した竪穴住居跡である。竪穴住居跡は基本土層のLⅣ上面で円形にめぐるプランとして把握した。竪穴住居跡の北側付近は大きく削平を受けている。竪穴住居跡の立地する標高は19.40～19.60mを計測し、平坦な段丘面に位置している。

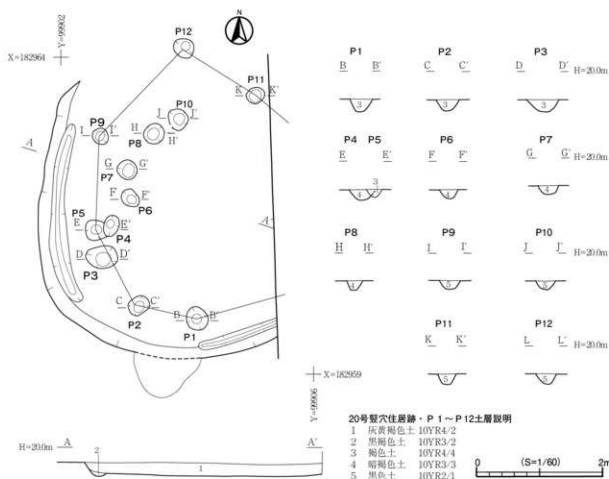


図42 20号竪穴住居跡

堅穴住居跡の堆積土は、暗褐色土と褐色土の2層に細分した。平面形はややいびつな円形で直径は2.7mを測る小規模な堅穴住居跡である。床面はほぼ平坦に整えられている。堅穴住居跡の壁の立ち上がりは、床面からやや角度を持って立ち上がる様子が観察できた。堅穴住居跡の床面から上端までの高さは、北側は削平され残りが悪く6cm程度、南側の残りの良い部分で計測した場合23cmを計測する。

複式炉は堅穴住居跡南側の中央に構築されている。平面形は瓢箪形を呈し、小規模ながら土器埋設部、石組部、前庭部から構築されることを確認した。前庭部の南端は堅穴住居跡の南壁に接している。複式炉は全長1.12m、幅70cmを測る。炉の主軸方向は南北軸よりやや西に偏している。

土器埋設部は南北幅37cm、掘方を含む東西幅は52cmを計測し、埋設土器は掘方の底にこぶし大の石を並べ、その上に底を打ち欠いた深鉢の口縁を用いている。埋設土器に使用された深鉢(図110-1)は、口径33cm、残存高12cmである。土器内の埋土は、暗褐色土の2層に細分した。埋土からは炭化物や焼土に混じって土器片が若干出土している。

石組部は南北幅52cm、東西幅70cmを計測する。石組部の掘方は、ローム層を椀形に掘り込み、その上に石を並べ構築している。その際に長さ40cm、幅20cm前後の大ぶりの石を、東西の両袖に置き、その間を小礫で埋めるようにして構築している。使用された石は主に円礫を使用している傾向がある。石組部の石は、両袖の大ぶりの石を含め表面に被熱の痕跡が確認されている。石組部の埋土は、暗褐色土と褐色土の2層に分かれ、埋土には炭化物や焼土が混じっている状況が確認された。前庭部は南北幅23cm、東西幅73cmを計測する。

前庭部はローム層を掘り込み、その上に黄褐色土の貼土を行って床面が平坦な前庭部を造作している。前庭部は半円形の空間を構成しており、堅穴住居跡の南壁に取り付く。

堅穴住居跡の支柱穴としては、P1から3の3基を確認した。P1は直径27cm、床面から掘方底面までの深さは14cmを計測し、柱掘方の埋土は褐色土である。P2は直径28cm、床面から柱掘方の底面までの深さは16cmを計測し、柱掘方埋土は褐色土を呈する。P3は直径27cm、床面から柱掘方の底面までの深さは18cmを測り、柱掘方の埋土は褐色土である。P3は西に隣接する別のピットが掘られるが、形状と重複関係がP3よりも新しいことから柱掘方とは認識できなかった。支柱穴は複式炉を挟んで、三角形に配置する構造をとる。堅穴住居跡床面には支柱穴以外に5基のピットを確認した。大きさはいずれも直径20～30cm程度で、床面から底面までの深さは10～20cm程度であり、そのほとんどは、堅穴住居跡が埋没した後に掘り込まれた新しい時期のピットの可能性が高いと判断している。

遺物は堅穴住居跡の埋土および複式炉の上面から、縄文土器が出土した。まとまった状態での遺物の出土は確認されなかった。

本遺構は、直径2.7mの小規模な堅穴住居跡である。堅穴住居跡は支柱穴となる3本の柱で構築されており、南面中央には小型の複式炉を伴う。堅穴住居跡の床面は踏み締まりのためか硬く締まっている様子が観察された。



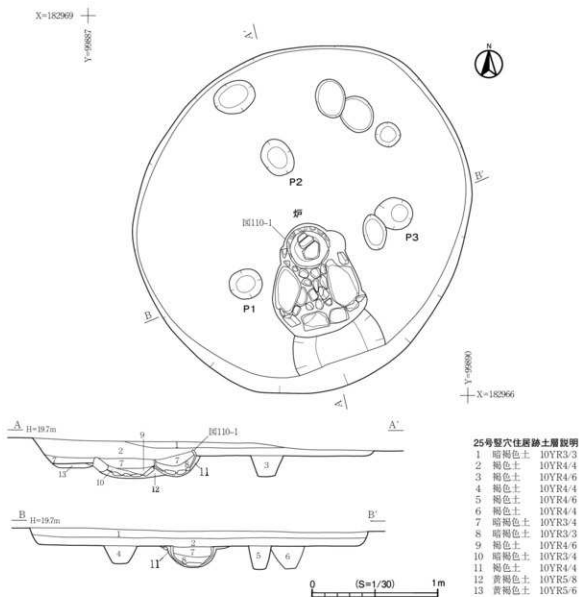


図43 25号竪穴住居跡

複式炉は土器埋設部、石組部、前庭部から構成され、土器埋設部には、並べた3つの石の上に深鉢の口縁を埋設するように構築している。この複式炉は小規模でありながらも複式炉の構成要素を良く反映した精緻な造りとなっている。複式炉の埋設土器を含め出土した土器は大木9式段階に位置付けられことから、大木9式期の竪穴住居跡と考えられる。本遺構は、日常生活に使用するには小規模すぎることと、小型で精緻な複式炉が特徴的である。一般的な他の竪穴住居跡とは趣の異なった機能が与えられていた可能性が高い。

#### 26号竪穴住居跡(図44)

26号竪穴住居跡は調査区南西部付近A-6・7区で確認した竪穴住居跡である。竪穴住居跡は標高20.2mの平坦な段丘面に位置し、LⅢ上面で褐色土が半円形にめぐるプランとして認識した。他の遺構との重複関係では5号竪穴住居跡・27号竪穴住居跡と重複が確認されており、これらの遺

構よりも新しいと判断している。

竪穴住居跡の堆積土は6層に分層した。1～5層は褐色土、6層はにぶい黄褐色土で壁周溝の堆積土である。竪穴住居跡の大部分は調査区外に延びており、調査区内では竪穴住居跡東側の一部が検出された程度であることから詳細は不明である。平面形は円形もしくは楕円形を呈する可能性が高い。規模は遺存する上端から計測した場合4.9mを測る。

床面は北側に緩やかに下る傾斜する傾向がみられるものの、ほぼ平坦である。壁周壁は、竪穴住居跡の床面から外傾して立ち上がって上端に至る。遺存する竪穴住居跡の壁の高さは22～37cm前後である。壁周溝は竪穴住居跡下端で確認できた。幅は16～44cmを計測し、床面からの壁周溝の底面までの深さは21～26cmである。また、壁周溝の底面からは8基のピットを確認した。底面からのピットの底面までの深さは8～15cmである。確認できた範囲では、竪穴住居跡に伴うその他の施設は確認できなかった。

遺物はわずかながら覆土下層や周溝内から縄文土器が出土している。

26号竪穴住居跡は、大部分が調査区外に延びており、竪穴住居跡の詳細は明らかではないが、円形または楕円形と推定される。時期は、覆土下層から出土している土器が大木10式に属することや重複関係から大木10式期と考えられる。

#### 27号竪穴住居跡(図45)

27号竪穴住居跡は、調査区南西部付近A-6・7区で確認した竪穴住居跡である。竪穴住居跡は標高20.1mの平坦な段丘面に位置し、基本土層LⅢ上面で暗褐色土の竪穴住居跡の輪郭の一部を確認した。他の遺構との重複関係では、26号竪穴住居跡よりも古く5号竪穴住居跡よりも新しい。

竪穴住居跡の堆積土は3層に分層した。各層とも層厚が薄いため堆積状況は不明である。平面形は、竪穴住居跡の大部分が26号竪穴住居跡と重複していること、また調査区外に延びているため、詳細は不明である。確認できる範囲から推測すると円形を呈するものと考えられる。規模は計測できる上端幅は2.4mである。床面はほぼ平坦で、竪穴住居跡の壁は床面から外傾して立ち上がって上端に達する。遺存する竪穴住居跡の壁の高さは2～6cmである。

竪穴住居跡の下端では壁周溝の一部を確認できた。幅は12～29cmを計測し、床面からの壁周溝の底面までの深さは5～18cmを計測した。

複式炉は確認できなかったことから、調査区外に遺存しているか、もしくは26号竪穴住居跡により失われた可能性がある。発掘調査では堆積土中から縄文土器が出土しているが、いずれも細片である。重複関係から大木10式期の竪穴住居跡と考えられる。

#### 30号竪穴住居跡

30号竪穴住居跡は、調査区西部付近A-4・5区で確認した竪穴住居跡である。竪穴住居跡は、標高20.0mの平坦な段丘面に位置し、基本土層LⅢ上面で暗褐色土が半円形に分布する状況で把握した。しかし、竪穴住居跡の西半部は調査区外に延びている。他の遺構との重複関係では、7号土坑よりも古いことを確認している。

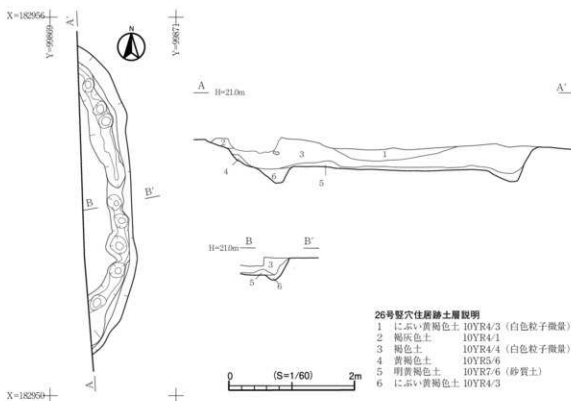


図44 26号竪穴住居跡

竪穴住居跡の堆積土は、最終的に5層に細分した。1・2層は黄褐色のブロックや炭化物、焼土粒子を含む黒色土と暗褐色土である。3層は黄褐色粒子を多量に含む褐色土で壁周溝の堆積土である。4・5層は前庭部の堆積土の可能性がある。

平面形は西半部が調査区外に延びているため明らかではないが、円形または楕円形の平面プランを有するものと推定される。規模は計測できる範囲の上端で4.2mである。床面は北側に向かって緩やかに低くなりつつも、ほぼ平坦である。竪穴住居跡の壁は、床面から外傾して立ち上がり、上端に達する。遺存する竪穴住居跡の上端から床面までの高さは7～16cmである。

竪穴住居跡の下端には壁周溝がめぐる。幅は30～32cmで、床面からの壁周溝の底面までの深さは14～16cmを計測した。調査範囲において確認できた主柱穴はP1・2の2基である。主柱穴間の距離は1.7mを計測する。P1・2の規模は、長径52cm・51cm、深さ58cm・64cmの円筒形を呈する。堆積土は3層で、1～3層は柱抜取痕跡と判断した。その他にピットが1基ある。直径20cm、深さ24cmを計測するが、性格は不明である。

堆積土中から縄文土器が出土している。

30号竪穴住居跡は、円形または楕円形の竪穴住居跡である。主柱穴は2基しか確認できなかったが、調査区外にも遺存するとみられ、本来は4基または5基で構成されていたものと想定される。時期は、床面から出土している土器が大木9式に属することや、重複関係にある7号土坑との関係から大木9式期と考えられる。

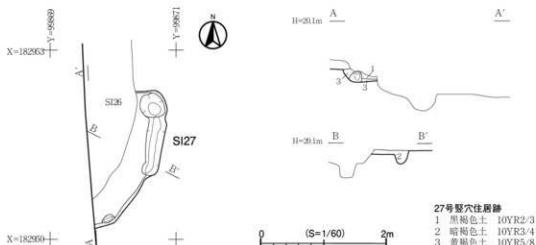


図45 27号竪穴住居跡

### 32号竪穴住居跡(図47)

32号竪穴住居跡は、調査区東端付近I・J-6・7区で隅丸方形に分布する黒褐色土で竪穴住居跡のプランを認識した。竪穴住居跡はLⅢ層上面で確認した。上部を大幅に削平され埋土の残りは極めて悪い。検出面の標高は20.0m前後を測る。周辺には、土坑やピットが分布しており、本来の竪穴住居跡のプランを想定した場合、重複関係にあることは確実である。竪穴住居跡の残存状態が悪く、またピットの分布状況もまばらであることから新旧関係を明らかにすることはできなかった。重複するピットの多くは竪穴住居跡が埋没した後に掘り込まれているものと判断した。

残存する範囲で観察される竪穴住居跡の堆積土は暗褐色土の単一層である。平面形は、竪穴住居跡の南半が削平を受け失われていることと、東側が調査区外へ伸びていることから明らかではない。残存部から方形の平面形を有するものと推定される。現状で計測できた規模は、南北3.76m、東西4.4mである。床面はほぼ平坦で貼床等の施設は確認できなかった。

竪穴住居跡の壁は床面から緩やかに立ち上がって上端に達する。竪穴住居跡上端から床面までの高さは残りの良い部分で約10cmを計測した。竪穴住居跡の床面では壁周溝や炉跡等の施設を確認することはできなかったが、竪穴住居跡の中央付近で床面が被熱した状況が確認された。確認された焼土面は、直径50cm前後の範囲に分布していることから、地床炉等が存在していた可能性がある。

32号竪穴住居跡には、重複する21基のピットを確認した。これらのピットは直径10cmから60cmまで大小さまざまで、底面までの深さも一様ではない。分布状況にも共通性は見られなかったことから、これらのピットの中から30号竪穴住居跡に伴う主柱穴を位置付けることはできなかった。

遺物は竪穴住居跡の堆積土から縄文土器の小片がわずかに出土した。

32号竪穴住居跡は一辺4mほどの隅丸方形の竪穴住居跡と推定される。竪穴住居跡の上部は大幅に削平され残存状態は非常に悪く、竪穴住居跡に伴う施設の大部分は確認することができなかった。唯一竪穴住居跡の中央付近では地床炉跡とみられる赤く変色した被熱面が確認された程度である。出土した大形破片の土器から32号竪穴住居跡の年代は大木8 b式期の所産と考えられる。

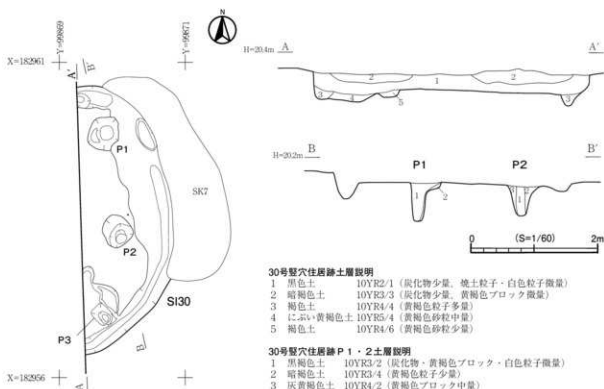


図46 30号竪穴住居跡

## 第2項 炉跡

### 1号炉跡(図48)

調査区南東隅I-7区のLⅢ層上面で複式炉を確認した。複式炉直上まで削平を受けており、周囲に存在するはずの竪穴住居の輪郭も不明である。検出面の標高は20.05mを測る。他の遺構との重複関係は見られない。周辺には複数のピットと複式炉との関係は不明である。

炉跡の平面形はいびつな瓢箪形で、土器埋設部、石組部、前庭部から構成される。炉直上まで削平を受けているため住居の輪郭は不明である。他の住居例を参考にすれば、複式炉は住居南壁に接するように配置されていた可能性が高い。

炉跡は、南北幅(北東-南西幅)208m、東西幅(北西-東西幅)105mを測る。炉跡の主軸方向は北東-南西方向である。

土器埋設部は、南北幅0.66m、東西幅0.75mを測る。土器埋設部では、南北に隣接するように配置された2個体の土器を確認した。南側の土器(図112-2)を先に、その後北側に土器(図113-3)を配置し、その後石組部・前庭部の順に構築している。北側の土器は、直径20cm、残存高15cmを測る。南側の土器は直径33cm前後、残存高28cmを測り、南側の土器の方が大きい。土器は、地山を掘りくぼめた後土器を設置する。土器の周囲に黄褐色土を入れ固定している。固定された埋設土器上面の周囲には石を並べている。土器内の埋土は、黒褐色土、にぶい黄褐色土などで、焼土

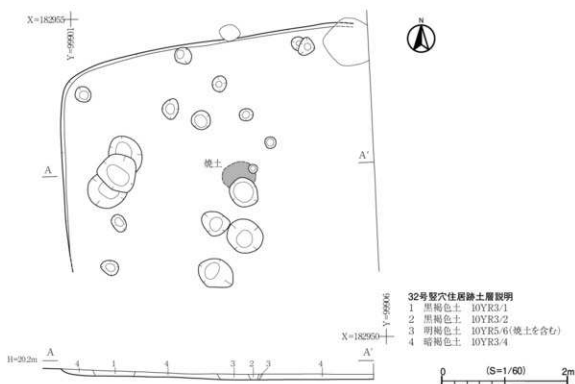


図47 32号竪穴住居跡

や炭化物に混じって土器片が出土した。埋設土器周辺は被熱し赤く変色した状態が観察された。

石組部は、南北幅0.77m、東西幅1.05mを測る。石組部は、すり鉢状に掘りくぼめた部分にこぶし大から人頭大サイズの石を並べ構築する。その際の裏込めには地山の明黄褐色土を入れている。構築に際しては、埋設土器の南側に接するように、一辺25cm程度のやや大ぶりな方形の石を置き、その石を起点として周りの石を配置している。石組部内に使用された石の大きさは、土器埋設部よりの北面に大きめのサイズの石を、前庭部よりの南面に小ぶりなサイズの石を配置している。石の被熱具合は、北面の方が強く被熱し、表面が赤く変色している。埋土からは炭化物や焼土に混じって土器片がわずかに出土した。

前庭部は、南北幅0.65m、東西幅1.06mを測る。前庭部は、地山を一定の深さに掘り込み、底に暗オリーブ褐色土の貼土を行い、作業場としての平坦面を構築する。前庭部床面は硬く締まっている。平面形は東西に長い楕円形をなす。前庭部周囲に石積み等は見られない。前庭部は住居南壁に接していた可能性がある。前庭部の埋土は黒褐色土で土器の出土は無かった。確認された一連の土層堆積からは、土器埋設部、石組部、前庭部はほぼ同時に構築している状況を確認した。前庭部からは焼土等の被熱痕跡は確認されていない。

複式炉周辺では、28基のピットを確認している。ピットの直径は20～60cm、深さは10～30cm前後とまばらである。検出位置はまともらず、複式炉との配置関係も規格的とは言えず、対応関係は定まらなかった。

複式炉上面およびその埋土から、縄文土器深鉢等の土器片がまばらに出土した。加えて、複式炉の土器埋設部・石組部の上面からは焼土や炭化物が確認されている。また、遺構外であるが、炉主軸方向の北側につぶれたように大形土器が2個体(図112-1・3)確認された。炉跡の位置関係および出土状況からみて、1号炉跡を構成していた竈穴住居に伴う可能性が高い。

出土土器は炉軸上出土土器と合わせて、大木9式期段階に属するものであり、本遺構も大木9式期の複式炉と考えられる。なお、1号炉跡の南側には2号炉跡が接するように確認されており、同複式炉周辺では、さほどの時期を置かずに、連続的に住居の造り替えが行われたと考えられる。

## 2号炉跡a(図49)

調査区南東隅I-7・8区のLⅢ層上面で2号炉跡を確認した。2号炉跡は新旧段階があり、南側

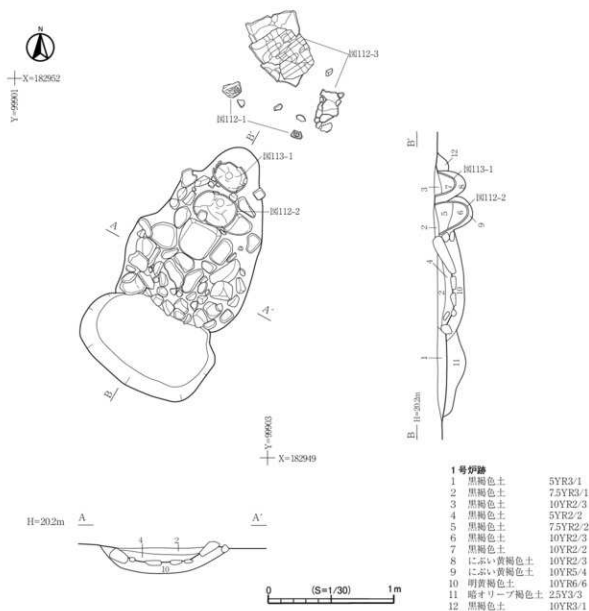


図48 1号炉跡

の新しい炉跡を2号炉跡a、北側の古い炉跡をbとする。2号炉跡は、後世の削平を受け残りが悪いが、2号炉跡aはbに比べると石組部がある程度確認できる状態にある。検出面の標高は20.10mを測る。

2号炉跡aの平面形はいびつな卵形である。複式炉は土器埋設部、石組部、前庭部から構成される。後世の削平は炉の直上まで及んでおり、周囲に存在するはずの竪穴住居の輪郭も不明である。よって、複式炉の住居内での正確な位置も現状では不明である。規模は南北幅1.45m、東西幅0.95mを測る。炉跡の主軸方向は南北方向で2号炉跡bとはほぼ同じ方向である。

土器埋設部は南北幅0.45m、東西幅0.5mを測る。地山を円形状に掘り込み、オリープ黒色土および黒褐色土を土器周囲に入れ土器を設置している。埋設土器である縄文土器深鉢(図111-2)は、直径35cm、残存高25cmを測る。土器の上面周囲に石の並びは確認されていない。土器内に確認された埋土は、青黒色土、黒色土などの4層にわかれる。埋土からは炭化物や焼土に混じって深鉢等の土器片が出土した。

石組部は南北幅0.65m、東西幅0.95mを測る。円形状の空間に平面的に並んだ石を確認した。使用された石は10～30cm程度の大きさである。石の外表面は熱を受け赤く変色した状況を確認した。平面的に残された石の状態およびその範囲から、現状は底部分のみが残っている状態と考えられ、石組部本来の形状は失われている。

前庭部は、石組部の南側に続く半円形の空間である。南北幅0.35m、東西幅0.95mを測る。前庭部上面も石組部と同様に大きく削平を受けており埋土の残存は見られない。前庭部は円形状に掘り込み、底には黒褐色土の貼土を行う。前庭部床面は硬く締まる。土層の堆積状況から、石組部および前庭部は連続的に構築されたものと理解される。前庭部内では焼土および被熱面は確認されていない。

2号炉跡の周辺では複数のピットを確認した。確認されたピットは直径・深さ共にばらつきがあり、複式炉との対応関係は現状では良く分からなかった。

遺物は、土器埋設部や石組部の周辺から炭化物や焼土に混じって縄文土器深鉢等の破片が確認された。埋土の残存状態は悪く、まとまった遺物の確認には至らなかった。

重複関係から大木10式期に属し、本遺構は大木10式期の複式炉と考えられる。

## 2号炉跡b(図49)

調査区南東隅I-7区のLⅢ層上面で確認した。2号炉跡bの南側には2号炉跡aが重なるように確認されている。新旧関係は2号炉跡bの方が古く、2号炉跡aの方が新しい。複式炉直上まで削平を受けており、周囲に存在するはずの竪穴住居の輪郭も不明である。検出面の標高は20.05mを測る。

炉跡の平面形はいびつな瓢箪形である。複式炉は土器埋設部、石組部、前庭部から構成される。南側の2号炉跡aにより南側を大きく壊されている。2号炉跡bは南北幅(残存長)1.15m、東西幅0.85mを測る。炉跡の主軸方向は南北に揃う。



土器埋設部は南北幅0.45m、東西幅0.46mを測る。土器埋設部では円形状に掘りくぼめた部分に縄文土器深鉢(図111-1)を埋設する。土器は直径30cm、残存高20cmを測る。土器の設置には表込めに暗褐色土を用いている。土器の上面周辺に石の並びは確認されていない。炉の上面は後世の削平により大幅に削られるため、石は抜き取られたか削平を受けた際に消失した可能性が高い。

石組部は南北幅(残存長)0.8m、東西幅0.85mを測る。石組部に使用された石材は現状ではほとんど残っておらず、散らばった状態の石がいくらか確認されたのみである。その他では石の抜き取痕跡が確認されている。石組部の石は2号炉跡aを構築する際に障害となったため抜き取られた可能性が考えられる。

前庭部の大部分は2号炉跡bに壊されるため、全体の形状は不明である。現状では前庭部の平面形は石組部と一体的に把握される。石組部の上部は削平を受けているため、埋土は確認されていない。確認されたのは、石の抜き取痕や底に施した粘土下部と思われる褐色土である。遺物は確認されなかった。

2号炉跡の周辺では23基のピットを確認した。直径は10～30cm、深さは10～50cmまでとばらつきがある。検出位置はまばらであり、複式炉との対応関係は不明である。

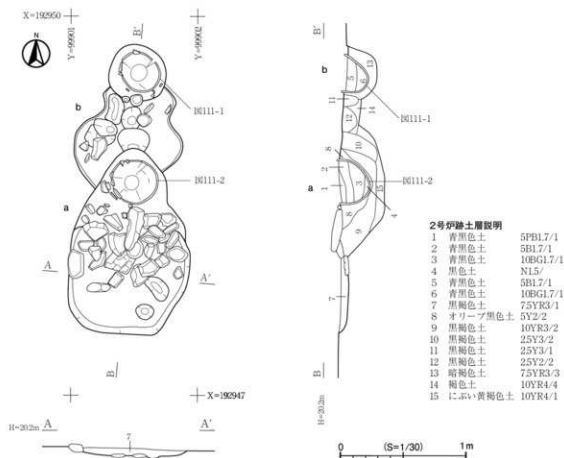


図49 2号炉跡

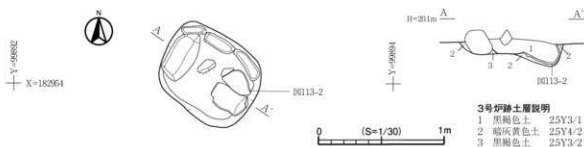


図50 3号炉跡

土器埋設部の周辺から、炭化物や焼土に混じて縄文土器深鉢等の小片がわずかに出土した。埋設土器も含めて大木10式期段階に属するものであり、本遺構は大木10式期の複式炉である。

### 3号炉跡(図50)

調査区南東部G-6区、SI24の北西部付近で3号炉跡を確認した。炉跡はSI24の埋土上面から掘り込まれるため、SI24の埋没後にその上面に造られた別住居に伴う炉跡と考えられる。炉跡は直上まで削平され堅穴住居の輪郭は確認できなかった。検出面の標高は19.98mを測る。

炉跡はSI24と重複し、遺構の上下関係から、SI24より新しい時期の遺構である。その他には遺構との重複関係は見られない。

炉跡の平面形は隅丸方形である。炉跡は土器埋設部を伴う石囲炉である。炉跡上部は後世の削平により大きく失われており、確認されたのは炉跡部分のみで住居の全容および住居内の炉跡の位置は不明である。炉跡は東西幅0.53m、南北幅0.43mを測る。炉の主軸方向は北西-南東方向である。

確認された埋設土器(図113-2)は縄文土器深鉢の底部から体部にかけての約1/3程度が残存している。埋設土器は残存幅20cm、残存高10cmを測る。炉跡は全体を方形に掘り込み、東部分をさらに一段掘り込み、その部分に土器を設置する。埋設土器は口縁部側を前庭部方向に向け斜めに据えている。土器の周囲には暗灰黄色土を入れ固定している。埋設土器周辺の埋土は黒褐色土で炭化物や焼土を多く含み、わずかに土器片が出土している。土器外面は被熱した状況が確認された。

炉跡東側は土器埋設部の北西面に浅く方形に掘り込まれている。隅丸方形の掘り込み外縁に沿って凹字に石を並べる。北西面および北面に石の並びを確認した。北西面には長軸27cm、短軸14cmのやや大ぶりな長方形の石を配置し、北面には長軸13~20cm、短軸5cm前後の長方形の小ぶりを3石並ぶように配置している。南西面の石の並びは確認されていない。炉跡は直上まで削平を受けるため、南西面の石はその際に消失した可能性がある。その床面は地山となり粘土の痕跡などは確認されなかった。石の外面は熱を受け赤く変色した状況を確認した。

炉の周辺で明確な対応関係を示すような柱穴およびピットは確認されなかった。遺物は埋土から焼土や炭化物に混じて縄文土器深鉢の小片がわずかに出土している。本遺構は出土土器、重複関係から、大木10式期に属する可能性が高く、大木10式期と考えられる。

### 第3項 土器埋設遺構

#### 1号土器埋設遺構(図51)

調査区南西部やや東よりD-8区において確認した。検出面の標高は20.12mを測る。本遺構は11号竪穴住居跡上で確認されており、11号竪穴住居跡の廃絶・埋設後に掘削された遺構である。

埋設土器を有した土坑の平面形はいびつな円形である。直径は0.5m前後を測る。断面形はいびつな逆台形をなす。底面は起伏があり、遺構検出面からの深さは南側の浅い部分で0.17m、北側の深い部分で0.28mを測る。

土坑は掘削後に、底から10cmまでの高さに、にぶい黄褐色土を入れ、その上に縄文土器深鉢を置く。土器の周囲には暗褐色土や黒褐色土を充填して土器を固定している。土器内の堆積土は暗褐色土となり2層に分かれる。確認された縄文土器深鉢(図114-1)は、体部片のみであり、底の部分は欠損している。現状での土坑の深さと土器の残存状況から判断して、遺構上部は後世の削平に際して大きく失われている。埋設土器は、直径34cm、残存高21cmを測る。

本遺構は重複関係、出土土器から大木10式期の所産と考えられる。

#### 2号土器埋設遺構(図51)

調査区南西部C-8区、11号竪穴住居跡の西面、LⅢ層上面で確認した。本遺構は9号竪穴住居跡と11号竪穴住居跡の中間に確認された。検出面の標高は20.10mを測る。本遺構の周辺には土坑およびピットが複数確認されているが、本遺構との重複関係は無い。

埋設土器を有した土坑の平面形はいびつな円形である。土坑の直径は0.4m前後、遺構検出面からの深さは0.25mを測る。断面形は逆台形、底面は平坦に整える。土坑は底面まで掘削後、まず黒色土を土坑内の北寄りに入れ、底に褐色土の貼土を行い、縄文土器深鉢を設置する。

土器は土坑内のやや南寄りに配置している。土器は直径0.23m、残存高0.22mを測る。土器内外からの目立った遺物の出土は無かった。出土した埋設土器は大木10式期に属するものであり、本遺構は大木10式期の所産と考えられる。

#### 3号土器埋設遺構(図51)

調査区南端中央付近F-8区、14号竪穴住居跡南面のLⅢ層上面で円形掘方を持つ土坑、その内部に置かれた埋設土器を確認した。検出面の標高は20.12mを測る。本遺構の周辺には土坑およびピットが複数見られるが、本遺構と直接に関係した重複関係は見られない。

埋設土器を有した土坑の平面形は円形、直径は0.25～0.27mを測る。検出面からの深さは0.12m、断面形はU字形である。土坑は底面まで掘削後、底面に厚さ5cmほどの黄褐色土の貼土を行い、その上に縄文土器深鉢(図114-4)を設置する。土器周囲に黄褐色土を入れ土器を固定している。

土器は直径(残存径)20～23cm、残存高5cmを測る。土器は上部に削平を受け、ほとんど残っていない状態である。土器内には黒褐色土を確認した。出土土器は大木9式期に属するものであり、本遺構は大木9式期の所産と考えられる。

#### 4号土器埋設遺構(図51)

調査区北東部H-5区、18号竪穴住居跡の北東縁辺でいびつな円形状の土坑およびその内部に置かれた埋設土器を確認した。検出面の標高は19.93mを測る。本遺構は18号竪穴住居跡に接する位置で確認された。18号竪穴住居跡の埋設後に4号土器埋設遺構が掘削されているものと判断した。

埋設土器を有した土坑の平面形はいびつな円形を呈す。直径は0.42～0.49mを測る。検出面からの深さは0.24m、断面形は椀状をなす。土坑は、底まで掘削後、底面に厚さ15～23cmほどの礫を含むオリーブ黒色土を入れ、その上に縄文土器深鉢を設置している。

埋設土器(図115-1)は、現状では土圧によりつぶれた状態で確認されており、原形をとどめず残存状態は悪い。土坑も後世の削平により上部を大きく失っていると考えられる。土器は残存幅32cm、残存高5cmを測る。土坑は埋設土器を含め後世の削平により上部は大きく失われている。土器内には僅かではあるがオリーブ黒色土の堆積が確認されている。土器内外からは埋設土器に関する土器片以外は目立った遺物の出土は無かった。

埋設土器は大木9式であり、本遺構は大木9式期の所産と考えられる。

#### 5号土器埋設遺構(図51)

調査区北東部H・I-5区、18・19号竪穴住居跡の東面、LⅢ層上面で確認されたいびつな楕円形の土坑およびその内部に置かれた埋設土器を確認した。検出面の標高は20.10mを測る。28号土坑内にあり、28号土坑との前後関係は不明である。28号土坑は本遺構に伴う可能性もある。その他に本遺構との重複関係は見られない。本遺構の南側には、隣接して6号土器埋設遺構が確認されている。

埋設土器を有した土坑の平面形はいびつな長円形である。東西幅(残存幅)は0.46m、南北幅(残存幅)は0.31mを測る。断面形は逆台形で、検出面からの深さは0.16mを測る。土坑掘削後に底に暗褐色土を入れ、その上に縄文土器深鉢(図114-3)を設置する。

埋設土器は直径(残存径)0.22m、残存高0.13mを測る。埋設土器は土坑を含め上部を大きく欠損した状態にあり、底部付近のみ残存する。土器内には暗褐色土の堆積を確認した。

埋設土器は大木8b式であり、本遺構は大木8b式期の所産と考えられる。

#### 6号土器埋設遺構(図51)

調査区北東部I-5区、18号竪穴住居跡の東面、LⅢ層上面で確認された不整形の土坑およびその内部に置かれた埋設土器を確認した。検出面の標高は20.00mを測る。本遺構は5号土器埋設遺構の南側に位置している。周辺に確認されている土坑およびピットと埋設土器との重複関係はない。

埋設土器を有した土坑の平面形は不整形である。東西幅(残存幅)は0.41m、南北幅(残存幅)は0.47mを測る。断面形は、不整な逆台形で検出面からの深さは0.15mを測る。土坑掘削後に底に褐色土を入れ、その上に縄文土器深鉢(図114-5)を設置する。

埋設土器は直径(残存径)29cm、残存高16cmを測る。土器内およびその周辺には暗褐色土の堆積

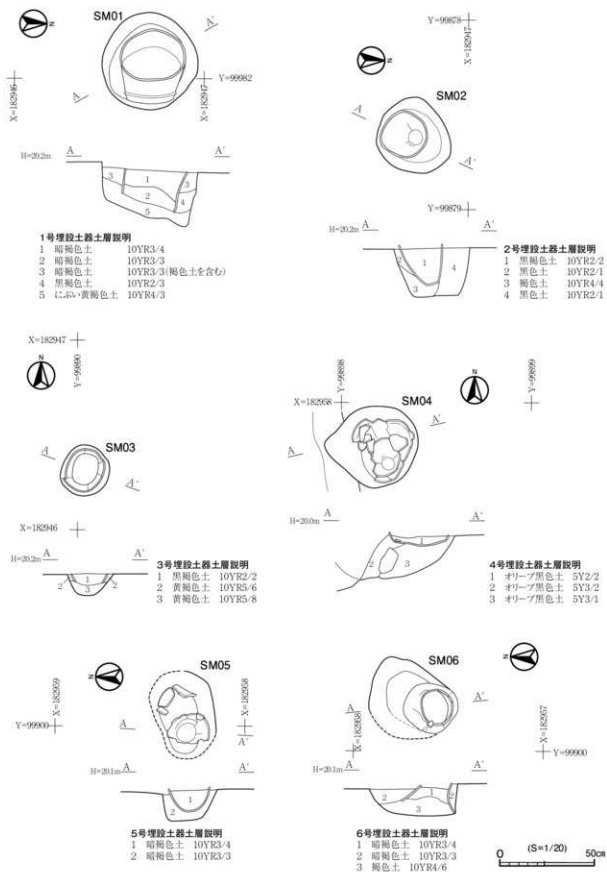


図51 埋設土器遺構

が確認された。現状での埋設土器は、土坑を含め上部を大きく欠損した状態にあり残存状況は悪い。土器内には暗褐色土の堆積を確認した。

埋設土器を含む出土土器は大木9式期に属しており、本遺構は大木9式期の所産と考えられる。

#### 第4項 土坑

図52～59に図示した土坑の多くは縄文時代の所産と考えられる。土坑は土坑Ⅰ～Ⅲ類ならびにピットに分類した。なお、堆積状況は人為堆積、自然堆積と分類したが、地山に由来する黄褐色土(ローム)の偽礫が全体に、まだらに含まれ、ラミナ状の堆積が認めにくい土層を人為堆積と表記した。計測値等は表3を参照されたい。

##### 土坑Ⅰ類

SK1～3・5～7・9・13・19・24・54・55・62・67・70・71が該当する。

長軸が1m以上を測る大型のものである。短軸も1m以上を測るものが主体である。平面形は楕円形から長方形で、深さ13～63cmと上端幅に比較し、浅い。断面形はU字形・逆台形を示し、壁がなだらかに立ち上がる。人為堆積と判断できるものが多く占める。

土器の出土量が他の土坑群より比較的多い。SK6・7・19・24・54・67からは半完形もしくは大形破片が出土している。また、土器片円盤の出土が特徴的である(SK2・6・7・9・19・55)。SK67からは石製垂飾品が出土している。また、上層・上面に集石状に礫を含むものも認められる(SK54・67)。

土坑Ⅰ類は、土坑規模、土器等の出土状況から墓坑である可能性が高い。以下に各遺構のうち墓坑の可能性が高い土坑Ⅰ類の概略を記す。

SK1～3は縦列状に重複して検出されている。SK2がSK1・3より新しい。出土土器は少ない。少量の出土土器より、SK2が大木10式期、SK1・3が大木9式期と考えられる。

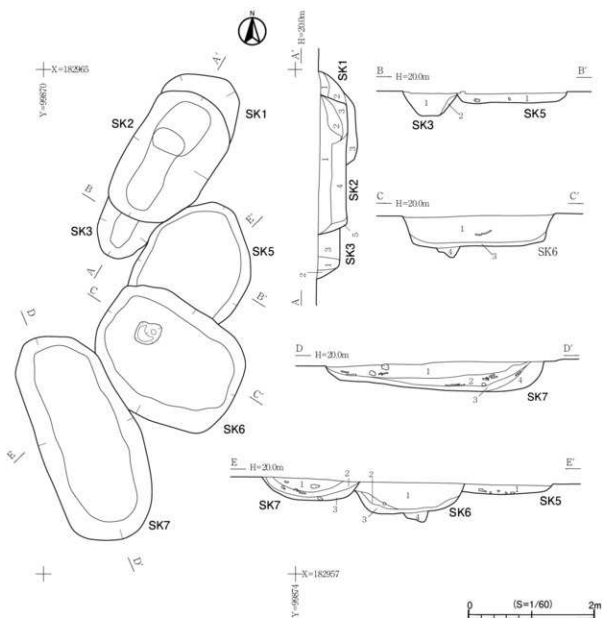
SK5～7も重複して構築されている。SK5が最も古く、SK7が最も新しい。SK6・7からは土器が多く出土し、特にSK7は中層の黒褐色土(2層)から水平方向に土器片が集中して出土している。1層の灰褐色土は偽礫がまだらにあり、埋土の可能性が高い。この他、SK6からは石鏃・打製石斧・土器片円盤、SK7からは石鏃未製品・土器片円盤が出土している。これらは大木10式期の所産と考えられる。

SK13は2号埋設土器に近接した位置にある。出土遺物は少ないが、下層に地山由来と考えられるにぶい黄褐色土に由来する偽礫を多く含みながら堆積しており、埋土と考えられる。

SK19はSK55と重複し、SK55より古い。浅い船底状の断面形、長方形の平面形を呈する。大形土器片が底面からやや浮いて水平に出土している。SK55はSK19を掘り込むように構築され、SK19の再掘削の可能性が高い。SK19は、出土土器から大木8b式期である。

SK24は堆積土に礫を多く含む。大形土器片が出土しており、大木8b式期の所産と考えられる。

SK54は11号竪穴住居跡と重複し、これを切る。上面に大形礫群、土器片が出土している。中層

**1号土坑土層説明**

- 1 黒褐色土 7.5YR3/1
- 2 灰黄褐色土 10YR4/2
- 3 にぶい黄褐色土 10YR4/3

**2号土坑土層説明**

- 1 黒褐色土 10YR3/2
- 2 褐色土 7.5YR4/3
- 3 灰褐色土 7.5YR4/2 (ローム粒子微量)
- 4 暗褐色土 10YR3/3
- 5 褐色土 7.5YR4/3

**3号土坑土層説明**

- 1 灰黄褐色土 10YR4/2
- 2 黒褐色土 10YR2/2
- 3 暗オリーブ褐色土 2.5Y3/3 (ローム粒子多量)
- 4 黄灰色土 2.5Y4/1 (ローム粒子多量)

**5号土坑土層説明**

- 1 黒褐色土 2.5YR3/1 (土器片混じる)

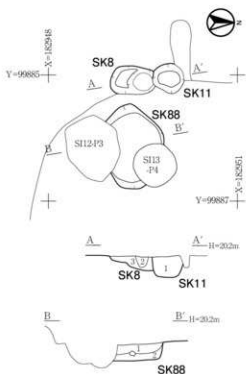
**6号土坑土層説明**

- 1 黒褐色土 10YR3/1 (土器片混じる)
- 2 黒褐色土 5YR2/1
- 3 灰黄褐色土 10YR4/2 (ローム粒子多量)
- 4 暗褐色土 10YR3/3 (ローム粒子多量)

**7号土坑土層説明**

- 1 灰褐色土 7.5YR4/2 (土器片混じる)
- 2 黒褐色土 10YR3/1 (土器片多く混じる)
- 3 褐色土 10YR4/1 (ローム粒子多量)
- 4 暗褐色土 10YR3/3

図52 土坑(1)



**8号土坑土層説明**

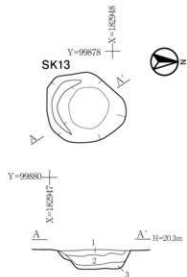
- 1 黒褐色土 10YR3/2(黄褐色粒子微量)
- 2 灰黄褐色土 10YR4/2(黄褐色ブロック粒子少量)

**11号土坑土層説明**

- 1 黒褐色土 10YR3/2(黄褐色ブロック炭化物微量)

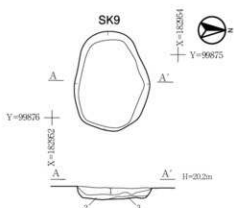
**88号土坑土層説明**

- 1 黒色土 10YR2/1(炭化物・黄褐色粒子微量)
- 2 灰黄褐色土 10YR4/2(黄褐色粒子中量)



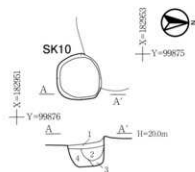
**13号土坑土層説明**

- 1 暗褐色土 10YR3/4 (白色粒子少量, 炭化粒子・3cm以下の小礫微量)
- 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3 (白色粒子少量, 炭化粒子微量)
- 3 褐色土 10YR4/6 (白色粒子微量)



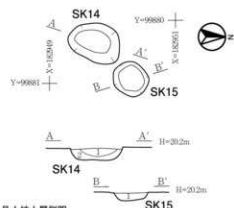
**9号土坑土層説明**

- 1 暗褐色土 10YR3/3 (焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・白色粒子微量)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (ローム粒子微量)
- 3 黒褐色土 10YR2/3 (ロームブロック中量)



**10号土坑土層説明**

- 1 にぶい黄褐色土 10YR5/4 (黄褐色ブロック中量, 白色粒子少量)
- 2 にぶい黄褐色土 10YR5/3 (白色粒子少量, 黄褐色ブロック微量)
- 3 にぶい黄褐色土 10YR5/3 (黄褐色砂粒中量, 白色粒子微量)
- 4 黒褐色土 10YR3/1 (黄褐色砂粒少量)



**14号土坑土層説明**

- 1 黒褐色土 10YR3/1(黄褐色ブロック粒子微量)
- 2 褐色土 10YR4/4(黄褐色ブロック粒子中量)

**15号土坑土層説明**

- 1 暗褐色土 10YR3/3(黄褐色粒子少量,白色粒子微量)

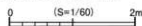


図53 土坑(2)



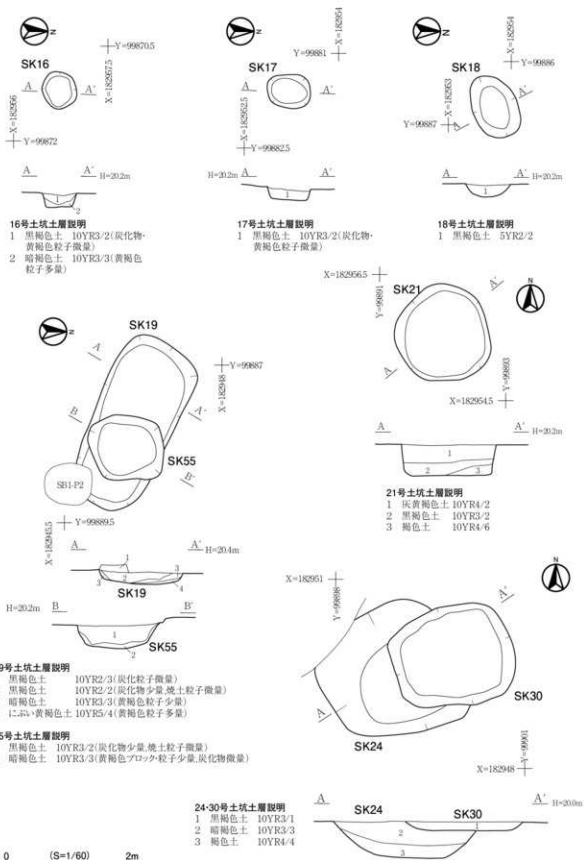


図54 土坑(3)

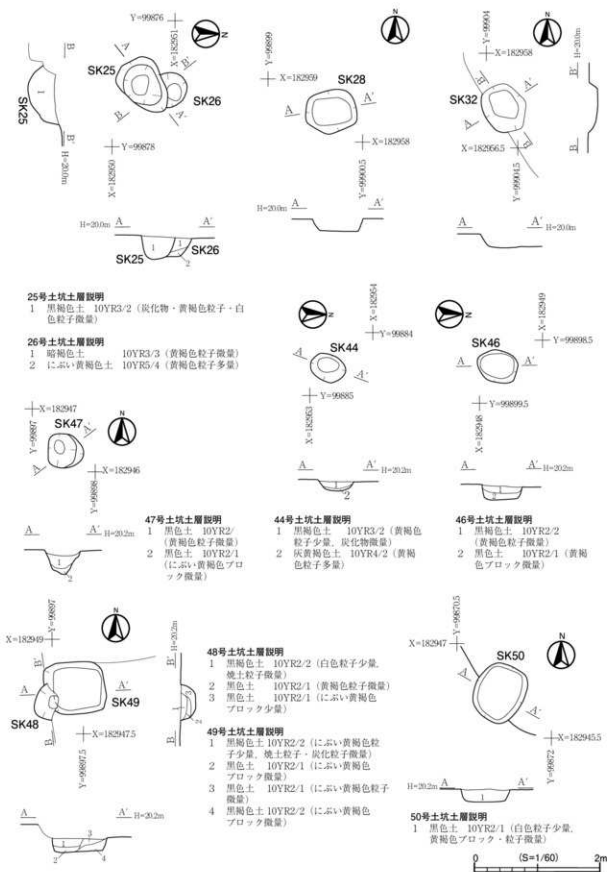


図55 土坑(4)

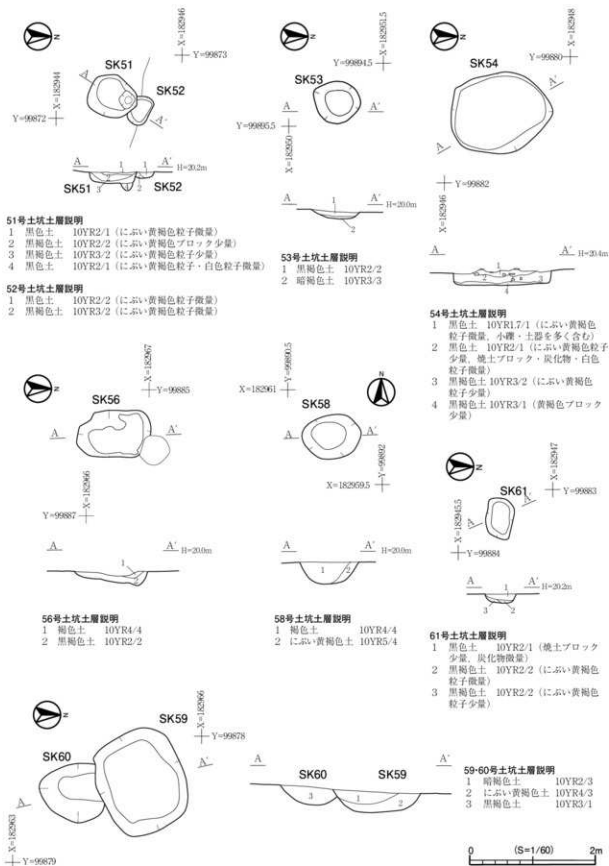


図56 土坑(5)

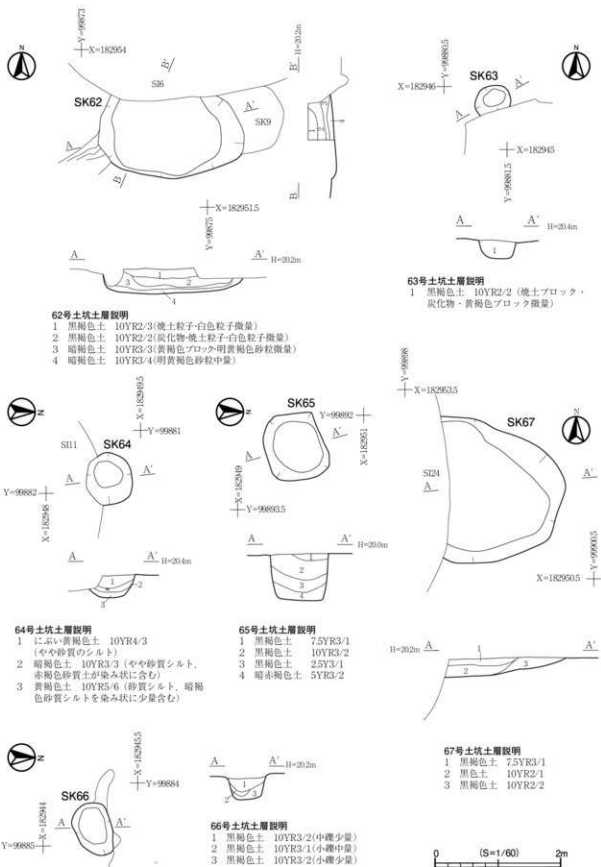


図57 土坑(6)

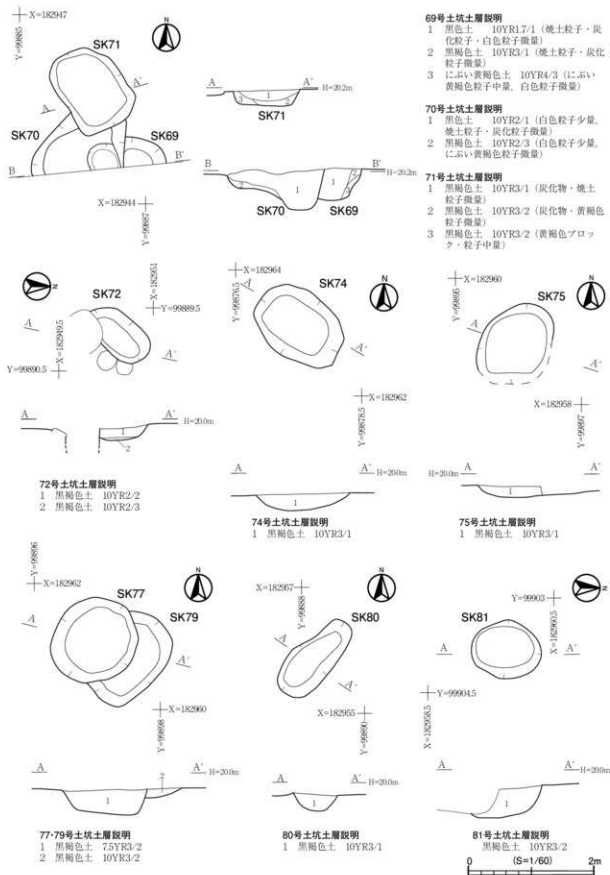


図58 土坑(7)

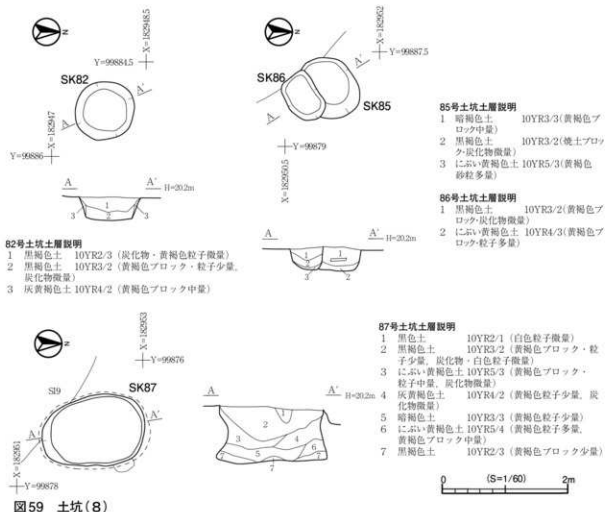


図59 土坑(8)

からも大形土器片(図122-9)が出土している。大木10式期にあたる。

SK67は24号堅穴住居跡と重複し、切られている。底面に口縁を下にして土器が埋設されている。上層からは小礫が出土している。また、石製垂飾品が出土しており、副葬品の可能性が高い。所属時期は大木8b式期である。

## 土坑Ⅱ類

SK21・82・87・88が該当する。

円形または楕円形の平面形を基調とする。断面形は台形または逆台形を呈し、壁が直線的に立ち上がる。他の土坑に比較すると土器等の遺物の出土が多い傾向にあるが、土坑Ⅰ類との比較では出土量は少ない。また、石器の出土例は無い。

土坑Ⅱ類は規模、形態から貯蔵穴としての機能と考えられる。以下に各遺構別の概略を記す。

SK21は底面が砂礫層に達したところで掘削を止めている。大木8b式の土器が出土しており、当該期の所産と考えられる。

SK82は12号堅穴住居跡を切る。出土遺物は少ない。大木9式以後の構築と考えられる。

SK87は特に深さが91cmと深く、断面形はフラスコ状を呈する。中層以上に炭化物を含む黄褐色

表3 土坑一覧表

遺構番号	検出位置	分類	主 軸	平面形	規模	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	断面形	厚積状況	出土遺物	重複関係 古→新	時期	備考	
1	B3	I類	N-34°-E	[楕円形]	大型	1.50	1.34	63	U字形	人為	縄文土器片	本跡→SK2	大木9・10		
2	A.B.3.4	I類	N-32°-E	楕円形	大型	2.23	1.38	48	進台形	人為	縄文土器片 土器片 片円盤 石鏃	SK1・3→本跡→SK5	大木9・10		
3	A.4	I類	N-29°-E	[楕円形]	大型?	0.82	0.88	38	進台形	人為	縄文土器片	本跡→SK2→SK5	大木9・10		
5	A.B.4	I類	N-32°-E	[楕円形]	大型	1.60	1.76	19	U字形	人為	縄文土器片	SK2・3→本跡→SK6	大木10		
6	A.B.4.5	I類	N-37°-W	不整形長方形	大型	2.43	1.92	51	進台形	人為	縄文土器片 土器片 片円盤 石鏃 打製石斧	SK5→本跡→SK7	大木10	ピット1か所	
7	A.4.5	I類	N-29°-W	不整形長方形	大型	3.48	1.62	48	U字形	自然	縄文土器片 土器片 片円盤 石鏃 未製品	SK3・SK6→本跡	大木10		
8	E.7	Ⅱ類	N-8°-E	楕円形	小型	0.71	0.47	23	U字形	人為	縄文土器片	本跡→SK11→SH2→SH3	大木9以前		
9	B.C.6	I類	N-82°-E	楕円形	大型	1.60	1.21	22	U字形	人為	縄文土器片 土器片 片円盤 網片	SH10→SK62→SH6→本跡	大木10		
10	B.6.7	Ⅱ類	N-5°-W	円形	小型	0.72	0.72	48	U字形	人為	縄文土器片	本跡→SH10→SK62	大木9以前		
11	E.7	Ⅱ類	N-1°-W	楕円形	小型	0.30	0.48	36	U字形	人為	縄文土器片	SK8→本跡→SH2→SH3	大木9以前		
13	C.7.8	I類	N-16°-E	楕円形	大型	1.30	1.14	32	進台形	自然	縄文土器片		大木9・10		
14	D.7	Ⅱ類	N-12°-E	楕円形	小型	0.84	0.62	24	U字形	人為					
15	D.7	Ⅱ類	N-57°-E	円形	小型	0.57	0.52	15	U字形	人為					
16	A.5	Ⅱ類	N-70°-E	楕円形	小型	0.59	0.52	22	進台形	人為	縄文土器片			縄文	
17	D.6	Ⅱ類	N-6°-E	楕円形	小型	0.70	0.56	20	進台形	人為	縄文土器片			縄文	
18	E.6	I類	N-62°-E	楕円形	小型	1.05	0.70	20	U字形	自然	縄文土器片 土器片 片円盤 打製石斧 網片 鏃	SH3・15・28・29→本跡	大木10		
19	E.F.8	I類	N-63°-W	長方形	大型	2.78	1.33	20	U字形	人為	縄文土器片 石鏃 未製品 土器片円盤	本跡→SK55	大木8b		
21	F.G.6	Ⅱ類	N-45°-W	円形	小型	0.85	0.75	24	方形	自然	縄文土器片			大木8b	
24	H.1.7	I類	N-32°-E	不整形長方形	大型	1.10	1.08	29	U字形		縄文土器片			大木8b	
25	C.7	Ⅱ類	N-56°-E	楕円形	小型	0.96	0.70	50	U字形	人為	縄文土器片	SK26→本跡→SH10	大木9以前		
26	C.7	Ⅱ類	N-41°-W	[楕円形]	小型	0.30	0.38	32	U字形	人為		本跡→SK25→SH10	大木9以前		
28	H.1.5	Ⅱ類	N-81°-E	楕円形	小型	0.82	0.67	21	進台形					大木8b	
30	H.1.7	Ⅱ類	N-39°-E	不整形長方形	小型	0.95	0.82	11	U字形			SK24→本跡→SH1	大木8b以後		
32	L.1.5	Ⅱ類	N-35°-W	楕円形	小型	0.80	0.66	21	U字形			本跡→SH3	縄文		
44	E.6	Ⅱ類	N-11°-E	楕円形	小型	0.57	0.43	15	U字形	人為					
46	H.7	Ⅱ類	N-39°-E	楕円形	小型	0.66	0.51	25	U字形	人為		本跡→SH1	縄文		
47	H.8	Ⅱ類	N-83°-W	不整形円形	小型	0.38	0.54	29	U字形	人為		本跡→SH1	縄文		
48	H.7.8	Ⅱ類	N-88°-E	[不整形円形]	小型	0.59	0.39	25	U字形	人為		SK49→本跡→SH1	縄文		
49	H.7.8	Ⅱ類	N-7°-W	長方形	小型	0.96	0.84	22	進台形	人為		本跡→SK48→SH1	縄文		
50	B.6.7	Ⅱ類	N-29°-E	[長方形]	小型	0.92	0.80	20	進台形	人為	縄文土器片	S8→本跡→S19	大木9以前		
51	A.8	Ⅱ類	N-27°-E	楕円形	小型	0.78	0.68	18	U字形	人為	縄文土器片	S8→S19→SK52→本跡	大木10以後	ピット1か所	
52	B.8	Ⅱ類	N-61°-W	楕円形	小型	0.48	0.27	9	U字形	人為	縄文土器片	S8→S19→本跡→SK51	大木10以後		
53	G.7	Ⅱ類	N-30°-W	円形	小型	0.45	0.35	6	U字形	自然		SH2→本跡	大木10以後		
54	D.8	I類	N-1°-W	楕円形	大型	1.61	1.30	21	方形	人為	縄文土器片	SH1→本跡	大木10以後		

第三章 調査成果

遺構番号	検出位置	分類	主 軸	平面形	規模	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	断面形	堆積 状況	出土遺物	重複関係 古・新	時期	備考
55	E-F-8	I類	N-6°-W	不整形	大型	1.15	1.05	40	U字形	人為	縄文土器片 土器 片四點	SK19→本跡	大木8b 以後	
56	E-3	Ⅱ類	N-1°-W	不整形	小型	0.58	0.38	13	U字形	自然	縄文土器片		縄文	
58	F-45	Ⅱ類	N-86°-E	楕円形	小型	0.47	0.35	17	U字形	自然	縄文土器片	SI16→本跡	大木9 以前	
59	H-3	Ⅱ類	N-25°-W	不整形	小型	0.80	0.67	15	U字形	自然	縄文土器片	SK50→本跡	縄文	
60	H-34	Ⅱ類	N-86°-W	楕円形	小型	0.53	0.47	14	U字形	自然		本跡→SK59	縄文	
61	D-8	Ⅱ類	N-84°-W	不整形長方形	小型	0.63	0.43	15	U字形	人為	縄文土器片	SI12→SI11→本跡	大木10 以後	
62	B-6	I類	N-81°-W	[楕円形]	大型	2.30	1.30	31	U字形	人為	縄文土器片	SK10→本跡→SI6・ 9→SI5・SK9	大木9・ 10	
63	D-8	Ⅱ類	N-61°-E	[楕円形]	小型	0.58	0.40	29	U字形	人為	縄文土器片	SI11→本跡	大木10 以後	
64	D-7	Ⅱ類	N-79°-W	楕円形	小型	0.83	0.74	37	U字形	人為	縄文土器片 石製未 製品	本跡→SI11	大木10 以前	
65	F-G-7	Ⅱ類	N-9°-W	不整形	小型	0.93	0.55	37	方形	自然	縄文土器片	SI29→本跡?	大木10 以後	柱穴?
66	E-8	Ⅱ類	N-70°-E	楕円形	小型	0.87	0.61	39	進台形	人為	縄文土器片	SI11→本跡	大木10 以後	
67	H-I- 67	I類	N-45°-W	不整形	大型	1.15	1.10	13	U字形	自然	縄文土器片 石製垂 飾品	本跡→SI24	大木8b	
69	E-8	Ⅱ類	-	[楕円形]	小型	0.65	0.48	26	進台形	人為	縄文土器片	本跡→SK70	大木10 以前	
70	E-8	I類	N-25°-E	不整形	大型	1.25	0.67	32	進台形	人為	縄文土器片	SI12・SK69→本跡 →SK71	大木9 以後	
71	E-8	I類	N-31°-W	不整形長方形	大型	1.36	1.00	15	進台形	人為	縄文土器片	SI12→SK70→本跡	大木9 以後	
72	F-7	Ⅱ類	N-39°-W	楕円形	小型	0.55	0.31	13	U字形	自然	縄文土器片	SI13→本跡	大木10 以後	
74	H-4	Ⅱ類	N-55°-W	不整形	小型	0.75	0.54	12	U字形	自然				
75	G-H- 5	Ⅱ類	N-18°-W	楕円形	小型	0.65	0.50	8	U字形	自然	縄文土器片	不明?	縄文	
77	H-4	Ⅱ類	N-40°-E	円形	小型	0.71	0.65	17	進台形	自然	縄文土器片	SK79→本跡	縄文	
79	H-4	Ⅱ類	N-41°-E	不整形円形	小型	0.76	0.55	6	U字形	自然		本跡→SK77	縄文	
80	E-F-5	Ⅱ類	N-43°-E	不整形	小型	0.74	0.34	12	U字形	自然	縄文土器片	SI15→本跡→SI4	大木10 以後	
81	I-J-5	Ⅱ類	N-2°-W	楕円形	小型	0.55	0.48	21	U字形	自然		SE20→本跡	大木8b 以後	
82	E-78	Ⅱ類	N-26°-W	円形	大型	0.99	0.92	38	進台形	人為	縄文土器片	SI12→本跡	大木9 以後	
85	C-7	Ⅱ類	N-53°-E	不整形長方形	小型	0.77	0.54	35	U字形	人為	縄文土器片	SK86→本跡→SI10	大木9 以前	
86	C-7	Ⅱ類	N-53°-E	楕円形	小型	1.05	0.39	38	U字形	人為		本跡→SK85→SI10	大木9 以前	
87	C-67	Ⅱ類	N-9°-W	楕円形	大型	1.77	1.22	91	台形	人為	縄文土器片	本跡→SI10	大木9 以前	
88	E-7	Ⅱ類	N-87°-E	[楕円形]	大型	1.36	0.74	31	進台形	人為		本跡→SI12→SI13	大木10 以前	

土が堆積し、埋め戻されている可能性が高い。底面は礫層で止まっている。

SK88は最上層に大形礫が認められる。12・13号竪穴住居跡の貼床下からの検出である。

### 土坑Ⅲ類

土坑I・Ⅱ類以外のその他の土坑で、41基調査した。長軸40cm以上、1m以下の土坑である。土坑I・Ⅱ類に比較すると小型である。直径は50～80cmを主体とし、深さは40cm以下である。平面形は円形から不整形まで多様である。土器の出土量は少ない。断面形はU字状を呈するものが多く、壁の立ち上がりはなだらかなものが主体である。土器等の遺物出土は他の土坑に比較すると少



なく、多くが流れ込みであると考えられる。

14号竪穴住居跡P5と重複するSK65は方形の掘方を呈する。P5との重複関係は不明であるが、14号竪穴住居跡の床面を切る。このため、14号竪穴住居跡に伴う柱穴であった可能性が指摘できる。その他の土坑の機能は不明である。

#### ビット群

直径40cm以下の穴をビットとした。調査区全体にあり、竪穴住居跡等と重複しているものも多い。竪穴住居検出地区を中心に検出しており、本来、建物跡等に伴うものであった可能性がある。有意な組み合わせを把握することができず、建物等の構造物を推定することはできなかった。

出土遺物は土器を中心として、小破片が多く含まれている。PG1-P72としたビット上面からは大形破片が出土しており(図123-1)、土器埋設遺構であった可能性がある。

これらのビット群の時期は縄文時代を中心とすると考えられるが、奈良・平安時代に相当するものも含まれている。堆積土などから時期を分別することはできなかった。

### 第5項 縄文土器

#### 5号竪穴住居跡(図60・61)

図60-1、図61-1・2が複式炉埋設土器である。図61-2が初めに埋設され、次に図60-1が下位に、図61-1が上位に位置して入れ子状に設置されていた。図60-1は器高55cm以上を測る大型の深鉢である。図61-1は胴部下位を波状沈線で区画する。図61-2は隆沈線で縄文帯を区画し、無文帯で文様を描くものとみられる。これらは大木10式に相当する。

覆土からの出土量は少ない。その他、大木8b式(図61-5)、大木9式(同図-6・7)もわずかに出土する。同図-13は大木10式の浅鉢である。

#### 6号竪穴住居跡(図62～71)

出土土器は、出土状況として炉内出土、床直・ビット群・7～10層の下層出土、1～6層出土に大別できる。図70-1・5は複式炉埋設土器であり、縦列して埋設されていた。いずれも沈線で文様帯を区画する。1は無文帯で横位S字状に文様を描く。5はアルファベット文を描く。いずれも口縁部に区画線や無文帯を有しない。大木10式である。

下層にあたる7層以下の出土土器(図68～71)の主体は大木10式である。大形破片である図68-1・2はアルファベット文を描く。大木8b式(図69-7等)、大木9式(同図-9等)が少量含まれる。

7層直上には図69-1・2が出土している。これらは4～6層の多量の土器廃棄の最下層と位置付けられる。1は精製の鉢で2対の注口状の突起があり、突起の開口部は、突起を左右にした状況にした左側がやや正面側に向く。注口状の突起と相対的な位置にある2対の橋状突起は体部上位の隆帯による文様と一体化している。体部中位に焼成後の穿孔が認められる。2は縄文施文の台付鉢の脚部である。隆帯により縁取られている透かし孔がある。これらは出土状況から、覆土中層にお

ける意図的な行為であった可能性がある。

1～6層は多量の土器が出土しており、住居廃絶後、土器廃棄が盛んであったとみられる(図62～67)。沈線・稜線によるアルファベット文(図62・64・65等)が多いが、口縁部に沈線・稜線による区画線を施すものが多い(図64-1、図65-1・5等)。無文帯で文様を横位に描くもの(図63-1・8)も認められる。

#### 7号竪穴住居跡(図71)

12は床面出土の大形破片である。波状口縁で上位が渦巻文の間に縦位S字状文、楕円文、下位に逆U字形区画文が施される。大木9式である。その他の出土遺物も大木9式以前に相当する。

#### 8号竪穴住居跡(図71)

保存することとなった遺構であり、遺構確認時に出土した土器を図示した。16は横位楕円区画文を施すキャリパー形を呈する大木8b式である。17・18は大木9式、大木10式に相当する。

#### 9号竪穴住居跡(図72～80)

9号竪穴住居は覆土中層から上層にかけての1・2層から多くの土器が出土し、住居埋没中に多量の土器廃棄があったと推察される。また、炉および周溝の検出状況から、a・bの2時期があり、古い段階をb期、新しい段階をa期としている。出土状況から、炉出土土器、床面・ピット出土土器、3層出土土器、1・2層出土土器に分類できる。

図72-1はa期の炉埋設土器である。器高64cmを測る大形の粗製土器である。口縁部に無文帯がある。a期炉からは図73-4・6～8も出土している。

図73-5がb期の炉埋設土器である。横位の無文帯で文様を抽出する。同図1はb期炉に被さるように出土した土器で、本来は図73-5埋設炉以前の炉埋設土器の可能性があり。口縁を沈線で区画し、逆U字形の文様を描く。その他、同図2・3がb期炉から出土している。これらa・b期の炉出土土器は大木10式である。

図74・75は床面またはピット・炉出土土器である。P4からは図74-1・5が出土し、埋納された可能性もある。1は稜線によって区画された縄文帯の先端が鱗状となる。5は胴部区画が横位に流れた波濤文となる。その他の床面出土土器は図75-1のように無文帯で文様を描くものが主体である。図79-6は口縁が外反する器形で、口縁下を稜線で区画する。

図76、図77-1～9、図79-4は下層の3層出土土器である。図76-5は小形の注口壺形土器である。

図77-10～15、図79-1～3・5、図80は上層の1・2層出土土器である。横位の無文帯で文様を描くものが主体である(図78-1・2等)。図79-1は2段のアルファベット文を描き、内湾する口縁を持つ。同図5は口縁下を稜線で区画し、胴部が膨らむ器形の粗製土器である。この他、注口壺形土器(図80-10)、両耳壺(同図14)、透かし孔を持つ器台(同図12)などが出土している。

これらの出土土器は大木10式が主体を占め、少量の大木8b式(図80-18等)、大木9式(同図16等)が含まれている。

**10号竪穴住居跡(図81)**

覆土中からの出土である。9・13・14・16は同一個体で、縦位楕円状の区画文を有する。同図11・12も同様の構成である。その他、渦巻文を有する口縁部破片が出土している(2~4)。大木9式に相当し、その他、大木8a式(6)、大木8b式(1・5)も出土している。

**11号竪穴住居跡(図81・82)**

図82-1は埋設土器である。波状口縁で口縁が外反する器形を持つ。無文帯より縄文帯の幅がやや広く、横位に流れる文様を描く。その他、覆土出土でも、無文帯で文様を描く大形破片があり(図82-6等)、無文帯が切り合うものも見られる(図82-8・9)。これらは大木10式に相当する。少量の大木8b式(図81-17)、大木9式(同図18等)のほか、網取式(図82-10)が出土している。

**12号竪穴住居跡(図83~85)**

複式炉に新旧の2時期あり、新しい時期を炉1、古い時期を炉2としている。図83-5、図84-2が炉1の埋設土器である。図84-2の内部に入れ子状に図83-5が埋設されていた。図83-5は縦位に多条沈線を施す。図84-1は逆U字形の帯状区画が施される。

図83-1、図84-1が炉2の埋設土器である。図84-1が埋設された後、図83-1がそれを切るかたちで埋設されたとみられ、埋設時期に差を認めることができる。図84-1は縦位に沈線が施されるが、下端は体部下部まで達しない。図83-1は内湾する口縁に双頭渦文を描き、体部と2段構成の文様をとる。これら炉埋設土器はいずれも大木9式である。

その他、覆土等からの出土も大木9式を中心とする。大木8b式(図85-1等)、大木10式(図85-3)もわずかに出土する。図83-14は器台で、内面に弧状の沈線が認められる。文様を描いたものかは不明である。

**13号竪穴住居跡(図85~90)**

図86-1は炉埋設土器である。稜線で区画し、やや幅広い縄文帯でアルファベット文を描く。体部中位でくびれ、外反する器形を呈する。

その他は貼床、床面、ピット、覆土からの出土である。小破片の大木8b式(図85-7等)、大木9式(同図20等)などがある。大木10式は大形破片が多く、無文帯で文様を描くもの(図88-1~8等)が多い。無文帯が切り合うものも少量含まれる(同図12)。アルファベット文を描くもの(図89-7)のほか、未調整沈線(同図11)、三角形の区画を有するもの(同図4)、燃糸文施文(同図12)、波状口縁で沈線区画の無文帯が切り合い口縁に達するもの(同図13)など、大木10式の中でも新しい要素が散見される。

図87-7は器台、図90-5・6は突起状の注口を持ち環状孔を有する波状の浅鉢、同図16は小型の蓋である。

**14号竪穴住居跡(図91・92)**

図91-1・4は炉埋設土器である。縦列して配置されている。1は口縁が内湾する器形を呈する。体部下半が無文となり、口縁部にはアルファベット文が展開するとみられる。同図4は口縁が外反

するものと推察される。体部下半に縄文は施されない。その他、炉内からはアルファベット文を施すものが出土している(同図2・3・5・6)。これらは大木10式に相当する。

ピット、下層の9層出土では大木8b式(同図9・10)、大木9式(同図7)がある。

図92-3~16は覆土上層の1・2層出土土器である。大木8b式(同図3等)、大木9式(同図9等)、大木10式(同図6等)が混在する。同図14・15は曽利式である。同図16は波頂部に環状孔を持つ浅鉢である。

#### 29号竪穴住居跡(図92・93)

14号竪穴住居跡の下に重複する住居跡であるため、炉からの出土土器のみである。図93-1は炉埋設土器である。縦位沈線区画で下端は開放している。体部中位は一部区画がアクセント的に隆沈線となる。体部下半は縄文施文である。図92-1・2、図93-3・4は同一個体である。大木9式である。本来は図93-1と縦列に埋設されていたものと考えられる。アルファベット文を描く大木10式である。大木9・10式が共存することとなり、過渡的段階の共存事例と考える。

#### 28号竪穴住居跡(図94)

13号竪穴住居跡に切られ、14・29号竪穴住居跡を切る住居跡である。炉内からわずかに出土し、1・2は大木8b式、3はアルファベット文を施す大木10式である。

#### 15号竪穴住居跡(図94~96)

図94-7・8が炉埋設土器である。縦列して埋設される。7は波濤状の稜線で体部を区画する。同図4~6、図95-1~6は炉内出土土器である。図94-4は三角形の区画文を持ち、アルファベット文が施される。同図5・6は横位に楕円状の区画文を持つ。6は外反する口縁を持ち、屈曲部の隆線内に2列の刺突を施す。これらは大木10式である。

図95-7~10は床直出土土器である。9は口縁ならびに体部下半を稜線で区画する。炉内ならびに床直出土土器には大木9式(同図1・10)も少量出土する。

図95-11~19、図96-1~12は覆土、ピット出土土器である。大木8b式(図95-11)、大木9式(同図12~19等)、大木10式(図96-12等)がある。図96-8は口縁に縦位隆線が施され、同図12も口縁部を隆線で区画する。

#### 16号竪穴住居跡(図96)

すべて一括で取り上げたものである。15・16は大木8b式、17~21は大木9式である。17は沈線にミガキ調整が施されていない。

#### 17号竪穴住居跡(図97・98)

図97-1は炉埋設土器で逆位にして埋納されていた。箱状の把手を持つ壺形土器である。渦巻状の文様を把手部下に隆線で描き、端部は鱗状となる。大木10式である。同図2は炉内出土、同図3は床面直上出土である。

その他は覆土出土土器である。大木8b式(図97-4等)、大木9式(同図17等)が比較的多く出土する。これらは重複し先行する住居跡に伴うものと考えられる。大木10式は大形破片が多い。

図98-1は横位に連結する椀区画が施される。体部中位で明瞭に屈曲し、頸部から口縁部にかけて外反する器形を呈する。同図3は無文帯で文様を描く。同図7は波頂部に突起が付き、口唇に沈線がめぐる。

#### 24号竪穴住居跡(図99～102)

図99-1・2、図100-1は同一個体で炉埋設土器である。これと縦列し、図99-9・10が縦列して配置されていた。図99-1・2、図100-1は体部を隆沈線で波濤文を加えて区画し、アルファベット文が幅広く施される。波状口縁で口縁を隆線で区画し、アルファベット文が展開する。図99-9は体部を稜線で区画する。同図3～8、図100-2～5は炉内出土土器である。図100-5は無文帯の切り合いが認められる。これらは大木10式である。

図101、図102-1は床直、覆土出土土器である。大形破片である図101-8はアルファベット文が横位に展開し、無文帯で文様を描くものに近接した状況を呈する。図102-1はアルファベット文を施し、口縁部を稜線で区画する。赤彩が認められる。その他少量の大木8b式(図101-6)、大木9式(同図1等)がある。同図13は鐙を持つ浅鉢である。

#### 18号竪穴住居跡(図102～108)

未完成の状態で埋没した竪穴住居跡である。出土土器はピット・3層、2層、1層に出土状況から分類でき、1層から多量の出土がある。

図102-2～10はピット・3層出土土器である。大木8b式(同図2)のほか、大木9式(同図8等)、大木10式(同図5等)がある。出土量は少ない。

図103は中層にあたる2層出土土器である。1層に比べると出土量は少ない。大木8b式(同図1)、大木9式(同図3・4等)、大木10式(同図7・10)が混在している。

図104～107、108-1～4は上層にあたる1層出土土器である。大木8b式(図104-1～6)、大木9式(同図7～17、図105-1～3)が一定量出土する。主体となるのは大木10式である。図106-6は小形の深鉢で波頂部に環状孔を持つ。未調整沈線内に燃糸文を施す。同図11も燃糸文が施される。同図6は沈線区画であり、無文帯で文様を描く。図107-1は瓢箪形の壺形土器であり、稜線で渦巻文を描く。体部中位の縦位の橋状突起が文様に組み込まれる。波状口縁を呈し、外面は赤彩が認められる。体部下位に焼成後の穿孔がある。同図14は曾形式である。図108-1・2は粗製土器である。1・2共に口縁は無文部を抽出する。

#### 19号竪穴住居跡(図108)

覆土からの出土である。5は縄文地に未調整の沈線で文様を描く大木8b式である。その他、大木10式もわずかに出土している(7・8)。

#### 20号竪穴住居跡(図108・109)

すべて覆土中からの出土で、大木8b式である。図109-1は箱状の突起を施し、頸部に無文帯を有する。体部には剣先文を持つ渦巻文を施す。同図3・4はキャリバー形の器形を呈し、頸部に無文帯、体部上位を3条の未調整沈線で区画する。渦巻文を施す。同図6は四方に貫通孔を有し、

渦巻文を沿わせる突起部である。

#### 25号竪穴住居跡(図110)

1は炉埋設土器である。内湾する器形で縦位縄文帯が上下に2段に配置され、それを1条の沈線で区画する。大木9式である。

#### 26号竪穴住居跡(図110)

周溝ならびに3層出土土器を図示した。2～4は大木9式である。3は内湾する口縁に双頭渦文が施される。4は楕円形の区画を2段に配している。同図5・6は大木10式と考えられる。

#### 30号竪穴住居跡(図110)

覆土中からの出土である。7は口縁を沈線で区画し、縦位縄文帯を展開させる。同図8は浅鉢と考えられる。沈線で区画し、体部下位には地文として縄文を施さない。いずれも大木9式に相当する。

#### 32号竪穴住居跡(図110)

いずれも覆土中からの出土である。14は波状口縁で波頂部上端に円形刺突を施し、口唇に沈線を1条施す。縄文地に3条単位の沈線が施される。その他、10・11・13が大木8b式に相当する。大木9式(9)もわずかにある。

#### 2号炉跡(図111)

新旧の2段階がある。1が旧炉(b)、2が新炉(a)の炉埋設土器である。1は体部中位を未調整沈線で区画する。大木10式である。2は縄文のみの施文であり、体部上半に影らみを持つ。

#### 1号炉跡(図112・113)

図112-2、図113-1は炉埋設土器である。縦列して配置されている。図112-2はステッキ状の縄文帯を配する。図113-1は頸部でくびれて内湾する口縁を持つ。2段の楕円区画と逆U字形の区画文を交互に配する。

図112-1・3は出土状況から1号炉跡に伴う可能性が高い。図112-1は口縁が短く内湾する器形を呈する。体部には2条単位の沈線が垂下する。同図2はステッキ状の縄文帯を配し、口縁は緩やかに外反する。これらは大木9式である。

#### 1・2号炉跡(図113-3～9)

3～9は1・2号炉跡を検出した確認面から出土した土器である。図113-6は口縁を区画する稜線が口縁に達し、突起状となる。同図9は注口土器である。注口から口縁上の半円状の突起が派生する。体部の文様は無文帯の切り合いが認められる。この2個体は大木10式であり、2号炉跡に伴っていた可能性が高い。

#### 3号炉跡(図113-2)

2は炉埋設土器である。粗製土器で口縁部に無文帯を有する。

#### 1号土器埋設遺構(図114-1)

1は1号土器埋設遺構の埋設土器である。口縁下に稜線で区画する。大木10式に相当する粗製土器である。

**2号土器埋設遺構**(図114-2)

2は2号土器埋設遺構の埋設土器である。体部下部を波状文で区画し、アルファベット文を施すとみられる。大木10式である。

**3号土器埋設遺構**(図114-4)

4は3号土器埋設遺構の埋設土器である。縦位の縄文帯と無文帯が交互に配される。大木9式である。

**4号土器埋設遺構**(図115-1~3)

1~3は4号埋設土器遺構出土土器である。1が埋設土器である。体部中位に縄文を縦位に区画する未調整沈線が施される。体部下位は条線文が地文となる。2・3は同一個体でステッキ状文が施される。いずれも大木9式である。

**5号土器埋設遺構**(図114-3)

3は5号土器埋設遺構の埋設土器である。体部の縄文地に3条単位の沈線が垂下する。大木8b式である。

**6号土器埋設遺構**(図114-5)

5は6号土器埋設遺構の埋設土器である。波状口縁で口縁部を無文とし、体部を縦位の縄文帯を配する。区画する沈線が一部波状文となる。大木9式である。

**1号土坑**(図115-4)

4は稜線で文様を抽出する。大木10式である。

**2号土坑**(図115-5)

5は頭部がくびれ、体部に縦位縄文帯を施文する。大木9式である。

**3号土坑**(図115-6・7)

6は縦位縄文帯を施文する。大木9式である。

**5号土坑**(図115-8、図116-1~7)

図115-8はキャリパー形を呈する大木9式である。その他、大木8b式(図116-1~3)、大木10式(同図4・5)が出土している。

**6号土坑**(図116-8~17)

8はアルファベット文を配する大木10式である。9は口縁が外反する粗製土器である。18は曾利式である。

**7号土坑**(図117-9~14、図118・119)

大木10式を主体とし、多量の土器が出土している。図118-1・2は同一個体でアルファベット文を配する。図119-5もアルファベット文を配し、口縁を沈線で区画する。体部下位に最大径を持つ。図117-13はアルファベット文を描き、三角形の区画を配する。同図14は体部下位には地文を有せず、隆沈線でアルファベット文を描く。これらは大木10式である。

**8号土坑**(図117-1~3)

小破片のみの出土である。1は未調整沈線が施され、大木10式と考えられる。

**9号土坑**(図117-4~7)

小破片のみの出土である。6はアルファベット文が描かれる大木10式である。

**10号土坑**(図117-8)

小破片のみの出土である。8は縦位の沈線を施す大木9式と考えられる。

**13号土坑**(図120-1)

小破片のみの出土である。1は口縁を沈線で区画する。大木10式と考えられる。

**18号土坑**(図120-2・3)

小破片のみの出土である。2・3はいずれもナデ調整隆沈線が施される大木8b式である。

**19号土坑**(図120-4~18)

多量の土器が出土している。5はキャリパー形の器形を呈し、口縁・体部に剣先文を持つ渦巻文を配する。大木8b式である。その他も大木8b式を主体とする。11はキャリパー形の器形で頸部に無文帯を有する。16は大木10式、17は曾利式である。

**21号土坑**(図121-1~7)

すべて大木8b式である。1~5は口縁部にナデ調整の隆線・隆沈線で文様を描く。

**24号土坑**(図121-9)

9は大木8b式である。口縁に渦巻文、頸部に無文帯を有し、3条単位の沈線で体部に文様を描く。

**50~52号土坑**(図122-1~5)

いずれの土坑からも少量の土器が出土している。大木9~10式に相当する。5は浅鉢で外面に付着物がある。

**54号土坑**(図122-6~10)

覆土中から大形破片が出土している。7・8は同一個体であり、無文帯で文様を描く。9も同様の文様を描く。大木10式である。

**55号土坑**(図122-11・12)

いずれも大木8b式である。12は環状孔に隆沈線が添う。

**56号土坑**(図122-13・14)

小破片のみの出土である。13は大木8b式、14は大木9式とみられる。

**58号土坑**(図122-15・16)

15・16は大木8b式である。未調整沈線で文様を描く。

**59号土坑**(図122-17・18)

17・18は大木9・10式に相当する。小破片のみの出土である。

**64号土坑**(図122-19・20)

19は大木8b式、20は大木10式の浅鉢である。



**65号土坑**(図122-21~23)

21・22は大木8b式である。21はキャリバー形の器形を呈する口縁部である。23は器台である。

**67号土坑**(図122-24)

24は底面に口縁を下に向けた逆位で出土している。キャリバー形の器形で、口縁部に隆線で文様を描く大木8b式である。

**77・85号土坑**(図122-25・26)

いずれの土坑からも少量の土器が出土している。大木9~10式に相当する。5は浅鉢で外面に付着物がある。

**87号土坑**(図122-27・28)

27・28は大木9式である。小破片のみの出土である。

**88号土坑**(図122-29~33)

29・30・32は大木9式、31は曾利式である。31は端部が鱗状に競り上がり、無文帯を切る文様を描く大木10式である。

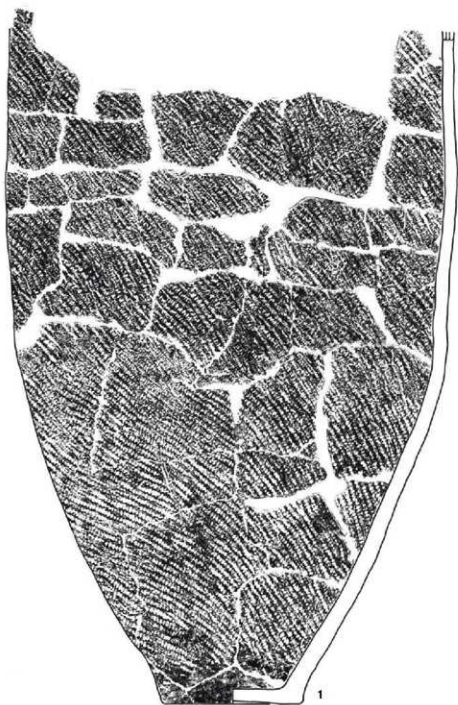
**ピット群**(図123-1~8)

ピット群からはわずかに小破片の土器が出土している。1は楕円区画を2段に配置する大木9式である。2は手捏ね成形のミニチュア土器である。

**縄文時代遺構外出土土器**(図123~128)

その他縄文時代の遺構外からも縄文土器が出土している。大木8a式も少量出土する。主体となるのは大木8b式~10式であり、網取式はほぼ認められない。これらは遺構形成時期と共通している。

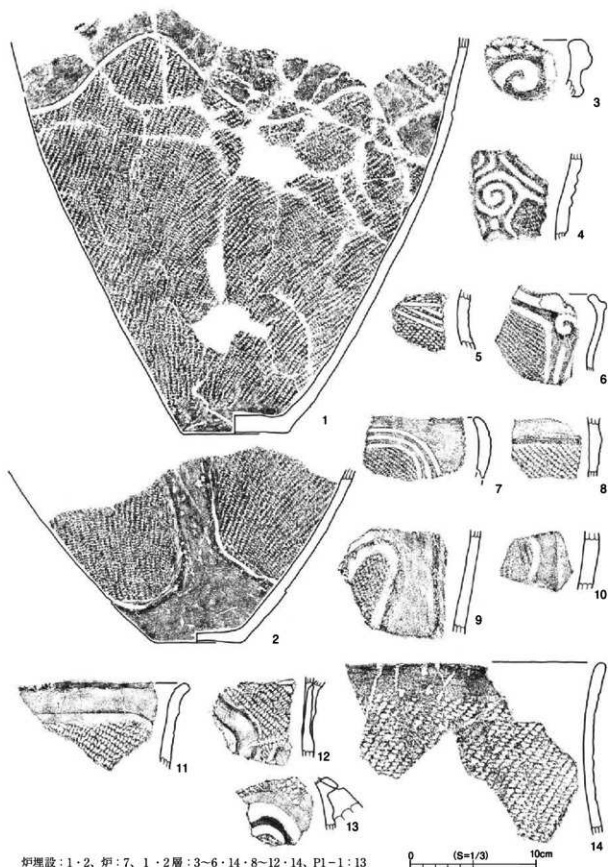
図124-10は交互刺突文が施される。大木8a式と考えられる。図123-7~9、図124-1~9・11~17、図125-1~4、図126-3は大木8b式である。図123-9は大形破片である。剣先文が渦巻文に付加する。図124-1~3は突起、把手部である。同図16・17は頸部のくびれ部を刺突列で区画する。図125-5~14、図126-1・2・4~16は大木9式である。図126-5~8は体部全体に渦巻文が描かれる。図127・128は大木10式である。無文帯が切り合い、文様を描くもの(図127-12、図128-8~10)なども出土している。図129-1~3は大木10式に伴う浅鉢である。図129-6~8は器台である。



炉埋設：1

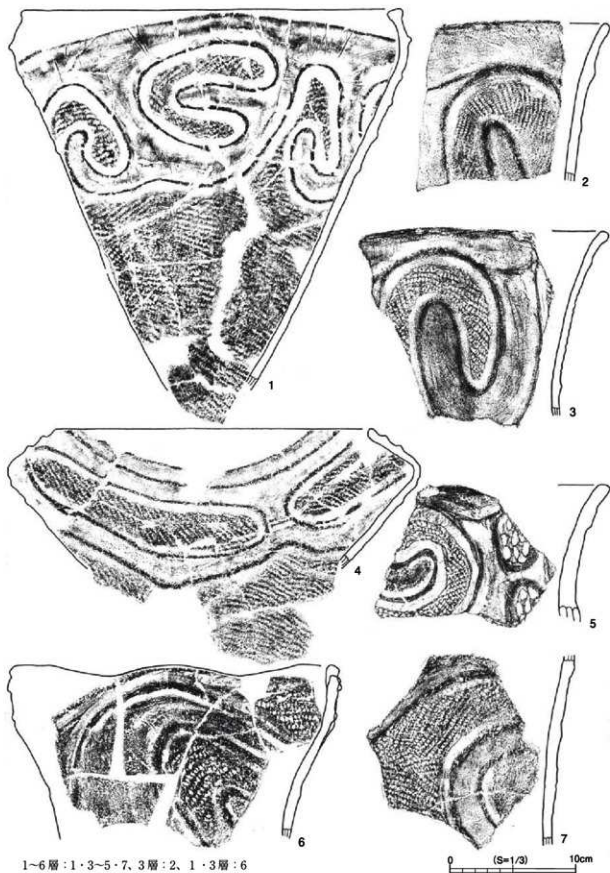
0 (S=1/3) 10cm

图60 5号竖穴住居跡出土遺物(1)



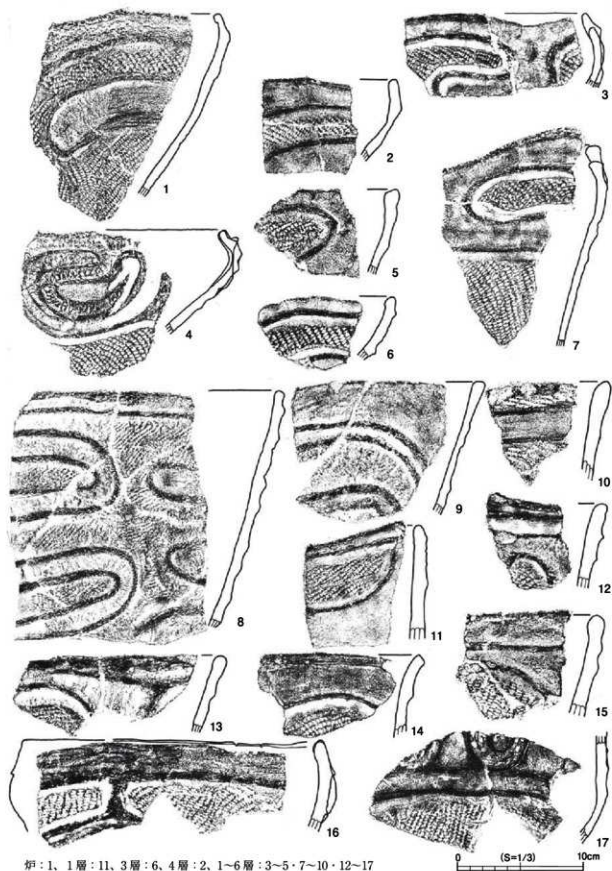
炉埋設：1・2、炉：7、1・2層：3-6・14・8-12・14、P1-1：13

図61 5号竪穴住居跡出土遺物(2)



1-6層:1·3-5-7, 3層:2, 1·3層:6

图62 6号竖穴住居跡出土遺物(1)



炉：1、1層：11、3層：6、4層：2、1~6層：3~5・7~10・12~17

図63 6号竪穴住居跡出土遺物(2)

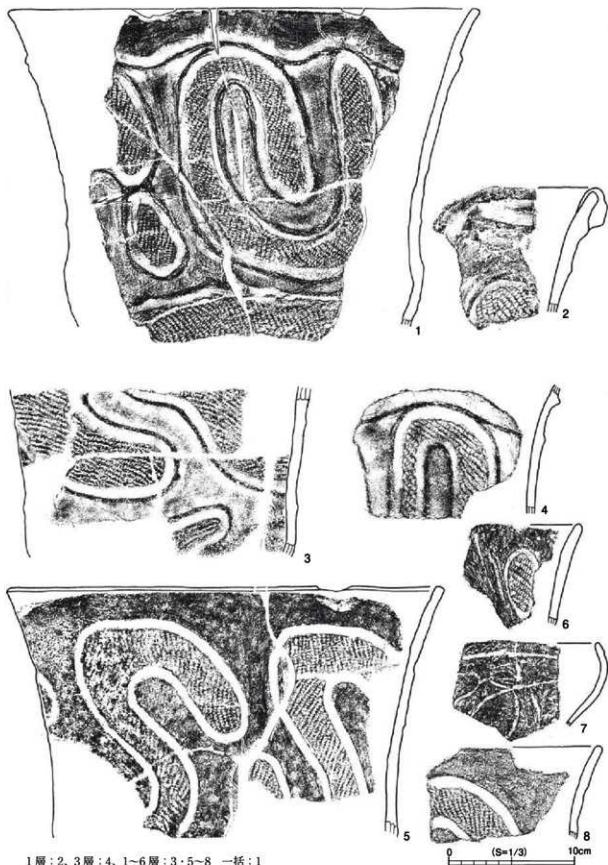
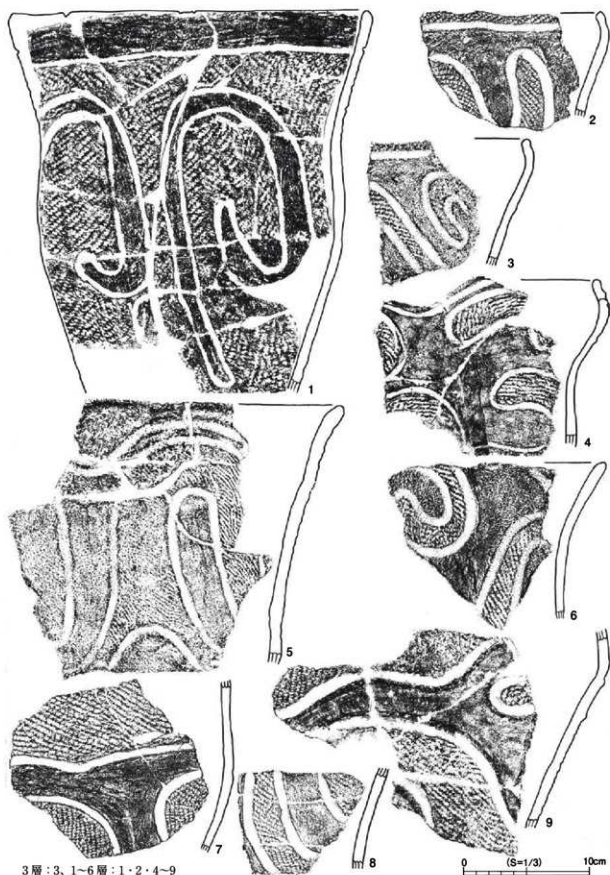
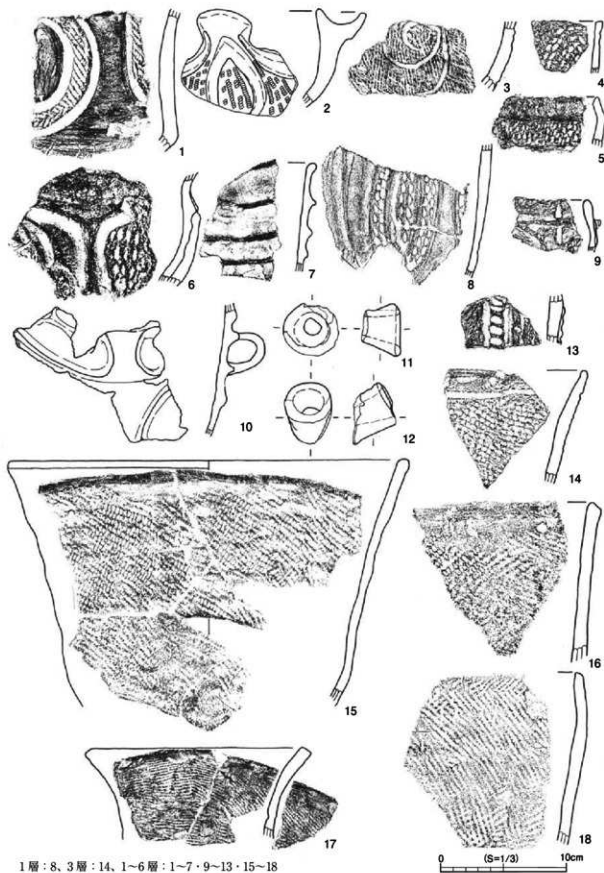


图64 6号竖穴住居跡出土遺物(3)



3層：3、1~6層：1・2・4~9

図65 6号竪穴住居跡出土遺物(4)



1層：8、3層：14、1~6層：1~7・9~13・15~18

図66 6号竪穴住居跡出土遺物(5)



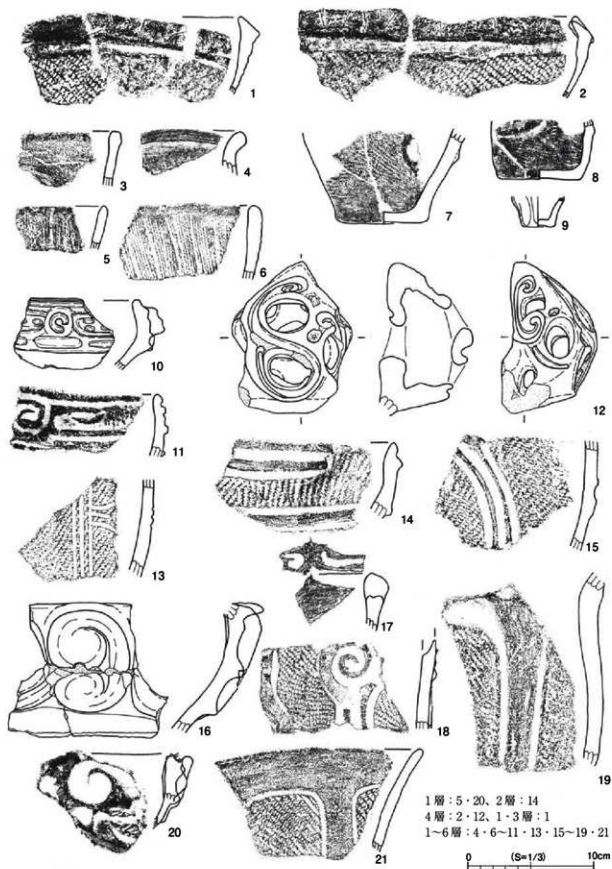


図67 6号竪穴住居跡出土遺物(6)

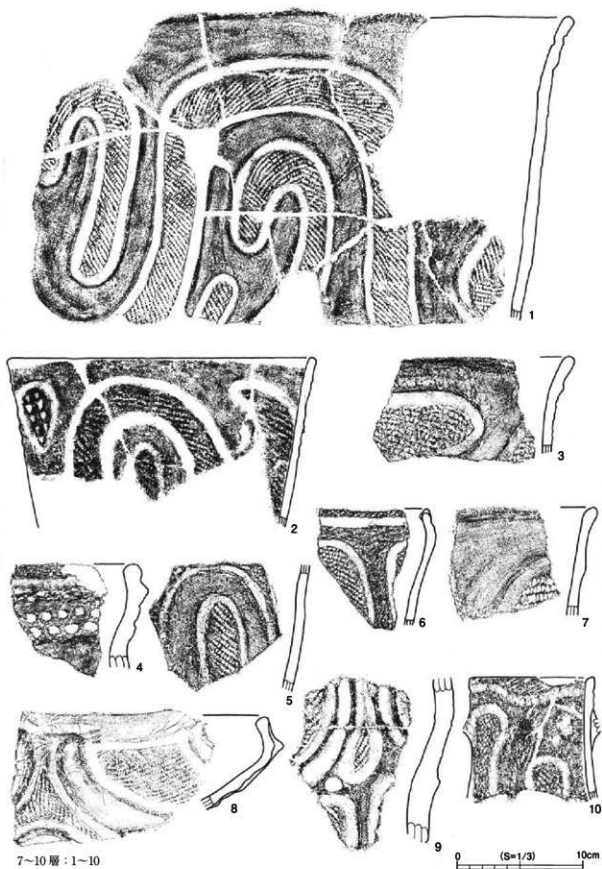
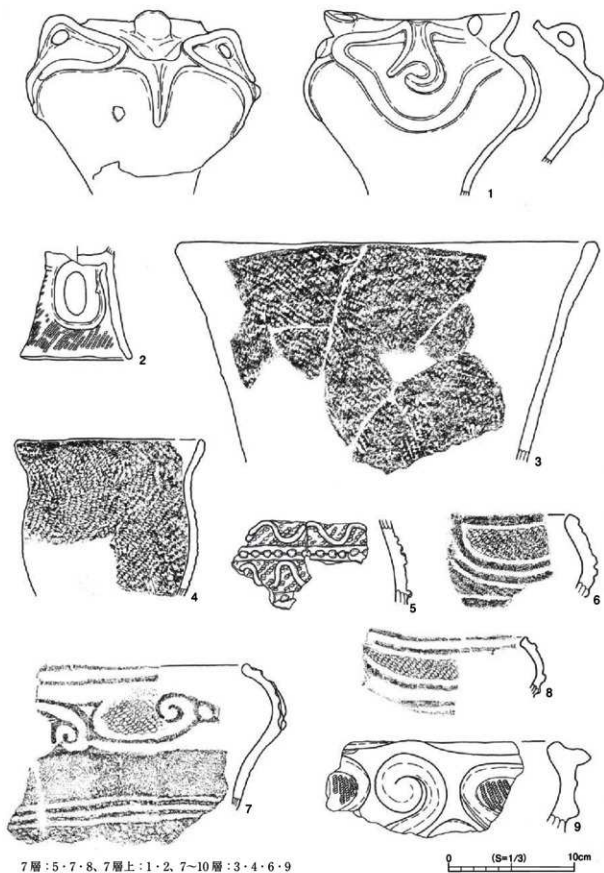
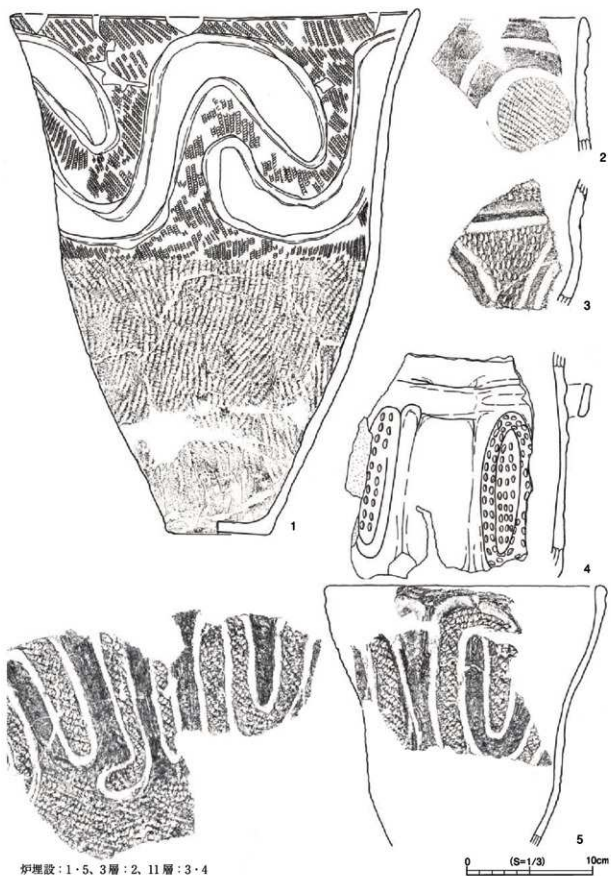


图68 6号竖穴住居跡出土遺物(7)



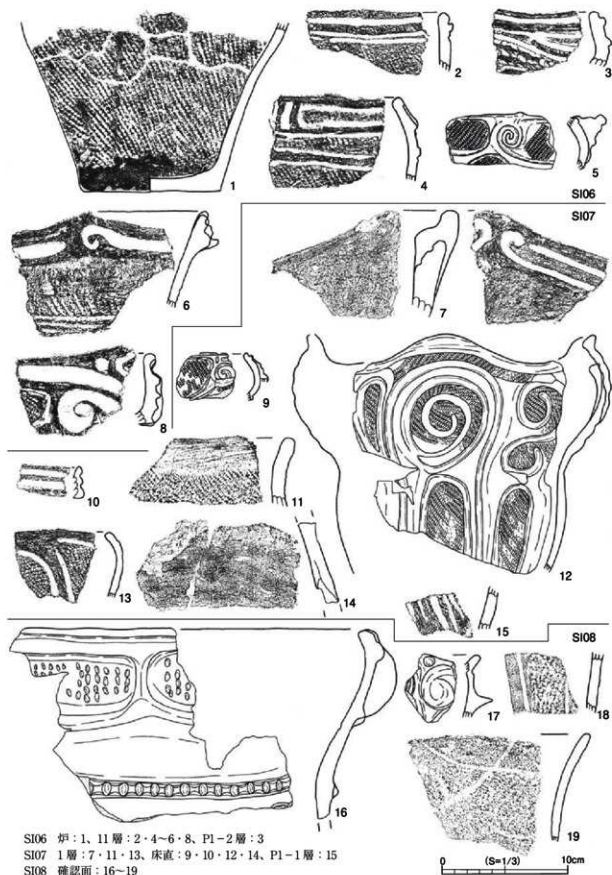
7層：5・7・8、7層上：1・2、7～10層：3・4・6・9

図69 6号竪穴住居跡出土遺物(8)



炉埋設：1・5、3層：2、11層：3・4

图70 6号竖穴住居跡出土遺物(9)



SI06 炉：1、11層：2・4-6・8、P1-2層：3

SI07 1層：7・11・13、床直：9・10・12・14、P1-1層：15

SI08 確認面：16-19

図71 6・7・8号竪穴住居跡出土遺物

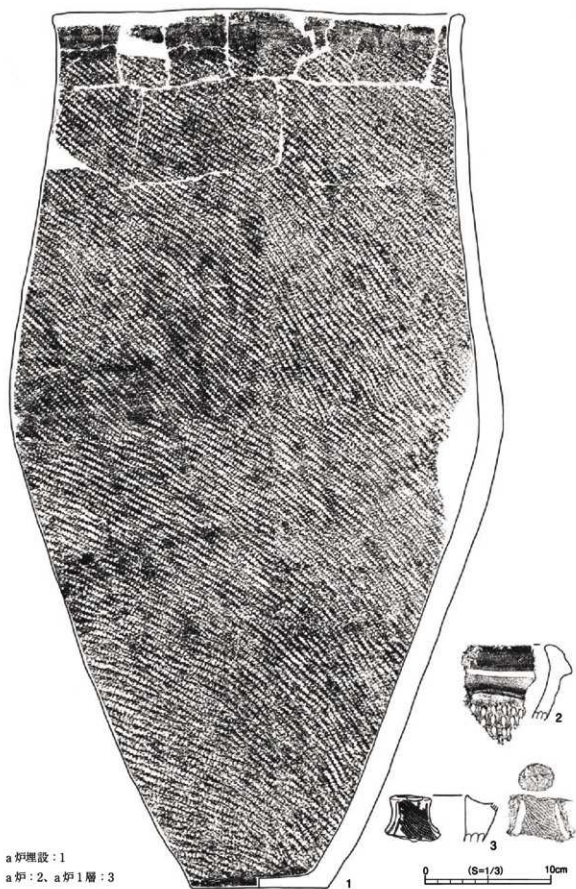
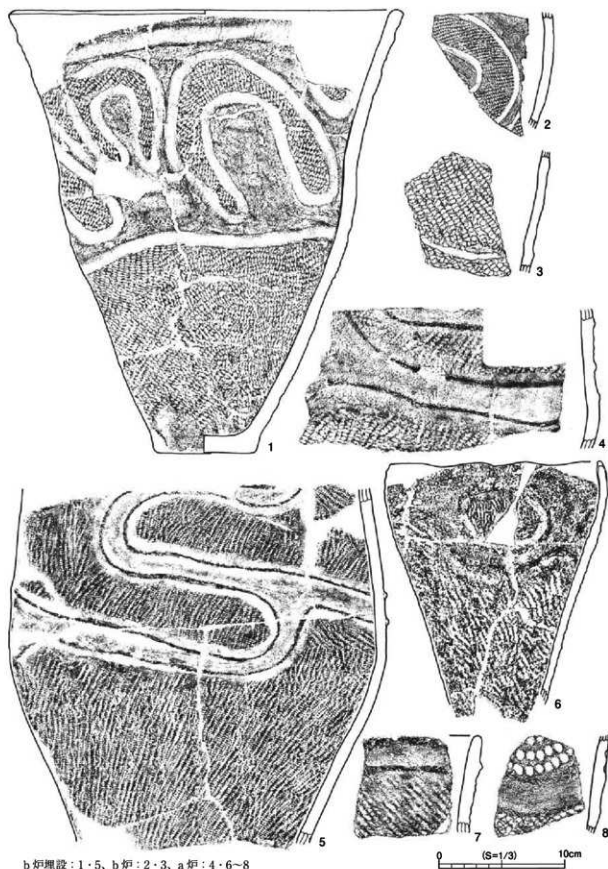


图72 9号竖穴住居跡出土遺物(1)



b 炉黒設：1・5、b 炉：2・3、a 炉：4・6～8

図73 9号竪穴住居跡出土遺物(2)

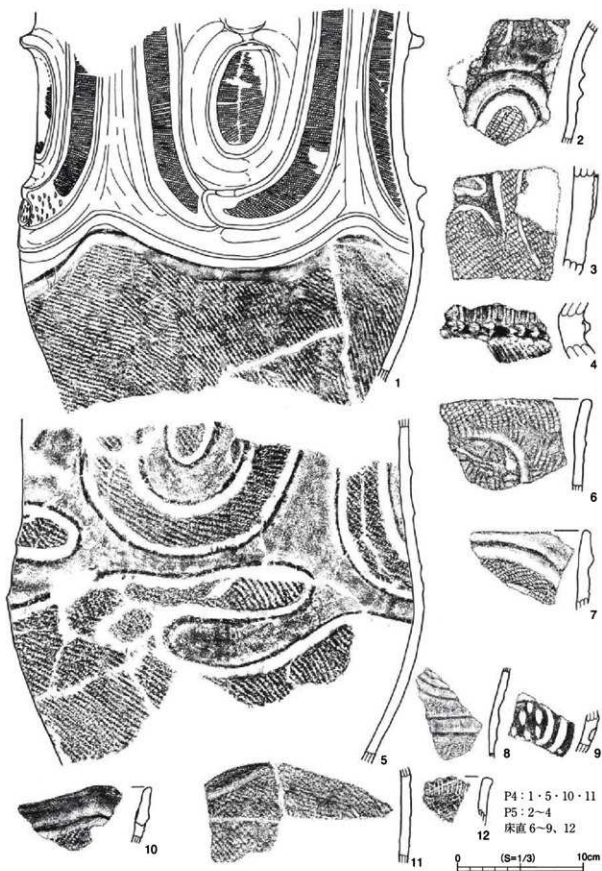
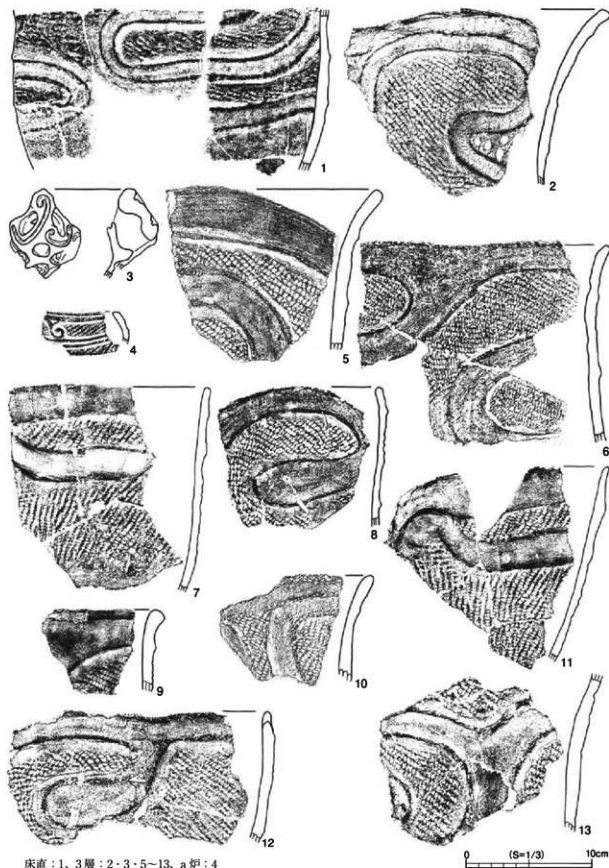


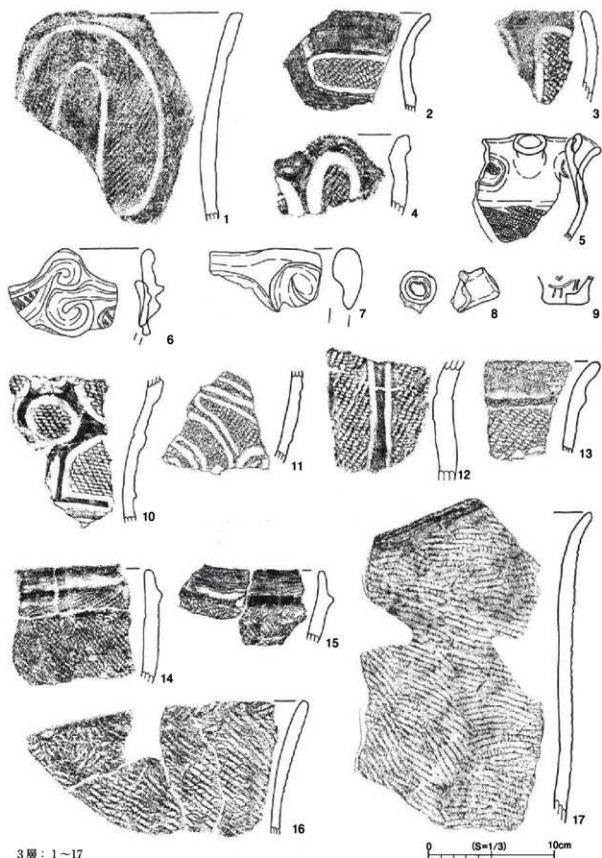
图74 9号竖穴住居跡出土遺物(3)





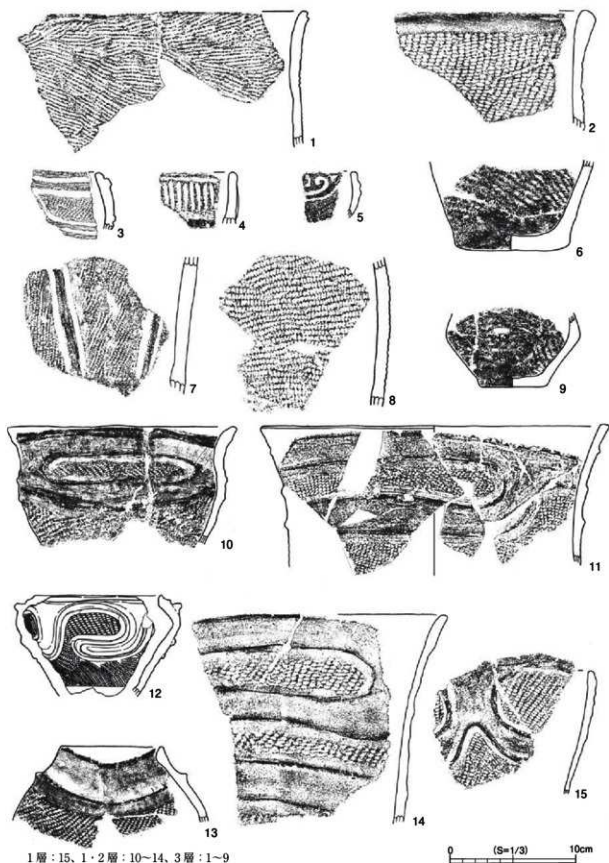
床直：1、3層：2・3・5～13、a 埴：4

図75 9号竪穴住居跡出土遺物(4)



3層：1~17

图76 9号竖穴住居跡出土遺物(5)



1層：15、1・2層：10～14、3層：1～9

図77 9号竪穴住居跡出土遺物(6)

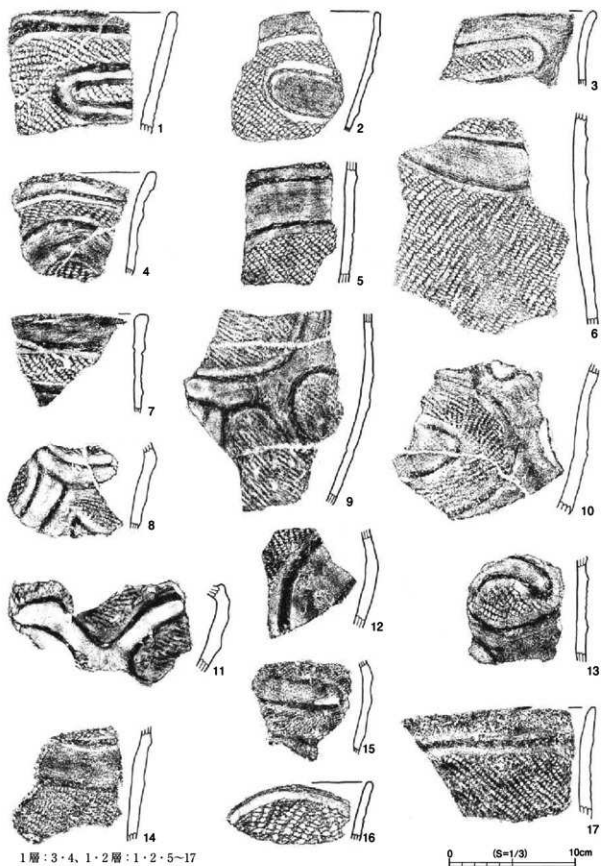
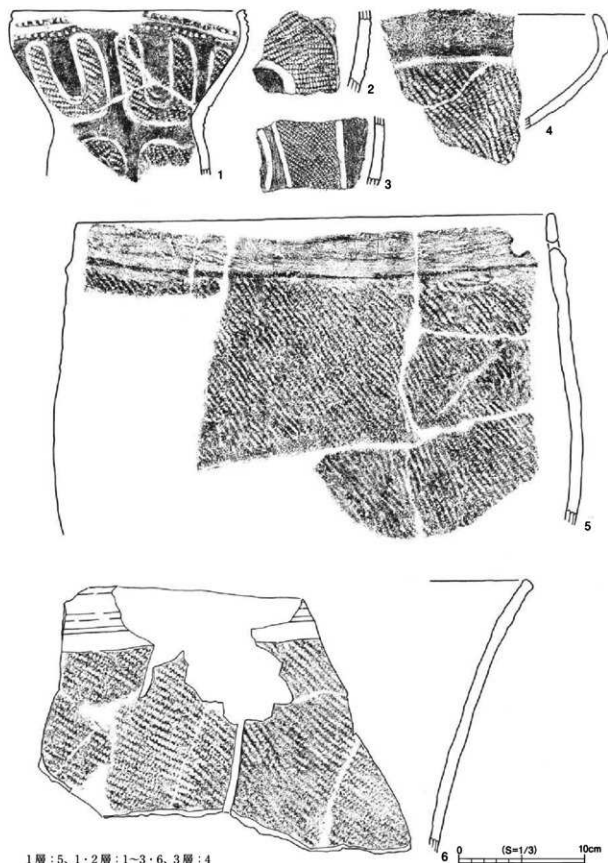
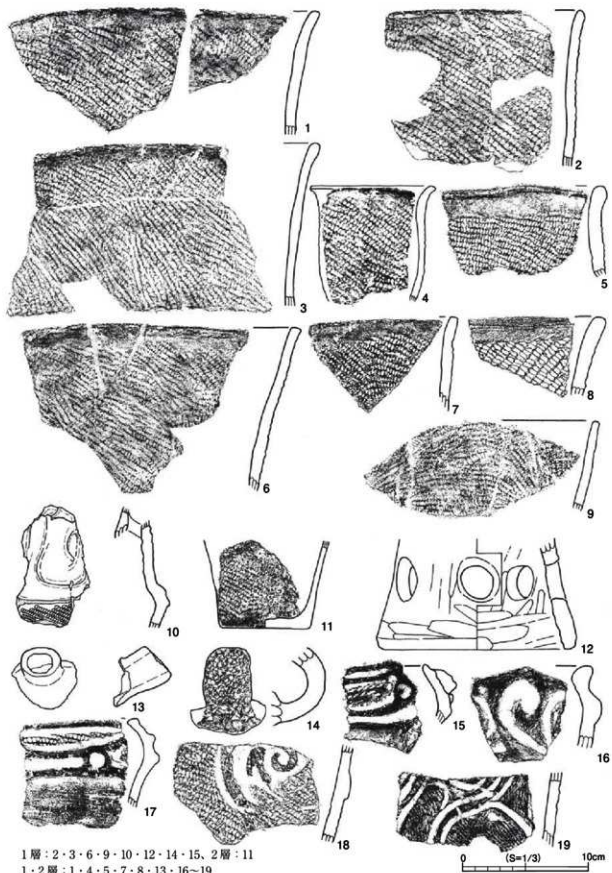


图78 9号竖穴住居跡出土遺物(7)



1層:5、1・2層:1~3・6、3層:4

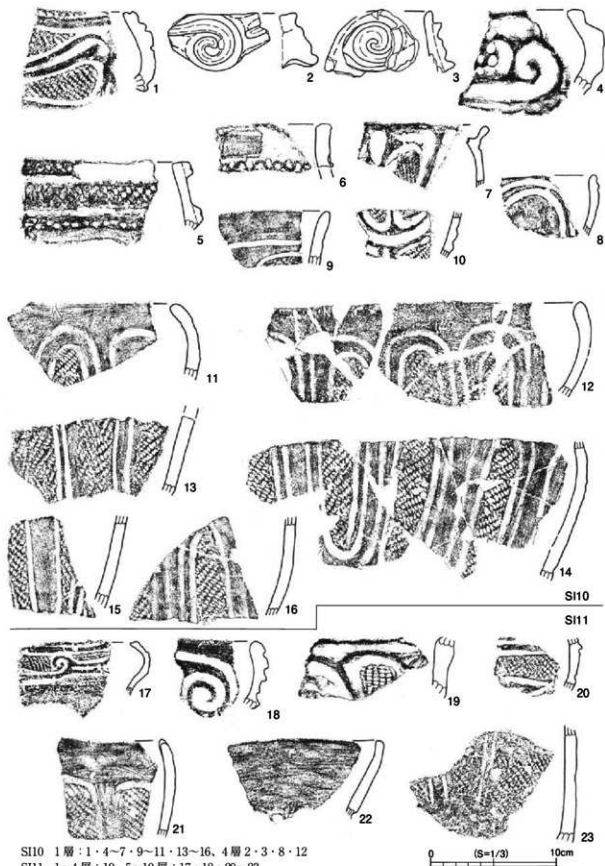
図79 9号竪穴住居跡出土遺物(8)



1層：2・3・6・9・10・12・14・15、2層：11

1・2層：1・4・5・7・8・13・16~19

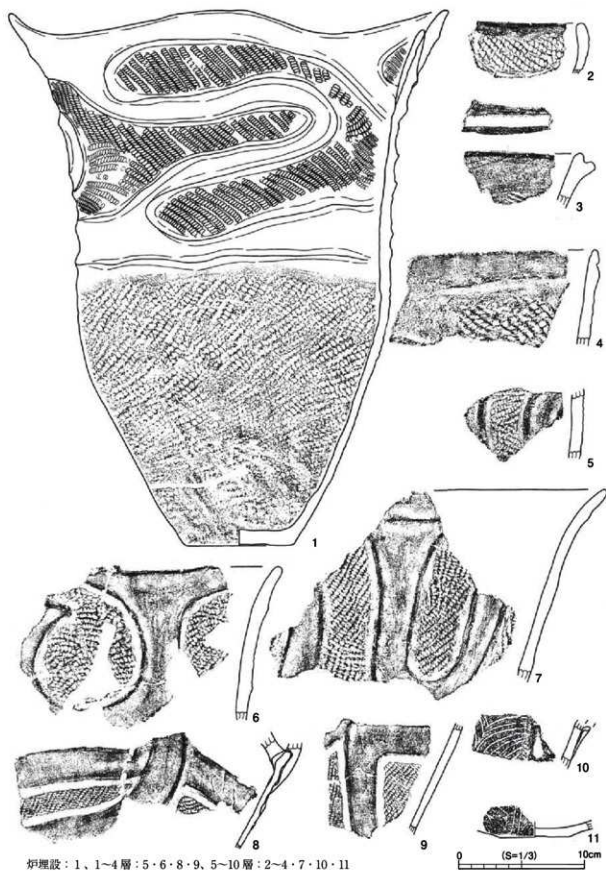
図80 9号竪穴住居跡出土遺物(9)



SI10 1層: 1・4~7・9~11・13~16, 4層 2・3・8・12

SI11 1~4層: 19, 5~10層: 17・18・20~23

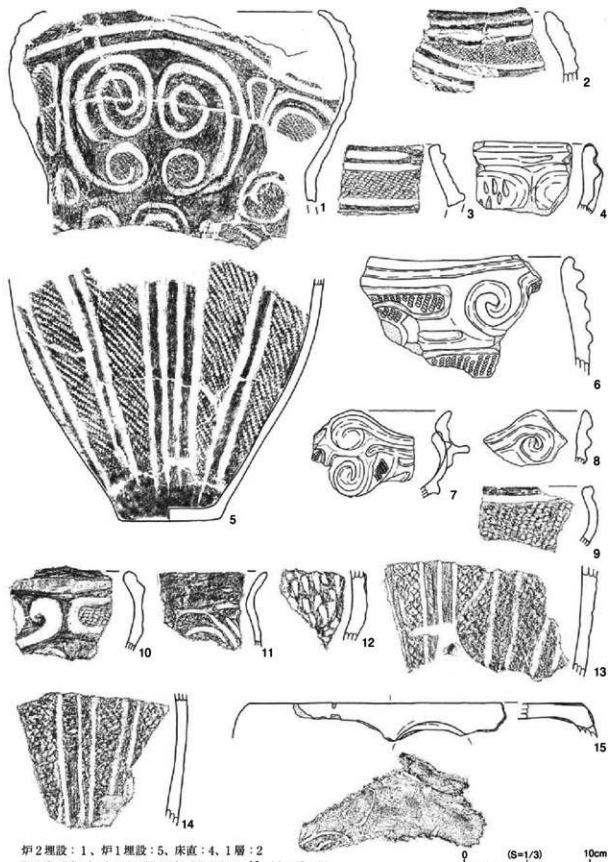
図81 10・11号竪穴住居跡出土遺物



炉壇設：1、1~4層：5・6・8・9、5~10層：2~4・7・10・11

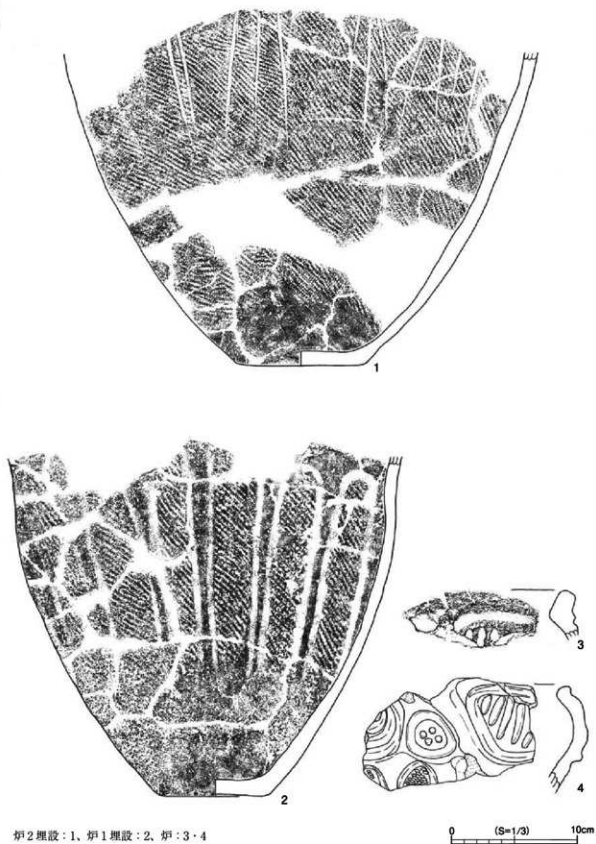
图82 11号竖穴住居跡出土遺物





炉2埋設：1、炉1埋設：5、床直：4、1層：2  
 P1：3、P2：6～9・11、P5：12、P7：15、一括：10・13・14

図83 12号竪穴住居跡出土遺物(1)



炉2埋設：1、炉1埋設：2、炉：3・4

图84 12号竖穴住居跡出土遺物(2)

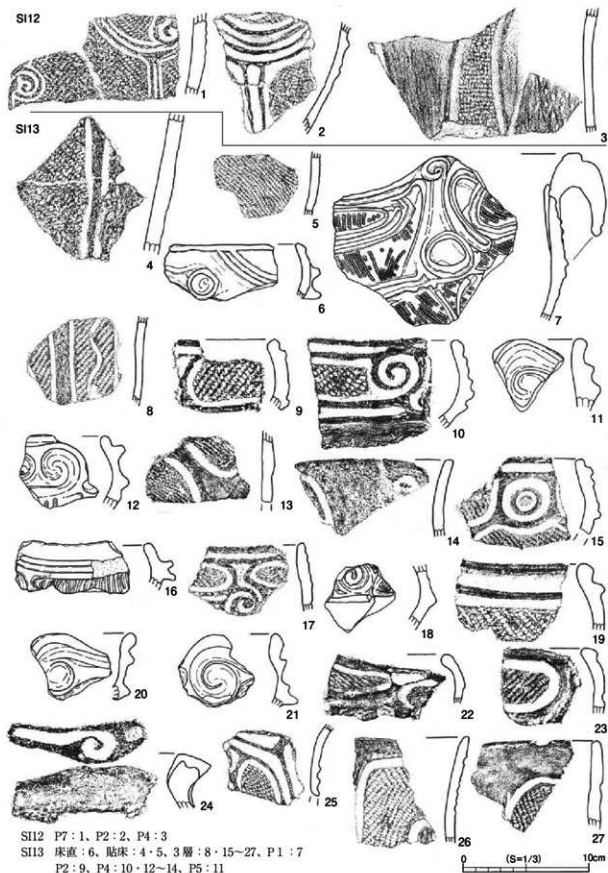
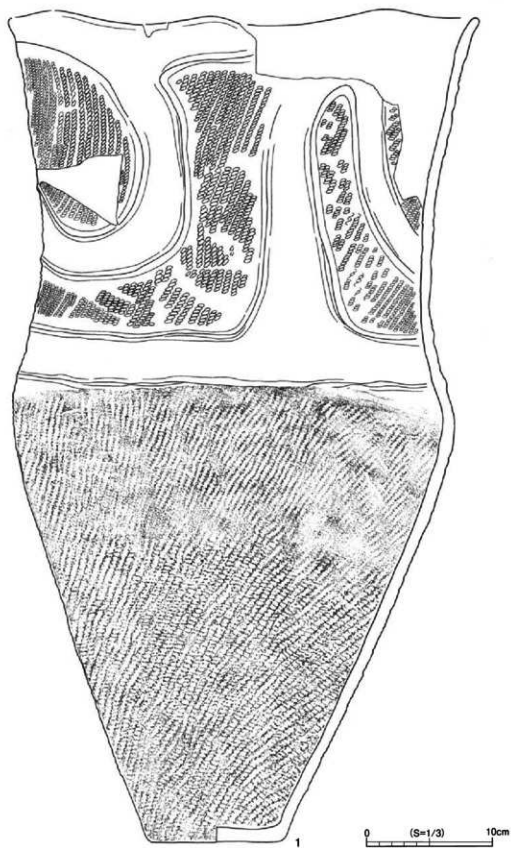
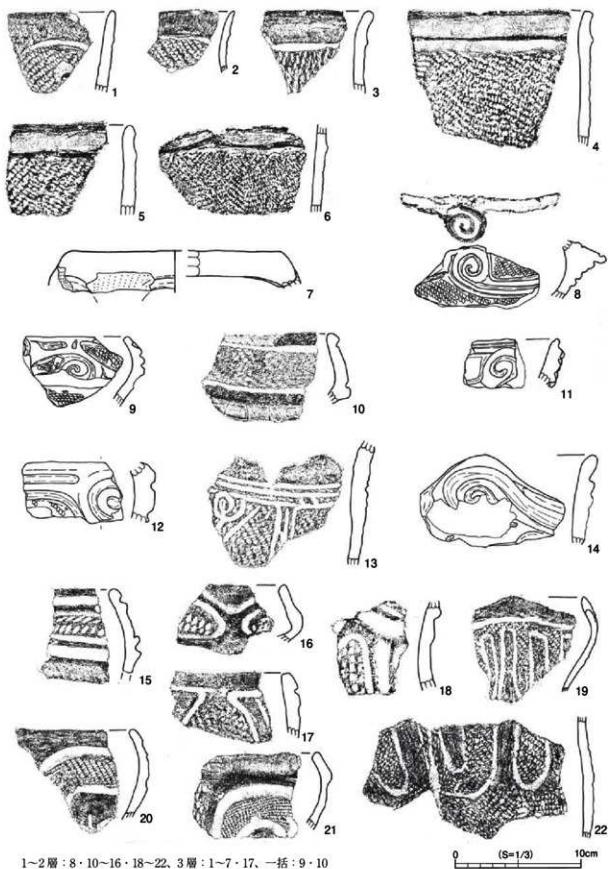


図85 12・13号竪穴住居跡出土遺物



炉裡設：1

図86 13号竪穴住居跡出土遺物(1)



1~2層：8・10~16・18~22、3層：1~7・17、一括：9・10

図87 13号竪穴住居跡出土遺物(2)

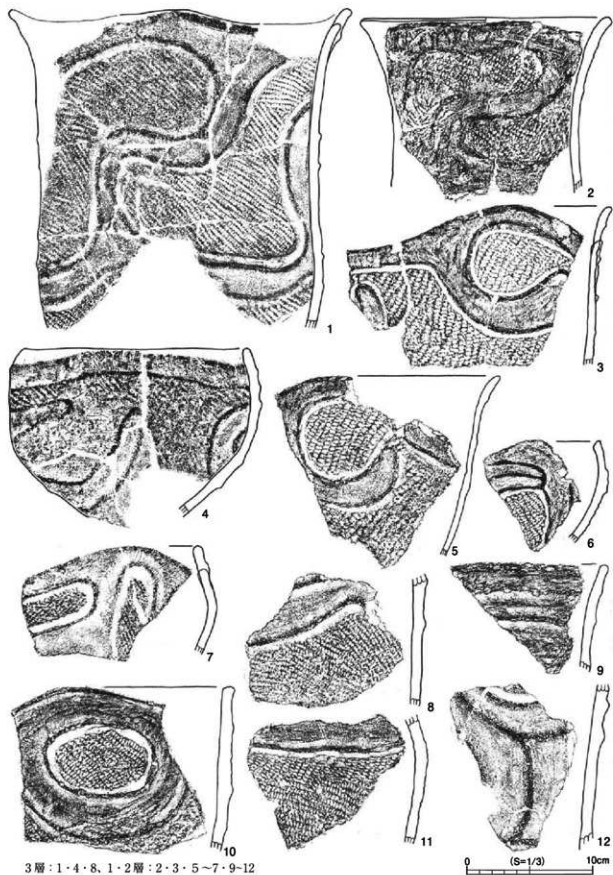
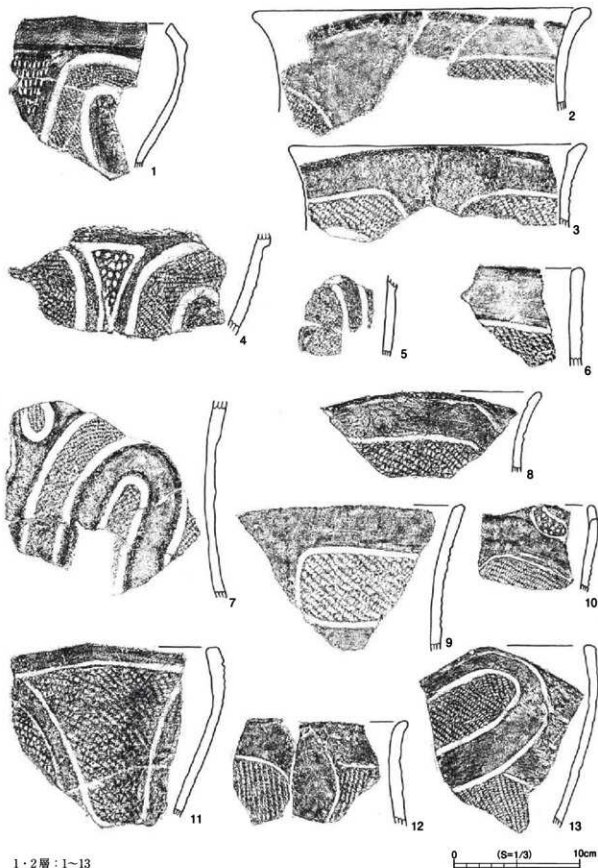


図88 13号竪穴住居跡出土遺物(3)



1・2層：1～13

図89 13号竪穴住居跡出土土器(4)

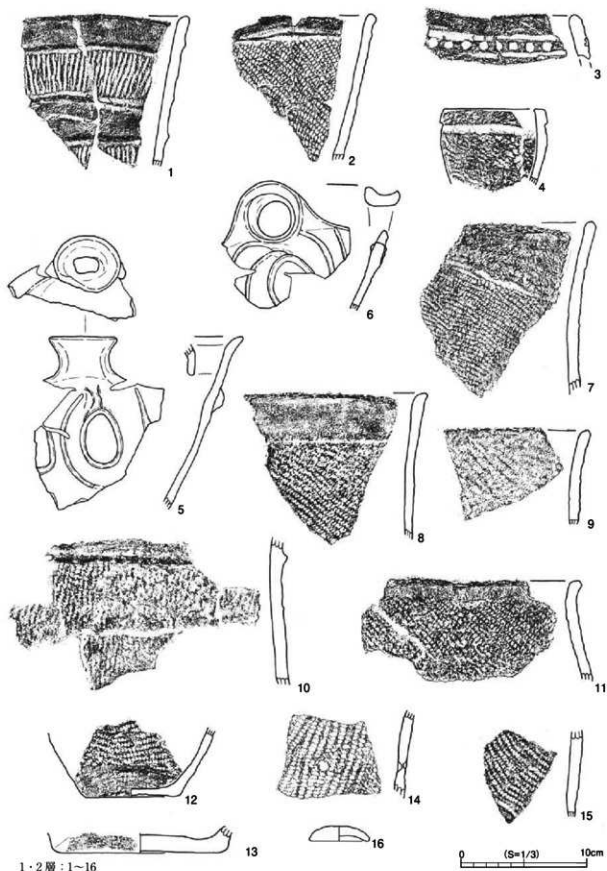
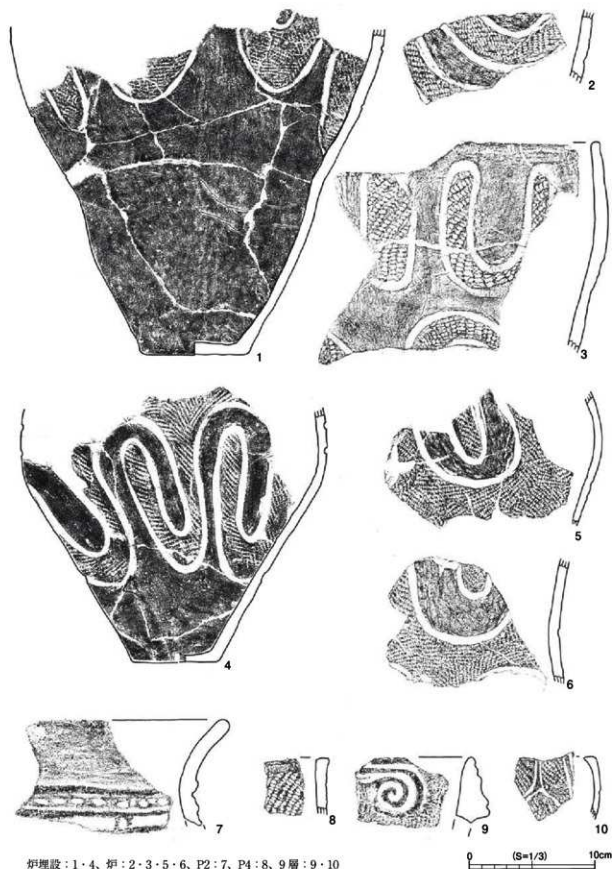


図90 13号竪穴住居跡出土土器(5)

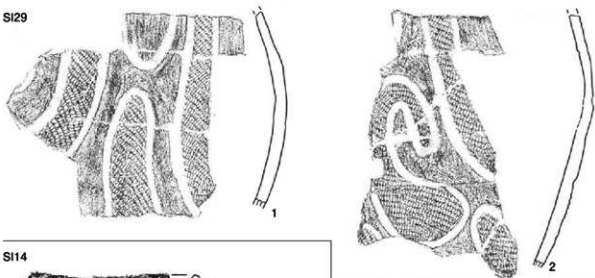




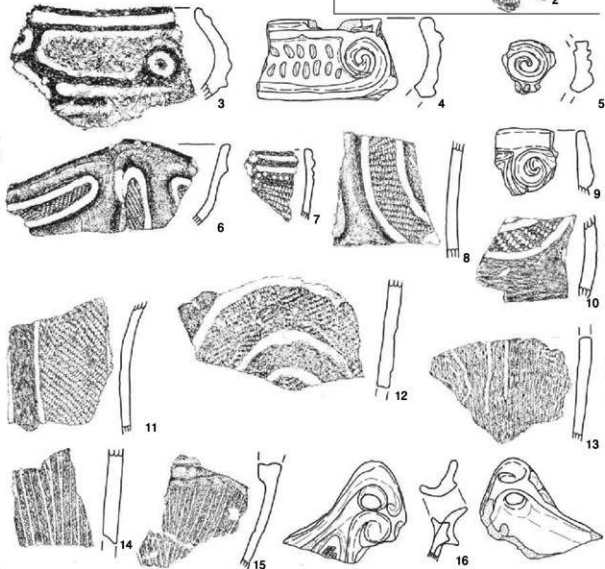
炉埋設：1・4、炉：2・3・5・6、P2：7、P4：8、9層：9・10

図91 14号竪穴住居跡出土土器

SI29



SI14

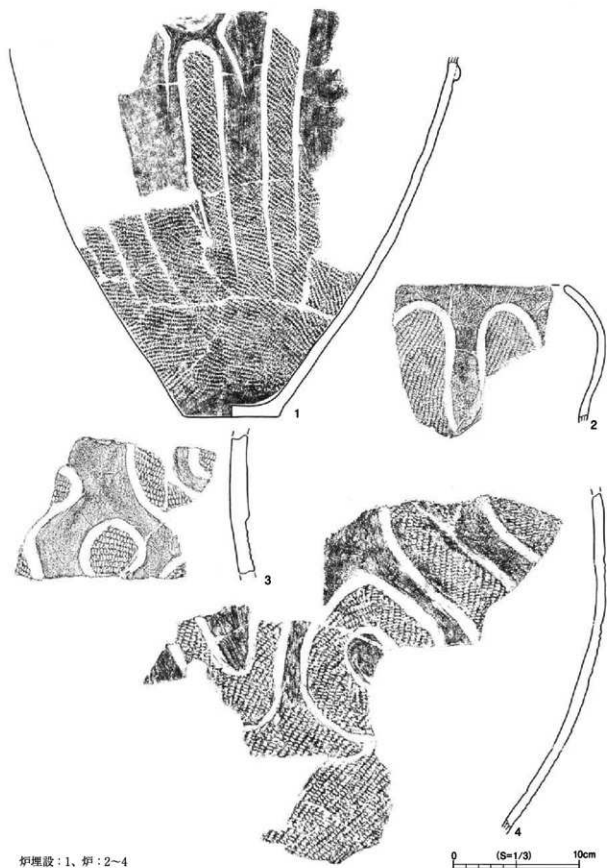


SI14 1層: 3·4·6~10·12~14·16, 2層: 5·11、一括: 15

SI29 炉: 1·2

0 (S=1/3) 10cm

图92 14·29号竖穴住居跡出土土器



炉埋設：1、炉：2～4

図93 29号竪穴住居跡出土土器

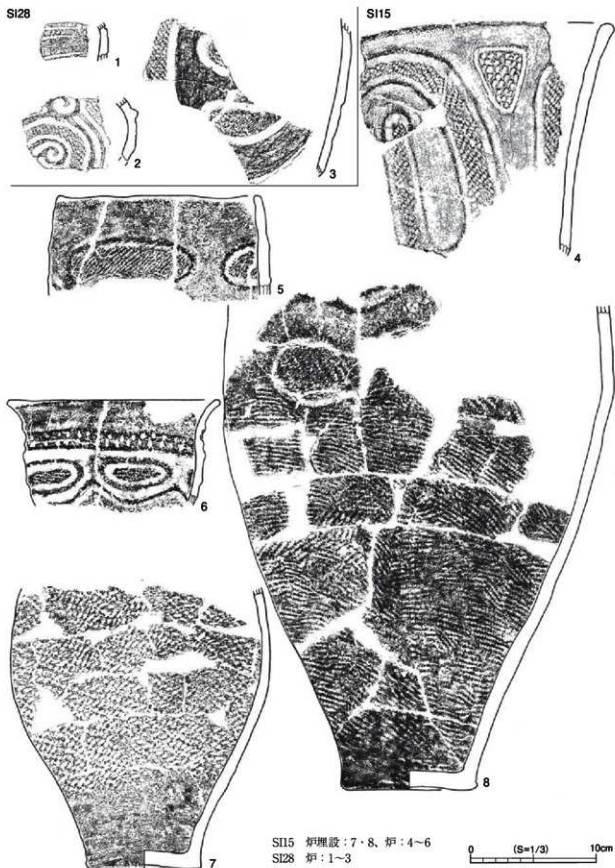
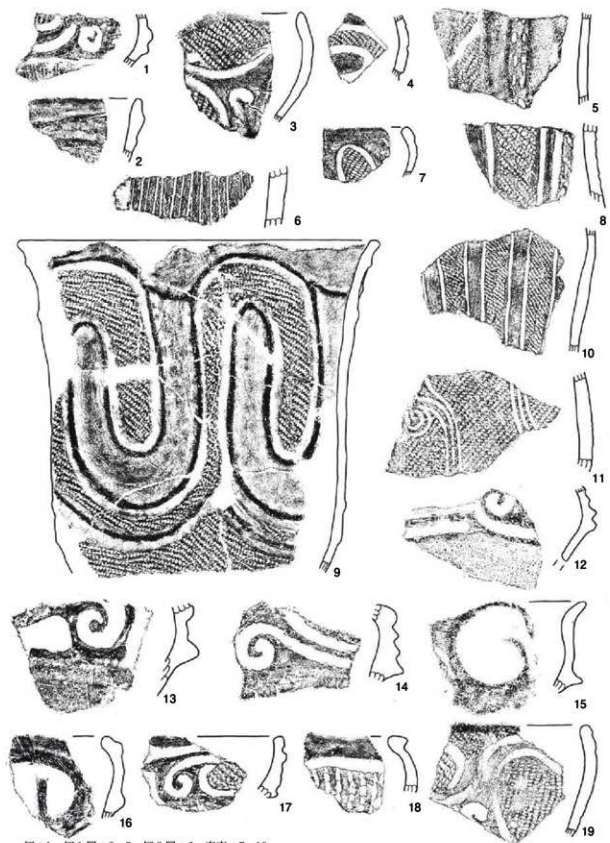


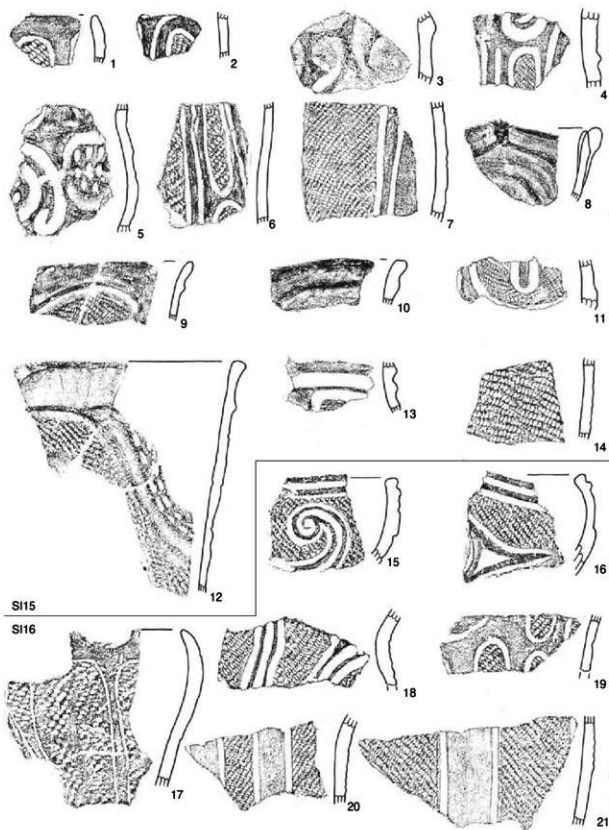
图94 15・28号竪穴住居跡出土土器



炉：1、炉1層：2-5、炉2層：6、床直：7-10  
 1-4層：11・12・14・16・19、5層：13・17・18、P2：15

0 (S=1/3) 10cm

図95 15号竪穴住居跡出土土器



SI15

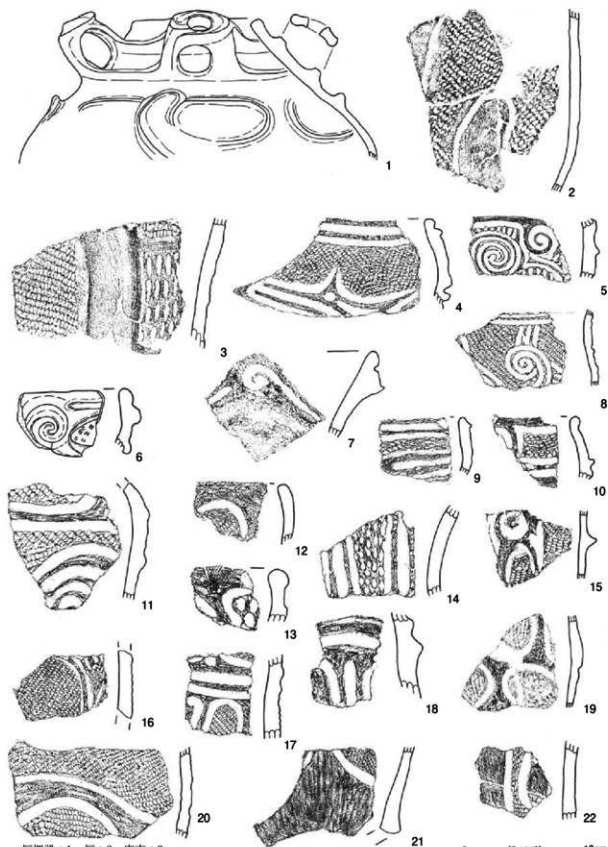
SI16

SI15 1~4層: 2~5・7~9・11・13・14、5層: 1・6・10・12

SI16 一括: 15~21

0 (S=1/3) 10cm

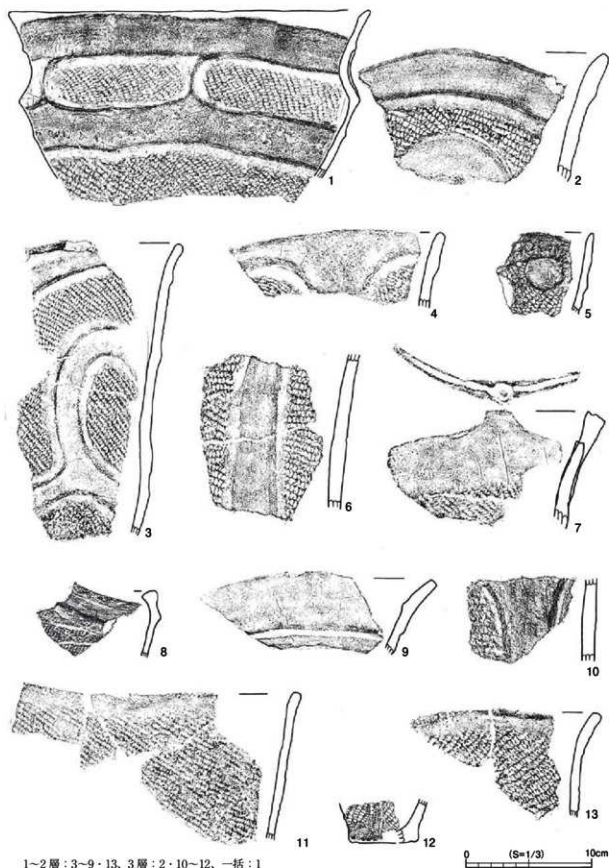
図96 15・16号竪穴住居跡出土土器



炉埋設：1、炉：2、床直：3

1~2層：4・7・9~14・18・20~22、3層：5・6・8・15~17・19

図97 17号竪穴住居跡出土土器(1)



1-2層:3-9·13, 3層:2·10-12, 一括:1

图98 17号竖穴住居跡出土土器(2)



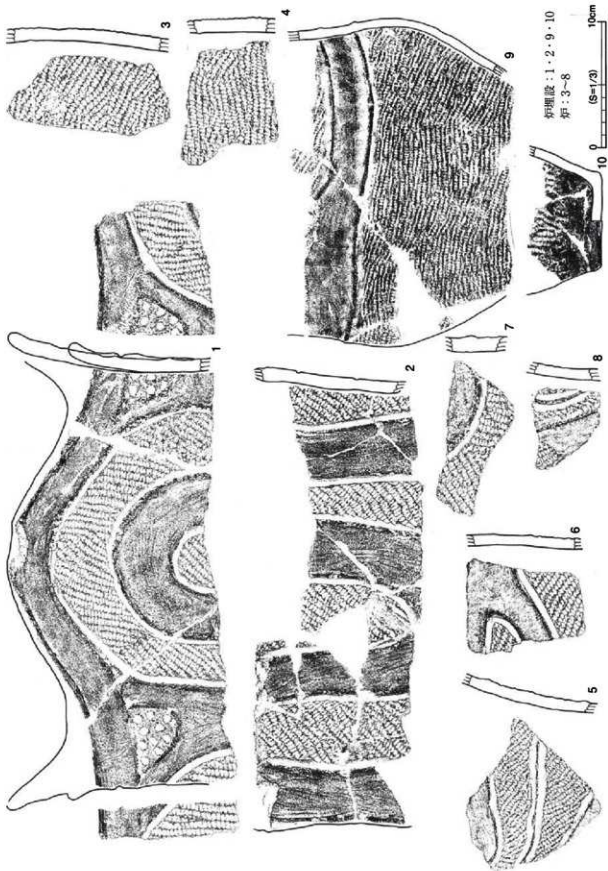


図99 24号竪穴住居跡出土土器(1)

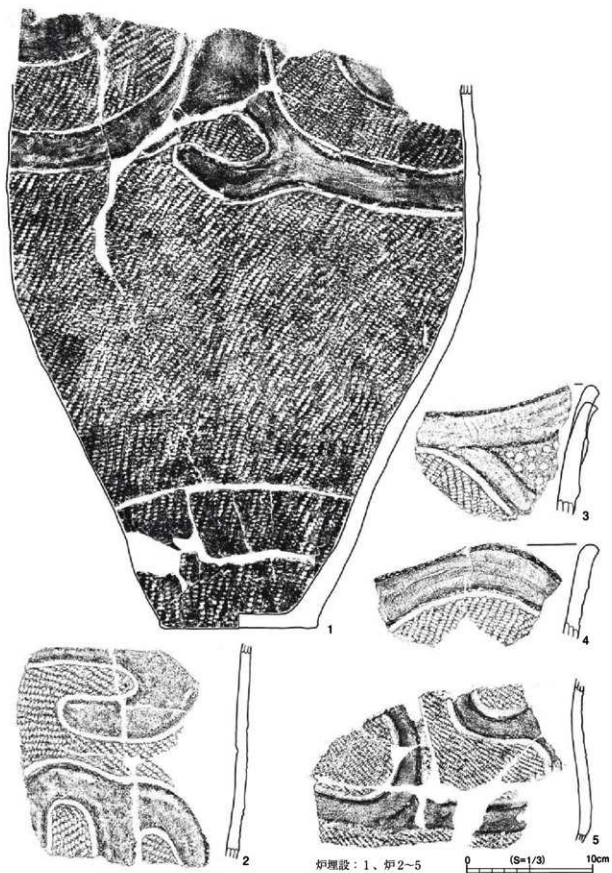


图100 24号竖穴住居跡出土土器(2)

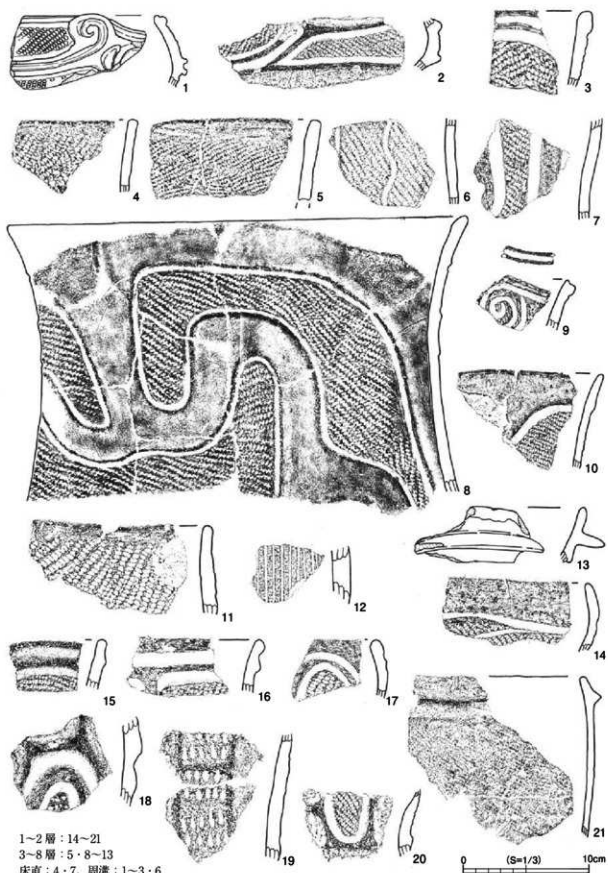
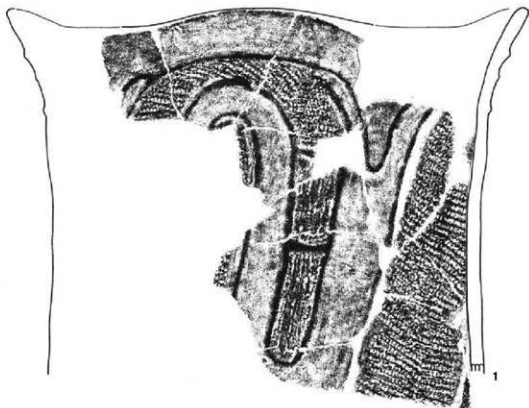
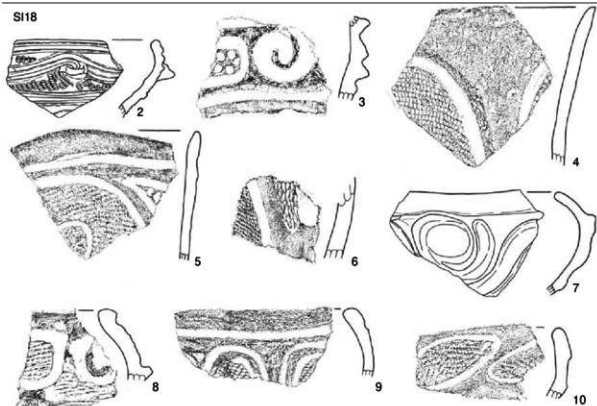


図101 24号竪穴住居跡出土土器(3)



SI24

SI18

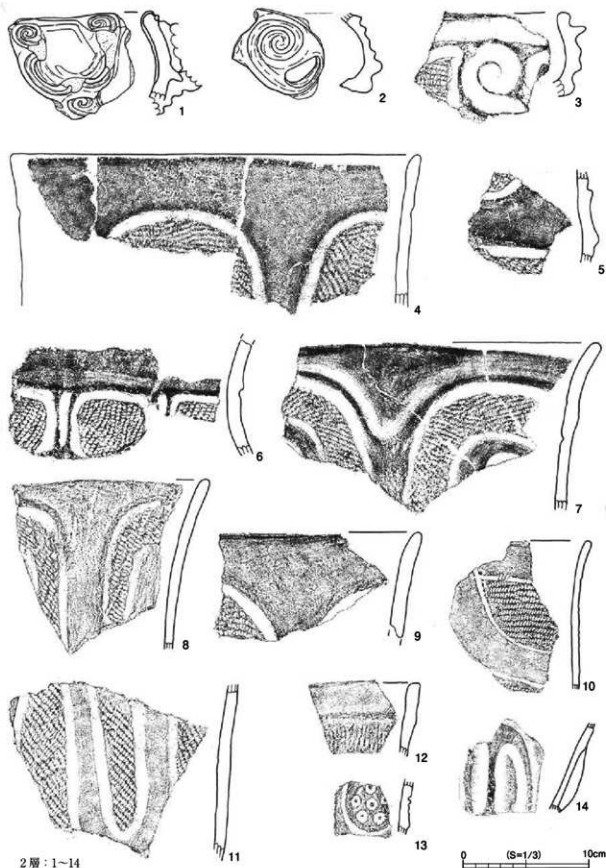


SI24 1~2層:1

SI18 P1:2~6, 3層:7~10

0 (S=1/3) 10cm

图102 18・24号竪穴住居跡出土土器



2層：1~14

図103 18号竪穴住居跡出土土器(1)

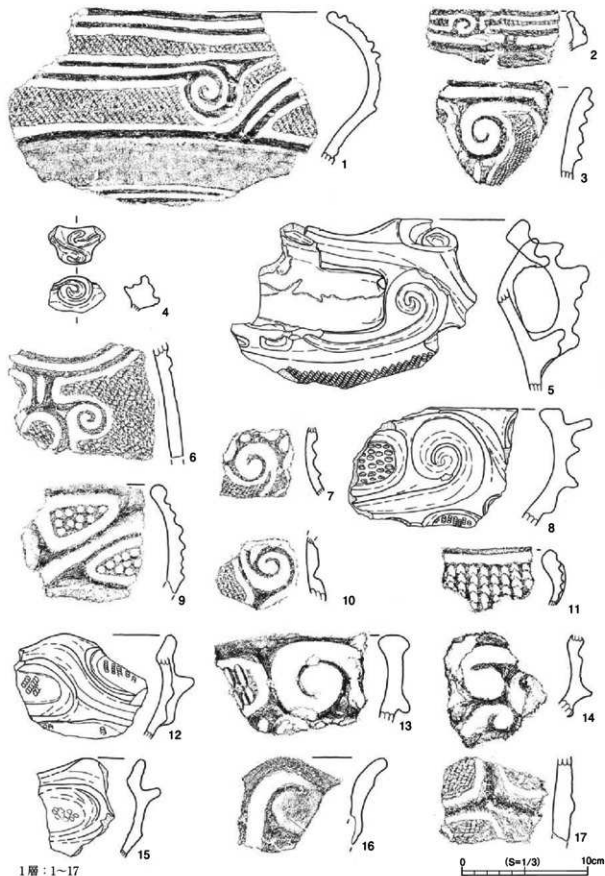


图104 18号竖穴住居跡出土土器(2)

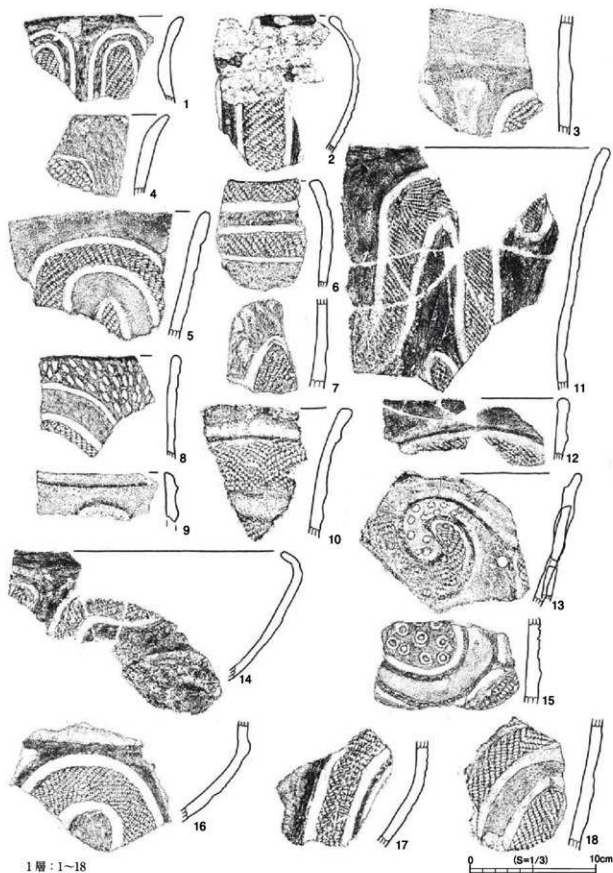
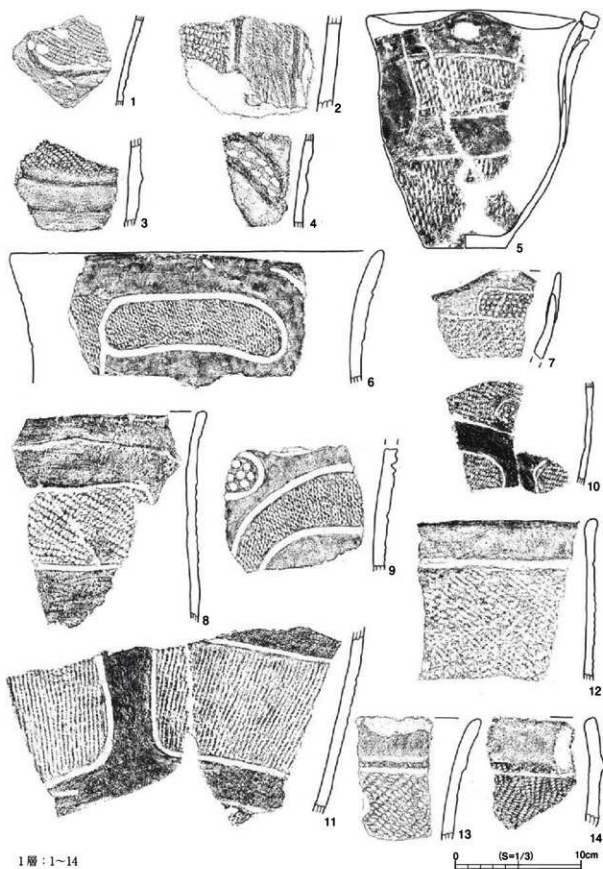


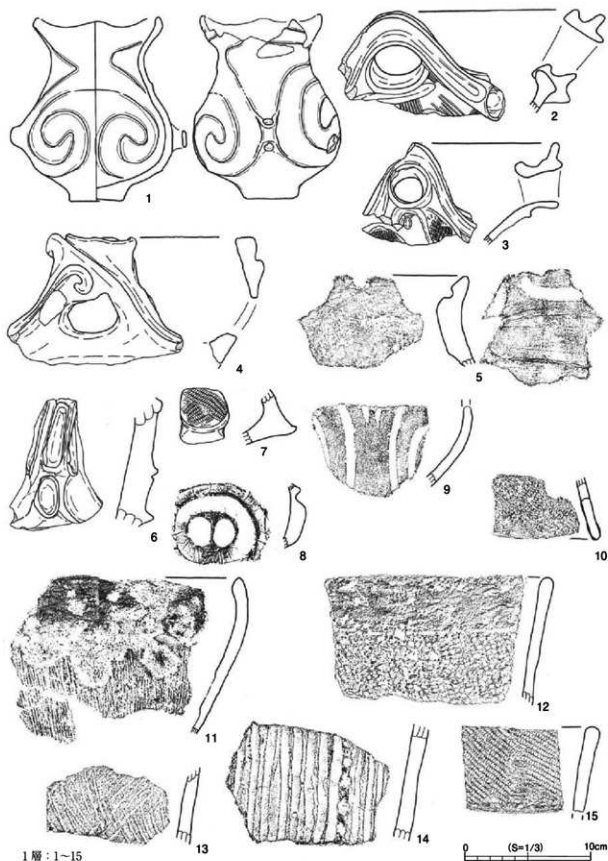
图105 18号竖穴住居跡出土土器(3)



1層：1~14

图106 18号竖穴住居跡出土土器(4)





1層：1～15

図107 18号竪穴住居跡出土土器(5)

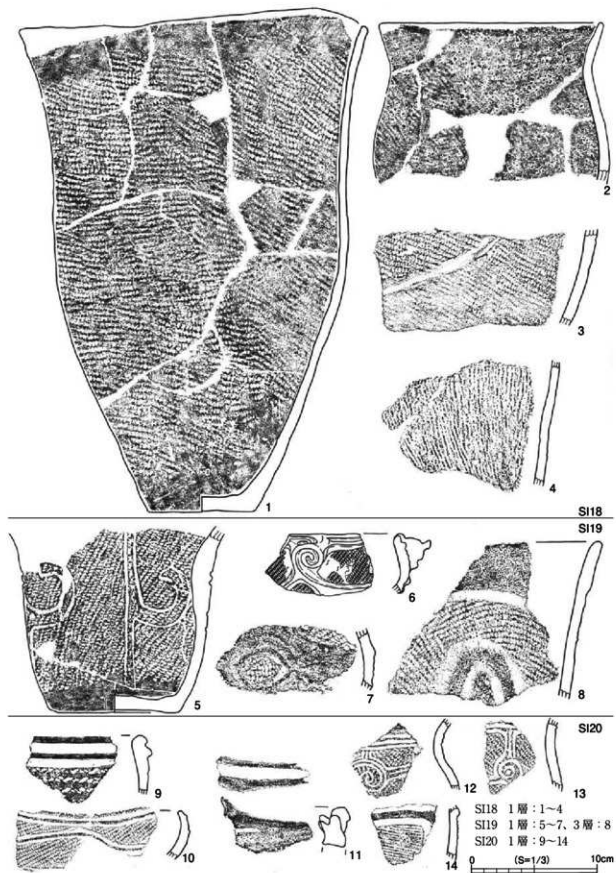
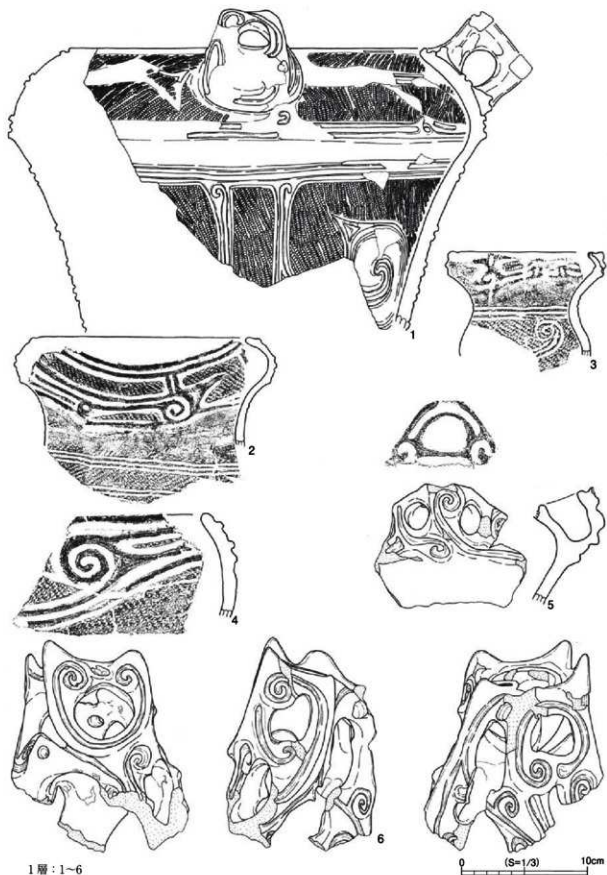


图108 18・19・20号竪穴住居跡出土土器



1層: 1~6  
図109 20号竪穴住居跡出土土器

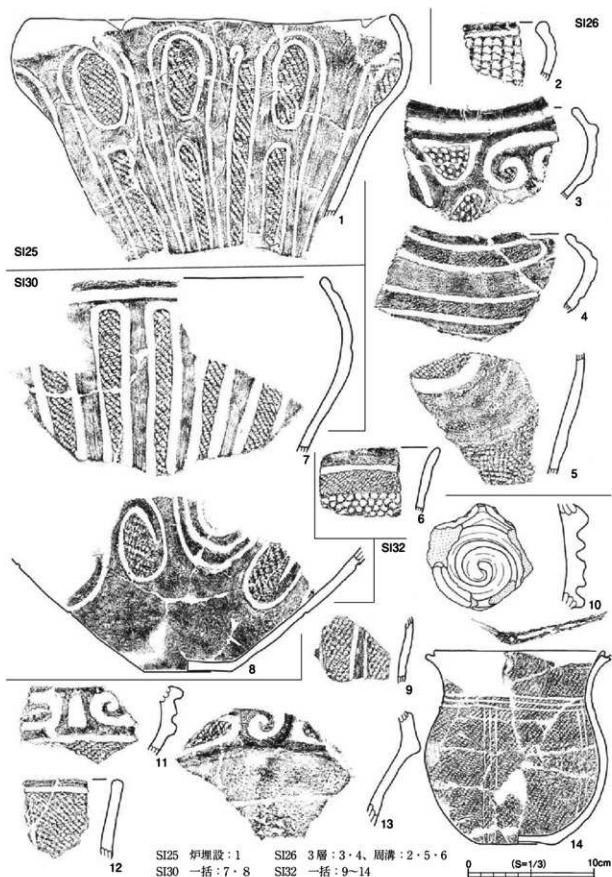


図110 25・26・30・32号竪穴住居跡出土土器

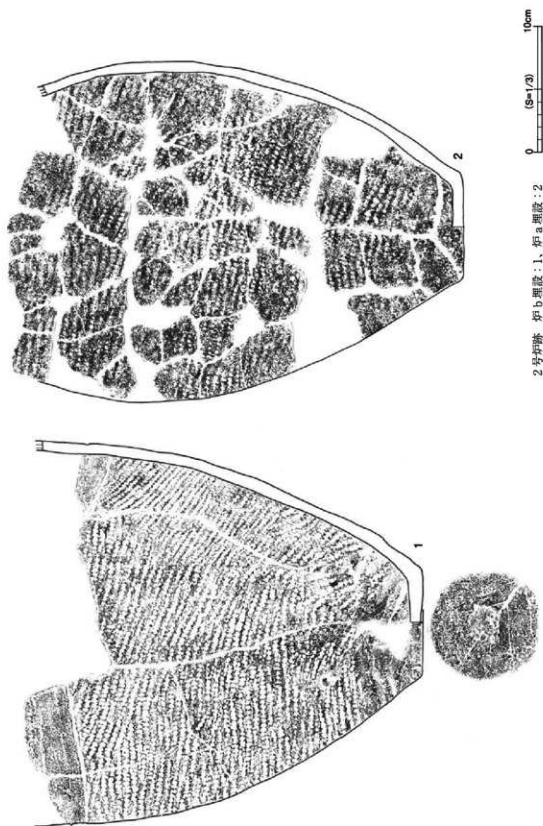


図111 2号炉跡出土土器

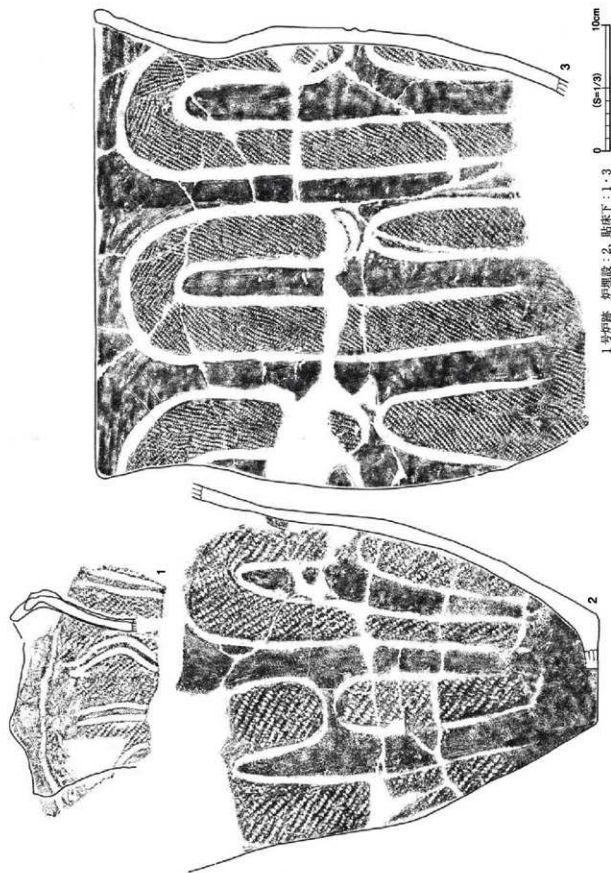
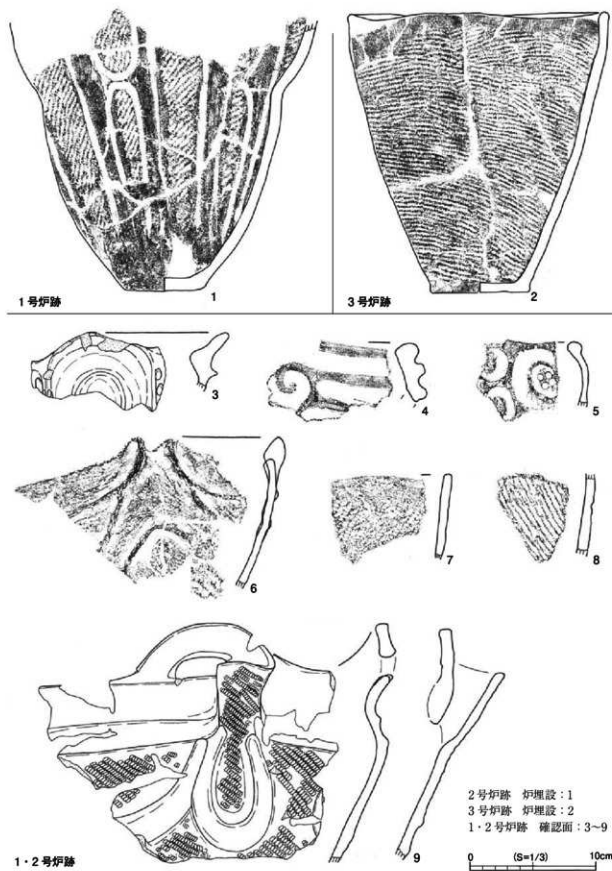
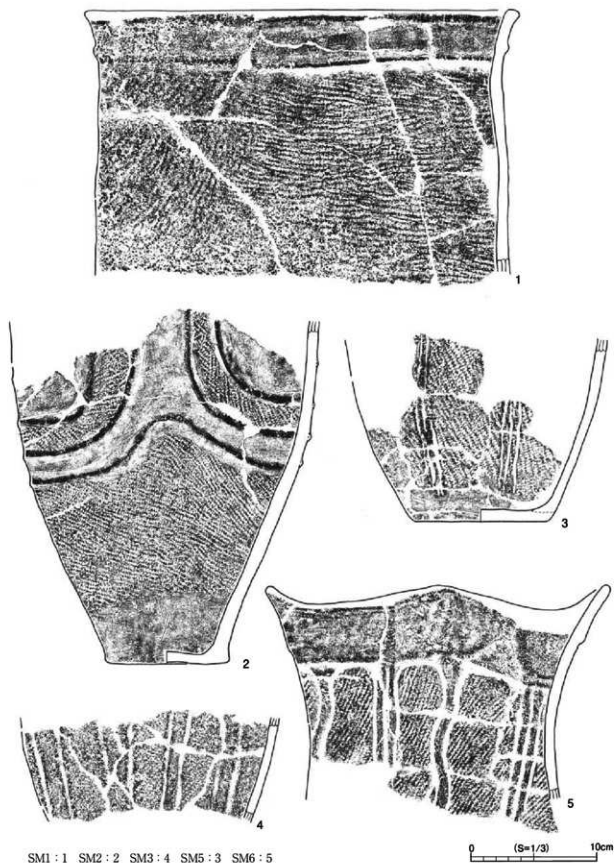


图112 1号炉跡出土土器



1・2号炉跡

図 113 1~3号炉跡出土土器



SM1:1 SM2:2 SM3:4 SM5:3 SM6:5

图 114 1・3・5・6号埋設土器



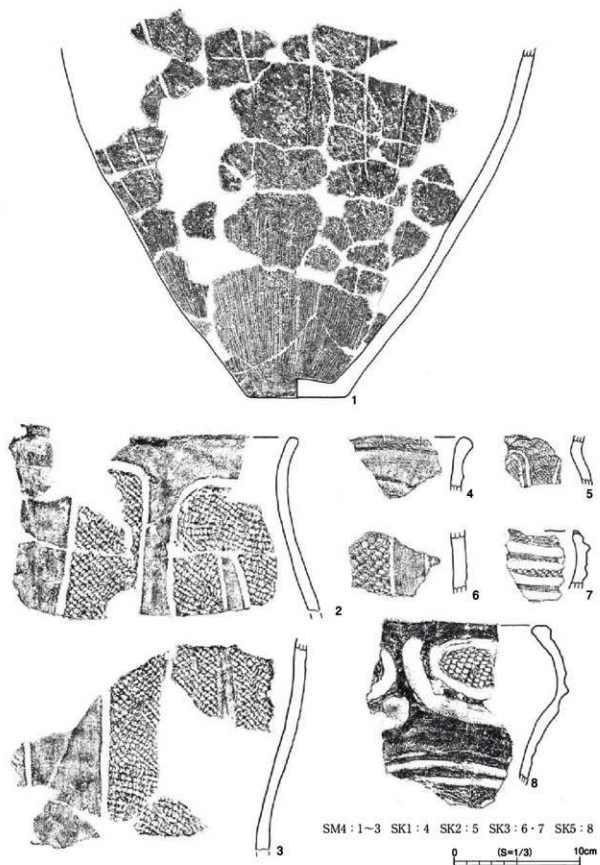


図 115 4号埋設土器・土坑出土土器(1)

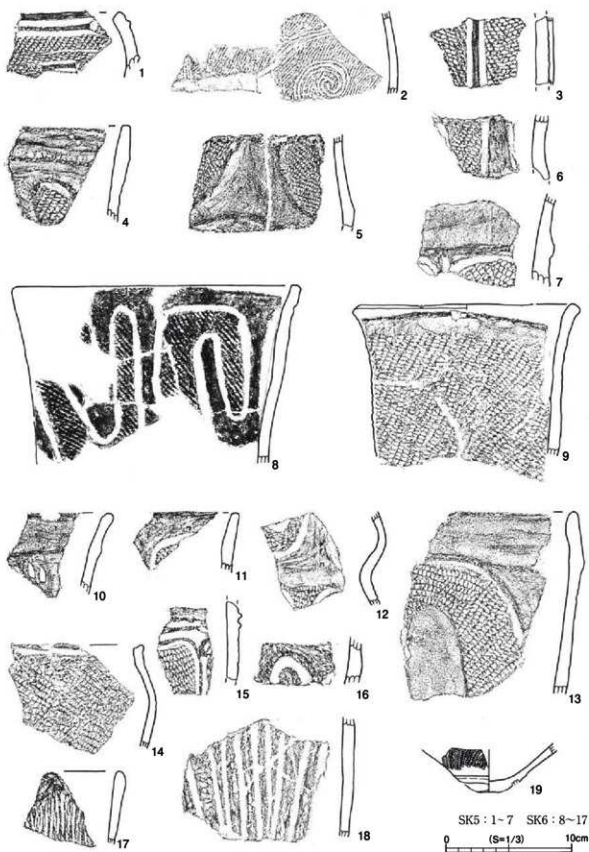
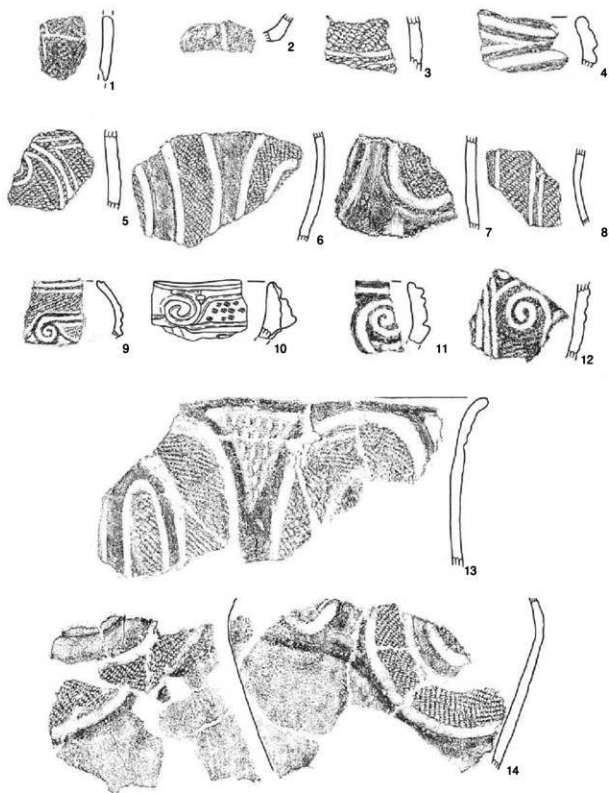


图 116 土坑出土土器(2)



SK7-1層：10-12、2層：9・13・14

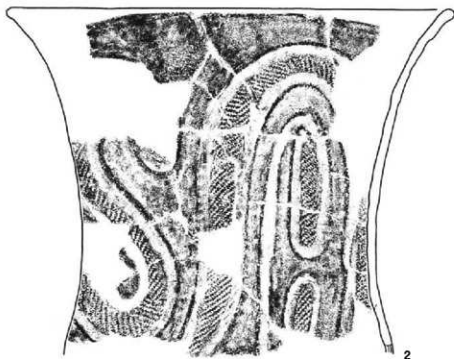
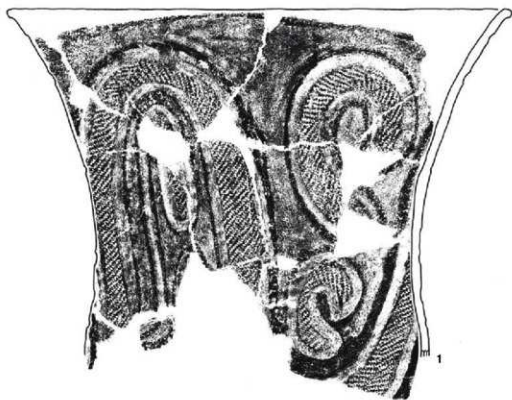
SK8：1~3

SK9：4~7

SK10：8

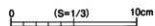
図117 土坑出土土器(3)

0 (S=1/3) 10cm



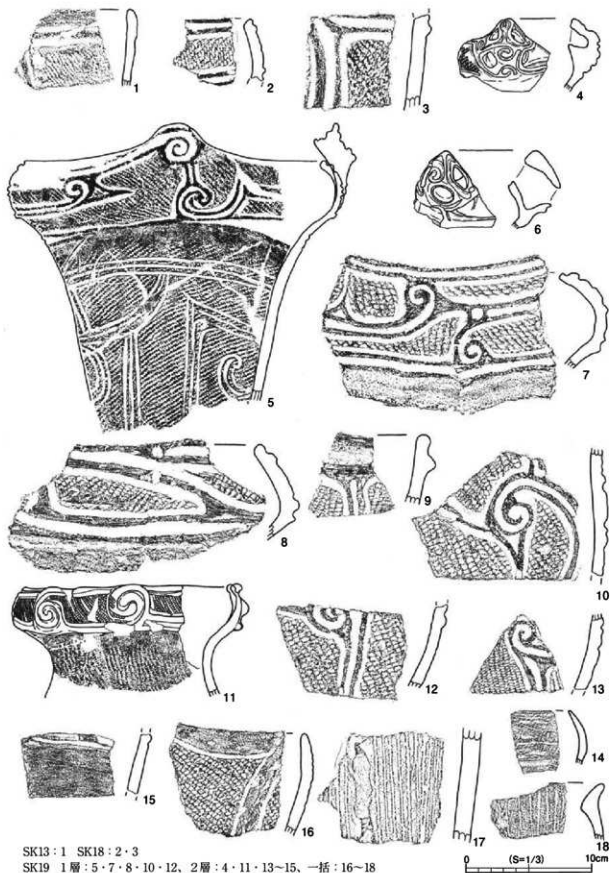
SK7: 1・2

図118 土坑出土土器(4)





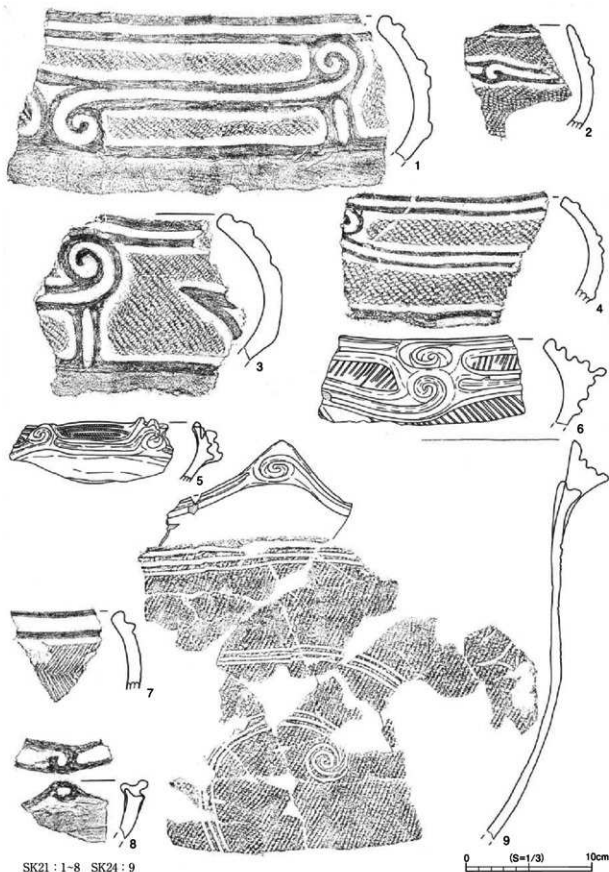
SK7 1層：1・2・4～6・10・12・15、2層：3・7～9・11・14、3層：13  
 図119 土坑出土土器(5)



SK13:1 SK18:2·3

SK19 1層:5·7·8·10·12, 2層:4·11·13~15, 一括:16~18

图120 土坑出土土器(6)



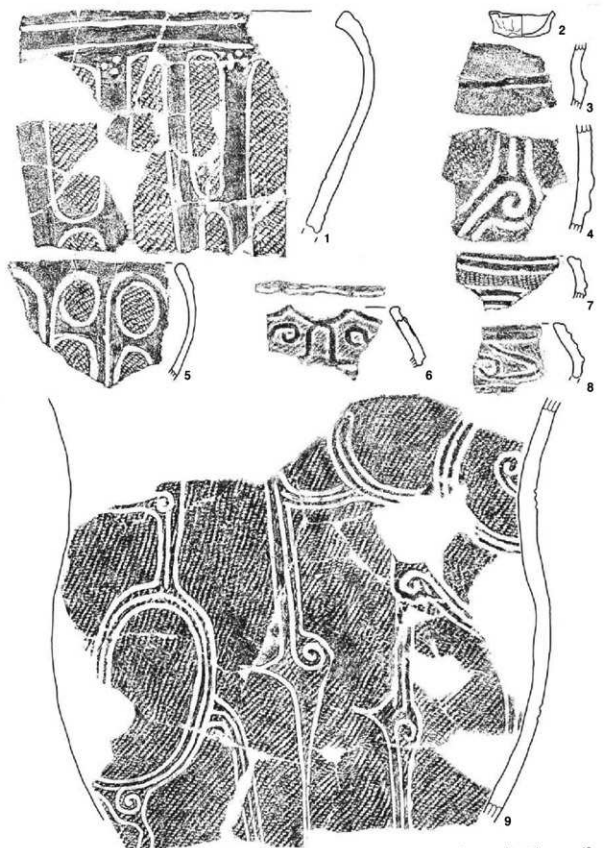
SK21 : 1-8 SK24 : 9

図121 土坑出土土器(7)



图 122 土坑出土土器(8)





PG1-P72:1 PG1-P70:2 PG5-P6:3 PG5-P25:4 P28:5 P105:6 LIV:7~9

図123 ビット群・遺構外出土縄文土器(1)



図124 遺構外出土縄文土器(2)

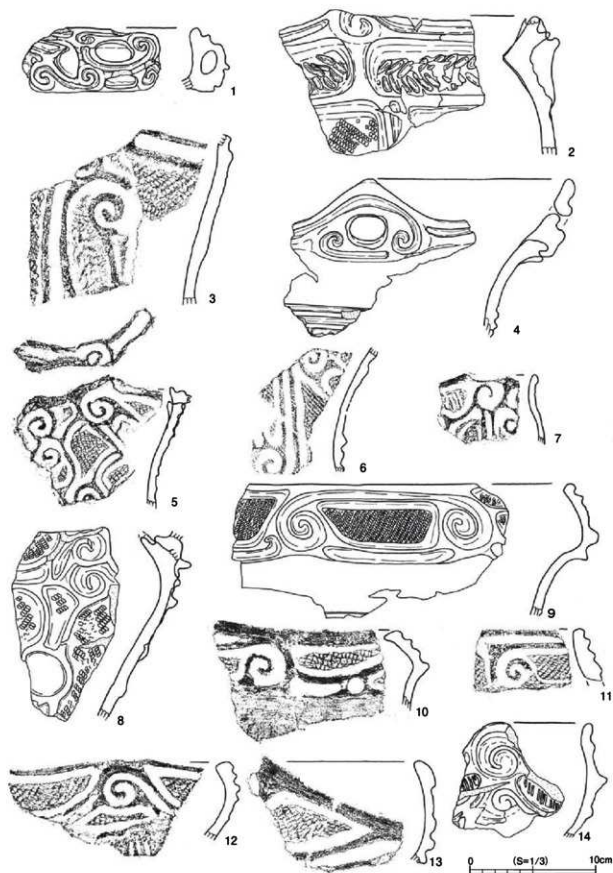


図 125 遺構外出土縄文土器(3)

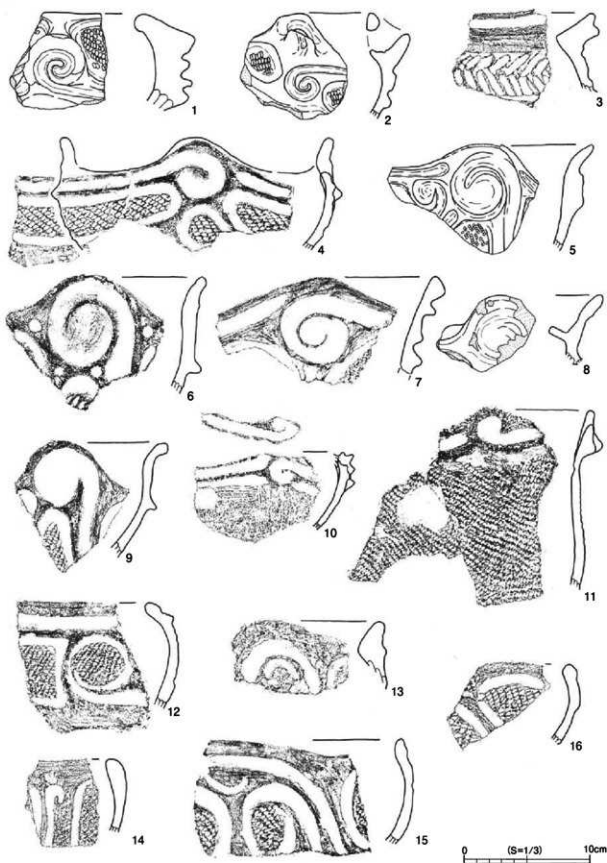


图 126 遺構外出土縄文土器(4)

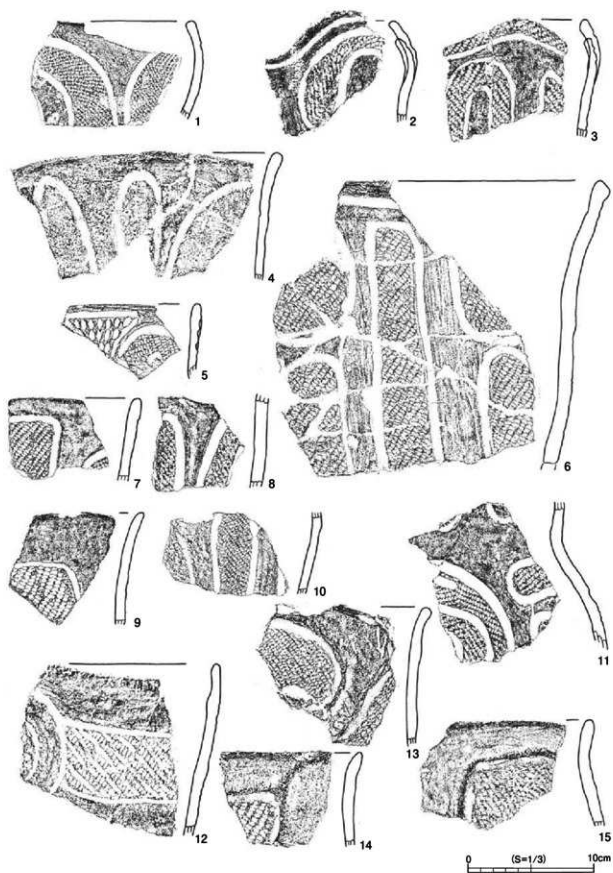


図127 遺構外出土縄文土器(5)

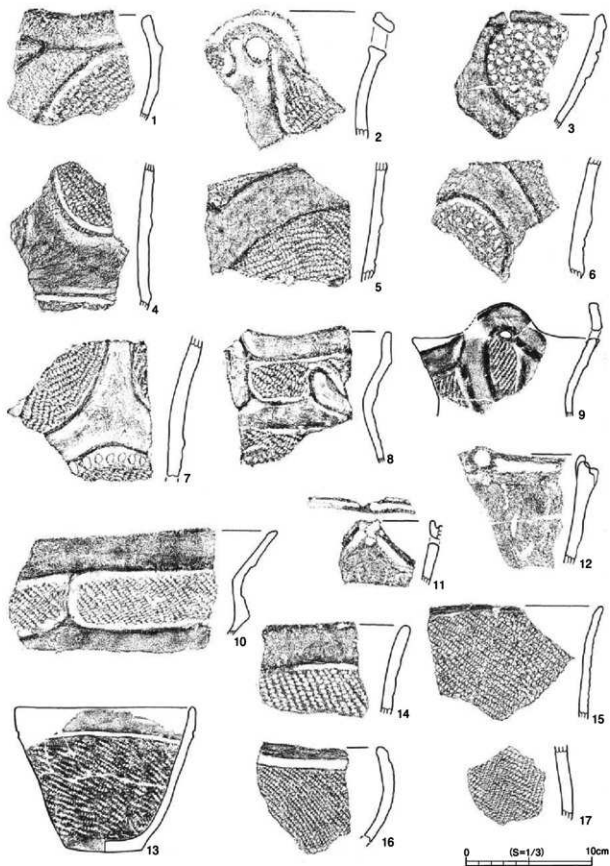


図128 遺構外出土縄文土器(6)



図129 遺構外出土縄文土器(7)

## 第6項 土製品

## 土器片円盤(図130~132、図133-1~5)

133点と多数の出土がある。特に多量の土器の廃棄があったと考えられる6・9・13・18号堅穴住居跡からの出土が多い。また、墓坑の可能性が高い土坑I類からの出土も特徴的である(SK 2・6・7・9・19・55)。大きさは直径2~5cmが主体となり、3~4cmが半数を占める。周縁部を研磨しているものとしていないものが認められる。

## その他(図133-6・7)

6は球状の土製品で全体にナデ調整されている。7が土偶の脚部で外面に1条の沈線が施される。

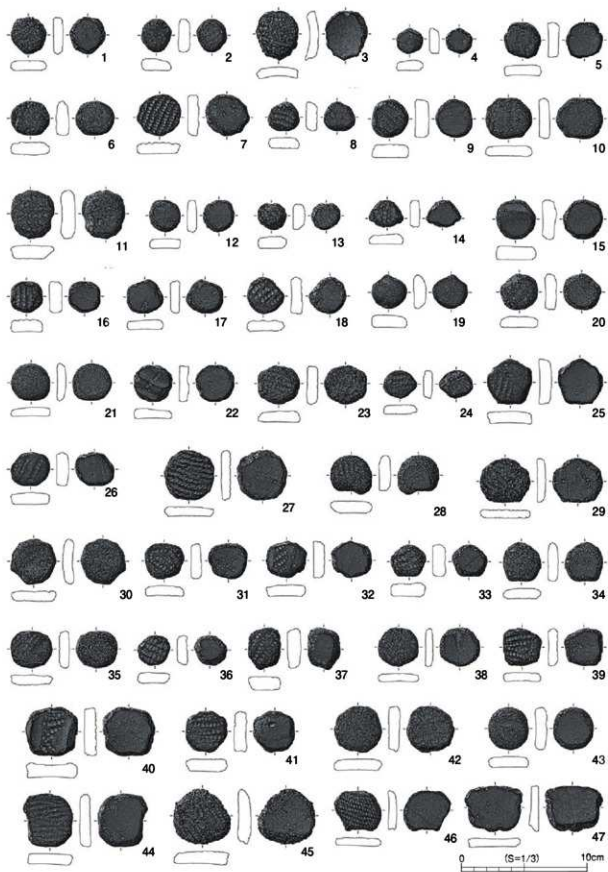


図130 土製品図面(1)



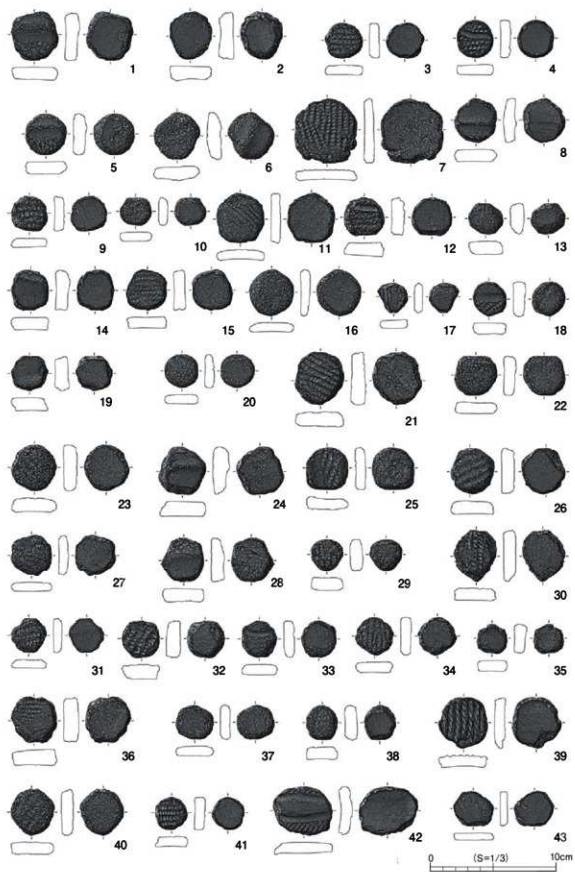


図 131 土製品図面(2)

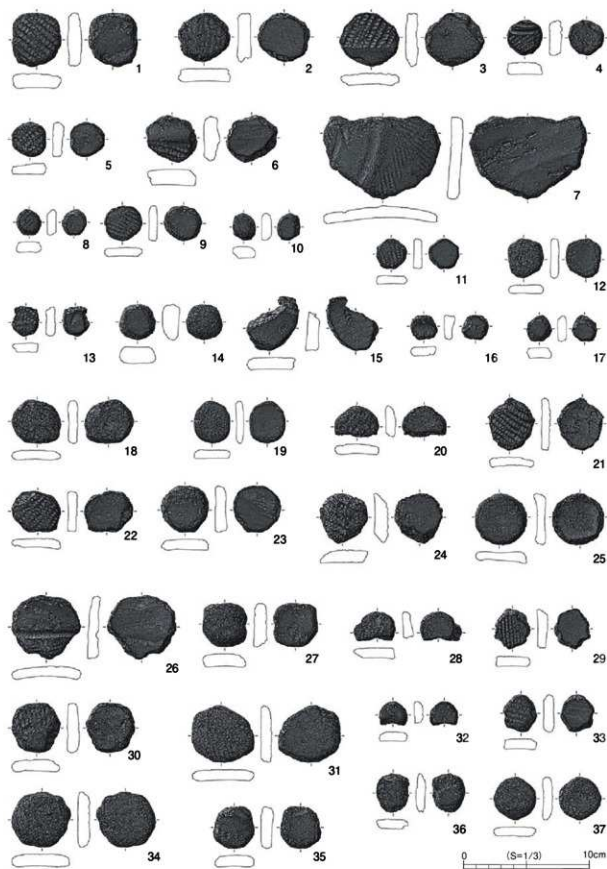


図132 土製品図面(3)

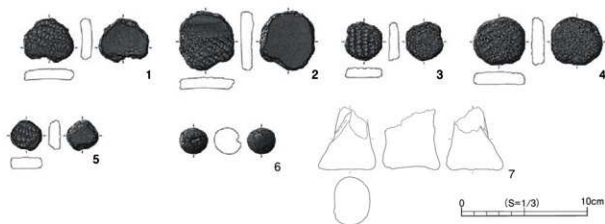


図133 土製品図面(4)

## 第7項 石器・石製品

石器・石製品は89点を図示した。本調査地点では縄文・弥生時代の遺構は大木8b～10式期に限定され、遺構外の出土土器においても他の時期はほぼ出土していないので、これらの石器・石製品は遺構外出土も含めて当該期の所産と考えられる。遺構別では多量の土器の出土があった6・9・24号竪穴住居跡の出土が多く、土器の出土傾向と一致している(表4)。

## 石鏃・石鏃未製品(図134-1～18)

1～8は凹基無茎鏃である。1・2は長さ15mm以下の小型品である。1は厚さも2.4mmと薄い。2は身幅が広く、鏃形状を呈する。5～7・8は長さ30mm以下の中型品である。側縁は尖頭部から直線的に開く。4は長さ42mmを測る大型品である。側縁から先頭部にかけて直線的に開き、上部でくびれ緩やかに弧状を描く。

9は小型の尖基鏃、10・11は尖基または凹基鏃である。10・11は未製品の可能性もある。

12～18は未製品である。17・18は側縁に押圧剥離がみられ、石鏃以外の未製品の可能性がある。これらの石材は珪質頁岩・頁岩を主体とする(1～7等)。その他、鉄石英(8・14・15)、流紋岩(13・17)、黒曜石(11)がある。

## 嘴状石器(図134-19)

左右非対称で片側の側縁が弧状になることから嘴状石器とした。裏面は調整が側縁のみであるため、未製品である可能性もある。珪質頁岩製である。

## 石匙・石匙未製品(図135)

1～7は縦形石匙の製品、未製品である。石刃を素材とし、片面加工をとる。1・3のように側縁部のみ押圧剥離が見られる傾向がある。1～3は片側刃部が弧状となり先端が尖頭状となる。5は下端が幅広となり、短冊状を呈する。

8は自然面を残す横形石匙未製品である。上縁中央左側につまみ部創出の剥離がみられる。9・10は側縁に押圧剥離がみられ、石匙以外の未製品の可能性がある。石材は珪質頁岩・頁岩である。

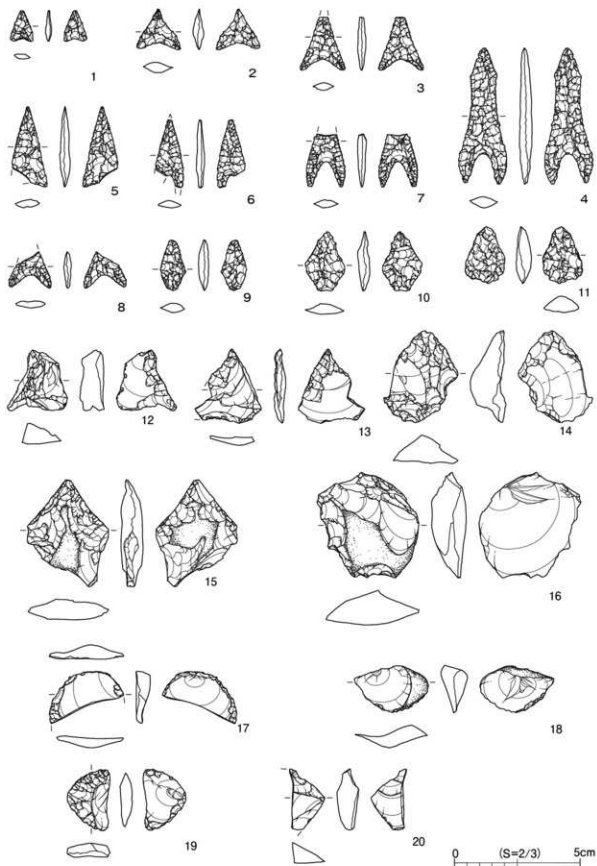


图134 石器(1)

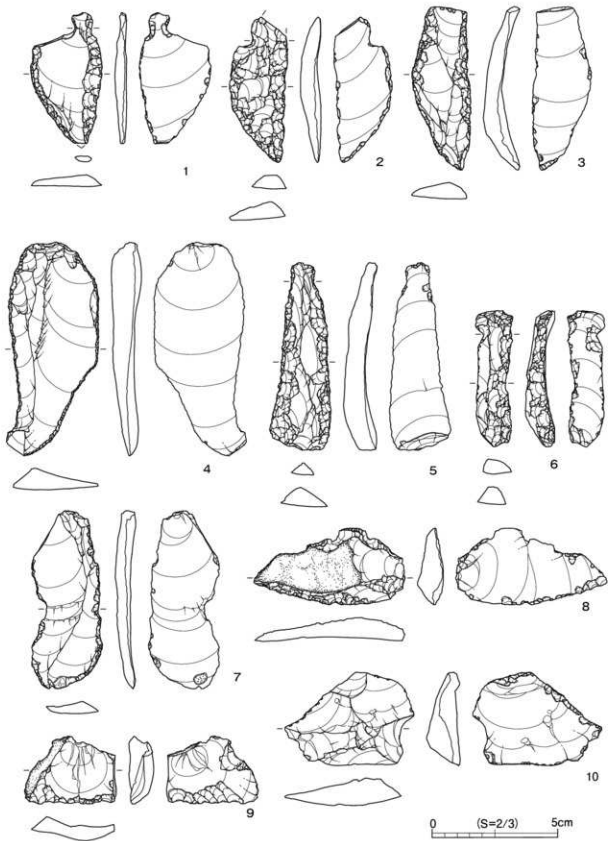


図135 石器(2)

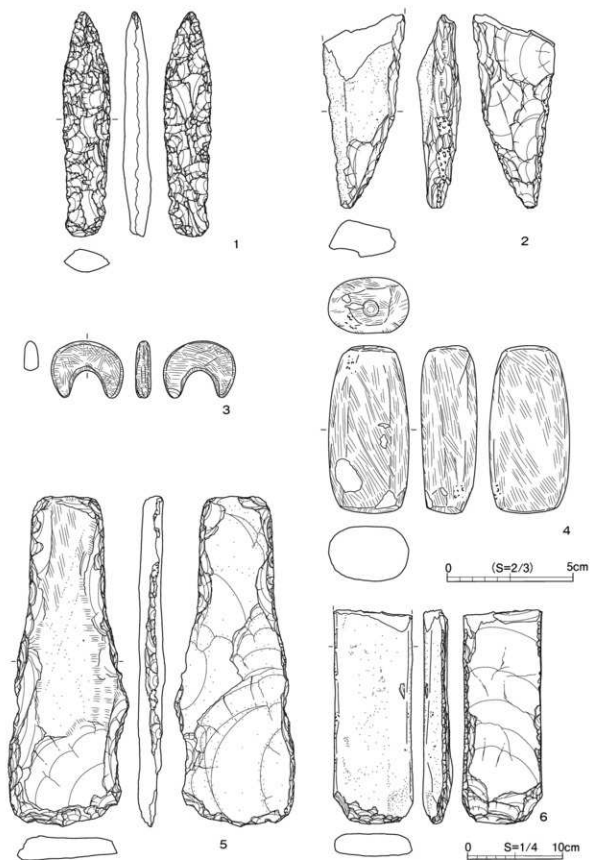


图 136 石器(3)

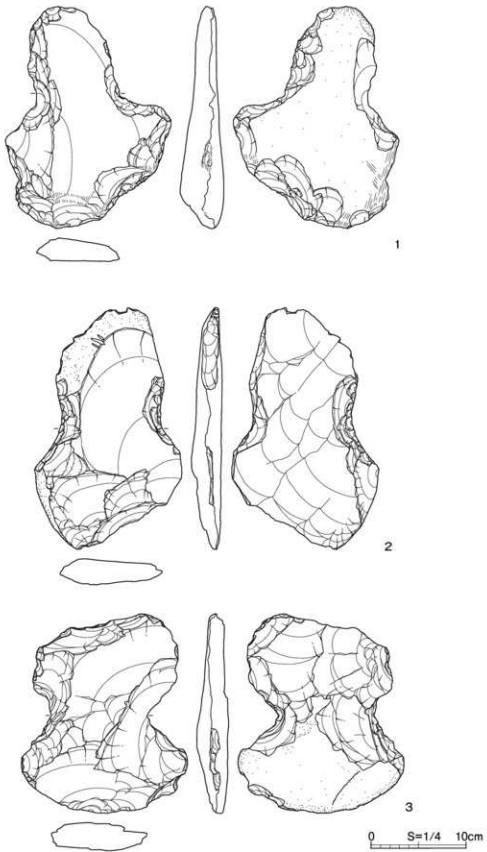


図137 石器(4)

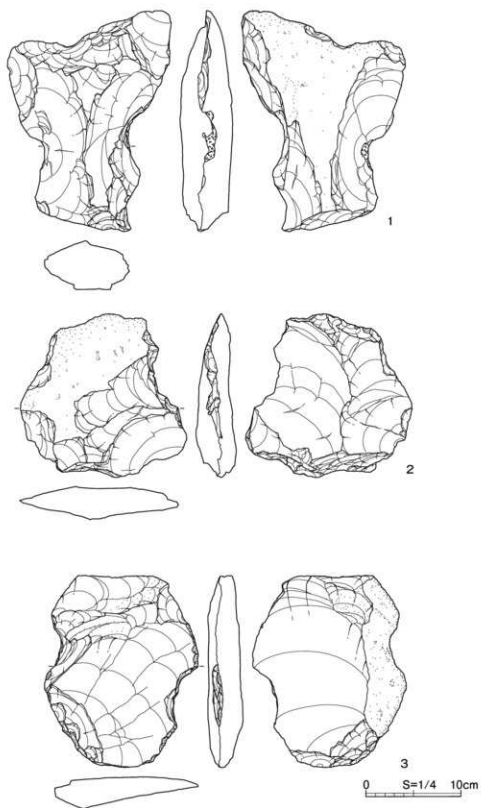


图138 石器(5)



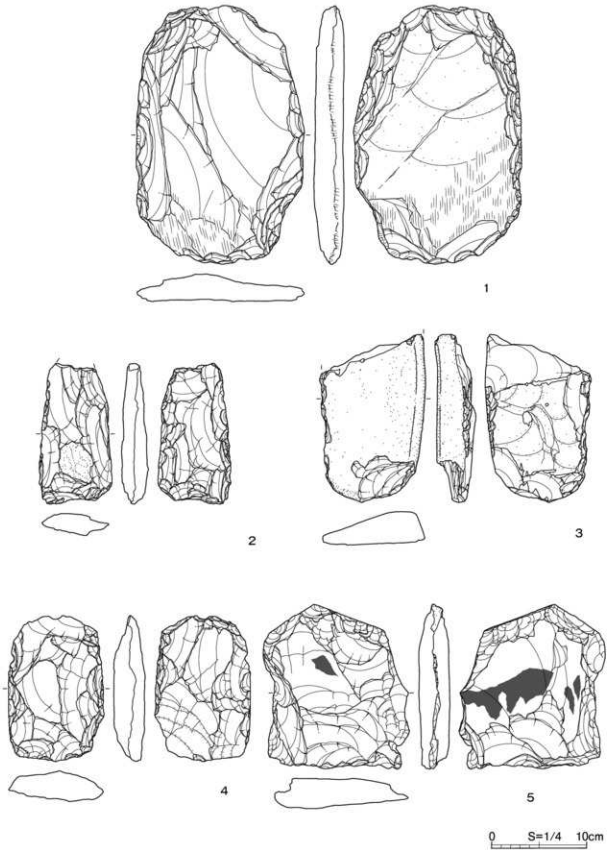


図139 石器(6)

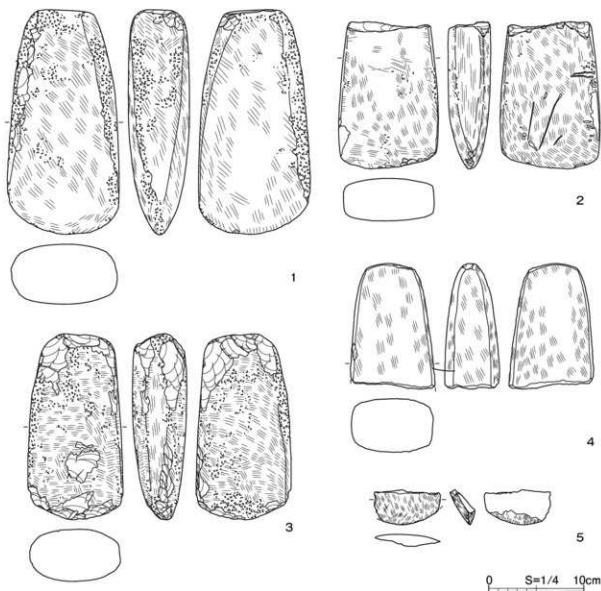


図140 石器(7)

石槍(図136-1)

1は細身の両面調整された石槍である。基部にやや抉り状の加工が認められる。珪質頁岩製である。

垂飾品(図136-3・4)

3は最大幅28mmを測る勾玉状の垂飾品である。蛇紋岩である。墓坑と考えられる土坑I類の67号土坑出土であり、副葬品と考えられる。4は垂飾未製品である。短冊状に磨き上げ、上下端は平坦に仕上げている。上端に穿孔途中の孔がある。凝灰岩製である。

打製石斧・篋状石器(図136-2・5・6、図137～139)

図136-2は尖頭状の形態で、自然面を残し、側縁は階段状剥離となる。泥岩製である。同図5・6は短冊状の形態を呈する。両者とも自然面を残す。5はやや撥型となり、上端は細身となる。粘板岩製である。

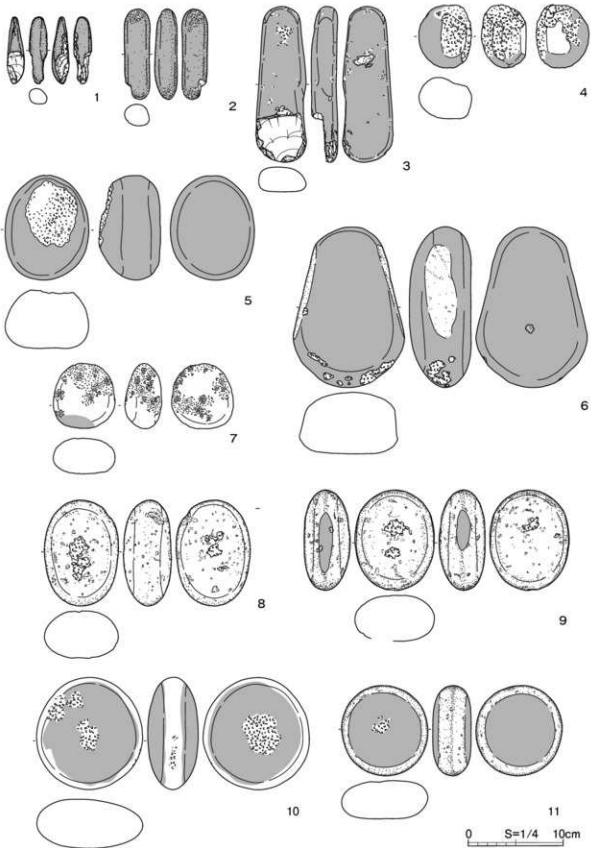


図141 石器(8)

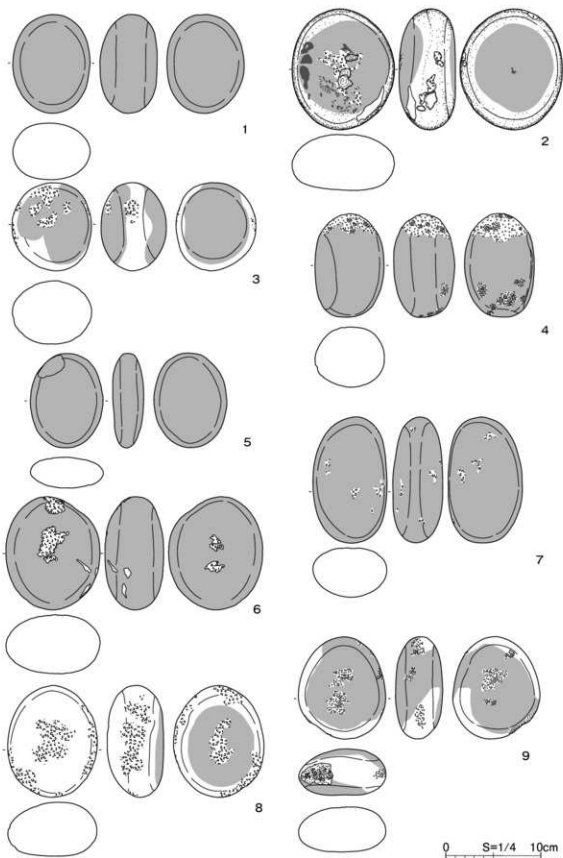


図142 石器(9)

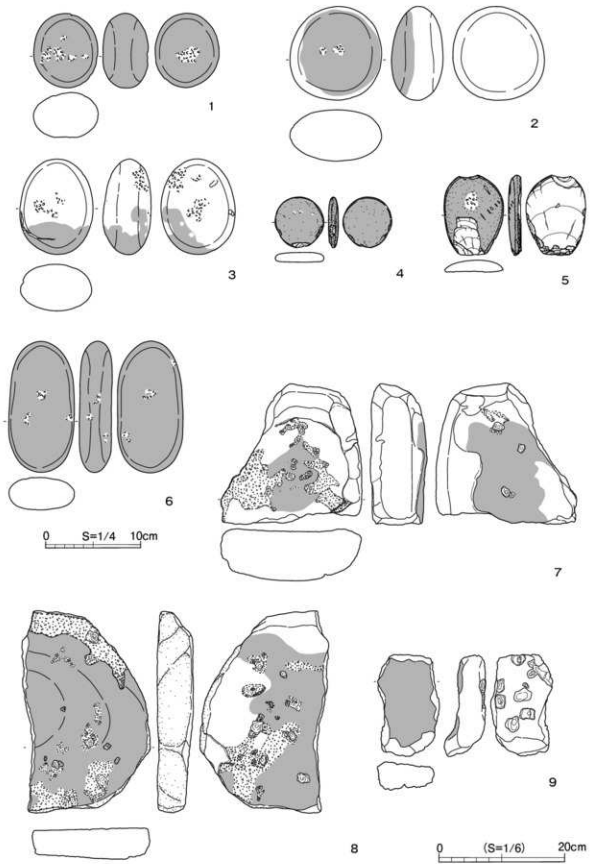


図143 石器(10)

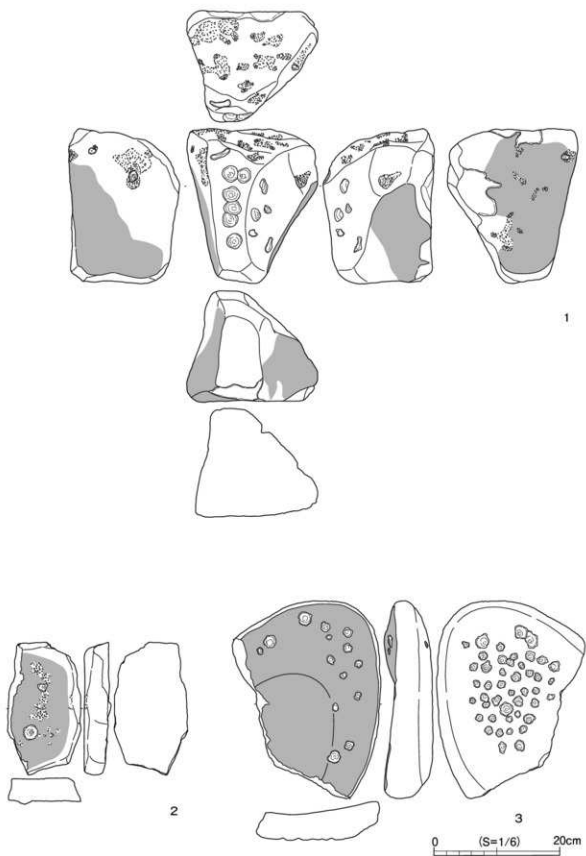


图144 石器(11)

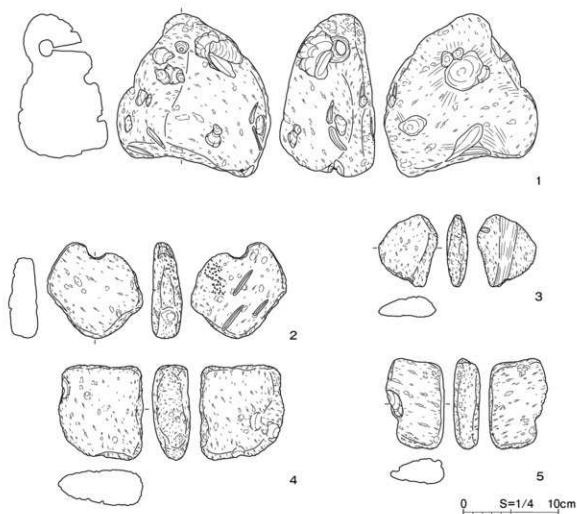


図145 石器(12)

図137・138に図示したのは分銅形の打製石斧であり、すべて粘板岩製である。上部が袂り部から細身になるもの(図137-1・2)と広がるもの(図137-3、図138-1)がある。

図139は寛状石器と分類したものを図示した。側縁は両面ともに水平回転にした剥離が施される。身幅の広く、大形のもの(図139-1)、短冊状のもの(同図139-2)などの形態差がある。同図3は自然面を残し、未製品の可能性がある。同図5は両面に付着物がある。すべて粘板岩製である。

#### 磨製石斧(図140)

1～5は定角式磨製石斧である。3は剥離面を残し、未製品の可能性がある。1・2・4が安山岩製、3が閃緑岩製、5が流紋岩製である。

#### 磨石・敲石(図141・142、図143-1～6)

24点出土している。石材は花崗岩、閃緑岩、安山岩、凝灰岩、粘板岩などがあり、在地の石材を利用している。図143-5は上下端に加工がみられ、石錘の転用であった可能性がある。

表4 石器・石製品出土位置集計表

遺構	合計	石鏃	石鏃 未製品	石匙	石匙 未製品	石匙? 未製品	塊状 石製品	石槍	打製石斧 ・ 槌状石器	磨製石斧	磨物品・ 磨物 未製品	石皿 ・ 凹石	磨石 ・ 敲石	浮子
S15	1	1												
S16	12	3	1		2			1					3	2
S19	13			1						1		1	9	1
S110	1											1		
S111	5								4					
S112	1											1		
S113	8				1				2		1	2	2	
S114	1												1	
S115	1					1								
S117	1												1	
S118	5	3							1					1
S124	9									1		1	7	
S128	2			1						1				
1・2号伊藤	1								1					
SK6	2	1							1					
SK7	1		1											
SK12	1									1				
SK19	1		1											
SK64	1					1								
SK67	1										1			
S11	1	1												
S14	1						1							
SB1	1								1					
LⅡ	1		1											
LⅢ	5								2	1			2	
LⅣ	10	1	3	1	1				2				1	1
一掃	1	1												
合計	88	11	7	4	4	2	1	1		5	2	6	26	5

## 石皿・凹石(図143-7~9、図144)

両面を利用しているものが多く、片面は石皿、片面は凹石として利用しているものがある(図143-9、図143-3)。図144-1は不定形の大形品で多面を利用している。同図-3は24号竪穴住居跡複式炉の構築材として転用されていた。図143-9、図144-2は被熱痕跡が認められる。

## 浮子(図145)

すべて軽石製である。1は横位の穿孔がある。2は上端に抉り、3は溝状の使用痕跡が認められる。4・5は明確な整形痕は確認できないが、全体に摩滅しており使用品と考えられる。



## 第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物

## 第1項 竪穴住居跡

## 1号竪穴住居跡(図146)

1号竪穴住居跡は、調査区南東部付近H・I-7・8区で確認した。標高20.1mの平坦な段丘面に位置し、LⅢ上面で黒色土の方形のプランとして確認した。他の重複する遺構より新しい。

竪穴住居跡内の堆積土は2層に分層できる。1層は焼土粒子、黄褐色粒子、砂粒を微量に含む黒色土で均一に堆積している。2層はLⅣの砂質黄褐色粒子を多く含む黒褐色土である。平面形と規模を見ると、四隅がやや丸みを帯びる方形を呈し、長軸の主軸方位は $N-6^{\circ}-W$ を示す。

竪穴住居跡の上端で計測した場合の規模は東西軸3.3m、南北軸3.2mを計測する。

床面はほぼ平坦で、中央部が硬化している。竪穴住居跡の壁はほぼ直立しており、上端から下端までの高さは16～20cmを測る。壁周溝やカマド等の施設は伴わない。カマド構築材と思われる粘土塊が北西部に確認できたが、煙道部の掘り込みが認められなかったことからカマドは存在してい



図146 1号竪穴住居跡

なかったものと思われる。貼床を剥がして精査してみたが柱穴の痕跡は確認できなかった。竪穴住居跡から出土した遺物には、土師器、須恵器や混入した縄文土器、石器などが覆土中から散在した状態で出土している。また、南東部の床面からは土師器坏(図157-1)が正位の状態でも出土している。

1号竪穴住居跡は、1辺3.5mほどの隅丸方形を呈する竪穴住居跡である。時期は床面から出土した土師器坏の形態から8世紀後半と考えられる。

## 2号竪穴住居跡(図147)

2号竪穴住居跡は、調査区の南東隅J-7・8区にあり、LⅢ層上面で竪穴住居跡の一部分を確認した。確認された竪穴住居跡は全体の約1/5程度で、残りの部分は調査区外に延びている。検出面の標高は19.9mを計測する。22号竪穴住居を掘り込んでいる。

平面形は隅丸方形を呈し、計測できる南北幅は5.1m、東西幅は1.4mを測る。床面床面はほぼ平坦で硬化面および貼床等は確認されていない。周壁壁面は床面から直立きみに立ち上がり、最も良く残る部分で28cmほどの高さである。周溝やカマド等の施設は確認されていない。遺構の大半は調査区外に位置することから、当住居に伴うカマドも調査区外に位置すると考えられる。床面の精査を行ったが、主柱穴と見られる柱穴は確認されなかった。遺物は竪穴住居跡の掘り下げ時に住居埋土から土師器片をわずかに出土した。

2号竪穴住居跡は一辺5m程度を計測する方形の竪穴住居と考えられる。遺構の大部分は調査区外のため全体の形状は定かではない。遺構の時期は、埋土に非ロクロ成形の土師器片を含み、ロクロ成形のものを含まないことから8～9世紀の所産と考えられる。

## 3号竪穴住居跡(図148)

3号竪穴住居跡は調査区の東端I-J-5・6区で、方形の竪穴住居跡のプランをLⅢ層上面で確認した。確認された竪穴住居跡は全体の約1/3程度で残りは調査区外に延びる。検出面の標高は20.0mを計測する。5号掘立柱建物との前後関係は不明である。

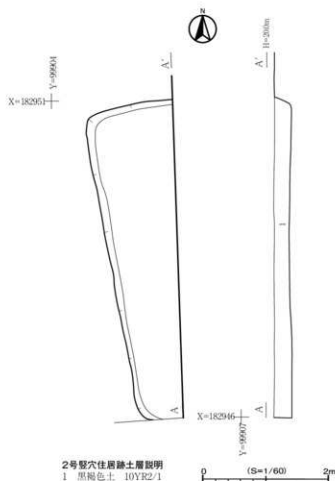


図147 2号竪穴住居跡

竪穴住居跡の床面は粗掘段階の凹凸面を埋めるように、暗褐色土および黒褐色土が堆積している状況を確認した。住居底の凹凸面をならし平坦にしている状況から、貼床の下部痕跡と考えられる。

竪穴住居跡の平面形は隅丸方形を呈し、規模は計測できる範囲で南北幅4.1m、東西幅1.9mであった。床面底の凹凸面を埋めるように堆積土が確認され、床面上部は大きく削平され詳細な状況は判然としない。床面は粘土により平坦な面を形成していた可能性が高い。

竪穴住居跡の壁面は床面から直立するように立ち上がる。最も残存する部分で高さ12cmを測る。周溝床面の精査を行ったが、壁周溝やカマ

ド等の施設は確認されなかった。住居の大部分は調査区外に位置しており、カマドも調査区外に位置する可能性がある。床面の精査では柱穴は確認されなかったため、主柱穴の位置は不明である。遺物出土状況住居の掘り下げ時に埋土からロクロ成形の土師器小片が出土した程度である。

3号竪穴住居跡は、一辺4m前後を計測する方形の竪穴住居と考えられる。住居跡は調査区東端で確認され、遺構の大半が調査区外のため全容は定かではない。遺構の時期は、埋土にロクロ成形の土師器片を含み、9世紀と考えられる。

#### 4号竪穴住居跡(図149・150)

4号竪穴住居跡は、調査区中央やや北よりのD・E・F-3・4・5区で、LIV層上面で方形のプランとして確認した。検出面の標高は198mである。他の遺構との重複関係では縄文時代のピットとの重複が見られるだけである。

竪穴住居跡の上面は大幅に削平されており、確認された埋土は検出面から10cm程度と全体的には残りが悪い。竪穴住居跡の堆積土は、にぶい黄褐色土(7層)であるが、貼床構築層の可能性もある。

平面形は隅丸方形を呈し、南北幅7.6m、東西幅7.2mを計測する。基本的に床面は平坦であるが、若干北側に向かって緩やかに下がる状況を確認した。床面の一部には硬化面が確認されることから、床面に施された貼床の一部が残存した可能性がある。

竪穴住居跡の壁上部は大幅に削平されるため壁面は全体的に残りが悪く、堆積土が最も残存する



図148 3号竪穴住居跡

#### 3号竪穴住居跡土層説明

- 1 暗褐色土 10YR3/4
- 2 暗褐色土 10YR2/4(黄褐色ロームを含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/2
- 4 黒褐色土 10YR3/1

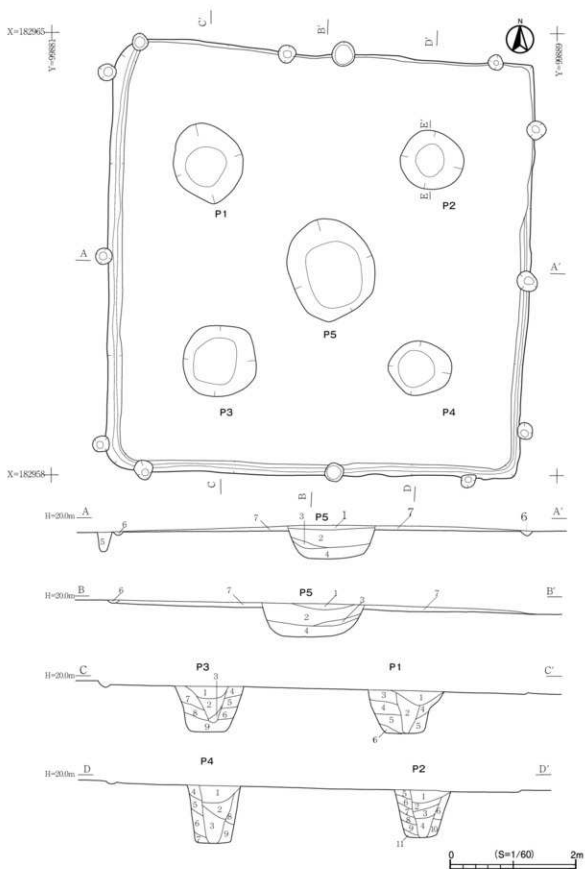
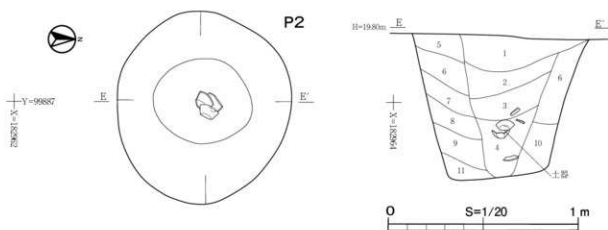


图 149 4号竖穴住居跡(1)

部分で計測した場合8cm程度である。特に壁際は残りが悪く、壁面の立ち上がりの状況が観察できる部分は殆ど無い状況であった。

竪穴住居跡に伴う壁周溝は、竪穴住居跡の西壁および南壁、東壁南半の一部で部分的に確認した。その他の部分は削平により失われている。壁周溝は幅15cm前後、床面からの深さ10cmを計測し、埋土は暗灰黄色土である。4号竪穴住居跡では明確なカマドを確認することはできなかったが、住居跡北端の中央付近には埋土の掘削時に焼土が部分的に確認された場所があり、竪穴住居跡北側にカマドを有していた可能性がある。

主柱穴は、竪穴住居跡床面の4箇所で柱掘方を確認した。これらの柱掘方は規模・配置等から見て4号竪穴住居跡の主柱穴と考えて問題ない。4基の主柱穴の中央には中央穴とした掘り込みを1基確認している。P1は、直径1.2m、深さ0.7m、埋土は黒褐色土および黄褐色土等の互層状の堆積となり、6層に細分された。柱掘方内の柱は抜き取られている。柱の抜き取痕跡は柱穴のほぼ中心に位置し、直径30cmを計測し、埋土は自然堆積によるもので炭化物を含む黒褐色土であった。P2は、直径1m、深さ0.76mを計測する柱掘方である。柱掘方の埋土は、褐灰色土と黄褐色土等の互層堆積を示し、最終的には11層に細分をした。柱掘方内の柱は抜き取られている。柱抜き取痕跡は、柱掘方のほぼ中心にあり直径40cmを計測し、柱抜き取痕跡内の堆積土は黒褐色土の自然堆積で



## 4号竪穴住居跡土層説明

- 1 褐色土 10Y4/1 (P5)
- 2 黒褐色土 10YR3/1 (P5)
- 3 におい黄褐色土 10YR5/4 (P5)
- 4 明黄褐色土 10YR6/6 (P5)
- 5 灰黄褐色土 10YR4/2
- 6 暗灰黄色土 25Y4/2
- 7 におい黄褐色土 10Y5/3

## 4号竪穴住居跡P1土層説明

- 1 黒褐色土 25Y3/1 (炭化物を含む)
- 2 黒褐色土 25Y3/1
- 3 黒褐色土 25Y3/2
- 4 黒褐色土 25Y3/1 (埴山を含む)
- 5 黄色土 25Y7/8
- 6 明黄褐色土 25Y6/8

## 4号竪穴住居跡P2土層説明

- 1 黒褐色土 25Y3/2
- 2 黒褐色土 25Y3/1
- 3 黒褐色土 25Y3/2
- 4 灰黄褐色土 10YR5/2
- 5 におい黄褐色土 10YR7/4
- 6 明黄褐色土 10YR6/6
- 7 褐灰色土 10YR4/1
- 8 黄褐色土 10YR5/8
- 9 黒褐色土 10YR3/1
- 10 黒褐色土 0YR3/2
- 11 褐灰色土 10YR4/1

## 4号v住居跡P3土層説明

- 1 黒褐色土 10YR3/1
- 2 暗褐色土 10YR3/3
- 3 褐色土 10YR4/4
- 4 褐灰色土 10YR4/1
- 5 灰黄褐色土 10YR4/2
- 6 黄褐色土 10YR5/6
- 7 褐色土 10YR4/4
- 8 黄褐色土 10YR5/6
- 9 明黄褐色土 10YR6/6

## 4号竪穴住居跡P4土層説明

- 1 黒褐色土 10YR3/1
- 2 灰黄褐色土 10YR4/2
- 3 におい黄褐色土 10YR4/3
- 4 黄褐色土 10YR5/6
- 5 褐灰色土 10YR4/1
- 6 黄褐色土 10YR5/6
- 7 黒褐色土 10YR3/1
- 8 明黄褐色土 10YR6/8
- 9 黄褐色土 10YR5/8

図150 4号竪穴住居跡(2)

ある。抜取痕跡の埋土からは土師器坏(図157-8・10)が重なる状態で出土した。おそらくは柱を抜き取った後に廃棄されたものであろう。建物廃棄の際の祭祀行為の可能性もある。P3は、直径0.8m、深さ0.9mを計測する柱掘方である。柱掘方の堆積土は褐灰色土と黄褐色土の互層堆積状況を示し、最終的には9層に細分した。柱掘方内の柱は抜き取られている。柱抜取痕跡は柱掘方のほぼ中央にあり、直径40cmを計測する。柱抜取痕跡に堆積した埋土は暗褐色土と褐色土の自然堆積である。P4は、直径1.1m、深さ0.7mを計測する柱掘方である。柱掘方の埋土は褐灰色土と黄褐色土の互層堆積を示し、最終的に8層に分層した。柱掘方の中央には直径約40cmの柱抜取痕跡を確認した。柱抜取痕跡の堆積土は黒褐色土と灰黄褐色土の自然堆積土である。

4号竪穴住居跡の中央にはピット1基(P5)を確認している。ほぼ主柱穴の交点にあたる位置にあり、長軸1.6m、短軸1.4mを測る大きなピットであった。P5は住居覆土を掘り込んでおり、7層は貼床構築層の一部である可能性もあり、本住居に伴うものと考えられる。ピット内の埋土は4層に分かれ、上から褐色土、黒褐色土、にぶい黄褐色土、明黄褐色土と堆積しており、堆積土には黄褐色ロームを含む。このピットからは柱痕跡や柱抜取痕跡などは確認されず、性格は不明である。

その他の施設では、竪穴住居跡の壁面に添うように壁柱穴を13基確認した。壁柱穴は、北壁側に4基、東・西・南壁側に3基配置されており、竪穴住居跡の各コーナー部分では角を扶むように2基1対となるように配置されている。壁柱穴の大きさは、直径20cm前後、深さ30cm前後で、堆積土は灰黄褐色土を主体とする。壁柱穴からは、少量の土器片が出土している。

遺物の出土状況は、竪穴住居跡の上部が大幅に削平されているため埋土の残りが悪い。土師器杯や須恵器の破片などが出土した。

P2からは、土師器杯や須恵器甕の小片が重なり合う状態で出土している。出土層位も、柱の抜取痕跡の中からの出土であることから、竪穴住居跡を廃棄する際に意図的に残されたものと考えられる。その他には竪穴住居跡の堆積土から土師器杯および須恵器高坏、甕などが出土している。

4号竪穴住居跡は、調査区中央付近に位置する一辺約7.5mの大型の竪穴住居跡である。竪穴住居跡には4本の主柱穴と中心部に掘られた直径1.6mのピットから構成され、部分的に壁周溝と壁柱穴を確認した。P2の柱掘方内の柱抜取痕跡から出土した土器群の特徴から9世紀後半の竪穴住居跡と考えられる。

### 23号竪穴住居跡(図151)

23号竪穴住居跡は、調査区南東付近F・G-8区の範囲で確認した。竪穴住居跡は、標高20.0mの平坦な段丘面に位置し、基本土層LⅢ上面で方形に分布する黒色土をもってプランを把握したが、竪穴住居跡の大部分は調査区外に延びているため、詳細な規模や構造等は不明な点が多い。他の遺構との重複関係では、1号掘立柱建物跡よりも古く、21号竪穴住居跡よりも新しい。

竪穴住居跡の堆積土は、にぶい黄褐色ブロックや粒子、白色粒子をわずかに含む黒色土で均一に堆積しているが人為的な堆積か自然堆積かは判断ができなかった。竪穴住居跡の大部分が調査区外に延びているため、詳細は不明であるが、確認された部分が竪穴住居跡の角となる部分であること

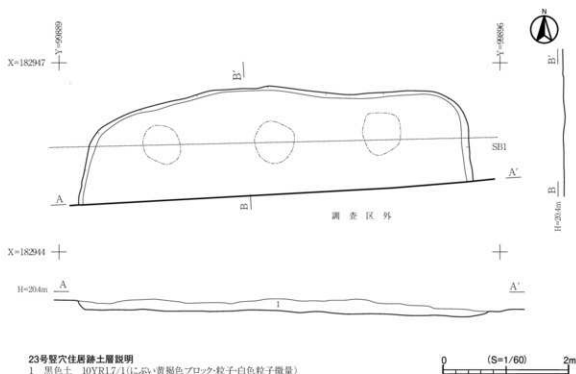


図151 23号竪穴住居跡

から基本的には方形を呈するものと思われる。計測できた範囲で主軸方位を示すと $N-1^{\circ}-W$ を指す。確認できた範囲で計測される規模は東西6.2m、南北軸1.7mである。

竪穴住居跡の床面面はほぼ平坦で、竪穴住居跡の壁は、床面から外傾して立ち上がり上端に達する。床面から上端までの高さは2～6cmを測る。その他、調査した範囲においては、壁周溝やカマド・柱掘方等の付帯施設は確認することはできなかった。出土遺物は土師器杯のほか混入した縄文土器や土器片製円盤がわずかに覆土中から出土している。

23号竪穴住居跡は、隅丸方形または隅丸長方形と想定され、カマドを有さない竪穴住居跡であった可能性が高い。竪穴住居跡の年代は、床面から出土した土師器杯から8世紀後半に比定できる。

## 第2項 掘立柱建物跡

### 1号掘立柱建物跡(図152)

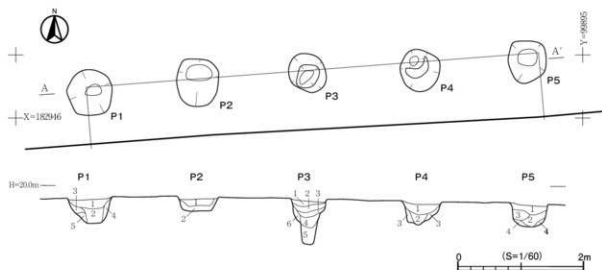
1号掘立柱建物跡は、調査区南部付近のE・F・G-8区の範囲で確認した掘立柱建物跡で、標高20.2mの平坦な段丘面に位置する。掘立柱建物跡は調査区際のLⅢ上面で東西方向に並ぶ柱掘方として検出した。柱掘方の北側では対応する柱穴が確認できなかったことから、調査区の南側へ広がる掘立柱建物跡と判断した。他の遺構との重複関係を示すと、23号竪穴住居跡よりも新しい。

1号掘立柱建物跡は、柱掘方列1列を確認しただけだが、柱間は4間であり、おそらくは建物主軸を東西に向けた側柱式掘立柱建物の可能性が高い。建物の主軸方向は $N-86^{\circ}-E$ を指す。柱間寸

法は、桁行北側柱列の西隅柱のP1から東隅柱のP5に向かって18m(6尺)+18m(6尺)+18m(6尺)+18m(6尺)の6尺等間で、総長は7.2mの24尺を計測し、柱筋の通りは極めて良い。

柱掘方の平面形は不整形円形または不整形楕円形で、長径65～75cm、短径58～72cmである。検出面から柱掘方底面までの深さは38～87cmで、掘方の断面形は逆台形またはU字形である。P2・P5以外では柱抜取痕跡が確認できる。

柱掘方内の堆積土からは土師器や須恵器の破片とともに縄文土器や打製石斧が出土している。1号掘立柱建物跡は、柱掘方が東西方向に5間の6尺等間に配置された側柱式掘立柱建物と考えられ、その他の柱列である北側、東側、西側は調査区内には展開しないことから調査区南側へ広がるものと考えられる。構築時期は8～9世紀と考えられる。



**1号掘立柱建物跡 P1 土層説明**

- 1 黒色土 25YR2/1 (黄色砂粒少量)
- 2 黒色土 25YR2/1 (全体的に3cm大の黄色砂ブロックを含む)
- 3 黒褐色土 25YR3/1 (全体的に褐色土ブロックを含む)
- 4 黒褐色土 10YR3/2 (黄色砂粒多量)
- 5 明黄褐色土 10YR7/6 (砂質土の中に褐色ブロックを含む)

**1号掘立柱建物跡 P2 土層説明**

- 1 黒色土 25YR2/1 (全体的に砂粒を含む)
- 2 褐色土 7.5YR4/1 (全体的に砂粒多量)

**1号掘立柱建物跡 P3 土層説明**

- 1 黒色土 25Y2/1 (全体的に砂粒多量)
- 2 黒色土 25Y2/1 (全体的に黄色砂粒を含む)
- 3 オリーブ黒色土 5Y3/2 (全体的に砂粒多量、3cm大の礫を含む)
- 4 灰オリーブ色土 5Y4/2 (全体的に3cm大の礫を含む)
- 5 オリーブ黒色土 5Y3/2 (全体的に礫を含む)
- 6 黒褐色土 25Y3/1 (黄褐色土を少量含む)

**1号掘立柱建物跡 P4 土層説明**

- 1 黒色土 25Y2/1 (全体的に砂粒多量)
- 2 黒色土 25Y2/1 (全体的に砂粒・3cm大の礫を含む)
- 3 暗灰黄色土 25Y4/2 (所々に黒色土を含む)

**1号掘立柱建物跡 P5 土層説明**

- 1 黒色土 25Y2/1
- 2 黒色土 25Y2/1 (所々に少量の黄褐色土を含む)
- 3 黒褐色土 25Y3/2 (黄褐色ブロック少量)
- 4 暗灰黄色土 25Y4/2 (所々に少量の黒色土を含む)

図 152 1号掘立柱建物跡



**2号掘立柱建物跡(図153)**

2号掘立柱建物跡は、調査区北西部付近のA・B-2・3・4区の範囲で確認した建物跡である。標高198mの平坦な段丘面に位置し、基本土層のLⅢ上面で長方形に並ぶ柱掘方を検出した。他の遺構との重複関係を見ると2号土坑よりも新しい。また、建物敷地としては3号掘立柱建物跡と重複している。直接的な柱掘方の重複は認められないことから新旧関係は不明である。

2号掘立柱建物跡は桁行3間×梁行2間の側柱式掘立柱建物跡で、桁行方向はN-9°-Eを指す南北棟の建物跡である。柱間寸法は、桁行の東側柱列の北隅柱から1.8m(6尺)、2.1m(7尺)、2.1m(7尺)の総長6.0m(20尺)、西側柱列で北隅柱から2.1m(7尺)、1.8m(6尺)、2.1m(7尺)の総長6.0m(20尺)である。梁行は北側柱列・南側柱列ともに2.1mの7尺等間で配置されている。柱筋はほぼ揃っており、柱筋の通りは良い。柱掘方は10基を確認した。

柱掘方の平面形は、不整形円形または不整楕円形で、長軸40～72cm、短軸36～70cmを計測する。検出面から柱掘方底面までの深さは13～38cmで、掘方の断面形はU字形を呈する。各柱掘方の堆積土は柱抜取後の自然堆積土である。柱掘方内からは土師器片のほかに混入した縄文土器が出土している。構築時期は8～9世紀と考えられる。

**3号掘立柱建物跡(図154)**

3号掘立柱建物跡は、調査区北西部付近のB・C-3・4区の範囲で確認した建物跡である。標高198mの平坦な段丘面に位置し、基本土層LⅢ上面で検出した。他の遺構との重複関係では、2号掘立柱建物跡と敷地の点で重複している。柱掘方同士の直接的な重複関係にはないため、両者の新旧関係は不明である。

3号掘立柱建物跡は、北東部が攪乱を受けているため柱痕跡を失っているが、桁行3間×梁行2間の側柱式掘立柱建物跡と推定される。桁行が示す方位はN-81°-Eとなり、東西棟の掘立柱建物跡に復元した。建物の規模は柱間寸法を残存する範囲で計測した場合、桁行は1.2m(4尺)+1.2m(4尺)の等間で配置され、梁行は1.8m(6尺)+1.5m(5尺)である。柱筋の通りは良い。

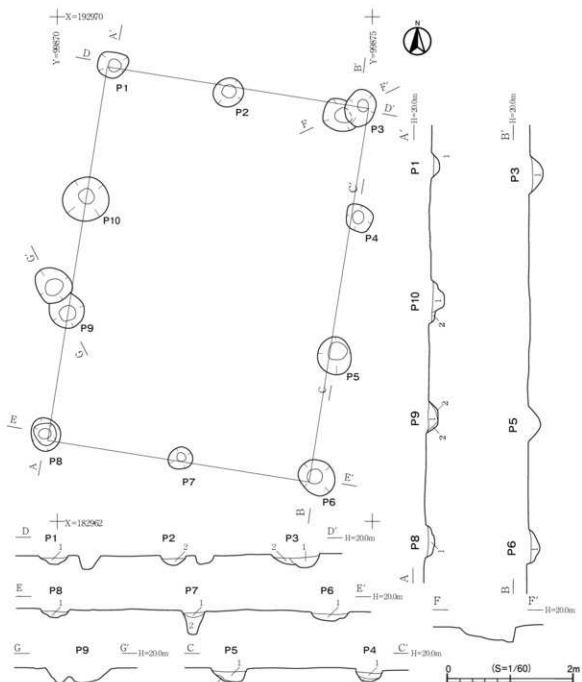
確認できた柱掘方は6基である。平面形は不整形円形または不整楕円形で、長軸41～54cm、短軸35～54cmを計測する。検出面から底面までの深さは21～47cmで、掘方の断面形は逆台形である。

柱掘方内の堆積土は多くて2層に細分される。いずれも柱抜取後の自然堆積土である。3号堅穴住居跡は、桁行3間×梁行2間の東西棟の側柱式掘立柱建物跡と推定される。構築時期は8～9世紀と考えられる。

**4号掘立柱建物跡(図155)**

4号掘立柱建物跡は、調査区北部付近のB・C・D-1・2・3区の範囲で確認した。掘立柱建物跡は、標高198mの平坦な段丘面のLⅢ上面で、長方形に並ぶ柱掘方を検出した。

掘立柱建物跡の規模と構造を見ると、桁行3間×梁行2間の側柱式掘立柱建物で、桁行方向はN-88°-Eを指す東西棟の建物である。柱間寸法は、桁行が1.5m(5尺)の等間で総長4.5m(15尺)、梁行が1.8m(6尺)の等間の総長3.6m(12尺)で均等に配置されている。柱筋の通りは良い。柱掘



**2号掘立柱建物跡 P 1 土層説明**

- 1 濃い黄褐色土 10YR5/3 (黒色土、褐色土を多量に含む)

**2号掘立柱建物跡 P 2 土層説明**

- 1 暗灰黄色土 2.5Y4/2 (黄色土を多量に含む)

**2号掘立柱建物跡 P 3 土層説明**

- 1 黒褐色土 2.5Y3/1 (黄色粘土ブロックを多量に含む)
- 2 オリブ褐色土 2.5Y4/4 (黄色粘土ブロックを多量に含む)

**2号掘立柱建物跡 P 4 土層説明**

- 1 黒褐色土 10YR3/1 (砂粒を含む) (全体に黄色土を多量に含む)
- 2 濃い黄褐色土 10YR6/4 (灰黄褐色土を多量に含む)

**2号掘立柱建物跡 P 5 土層説明**

- 1 黒褐色土 10YR3/2 (全体に黄色土を含む)
- 2 黒色土 10YR2/1 (全体に黄色土を少量含む)

**2号掘立柱建物跡 P 6 土層説明**

- 1 濃い黄褐色土 10YR4/3 (全体に黄色土を含む)

**2号掘立柱建物跡 P 7 土層説明**

- 1 黒褐色土 10YR3/1 (砂粒を含む)
- 2 灰黄褐色土 10YR4/2 (全体に多量の砂粒を含む)

**2号掘立柱建物跡 P 8 土層説明**

- 1 暗褐色土 10YR3/3 (黄色土を少量含む)

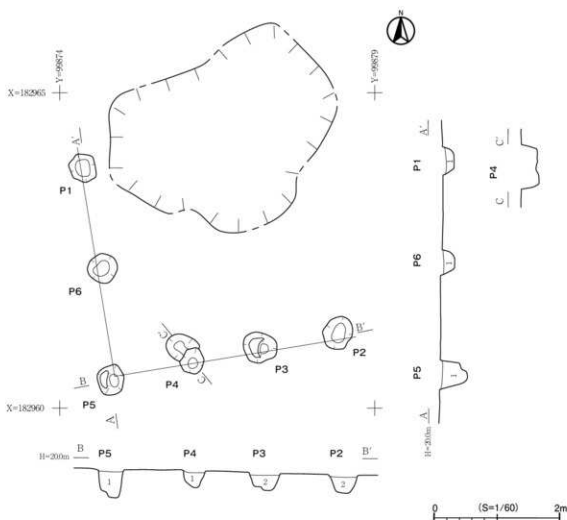
**2号掘立柱建物跡 P 9 土層説明**

- 1 灰黄褐色土 10YR4/2 (黄色土を少量含む)
- 2 濃い黄褐色土 10YR4/3 (全体に黄色土粒子を多量含む)

**2号掘立柱建物跡 P 10 土層説明**

- 1 黒褐色土 10YR3/2 (全体に黄褐色ブロックを多量含む)

図 153 2号掘立柱建物跡



3号掘立柱建物跡P1～6土層取明  
 1 黒色土 10YR2/1(下層に黄褐色ブロック・粒子を含む)  
 2 黒褐色土 10YR3/1(黄褐色ブロック・粒子を含む)

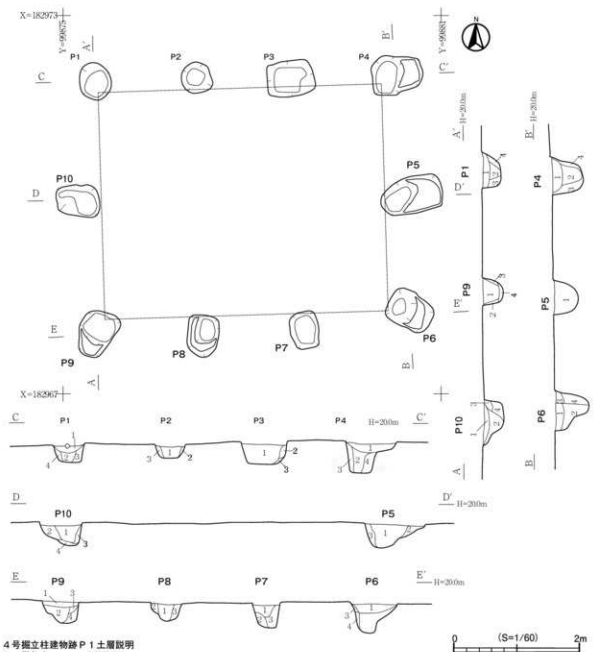
図154 3号掘立柱建物跡

方は10基を確認した。平面形はP1・2が楕円形・円形で、長軸60・52cm、短軸50・50cm、P3～10が不整長方形で、長軸60～100cm、短軸46～63cmである。検出面から柱掘方底面までの深さは27～59cmで、掘方の断面形は逆台形またはU字形である。P5以外の柱穴では、柱採取痕跡が確認できる。それ以外は柱掘方埋土である。

遺物は須恵器と縄文土器が出土しており、縄文土器は掘立柱建物跡の建設の際に埋土に混入したものである。

#### 5号掘立柱建物跡(図156)

5号掘立柱建物跡は、調査区東端付近のJ-5・6区、LⅢ層上面で南北方向に並ぶ柱掘方2基を検出したため、5号掘立柱建物跡とした。確認された柱掘方は、北からP1・2とし、南側に続く部分は調査区外に達しており不明である。検出面の標高は19.88mを測る。3号竪穴住居との前後関係は不明である。



4号掘立柱建物跡 P1 土層説明

- 1 黒色土 2.5YR3/1
- 2 黒褐色土 2.5Y3/2
- 3 にぶい褐色土 10YR4/3
- 4 暗褐色土 10YR3/3

4号掘立柱建物跡 P2 土層説明

- 1 黒褐色土 10YR3/1
- 2 暗褐色土 10YR3/3
- 3 暗褐色土 10YR3/4

4号掘立柱建物跡 P3 土層説明

- 1 黒褐色土 2.5YR3/1
- 2 黄褐色土 10YR5/6
- 3 黄褐色砂質土 10YR5/8

4号掘立柱建物跡 P4 土層説明

- 1 黒褐色土 10YR3/2
- 2 黒色土 10YR2/1
- 3 黄褐色土 10YR5/6
- 4 にぶい黄褐色土 10YR4/3

4号掘立柱建物跡 P5 土層説明

- 1 黒褐色土 10YR3/2
- 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3
- 3 暗褐色土 10YR3/3

4号掘立柱建物跡 P6 土層説明

- 1 黒褐色土 2.5YR3/1 (黄褐色ロームを含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/2
- 3 褐色土 10YR4/4
- 4 褐色土 10YR4/3

4号掘立柱建物跡 P7 土層説明

- 1 黒褐色土 10YR3/1
- 2 暗褐色土 10YR3/3
- 3 褐色土 10YR4/4

4号掘立柱建物跡 P8 土層説明

- 1 黒褐色土 10YR3/1
- 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3
- 3 褐色土 10YR4/4

4号掘立柱建物跡 P9 土層説明

- 1 黒褐色土 10YR3/1
- 2 黒褐色土 10YR3/2
- 3 褐色土 10YR4/4
- 4 褐色土 10YR4/6

4号掘立柱建物跡 P10 土層説明

- 1 黄灰色土 2.5Y4/1
- 2 黒色土 2.5Y2/1 (黄褐色ロームを含む)
- 3 褐色土 10YR4/4
- 4 にぶい黄褐色土 10YR4/3

図155 4号掘立柱建物跡

柱掘方の堆積土は、P1では、上から黒褐色土、暗褐色土の2層に分かれる。P2は黒褐色土の単層である。P1の平面形はいびつな楕円形で、南北幅0.7m、東西幅1.0mを計測し、検出面からの柱掘方の底面までの深さは32cmを測る。断面形は椀形である。P2はいびつな円形で、南北幅74cm、東西幅70cmを計測し、検出面からの柱掘方底面までの深さは12cmである。断面形は椀形であるが上部を大きく削平され殆ど残っていない。P1と2の間尺は1.3m(4.3尺)である。柱掘方の埋土からは土師器小片が出土した。

5号掘立柱建物跡は調査区の東端で確認された。確認されたのはP1・2の2基の柱掘方であり、南側に続く部分は調査区外となっており不明である。したがって遺構の詳細は不明であることから、厳密に掘立柱建物跡か欄列かを判断することは難しい。構築時期は8～9世紀と考えられる。

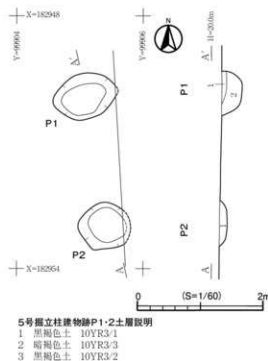


図156 5号掘立柱建物跡

### 第3項 土師器・須恵器

#### 1号竪穴住居跡(図157-1・2)

1は手持ちヘラ削りの丸底の坏である。床直の出土である。2も同様の坏である。8世紀後半に位置付けられる。

#### 2号竪穴住居跡(図157-3)

3は非ロクロ成形で底部手持ちヘラ削りの坏である。8世紀代と考えられる。

#### 3号竪穴住居跡(図157-4～7)

4～7はいずれもロクロ成形の坏である。7は体部下端に回転ヘラ削りが施される。

#### 4号竪穴住居跡(図157-9～15、17～20)

P2から埋納した状況で8・10が出土している。いずれも体部下端は回転ヘラ削りを施すロクロ成形の坏である。9・11は覆土中からの出土である。8・10に比較し、口径底径比が小さく、深みのあるロクロ成形の坏である。これらは9世紀後半の所産と考えられる。

17～20は須恵器の甕である。

#### 23号竪穴住居跡(図157-16)

底部に丸みを有し、手持ちヘラ削りの坏である。8世紀後半の所産と考えられる。

#### 5号掘立柱建物(図158-14)

14は須恵器甕である。外面にタタキ、内面に当て具痕を残す。

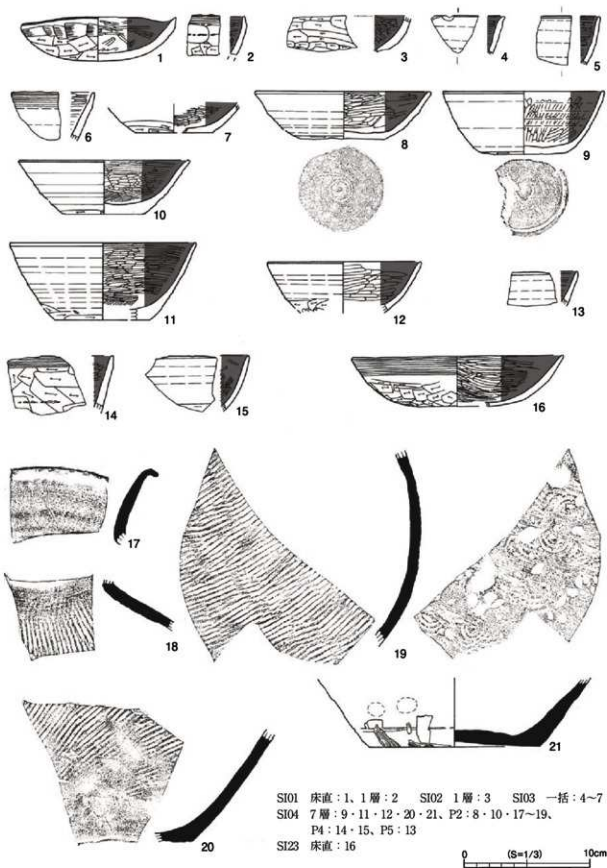


図157 奈良・平安時代出土土器(1)

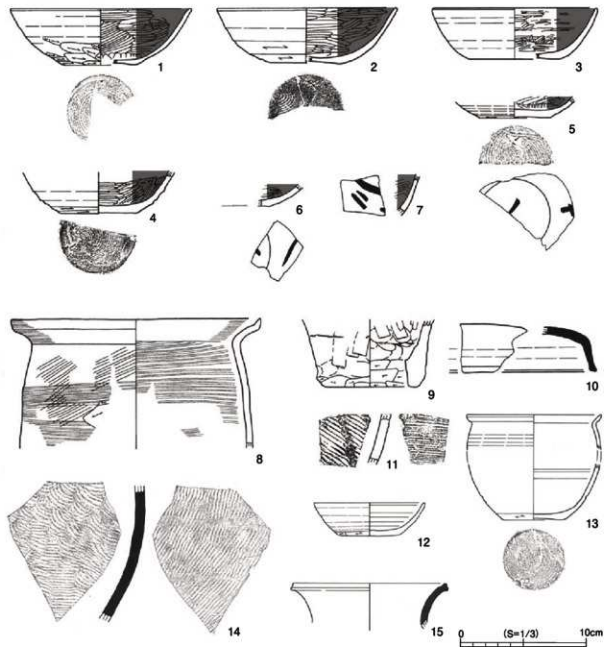


図158 奈良・平安時代出土土器(2)

## 遺構外出土土器(図158-1~13・15)

1~5はすべてロクロ成形の坏である。すべて底面は回転系切りである。1は体部下半が手持ちヘラ削り、2・4は回転ヘラ削りが施される。5~7は墨書が施される。12は内面黒色処理が施されないロクロ成形の坏である。底部はヘラ削りされる。

8はロクロ成形の甕で体部上半はタタキ後、ナア・刷毛目が認められる。13もロクロ成形の甕で底部は回転系切り痕を残す。

9は甕底部である。10は須恵器蓋、11は須恵器甕の体部破片、15は須恵器甕口縁である。

## 第IV章 まとめ

### 第1節 縄文時代の調査成果

東町遺跡の第2次調査は大木8b～10式期の遺構を多く検出した。この集落の状況を確認するため、複式炉埋設土器を中心に縄文土器の整理を行う。また、あわせて複式炉・住居構造等を検討した上で、集落の変遷過程を確認する。

#### 1. 縄文土器(図159～165)

縄文土器の検討の上で、複式炉、土器埋設遺構、竪穴住居跡床面直上、覆土土器廃棄集中層、土坑I類(墓坑)などの一定の限定した埋納、廃棄と考えられる土器群を抽出する。分類は大木8b式、大木9式、大木10式に分別する。なお、本章で記載する土器の番号は図159～164の記載番号を示す。

##### (1)大木8b式

大木8b式を図159に図示した。大木8b式が出土したこれらの遺構は、本調査では重複関係で最も古く位置付けられる。

器形はキャリパー形を呈するもの(1・2・6～9)、胴部中位が膨らみ、頸部から口縁にかけて緩やかに外反するもの(3・11)がある。キャリパー形では口縁部に渦巻文、剣先文をナデ調整隆線で描き、頸部に無文帯を有するものが多い(6～10)。体部文様は3本単位の未調整沈線で大ぶりの渦巻文を描くもの(11)や頸部下位を横位沈線で区画し、縦位の沈線を施すもの(3)、ナデ調整隆沈線により剣先文が付加する渦巻文・縦位麻手文を施すもの(6)がある。

##### (2)大木9式

大木9式を図160に図示した。器形はキャリパー形で口縁部が大きく内湾するもの(12・13・20・28等)と胴部中位が膨らみ、頸部から口縁にかけて外反するもの(15・22等)がある。キャリパー形の器形は、大木8b式に比較し、内湾する口縁が縦に広がる。

文様構成は口縁部と体部で2段に文様を配置するもの(12・16・28)、縦位の楕円または逆U字形の区画(16・17)、ステッキ状区画(21・22)がある。28は口縁部に双頭渦文を施す。区画沈線が多条となり、区画間に麻手状の垂下文を施すものも認められる(16)。26は2段の縦位区画間にH字状の隆線をアクセントとして配する。口縁に無文帯を有するものも散見される(15・19)

大木10式との分別の一つの基準として、体部下半に横位区画線がなく、区画文が下方に開放することがあげられる(20・26等)。SI29の複式炉の区画文が下方に開放しない27は、区画が開放する26と共存する。複式炉埋設土器に、型式差があることは、高木遺跡SI179・SI241a(福島県教育委員会2003a)などでも知られ、過渡的段階の事例と考える。



## (3)大木10式

大木10式は2ないしは3段階に大別されている(丹羽1981・1989、阿部2008、森2008等)。また、福島県域においては、調査報告書において、各遺跡における編年が示されており、さらに細分できることも指摘されている(鈴鹿1984、丸山1989、新井2003、大河原2003等)。これらの編年案は、変遷過程は概ね一致しているが、各段階の分別基準は共通の見解が得られていない。しかしながら、重複関係が多く、大木10式期で複数段階があると想定できる本遺跡の変遷過程を確認するには、大木10式において、一定の段階設定を行うことが必要である。

ついでは大木10式の検討手順として、重複・層序関係を時系列として整理した上で、出土状況から一定の共時性を確認できる土器群を抽出する。そして各土器群の特徴から、これまでの上記編年案を参考に、各土器群の段階を比定していくこととする。

この重複関係の時系列は複数の方向性を持つため、下線を付した遺構は、重複して記載するものである。なお、ここでの型式・段階記載は後述の段階設定による。

**重複関係①** SI6複式埴(大木10式古段階)→SI06-7~11層(大木10式古段階)→SI06-1~6層(大木10式古~中段階)、SI5複式埴(大木10式中段階)

**重複関係②** SI9b複式埴(大木10式古~中段階)→SI09a複式埴(大木10式中段階)→SI9ビット床直覆土(大木10式中段階)→SI5複式埴(大木10式中段階)

**重複関係③** SI12(大木9式)→SI11複式埴(大木10式中段階)→SI11覆土、SK54、SM1(大木10式中~新段階)

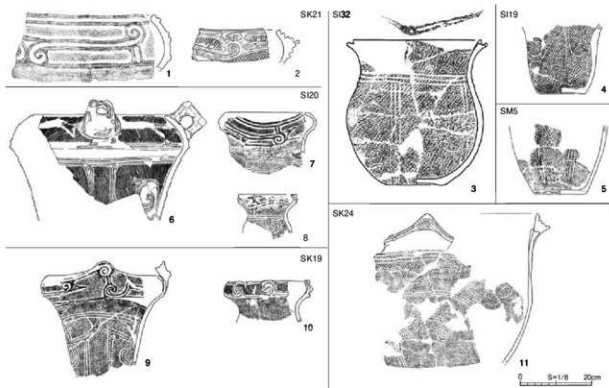


図159 縄文土器集成図(1)

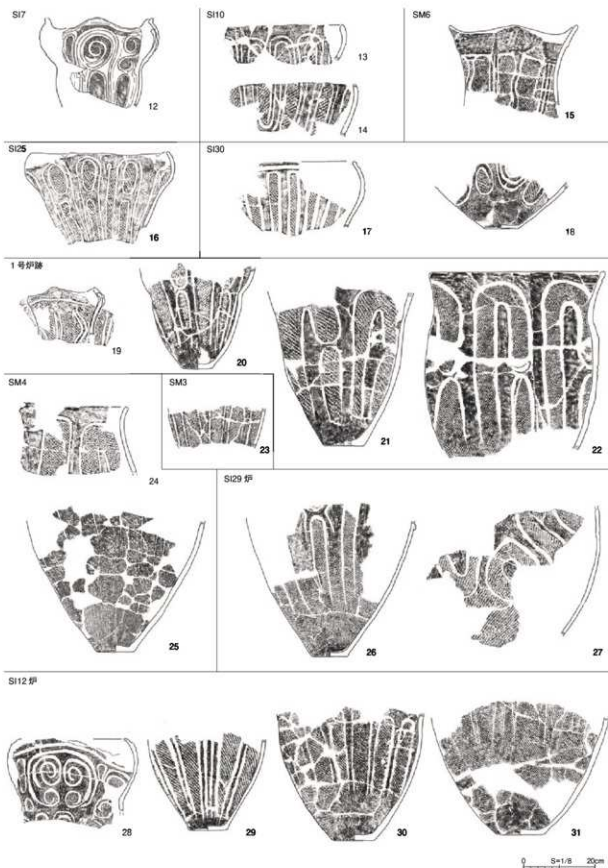


図160 縄文土器集成図(2)

**重複関係④** SI14 複式炬(大木10式古段階)→SI24 複式炬(大木10式古段階)→SI24 覆土(大木10式古段階)→SI 17、3号跡跡(大木10式新段階)

**重複関係⑤** SI29 複式炬(大木9式)→SI14 複式炬(大木10式古段階)→SI28→SI13 複式炬(大木10式古段階)→SI15 複式炬(大木10式中段階)、SI13 覆土(大木10中～新段階)

**重複関係⑥** SI18-3層(大木9式～大木10式古段階)→SI24 複式炬(大木10式古段階)→SI24 覆土(大木10式古段階)、SI18-1・2層(大木10式中～新段階)

次に一定の共時性が認められる土器群を抽出し、その特徴を述べる。

**土器群1** 重複関係④で最も古く、重複関係⑤で大木9式または大木9・10式の過渡的事例としたSI29複式炬を踏襲して構築されるSI14複式炬(32～34)を大木9式直後として設定する。口縁が内湾するもの(32・34)、文様を2段に配するもの(34)がある。体部下位に縄文施文が欠如するもの(32・33)が特徴的である。

**土器群3** 土器群1の次段階として重複関係④・⑤から、SI13複式炬(53)、SI28(39)、SI24複式炬・覆土(62～68)があげられる。53は縄文帯、無文帯の幅がほぼ同じで口縁が緩やかに外反し、体部下位に最大径を持つ。63・64も体部下位に最大径を持つ。62では口縁部を横位区画し、三角形の区画を有するアルファベット文、64は体部下位横位区画に波濤文が認められる。67・68もこれらと同様の特徴を持つ。

**土器群2** 土器群1と3では器形・文様の差異がある。その両者の特徴を持つ中間の土器群として、SI6複式炬・7～11層(37～44)、SK6(35・36)、SK7(47～51)があげられる。

器形として土器群1に近い内湾気味の口縁のもの(37)、口縁が外反し、体部下位まで最大径が下がらないもの(38・47)、土器群3にみられる最大径が体部下半まで下がるもの(48)がある。

文様は口縁部に明瞭な横位区画線を有しないもの(35・37・38・41・47・49)が多い。しかし、三角形の区画(41・49・50)、口縁の横位波状区画線(48)は土器群1にはない特徴である。

また、SI6複式炬(37・38)とSK7(47～51)では相違点もあり、SK7に口縁部の三角形区画(49・50)、口縁部の沈線区画(48)などの新出要素が目立つ。

**土器群4** 土器群3より新段階として位置付けられるのは、重複関係①・⑤からSI5複式炬(96～98)、SI15複式炬(86～89)である。97では体部下位の区画が未調整沈線である。88では体部下位の波濤文が横方向に延びる。また、横位の楕円区画がある(87・89)。

これらの特徴を指標とすると、同じ様相として重複関係②で本土器群のSI5複式炬に先行するSI9(69～84)があげられる。横方向に流れる波濤文(74)、横位楕円区画(71・78)がある。その他、無文帯が幅狭となり、無文帯で文様を描くもの(70・75)がある。73は文様帯区画が鱗状となり、無文帯の切り合いがある。しかし、口縁部に区画線がせり上がるものや明瞭な無文帯の切り合いが明確ではない。器形は、キャリパー形を呈するものはほぼ見られず、口縁が外反し、体部中位以下に最大径を持つもの(72等)は前段階より増加する。他に体部中位から口縁にむけてくびれを有さず内湾するものがある(71)。

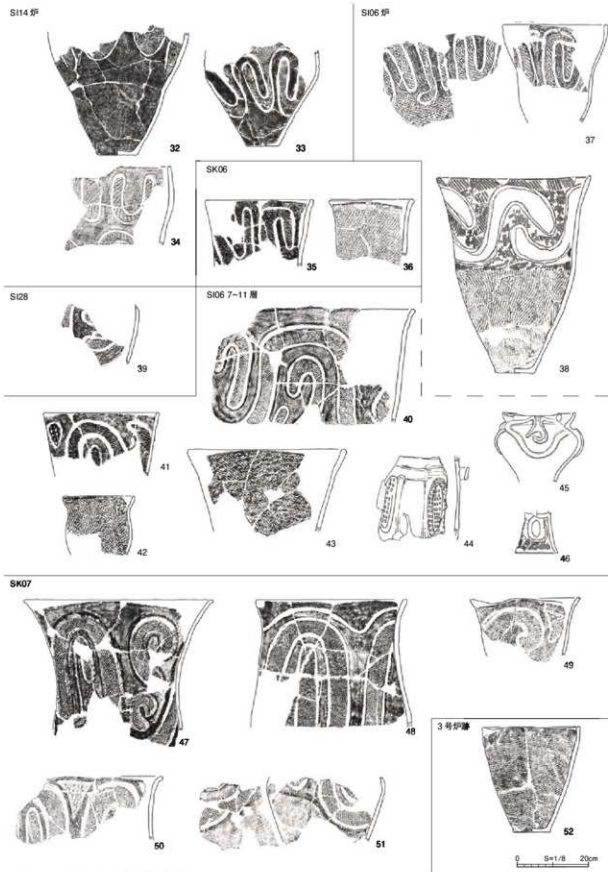
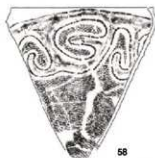
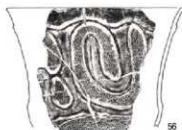


図 161 縄文土器集成図(3)

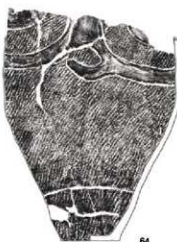
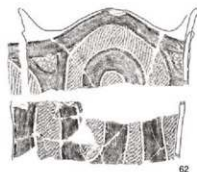
SI13 伊



SI06 1-6 層



SI24 伊



SI24 土



0 1/8 20cm

図 162 縄文土器集成図(4)

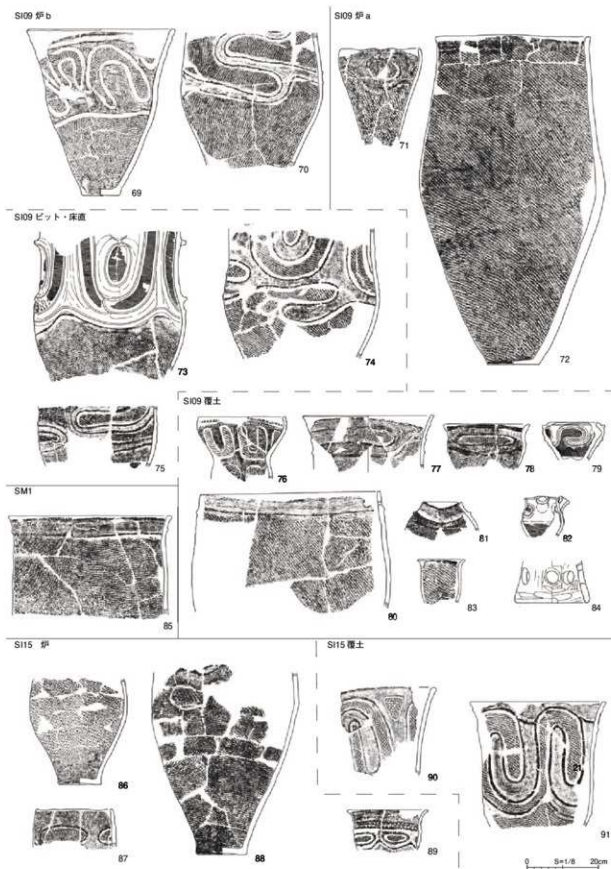


図 163 縄文土器集成図(5)

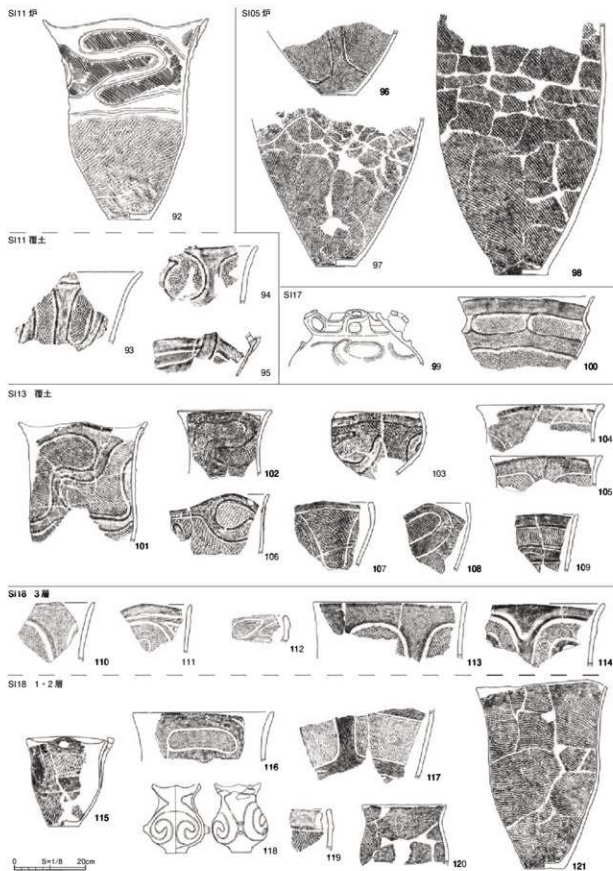


図164 縄文土器集成図(6)

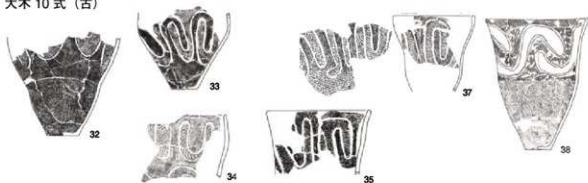
大木 8b 式



大木 9 式



大木 10 式 (古)



大木 10 式 (中)

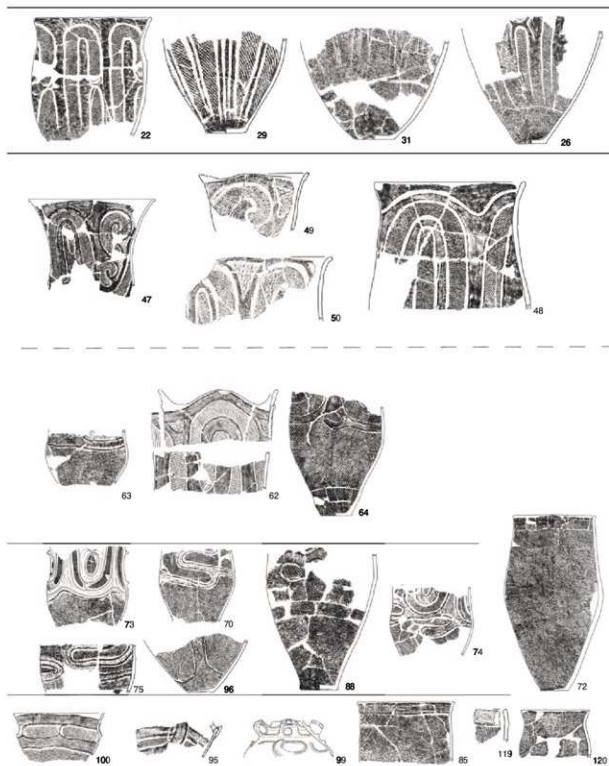


大木 10 式 (新)



図 165 縄文土器編年表





さらに横位に流れる文様を指標とすると、SI11複式炉(92)も同段階に位置付けられる。前段階の53に比較すると、文様帯が横位に展開し、無文帯の幅が狭くなり、後出要素を示す。

本段階としたSI9では1段階古い土器群3に位置付けられるものも含まれる。出土状況としてSI9の最古段階である初期の炉埋設土器である69、2段の文様構成を持つ76は他のSI9出土土器より古い要素が認められる。

また、土器群2としたSI6複式炉7～11層の最上層出土土器(45・46)・1～6層(54～61)は土器群3～4が混在している。45・46は竪穴住居を埋め戻した7層直上に置かれたように出土したものであり、土器群4に相当すると考えられる。

**土器群5** 土器群4よりも新しい段階と考えられるのは、重複関係③～⑥により、SI17(99・100)、3号炉跡(52)、SI11覆土(93～95)、SI13覆土(101～109)、SI18-1・2層(115～121)、SM1(85)である。炉埋設土器としての出土は激減し、覆土出土中心の資料である。

覆土出土中心であるため、古い段階のものが混在はしていると考えられる。新出要素としては無文帯同士の切り合い(95・99等)、区画内捲糸文(109・115・117)、未調整沈線区画(115・117等)があげられる。115は波頂部に環状孔が施される。SM1(85)のような口縁部下位を隆線と横区画する粗製土器はこの段階から増加すると考えられる。

次に分類した土器群をこれまでの編年案をもとに、古・中・新段階の3段階に分別する。

**大木10式古段階** 縄文帯を主文様として、主に縦位アルファベット文を施す段階である。先に示した土器群1～3が相当する。土器群1～3については先述したように重複関係による時間差、型式差が認められ、土器群1(33・34)→土器群2(37・38)→土器群2(47・48)→土器群3(53・69)の変遷過程と考えられる。しかし、これらの時系列は妥当としても、その変遷は漸移的であり、地域差や各要素の消長を整理しきれていないため、個々の土器だけでは十分に判断できない場合もある。ここでは、数段階の変遷があることを内包しつつ、これらを大きく一段階としてまとめておく。

器形は、キャリバー形、口縁部が外反するものがある。新しい様相にはキャリバー形が少なくなる。文様は沈線、隆線、隆沈線のほか、稜線で文様を描くものが出現する。区画された縄文帯は無文帯より幅狭もしくは同幅で、縄文帯で文様を描出する。文様を上下2段に配することは古い特徴であり、新しい要素としては、縄文帯幅の幅広化、口縁部の沈線等の横位区画、口縁部の三角形区画、体部沈線区画の波濤文がある。

**大木10式中段階** 土器群4が相当する。無文帯の幅が狭く無文帯で文様を描くようになること、前段階に比較し、横位に文様が描かれることを基準とする。縦位に展開するものでも、区画端部の鱗状隆起、区画線の波濤文の横位展開が前段階との差異である。器形はキャリバー形がほぼ無く、口縁部が外反するものが主体である。体部がくびれず口縁部が内湾する器形もある。

古段階から中段階も漸移的に進行したとみられ、古・中段階の相違点も古段階の中での細別される相違点と同一視し、ここで設定した古・中段階をまとめて一段階と設定する考えもある。

しかし、本遺跡の検討だけでなく、地域を広く捉える場合の検討の上でも、認識しやすい指標をもとに一段階を設定することが適切と考える。

**大木10式新段階** 土器群5が相当する。本調査地点では遺構数が少なく、覆土出土土器が中心となる。無文帯により切り合いが認められるもの、未調整沈線区画で熱赤文が施されるものを指標としている。本調査では、確実な遺構に伴い、共時性が担保される資料数が少ないことから中段階とした土器群に後続するものとしての設定にとどめ、一段階としての妥当性は他遺跡資料を含めた検討が必要である。

## 2. 住居構造・複式炉(図166～169)

竪穴住居跡は大木8b式期と複式炉を伴う大木9～10式期で異なる。本調査では、大木8b式期の検出数は少ない上、いずれも遺存状況も悪く、炉も検出できないので、詳細は不明である。SI20は壁柱穴、SI19は4本主柱である。やや長軸方向に長い小判形・楕円形を呈するものと考えられる。

大木9式期以降は複式炉を伴う竪穴住居跡が確認される。これらは壁周溝が伴うものが多く、周溝間に小ピットが散見される。平面形は円形(SI11・12・25)、複式炉側がやや直線的となる楕円形(SI6・9・14・29)、隅丸方形(SI13・15)がある。規模は長軸5～6m測るものが主体であり、長軸7m(SI9・14)を測るものは大型住居と位置付けられる。SI25は長軸2.5mと著しく小型の円形住居で、特殊な住居跡と考えられる。また大木10式新段階のSI17も長軸3.5mと小型であり、平面形が方形であることも含め、特異なあり方を示す。

柱配置は小型のSI17・25を除き、4本主柱と5本主柱である。4本主柱は複式炉側の柱間が奥側の柱間より広がる傾向が指摘できる(SI6・SI15)。また、複式炉の長軸方向に焼土分布が多く認められ(SI6・9・14・29)、複式炉を伴う住居内の場の利用を示唆する。

これらの特徴は本調査地点では時期別の有意な差は認められない。特に大木10式期中段階までは大きな住居構造の差異はないと言える。

また、住居の埋め戻し、埋没途中の土器廃棄は大木9式以前は顕著ではない。大木10式期は住居埋没中の土器廃棄があり、SI6の45・46のような異形土器、浅鉢の出土が多い傾向が認められる。

複式炉は、住居構造・規模と異なり時期差が認められる。本調査で確認された大木9～10式期の炉跡は3号炉跡を除き、前庭部・石組部・土器埋設部で構成される複式炉である。

検出した複式炉の土器埋設部は1・2個体の土器を埋設する。2個体埋設する場合は外側が内側に比べ小型の土器を配置し、底面も浅くなる。土器埋設部は礫が土器を囲んで配置するのが主体である。大木9式期のSI12の炉2、大木10式期の2号炉跡は土器のみの埋設である。また、大木9式期のSI12、大木10式古段階のSI24は土器埋設部を礫で区画する複式構造が認められる。

石組部は検出したものは底面まで礫が敷設される。前庭部は原則として竪穴住居跡壁・周溝に連接するとみられる。前庭部の壁際にピットをもつもの(SI29)、中央にピットを持つもの(SI6・12)、外周に溝をめぐらせるもの(SI6)のほか、複式炉主軸中央の周溝が複式炉側に突出するもの(SI9・12・29)がある。これらの点は大木9～10式期において時期差は認められない。

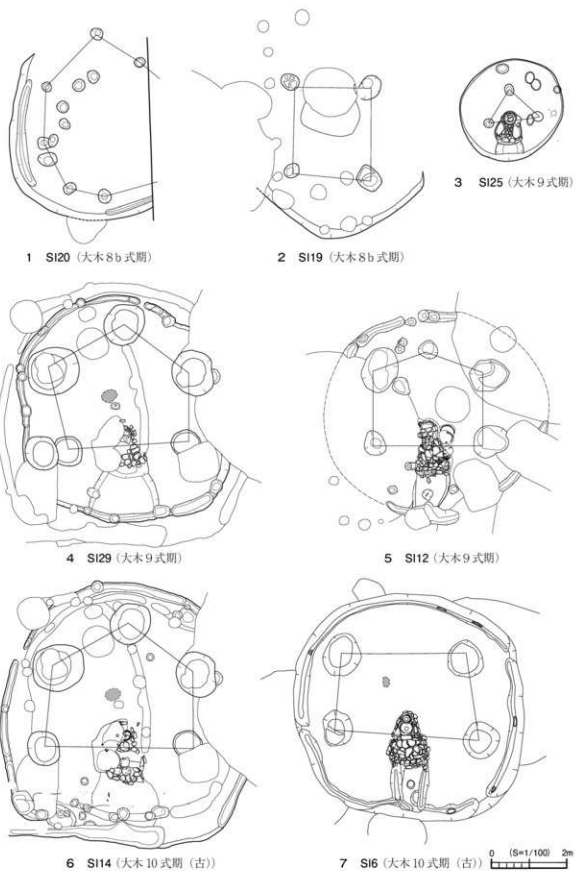
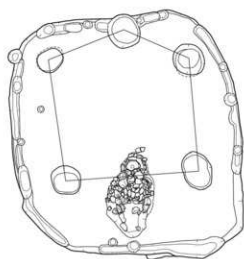


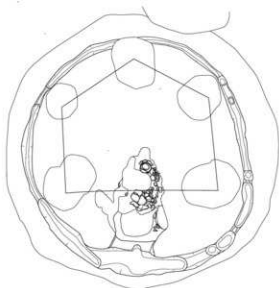
図166 縄文時代竪穴住居跡集成図(1)



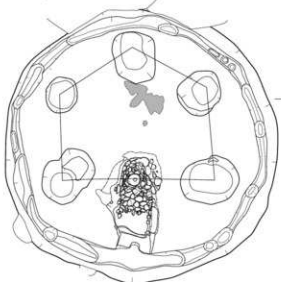
1 SI13 (大木10式期 (古))



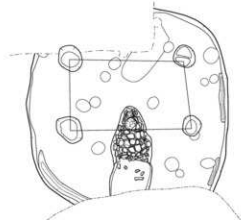
2 SI24 (大木10式期 (古))



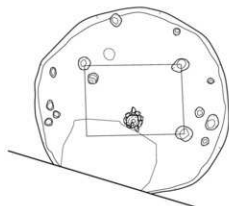
3 SI9b (大木10式期 (中))



4 SI9a (大木10式期 (中))



5 SI15 (大木10式期 (中))



6 SI11 (大木10式期 (中))

0 (S=1/100) 2m

図167 縄文時代竪穴住居跡集成(2)

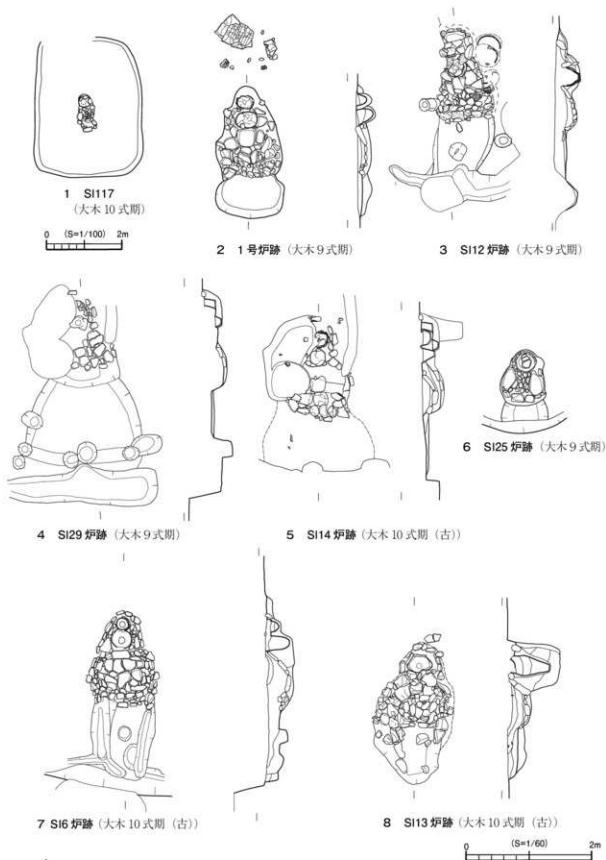


図168 縄文時代竪穴住居跡・複式炉集成図(1)

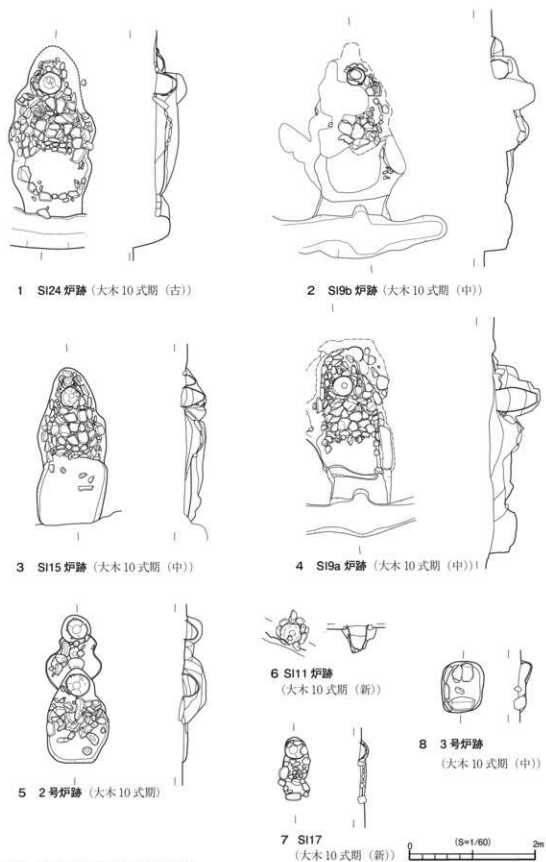


図169 縄文時代複式炉集成図(2)

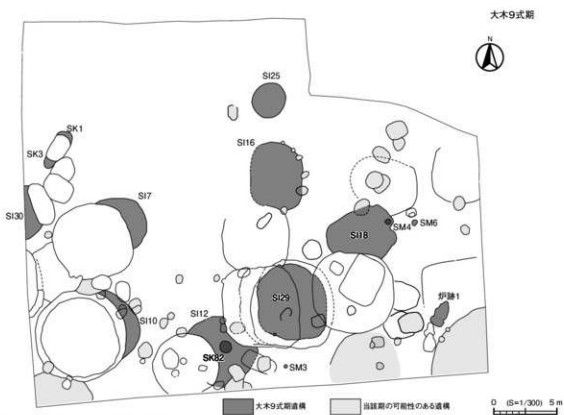
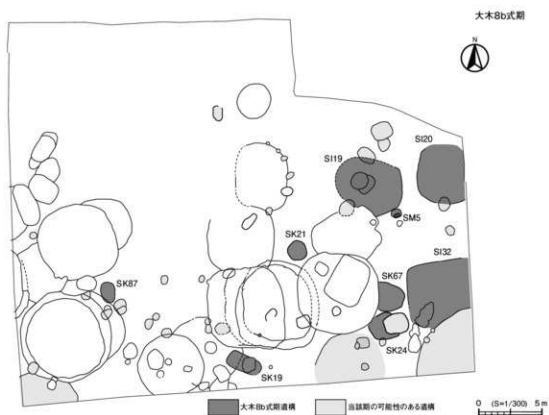


図170 縄文時代遺構変遷図(1)



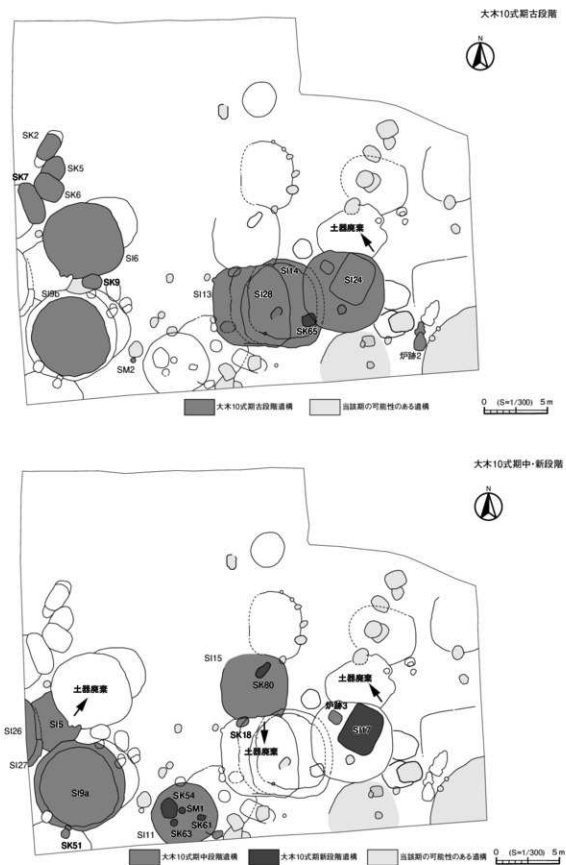


図171 縄文時代遺構変遷図(2)

複式炉の時期差が認められる特徴は次の点である。

- ・大木9式期の平面形は、石組部と土器埋設部の間にくびれを持つ瓢箪形、前庭部は住居壁側にハ字状に広がる形態である。
- ・大木10式期の平面形は、石組部と土器埋設部の間にくびれが弱く紡錘形またはA字形、前庭部は箱形または壁に向かってすぼまる形態で、前庭部と石組部の屈曲ならびにくびれは弱くなる。この変化は前庭部に付属する入口などの施設変容が反映すると考えられる。
- ・大木10式期古段階以降は大木9式期に比較し、石組部の壁の立ち上がりはやや鋭角的である。
- ・前庭部の外周に石列を配置するのは大木9式期に無く、大木10式期に認められる。
- ・大木10式期新段階であるSI17は住居壁からは離れた位置に構築されている。同じく新段階の3号炉跡は土器が埋設され、炉縁辺に礫を配する石囲炉である。これらは大木10式中段階以前には認められない。

これらの検討から、複式炉が伴う大木9～10式中段階までは住居構造は定型的である一方、複式炉は時期的変容が認められる。しかし、その炉の変容も前後の大木8b式期、大木10式新段階に比較すれば、土器埋設部・石組部・前庭部を備える複式炉として斉一性が高いと評価できる。

### 3. 集落の変遷過程(図171・172)

これまでの検討をもとに各段階の遺構分布状況の変遷を確認する。

大木8b式期は、調査地点東側に竪穴住居跡が3軒確認される。住居の集中度からみると本調査地点の東側にさらに居住域が広がっていたと推察される。住居分布域の東側に墓坑とした土坑I類(SK19・24・67)、貯蔵穴とした土坑II類(SK21・87)があり、居住域の周縁部にこれらが分かれて存在していたと考えられる。

大木9式期の竪穴住居跡・炉跡は大木8b式期に比べ増加し、居住域は西側、北側に広がる。これらに重複して大木10式期の住居が構築され、本段階で確認できる住居域が以後継続したと考えられる。また、大木9式～10式中段階までの複式炉は、いずれも南側の壁際に構築され、主軸方向が真北に近いこともその継続性を傍証する。

また、大木9式期は、土坑I類(SK1・3)が調査区北西側に確認されており、この地区に墓域が形成されたとみられる。前段階にみられた土坑II類はこの段階以降、明瞭な分布域が認められない。掘削途中で中止した未完成の竪穴住居跡であるSI18は当該期に掘削された可能性が高い。

大木10式期古段階も竪穴住居跡は前段階の分布域を踏襲する。しかし、前段階に比較すると、古段階の中でも複数の重複関係を持つSI13・14・24・28とSI6・9の東西に分節しているとみられる。埋設中のSI18にはこの段階以降、土器廃棄がなされたと考えられる。調査区北西側に土坑I類が集中し、明確な墓坑群を形成する。この墓域は大木9式期から継続するものである。

大木10式中段階も前段階の居住域を踏襲する。同段階での竪穴住居跡の重複も認められる(SI9b→SI5→SI26)。埋設途中の竪穴住居跡への土器廃棄が顕著である。土坑I類の集中域は確認できず、この点は前段階との相違点と認められる。

大木10式期新段階の明確な竪穴住居跡はSI17のみである。中段階にあたるSI11の覆土上から構築される土坑I類のSK54やSM1がある。また、前段階までの竪穴住居跡は真北を中心に主軸があったものが、SI17では大きく東に振れることも相違点として指摘できる。これらのことから、大木10式新段階に至って、本調査地点は遺構数が減少するなど大きな変容があり、居住域としては収束していったと考えられる。

大木9式期以降の住居・炉の造り替えは、前段階の位置や入口方向をほぼ踏襲しており、一定の連続性を持った構築と評価できる。この竪穴住居跡・炉の重複状況は次のように分類できる。

- ① 炉のみ造り替えるもの(SI9b、SI12)
- ② 同心円状または住居の一方の拡張とともに炉も造り替えるもの(SI28→SI13、SI29→SI14、SI9b→a、SI26→SI27、2号炉跡b→a)
- ③ やや場所をずらして新たに構築するもの(SI7→SI6、SI10→SI9→SI5、SI6→SI5、SI14→SI24、SI14→SI28、1号炉跡→2号炉跡)
- ④ 完全に埋没後、同位置に重複して構築するもの(SI24→SI17・3号炉跡)

①から④にかけてその時間差は大きくなると考えられ、特に③・④の重複状況は、一定の断続期を考慮する必要がある。一方、SI5と③の重複状況となるSI6は堆積状況からSI5構築時の埋め戻しが想定され、③の重複状況でありながら大きな時間差を有しないと推察される。③・④の重複状況でも連続し構築している可能性があり、断続期の設定は堆積状況を含めた検討が必要である。

これらの分布状況から大木9式期から大木10式期中段階までは、一定の断続期が存在したとしても、連続的に竪穴住居が構築されていることが本調査地点の大きな特徴である。また、その前後に集落としての画期を設定できる。そして、その画期は複式炉の消長とほぼ期を同一とすることは重要な点である。このことは周辺の遺跡や広域的なあり方、遺物の変容などもあわせて検討することが必要である。

## 第2節 奈良・平安時代の調査成果

本調査地点では竪穴住居跡5軒、掘立柱建物5棟が確認されている。竪穴住居跡は非ロク口成形の丸底の坏を伴うSI1・2・23とロク口成形の坏を伴うSI3・4に大きく2区分できる。前者は8世紀中ごろから後半、後者は9世紀が中心と位置付けられる。比較的多量に出土したSI4の坏は底径・口径比が大きく、口縁端部がやや外反するものが多いことから、9世紀後半の所産と考えられる。掘立柱建物柱を含めてその他の遺構については遺物からの詳細な年代比定は困難である。

これらの分布状況を見ると8世紀段階の竪穴住居跡は調査区南東側に偏在しており、遺構の主軸方向もほぼ一致する。9世紀段階の竪穴住居跡は調査区北寄りに位置し、8世紀段階と異なる。

掘立柱建物のうち、SB2～4は重複・隣接位置で確認され、同時併存したとは考え難い。南北棟、東西棟の違いはあるが、2×3間の欄柱建物であり、規模も近似する。このことから、これらは同

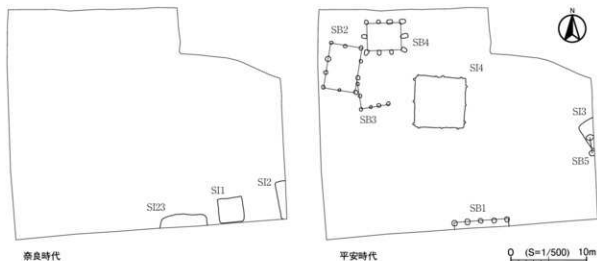


図172 奈良・平安時代遺構変遷図

一の性格を持つ2回の建て替えがあった一連の建物群と考える。所属時期は隣接するSI4とSB2・4の主軸方向が近似することや関係性が認められる配置構成から、SB2・4はSI4と共存したと判断する。そして、主軸方向をSI4とやや異なるSB3はSB2・4に後続する建て替えと推察する。

また、8世紀代のSI23を切るSB1はSB4と主軸方向が近似することから、同段階の9世紀後半に位置づけておく。SB3はSI3との重複関係が不明であり、時期は判断しがたい。掘立柱建物が9世紀代を中心とすることから、暫定的に9世紀代としておく。

これまでの検討を踏まえた時期別分布状況を見ると、いずれの段階でも主軸方向が近接するなど、整然とした配置構成であることが指摘できる。また、竪穴住居跡のいずれもカマドが構築されることが多い北辺が検出しているにも関わらず、カマドの痕跡がほぼ認められないことが特徴的である。

特に9世紀後半のSI4はカマドを伴わないほか、一辺7mを超える大型住居で、住居中央の土坑、柱穴への土師器埋納といった特殊なあり方を示す。掘立柱建物が伴う可能性が高いこともあわせ、これらの遺構群が一般集落とは異なる機能・性格を有していた可能性がある。8世紀代の竪穴住居全体を調査した小型のSI1でもカマドが確認できず、この点は本調査地点では通時的にみられる特徴であることも指摘できる。

ただし、遺存状況は良好ではなく、また竪穴住居跡全体を調査できたものも少ない。よって、一般集落と機能差があるという推察は可能性を指摘したものであり、今後の周辺の調査成果により判断する必要がある。また周辺地域では奈良・平安時代の集落遺跡調査例が近年増加していることから、これらの資料を比較検討し、本遺跡の特徴を改めて位置付けることが必要であろう。

## 引用・参考文献

- 阿部昭典(2008)縄文時代の社会変動論、アムプロモーション
- 新井達哉(2003)第4章 考察、和台遺跡、飯野町教育委員会
- 飯野町教育委員会(2003)和台遺跡
- 大河原勉(2003)第1章 縄文時代の遺物について 第1節 土器、阿武隈右岸築堤遺跡発掘調査報告3 高木・北ノ脇遺跡 第1分冊、福島県教育委員会
- 小高町教育委員会(2005)浦尻貝塚1
- 鈴木貞一(1984)上ノ台A遺跡(第1次)、真野ダム関連遺跡発掘調査報告V、福島県教育委員会
- 大工原豊ほか(2020)縄文石器提要、ニューサイエンス社
- 中野幸大(2008)大木7b～8b式土器、総覧 縄文土器、アムプロモーション
- 丹羽茂(1981)大木式土器、縄文文化の研究4、雄山閣
- 丹羽茂(1989)中期大木式様式、縄文土器大観1、小学館
- 原町市教育委員会(2000a)川内迫B遺跡群F地区
- 原町市教育委員会(2000b)蛭沢遺跡群・川内迫B遺跡群
- 福島県教育委員会(1984)真野ダム関連遺跡発掘調査報告V 上ノ台A遺跡(第1次) 宮前遺跡
- 福島県教育委員会(1990a)真野ダム関連遺跡発掘調査報告XIV 上ノ台A遺跡(第2次)
- 福島県教育委員会(1990b)真野ダム関連遺跡発掘調査報告XV 宮内A遺跡(第2次)上ノ台B遺跡 上ノ台C遺跡 上ノ台D遺跡 日向遺跡 日向南遺跡(第4次)
- 福島県教育委員会(1991a)東北横断自動車道遺跡調査報告11 法正尻遺跡
- 福島県教育委員会(1991b)請戸川地区移籍発掘調査報告I 大富西畑遺跡 四ツ栗遺跡
- 福島県教育委員会(2001)常磐自動車道遺跡調査報告25 馬場前遺跡(1次調査)
- 福島県教育委員会(2003a)阿武隈右岸築堤遺跡発掘調査報告3 高木・北ノ脇遺跡
- 福島県教育委員会(2003b)常磐自動車道遺跡調査報告34 馬場前遺跡(2・3次調査)
- 福島県教育委員会(2003c)常磐自動車道遺跡調査報告35 前山A遺跡
- 福島県教育委員会(2009)常磐自動車道遺跡調査報告55 四ツ栗遺跡(第3次調査)、大田和広畑遺跡
- 福島県教育委員会(2015)東日本大震災復興関連遺跡発掘調査報告1
- 福島県教育委員会(2016a)東日本大震災復興関連遺跡発掘調査報告2
- 福島県教育委員会(2016b)東日本大震災復興関連遺跡発掘調査報告3
- 福島県教育委員会(2016c)県道北泉小高線関連遺跡発掘調査報告1 五畝田・犬道遺跡
- 福島県教育委員会(2016d)農山漁村地域復興基盤総合整備事業関連遺跡調査報告1 天化沢A遺跡
- 福島県教育委員会(2017a)県道北泉小高線関連遺跡発掘調査報告2 五畝田B遺跡
- 福島県教育委員会(2017b)農山漁村地域復興基盤総合整備事業関連遺跡調査報告2 五畝田・犬道遺跡(2次調査)
- 福島県教育委員会(2018a)東日本大震災復興関連遺跡発掘調査報告4
- 福島県教育委員会(2018b)県道浪江鹿島線関連遺跡発掘調査報告1 植松C遺跡
- 福島県教育委員会(2019)東日本大震災復興関連遺跡発掘調査報告5
- 福島市教育委員会ほか(1989)昭和63年度 市道原宿愛宕原1号線建設工事関連遺跡調査報告 愛宕原遺跡
- 藤根久(2010)附編4 浦尻貝塚周辺低地ボーリング試料の珪酸化石群集、浦尻貝塚4、209-217
- 丸山泰徳(1989)第5章 検討 第1節 縄文時代 1 土器、昭和63年度 市道原宿愛宕原1号線建設工事関連遺跡調査報告 愛宕原遺跡、福島市教育委員会ほか
- 南相馬市(2011)原町市史第三巻、資料編1、考古
- 南相馬市教育委員会(2006)浦尻貝塚2
- 南相馬市教育委員会(2007)大田和広畑遺跡
- 南相馬市教育委員会(2008)浦尻貝塚3

- 南相馬市教育委員会(2010) 浦尻貝塚4
- 南相馬市教育委員会(2015)南相馬市内遺跡発掘調査報告書9.平成24年度試掘調査・発掘調査報告
- 南相馬市教育委員会(2017a)南相馬市内遺跡発掘調査報告書10.平成26・27年度試掘調査報告
- 南相馬市教育委員会(2017b)東日本大震災復興関連遺跡発掘調査報告書1-平成24～26年度東日本大震災復興のための調査-
- 南相馬市教育委員会(2018b)南相馬市内遺跡発掘調査報告書11-平成25・28年度試掘調査報告-
- 南相馬市教育委員会(2019a)南相馬市内遺跡発掘調査報告書12-平成29年度試掘調査報告-
- 南相馬市教育委員会(2019b)南相馬市内遺跡発掘調査報告書13-平成29・30・令和元年度試掘調査報告-
- 南相馬市教育委員会(2019c)東日本大震災復興関連遺跡発掘調査報告書2-平成24～26年度震災者住宅建設のための調査-
- 南相馬市教育委員会(2019d)南海老南町遺跡-(仮)大型園芸施設建設に伴う発掘調査-
- 南相馬市教育委員会(2020a)中才遺跡(2次調査)
- 南相馬市教育委員会(2020b)上泷佐原田遺跡(4次調査)
- 森幸彦(2008)大木9・10式土器,総覧 縄文土器,アムプロモーション

# 観 察 表

表5 縄文土器観察表

表5 縄文土器観察表

図版番号	国内番号	遺構	出土位置	器種	形式	口縁	主な修施手法	地文	区画内施文	内面	備考
60	1	S 15	伊明段	深鉢	粗製			縦位LR縄文		ミガキ	
61	1	S 15	伊明段	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	縦位・斜位LR縄文		ミガキ	
61	2	S 15	伊明段	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	赤彩?
61	3	S 15	1・2層	深鉢	大木9	波状	刺突 ミガキ調整沈澱			ミガキ	
61	4	S 15	1・2層	深鉢	大木9			横位LR縄文		ナデ	
61	5	S 15	1・2層	深鉢	大木8b		和調整沈澱	縦位LR縄文		ナデ	
61	6	S 15	1・2層	深鉢	大木9	波状	ナデ調整沈澱	横位LR縄文		ミガキ	
61	7	S 15	伊	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
61	8	S 15	1・2層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
61	9	S 15	1・2層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
61	10	S 15	1・2層	深鉢	大木10		横線	縦位LR縄文		ミガキ	
61	11	S 15	1・2層	深鉢	大木10	平	横線	縦位LR縄文		ミガキ	
61	12	S 15	1・2層	注口壺形			横線	縦位LR縄文		ミガキ	
61	13	S 15	P1層	浅鉢	大木10		ミガキ調整沈澱帯・沈澱 刺突	縦位LR縄文		ミガキ	精製
61	14	S 15	1・2層	深鉢	粗製			縦位LR縄文		ミガキ	
62	1	S 16	1~6層	深鉢	大木10	平	横線	縦・横位LR縄文		ミガキ	
62	2	S 16	3層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
62	3	S 16	1~6層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
62	4	S 16	1~6層	浅鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
62	5	S 16	1~6層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱・除沈澱	刺突 縦・横位LR縄文		ミガキ	精製
62	6	S 16	1~3層	深鉢	大木10	波状	ミガキ調整沈澱	横位LR縄文		ミガキ	
62	7	S 16	1~6層	深鉢	大木10	波状	ミガキ調整沈澱	縦・横位LR縄文		ミガキ	
63	1	S 16	伊	深鉢	大木10	小波状	ミガキ調整沈澱帯・沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
63	2	S 16	4層	浅鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
63	3	S 16	1~6層	深鉢	大木10	波状	ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	付着物有
63	4	S 16	1~6層	浅鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱	刺突 縦位LR縄文		ミガキ	
63	5	S 16	1~6層	浅鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱	横位LR縄文		ミガキ	
63	6	S 16	3層	浅鉢?	大木10	小波状	ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
63	7	S 16	1~6層	深鉢	大木10	波状	ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
63	8	S 16	1~6層	深鉢		平	ミガキ調整沈澱	横位LR縄文		ミガキ	
63	9	S 16	1~6層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	横位LR縄文		ミガキ	
63	10	S 16	1~6層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱	縦・斜位LR縄文		ミガキ	
63	11	S 16	1層	深鉢	大木10	小波状	ミガキ調整沈澱	横位LR縄文		ナデ?	
63	12	S 16	1~6層	深鉢	大木10	小波状	ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
63	13	S 16	1~6層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
63	14	S 16	1~6層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱	横位LR縄文		ミガキ	
63	15	S 16	1~6層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
63	16	S 16	1~6層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
63	17	S 16	1~6層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	精製
64	1	S 16	一括	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱	斜位・縦位LR縄文		ミガキ	
64	2	S 16	1層	深鉢	大木10	小波状	ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
64	3	S 16	1~6層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
64	4	S 16	3層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ナデ?	
64	5	S 16	1~6層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
64	6	S 16	1~6層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
64	7	S 16	1~6層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
64	8	S 16	1~6層	深鉢	大木9・10		ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ナデ?	
65	1	S 16	1~6層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
65	2	S 16	1~6層	深鉢	大木10	小波状	ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
65	3	S 16	3層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ?	
65	4	S 16	1~6層	深鉢	大木10	波状	ミガキ調整沈澱	縦・斜位LR縄文		ミガキ	
65	5	S 16	1~6層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ナデ?	
65	6	S 16	1~6層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ナデ?	
65	7	S 16	1~6層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	縦・斜位LR縄文		ミガキ	
65	8	S 16	1~6層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	
65	9	S 16	1~6層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	赤彩?
66	1	S 16	1~6層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	精製
66	2	S 16	1~6層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	縦位LR縄文		ミガキ	非円状突縁
66	3	S 16	1~6層	深鉢	大木8b		和調整沈澱	縦位R熱赤文		ミガキ	
66	4	S 16	1~6層	深鉢	大木9・10		刺突			ミガキ	
66	5	S 16	1~6層	深鉢	大木10	平	刺突			ミガキ	
66	6	S 16	1~6層	深鉢	大木9・10		刺突			ナデ?	
66	7	S 16	1~6層	浅鉢	大木9	波状	ミガキ調整沈澱			ミガキ	
66	8	S 16	1層	壺形土器	大木10		刺突			ミガキ	精製
66	9	S 16	1~6層	浅鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱			ミガキ	有孔



表5 縄文土器観察表

国庫 番号	区内 番号	遺構	出土位置	器種	型式	口縁	主な埴輪文手法	地文	区画内備文	内面	備考
66	10	S 16	1~6層	帯形土器	大木10		ミガキ調整沈線			ミガキ	楕状把手
66	11	S 16	1~6層	注口土器	大木9・10		ミガキ			ミガキ	注口部
66	12	S 16	1~6層	注口土器	大木9・10		ミガキ			ナデ	注口部
66	13	S 16	1~6層	注口土器			細大陸帯			縦位沈線	ミガキ
66	14	S 16	3層	深鉢	粗製	平	未調整沈線			縦位LR縄文	ミガキ
66	15	S 16	1~6層	深鉢	粗製	平				縦位LR縄文	ミガキ
66	16	S 16	1~6層	深鉢	粗製	平				横・縦位LR縄文	ミガキ
66	17	S 16	1~6層	深鉢	粗製	平				縦位LR縄文	ミガキ
66	18	S 16	1~6層	深鉢	粗製	平				横・縦位LR縄文	ミガキ
67	1	S 16	1・3層	深鉢	粗製	平	ミガキ調整沈線			縦位LR縄文	区画=2と同一
67	2	S 16	4層	深鉢	粗製	平	ミガキ調整沈線			縦位LR縄文	区画=1と同一
67	3	S 16	一括	深鉢	粗製?	平				縦位条線文	ミガキ
67	4	S 16	1~6層	深鉢	大木9・10		ミガキ			ミガキ	粗製
67	5	S 16	1層	深鉢	粗製	平	縦位条線文			ミガキ	
67	6	S 16	1~6層	深鉢	粗製	平	縦位条線文			ミガキ	
67	7	S 16	1~6層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線			縦位LR縄文	ナデ
67	8	S 16	1~6層	小型壺?	大木10		ミガキ調整沈線			縦位LR縄文	ナデ
67	9	S 16	1~6層	ミニチュア土器			ナデ				ナデ
67	10	S 16	1~6層	深鉢	大木8b	平	ナデ調整沈線			剥突	区内面付着物
67	11	S 16	1~6層	深鉢	大木8b	平	ナデ調整沈線			ミガキ	
67	12	S 16	4層	深鉢	大木8b		ナデ調整沈線			ナデ	楕状突起
67	13	S 16	1~6層	深鉢	大木8b		未調整沈線			縦位RL縄文	ミガキ
67	14	S 16	2層	深鉢	大木8b	平	ナデ調整沈線			縦位LR縄文	—
67	15	S 16	1~6層	深鉢	大木8b		ナデ調整沈線			縦位RL縄文	ミガキ
67	16	S 16	1~6層	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整沈線				ナデ?
67	17	S 16	1~6層	深鉢	大木9	小波状	ミガキ調整沈線				突起
67	18	S 16	1~6層	深鉢	大木9		ナデ調整沈線			縦位LR縄文	ミガキ
67	19	S 16	1~6層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線			縦位LR縄文	ミガキ
67	20	S 16	1層	深鉢	大木9	小波状	ミガキ調整沈線				ミガキ
67	21	S 16	1~6層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線				ミガキ
68	1	S 16	7~10層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線			縦位LR縄文	ナデ?
68	2	S 16	7~10層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線			縦位LR縄文	剥突
68	3	S 16	7~10層	深鉢	大木10	平	横線			斜位LR縄文	ミガキ
68	4	S 16	7~10層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線			剥突	ミガキ
68	5	S 16	7~10層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線			縦位LR縄文	ナデ?
68	6	S 16	7~10層	深鉢	大木10	小波状	ミガキ調整沈線			縦位LR縄文	ミガキ
68	7	S 16	7~10層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線			斜位LR縄文	ミガキ
68	8	S 16	7~10層	深鉢	大木10	小波状	ミガキ調整沈線			縦・横位LR縄文	ミガキ
68	9	S 16	7~10層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線			縦位LR縄文	ミガキ
68	10	S 16	7~10層	小型壺	大木10	平	ミガキ調整沈線			縦位LR縄文	ミガキ
69	1	S 16	7層上	帯形土器	大木10	平	ミガキ調整沈線			ミガキ	脚部 楕円形 通かし孔2対
69	2	S 16	7層上	帯形土器?	大木10		ミガキ調整沈線			縦位RL縄文	ミガキ
69	3	S 16	7~10層	深鉢	粗製	平				縦位LR縄文	ナデ
69	4	S 16	7~10層	深鉢	粗製	平				縦位LR縄文	ミガキ
69	5	S 16	7層	深鉢	大木8a		ナデ調整沈線			縦位RL縄文	ミガキ
69	6	S 16	7~10層	深鉢	大木8b	平	ナデ調整沈線			縦位LR縄文	ナデ?
69	7	S 16	7層	深鉢	大木8b	平	ミガキ調整沈線	未調整沈線			ナデ?
69	8	S 16	7層	深鉢	大木8b	平	ナデ調整沈線			横位LR縄文	ミガキ
69	9	S 16	7~10層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線			縦位LR縄文	ミガキ
70	1	S 16	7~10層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線			縦位LR縄文	ミガキ
70	2	S 16	P23層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線			縦位LR縄文	ミガキ
70	3	S 16	11層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線			剥突	ミガキ
70	4	S 16	11層	帯形土器	大木10	平	横線			剥突	ミガキ
70	5	S 16	7~10層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線			縦位RL縄文	ミガキ
71	1	S 16	9層	深鉢	大木9・10					縦位LR縄文	ミガキ
71	2	S 16	11層	深鉢	大木8b	平	ナデ調整沈線			縦位LR縄文	ミガキ
71	3	S 16	P12層	深鉢	大木8b	平	ナデ調整沈線			縦位LR縄文	ミガキ
71	4	S 16	11層	深鉢	大木8b	平	ナデ調整沈線			縦位LR縄文	ミガキ
71	5	S 16	11層	深鉢	大木8b	平	ミガキ調整沈線			横位LR縄文	ミガキ
71	6	S 16	11層	深鉢	大木8b	平	ミガキ調整沈線			縦位LR縄文	ミガキ
71	7	S 17	1層	深鉢	大木8b	波状	ミガキ調整沈線			ミガキ	

表5 縄文土器観察表

図録番号	図内番号	遺構	出土位置	器種	型式	口縁	主な様式文手法	地文	区画内地文	内面	備考
71	8	S 16	11層	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整沈澱	縦位LR 縄文		ミガキ	
71	9	S 17	床直	深鉢	大木8b	平	ナメ調整沈澱・沈澱	縦位LR 縄文		ミガキ	内面付着物有
71	10	S 17	床直	深鉢	大木8b	平	ナメ調整沈澱			ミガキ	
71	11	S 17	1層	深鉢	粗製	平		縦位LR 縄文		ミガキ	
71	12	S 17	床直	深鉢	大木9	小波状	ミガキ調整沈澱	縦位LR 縄文		ミガキ	
71	13	S 17	1層	深鉢	大木10	平	ミガキ	縦位LR 縄文		ミガキ	
71	14	S 17	床直	深鉢						ミガキ	
71	15	S 17	P1-1層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈澱			ミガキ	
71	16	S 18	確認面	深鉢	大木8b	平	ミガキ調整沈澱	斜突付沈澱		ミガキ	斜位隆線・上刺突
71	17	S 18	確認面	浅鉢?	大木9	波状	ミガキ調整沈澱			ミガキ	精製
71	18	S 18	確認面	深鉢	大木9		ミガキ調整沈澱	縦位RL 縄文		ミガキ	
71	19	S 18	確認面	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱	縦位RL 縄文		ミガキ	
72	1	S 19	a・b埋設	深鉢	粗製	平		縦位LR 縄文		ミガキ	
72	2	S 19	a・b埋設	浅鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱	斜突		ミガキ	精製
72	3	S 19	a・b埋設	深鉢	大木10	波状	和調整沈澱	縦位LR 縄文		ミガキ	ナメ
72	4	S 19	b・c埋設	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈澱・沈澱	縦位LR 縄文		ミガキ	
72	2	S 19	b・c埋設	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	縦位LR 縄文		ミガキ	
73	3	S 19	b・c埋設	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	縦位LR 縄文		ミガキ	
73	3	S 19	b・c埋設	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	縦位LR 縄文		ミガキ	
73	4	S 19	a・b埋設	深鉢	大木10	横線		縦位LR 縄文		ミガキ	
73	5	S 19	b・c埋設	深鉢	大木10	横線		縦位LR 縄文		ミガキ	
73	6	S 19	a・b埋設	深鉢	大木10	横線		縦位LR 縄文		ミガキ	口唇・口縁下波状・横線区画
73	7	S 19	a・b埋設	深鉢	粗製	平	ミガキ調整沈澱	縦位LR 縄文		ミガキ	
73	8	S 19	a・b埋設	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	縦位LR 縄文	斜突	ミガキ	
74	1	S 19	P4	深鉢	大木10	横線		縦位LR 縄文		ミガキ	精製・横状突起
74	2	S 19	P5	深鉢	大木9		ミガキ調整沈澱	縦位LR 縄文		ミガキ	
74	3	S 19	P5	深鉢	大木8b		ナメ調整沈澱	縦位RL 縄文		ミガキ	
74	4	S 19	P5	深鉢	骨製		集合沈澱			ミガキ	
74	5	S 19	P4	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	縦位LR 縄文		ミガキ	
74	6	S 19	床直	深鉢	大木10	横線		縦位LR 縄文		ミガキ	
74	7	S 19	床直	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	横・斜位LR 縄文		ミガキ	
74	8	S 19	床直	浅鉢	大木10	横線		縦位LR 縄文		ミガキ	精製
74	9	S 19	床直	浅鉢?	大木9・10		ミガキ調整沈澱	斜突		ミガキ	
74	10	S 19	P4	浅鉢	大木10	波状	横線	斜位LR 縄文		ミガキ	精製 赤彩 波頭部貫通孔
74	11	S 19	P4	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	縦位LR 縄文		ミガキ	
74	12	S 19	床直	深鉢	穿山下割?	波状	縦位短沈澱	条痕?		条痕	口唇上縁棒状 工具による斜突 横線わずかに含む
75	1	S 19	床直	深鉢	大木10		ミガキ調整沈澱	横位R 縄文		ミガキ	
75	2	S 19	3層	深鉢	大木10	小波状	横線	縦位LR 縄文	斜突	ミガキ	
75	3	S 19	3層	深鉢	大木8b		ミガキ調整沈澱	縦位LR 縄文		ミガキ	中空突起
75	4	S 19	a・b埋設	深鉢	大木8b	平	ナメ調整沈澱	横位LR 縄文		ミガキ	
75	5	S 19	3層	深鉢	大木10	小波状	ミガキ調整沈澱	縦位LR 縄文		ミガキ	
75	6	S 19	3層	深鉢	大木10	平	横線	縦位LR 縄文		ミガキ	
75	7	S 19	3層	深鉢	大木10	平	横線	縦位LR 縄文		ミガキ	
75	8	S 19	3層	深鉢	大木10	波状	横線	縦位LR 縄文		ミガキ	
75	9	S 19	3層	深鉢?	大木10	平	横線	縦位LR 縄文		ミガキ	精製
75	10	S 19	3層	深鉢	大木10	平	横線	縦位LR 縄文		ミガキ	
75	11	S 19	3層	深鉢	大木10	平	横線	縦位LR 縄文		ミガキ	精製 横状突起
75	12	S 19	3層	深鉢	大木10	波状	横線	縦位LR 縄文		ミガキ	
75	13	S 19	3層	深鉢	大木10	横線		縦位LR 縄文		ミガキ	
76	1	S 19	3層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈澱	縦位RL 縄文		ナメ?	
76	2	S 19	3層	深鉢	大木10	平	横線	縦位LR 縄文		ミガキ	
76	3	S 19	3層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈澱	縦位LR 縄文		ミガキ	
76	4	S 19	3層	深鉢	大木9	小波状	ミガキ調整沈澱	縦位LR 縄文		ナメ?	
76	5	S 19	3層	注口窓形	大木10	小波状	横線	縦位LR 縄文		ミガキ	
76	6	S 19	3層	深鉢	大木9	小波状	ミガキ調整沈澱	縦位LR 縄文		ミガキ	
76	7	S 19	3層	深鉢	大木9	小波状	ミガキ調整沈澱	縦位LR 縄文		ミガキ	
76	8	S 19	3層	注口土器 ミニチュア土器	大木9・10			ナメ		ナメ	
76	9	S 19	3層		大木9・10		和調整沈澱			ナメ	
76	10	S 19	3層	深鉢	大木9		ナメ調整沈澱	縦位LR 縄文		ミガキ	
76	11	S 19	3層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈澱	斜位LR 縄文		ミガキ	
76	12	S 19	3層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈澱	縦位LR 縄文		ミガキ	
76	13	S 19	3層	深鉢	粗製	平	横線	縦位LR 縄文		ミガキ	

表5 縄文土器観察表

国庫 番号	区内 番号	遺構	出土位置	器種	型式	口縁	主な埴輪文手法	地文 区画内地文	内面	備考	
76	14	S 19	3層	壺形土器	大木9・10	平	横線	縦位LR縄文	ミガキ	国76-15と 同一	
76	15	S 19	3層	壺形土器	大木9・10	平	横線	縦位LR縄文	ミガキ	国76-14と 同一	
76	16	S 19	3層	深鉢	粗製	波状		縦位LR縄文	ミガキ		
76	17	S 19	3層	深鉢	粗製	平		縦位LR縄文	ミガキ		
77	1	S 19	3層	深鉢	粗製			縦・斜位LR縄文	ミガキ		
77	2	S 19	3層	深鉢	粗製			縦位LR縄文	ミガキ		
77	3	S 19	3層	深鉢	大木8b		ナ字調整段沈線	横位LR縄文	ミガキ		
77	4	S 19	3層	深鉢	大木8b		糸調整沈線	縦位沈線	ミガキ		
77	5	S 19	3層	深鉢	大木8b		ナ字調整段沈線		ミガキ		
77	6	S 19	3層	深鉢				縦位LR縄文	ミガキ	底部ミガキ	
77	7	S 19	3層	深鉢	大木9		ナ字調整段沈線	縦位LR縄文	ミガキ		
77	8	S 19	3層	深鉢				横位LR縄文	ミガキ		
77	9	S 19	3層	小形深鉢	大木9・10			縦位LR縄文?	ミガキ		
77	10	S 19	1・2層	浅鉢	大木10		ミガキ調整段線	縦・横位LR縄文	ミガキ		
77	11	S 19	1・2層	深鉢	大木10	平	横線	縦位LR縄文	ミガキ		
77	12	S 19	1・2層	浅鉢	大木10	平	ミガキ調整段線	縦位LR縄文	ミガキ		
77	13	S 19	1・2層	壺形土器	大木10	平	ミガキ調整段線	縦位LR縄文	ミガキ		
77	14	S 19	1・2層	深鉢	大木10		横線	縦位LR縄文	ミガキ		
77	15	S 19	1層	深鉢	大木10		横線	縦位LR縄文	ミガキ		
78	1	S 19	1・2層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整段線	縦位LR縄文	ナデ?		
78	2	S 19	1・2層	深鉢	大木10		波状	横線	縦位LR縄文	ミガキ	
78	3	S 19	1層	深鉢	大木10	平	横線	縦位LR縄文	ミガキ		
78	4	S 19	1層	深鉢	大木10		波状	横線	縦位LR縄文	ミガキ	
78	5	S 19	1・2層	深鉢	大木10		横線	縦位LR縄文	ミガキ		
78	6	S 19	1・2層	深鉢	大木10		横線	縦位LR縄文	ミガキ		
78	7	S 19	1・2層	深鉢	大木10	平	横線	縦位LR縄文	ミガキ		
78	8	S 19	1・2層	浅鉢	大木10		横線	斜位LR縄文	ミガキ		
78	9	S 19	1・2層	深鉢	大木10		横線	縦位LR縄文	ナデ?		
78	10	S 19	1・2層	深鉢	大木10		横線	縦・斜位LR縄文	ミガキ		
78	11	S 19	1・2層	浅鉢	大木10		ミガキ調整段線	縦位LR縄文	ミガキ	粗製	
78	12	S 19	1・2層	深鉢	大木10		横線	横位LR縄文	ミガキ		
78	13	S 19	1・2層	深鉢	大木10		横線	縦位LR縄文	ミガキ		
78	14	S 19	1・2層	深鉢	大木10		横線	縦位LR?	ミガキ		
78	15	S 19	1・2層	深鉢	大木10		横線	横位LR縄文	ミガキ		
78	16	S 19	1・2層	深鉢?	大木9・10	波状	ミガキ調整段線	縦位LR縄文	ミガキ		
78	17	S 19	1・2層	深鉢	粗製	平	ミガキ調整段線	縦位LR縄文	ミガキ		
79	1	S 19	1・2層	深鉢	大木10		ミガキ調整段線	縦位LR縄文 上下凹形突起	口縁沈線	ミガキ	
79	2	S 19	1・2層	深鉢	大木9・10			横・斜位LR縄文	ミガキ		
79	3	S 19	1・2層	深鉢	大木9・10		ミガキ調整段線	縦位LR縄文	ミガキ		
79	4	S 19	3層	浅鉢	大木9・10	平	ミガキ調整段線	縦位LR縄文	ナデ?		
79	5	S 19	1層	深鉢	粗製	平	横線	縦位LR縄文	ナデ?		
79	6	S 19	1・2層	深鉢	粗製	平	横線	縦位LR縄文	ミガキ		
80	1	S 19	1・2層	深鉢	粗製	平		縦位LR縄文	ミガキ		
80	2	S 19	1層	深鉢	粗製	平		縦位LR縄文	ミガキ		
80	3	S 19	1層	深鉢	粗製	平		縦位LR縄文	ミガキ		
80	4	S 19	1・2層	深鉢	粗製	平		縦位LR縄文	ミガキ		
80	5	S 19	1・2層	深鉢	粗製	平		斜位LR縄文	ミガキ		
80	6	S 19	1層	深鉢	粗製	平		縦位LR縄文	ミガキ		
80	7	S 19	1・2層	深鉢	粗製	平		縦位LR縄文	ミガキ		
80	8	S 19	1・2層	深鉢	粗製	平		横位LR縄文	ミガキ		
80	9	S 19	1層	浅鉢	粗製	波状		縦位LR縄文	ミガキ		
80	10	S 19	1層	注口壺形土器	大木10		横線	縦位LR縄文	ナデ	注口2孔	
80	11	S 19	2層	小形深鉢	粗製			縦位LR縄文	ナデ		
80	12	S 19	1層	砂台				ミガキ	ミガキ	透かし孔3	
80	13	S 19	1・2層	注口土器				縦位LR縄文	ナデ		
80	14	S 19	1層	両耳壺形土器	大木10			縦位LR縄文	ナデ	横状把手	
80	15	S 19	1層	深鉢	大木8b	平	ナ字調整段線	横位LR縄文	ミガキ		
80	16	S 19	1・2層	深鉢	大木9	小波状	ミガキ調整段線	研究	ミガキ		
80	17	S 19	1・2層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整段線	斜位LR縄文	ミガキ		
80	18	S 19	1・2層	深鉢	大木8b		ナ字調整段沈線	縦位LR縄文	ミガキ		
80	19	S 19	1・2層	深鉢	大木9		ミガキ調整段線	縦位LR縄文	ミガキ		
81	1	S 110	1層	深鉢	大木8b	平	ナ字調整段沈線	横位LR縄文	ミガキ		
81	2	S 110	4層	深鉢	大木9	小波状	ミガキ調整段沈線		ミガキ		
81	3	S 110	4層	深鉢	大木9	小波状	ミガキ調整段沈線		ミガキ		
81	4	S 110	1層	深鉢	大木9	平	横線	研究	ミガキ		

表5 縄文土器観察表

国庫 番号	国内 番号	遺構	出土位置	器種	型式	口縁	主な特殊文手法	地文	区画内備文	内面	備考
81	5	S110	1層	深鉢	大木8b	平	未調整隆帯	縦位LR縄文		ミガキ	
81	6	S110	1層	深鉢	大木8a	平	交互斜突			ミガキ	
81	7	S110	1層	浅鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
81	8	S110	4層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線			ミガキ	
81	9	S110	1層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線	縦位RL縄文		ミガキ	区81-13、 14、16と同一
81	10	S110	1層	浅鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線	縄文		ミガキ	
81	11	S110	1層	浅鉢	大木9		梳洗痕	縦位LR縄文		ミガキ	精製
81	12	S110	4層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦・横位RL縄文		ミガキ	
81	13	S110	1層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線	縦位RL縄文		ミガキ	
81	14	S110	1層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位RL縄文		ミガキ	区81-9、 14、16と同一
81	15	S110	1層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	区81-9、 13、16と同一
81	16	S110	1層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位RL縄文		ミガキ	区81-9、 13、14と同一
81	17	S111	5-10層	深鉢	大木8b	平	ナデ調整隆帯	縦位LR縄文		ミガキ	
81	18	S111	5-10層	深鉢	大木8b	平	ナデ調整隆帯	縦位LR縄文		ミガキ	
81	19	S111	1-4層	深鉢	大木9		ミガキ調整隆帯	縦位LR縄文		ミガキ	
81	20	S111	5-10層	深鉢	大木8b		ナデ調整隆帯	縦位LR縄文		ミガキ	
81	21	S111	5-10層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
81	22	S111	5-10層	浅鉢	大木9・10	平	ミガキ調整沈線			ミガキ	
81	23	S111	5-10層	深鉢	大木9		未調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
82	1	S111	伊2埋設	深鉢	大木10	波状	梳痕	縦位LR縄文		ミガキ	
82	2	S111	5-10層	深鉢	大木10	平	未調整沈線	横位RL縄文		ミガキ	
82	3	S111	5-10層	浅鉢	大木9	波状	ミガキ調整沈線			ミガキ	
82	4	S111	5-10層	深鉢	大木10	平	梳痕	縦位LR縄文		ミガキ	
82	5	S111	1-4層	深鉢	大木10		梳痕	縦・横位LR縄文		ミガキ	
82	6	S111	1-4層	深鉢	大木10		梳痕	横・斜位LR縄文		ミガキ	横状突起
82	7	S111	5-10層	深鉢	大木10	平	梳痕	縦位LR縄文		ミガキ	
82	8	S111	1-4層	深鉢	大木10	平	梳痕	縦位RL縄文		ミガキ	区82-9と 同一・精製
82	9	S111	1-4層	深鉢	大木10		梳痕	縦位RL縄文		ミガキ	区82-8と 同一・精製
82	10	S111	5-10層	深鉢	網取?		ナデ調整隆帯	未調整沈線		ミガキ	
82	11	S111	5-10層	浅鉢			未調整沈線			ミガキ	
83	1	S112	伊2埋設	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
83	2	S112	1層	深鉢	大木8b	平	ナデ調整隆帯	縦位LR縄文		ミガキ	
83	3	S112	P1	深鉢	大木8b	平	ナデ調整隆帯	縦位LR縄文		ミガキ	
83	4	S112	床直	深鉢	大木9	平	ミガキ調整隆帯	斜突		ミガキ	
83	5	S112	伊1埋設	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
83	6	S112	P2	深鉢	大木8b	波状	ナデ調整隆帯	縦位LR縄文		ミガキ	
83	7	S112	P2	浅鉢	大木9	波状	ミガキ調整隆帯	横位RL縄文		ミガキ	精製
83	8	S112	P2	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整隆帯			?	
83	9	S112	P2	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
83	10	S112	一拵	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整隆帯	縦位LR縄文		ミガキ	
83	11	S112	P2	帯毛土器	大木9	平	ミガキ調整沈線	縄文		ミガキ	
83	12	S112	P5	深鉢	大木9・10		ミガキ調整沈線	斜突		ミガキ	
83	13	S112	一拵	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
83	14	S112	一拵	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
83	15	S112	P7	器台				ナデ		ナデ 未調整沈線	
84	1	S112	伊2埋設	深鉢	大木9		未調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
84	2	S112	伊1埋設	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
84	3	S112	伊	深鉢	大木9		ミガキ調整隆帯	斜突		ミガキ	
84	4	S112	伊	深鉢	大木9		ミガキ調整隆帯	斜突 縦位LR縄文		ミガキ	
85	1	S112	P7	深鉢	大木8b		未調整沈線	縦位LR・RL縄文		ミガキ	
85	2	S112	P2	浅鉢	大木9		ミガキ調整隆帯	縦位LR縄文		ミガキ	
85	3	S112	P4	深鉢	大木10		梳痕	斜位LR縄文		ナデ?	
85	4	S113	船塚	浅鉢	大木8b		ナデ調整隆帯	斜位LR縄文		ミガキ	
85	5	S113	船塚	深鉢				縦位LR縄文		ミガキ	
85	6	S113	床直	浅鉢	大木8b	平	ナデ調整隆帯			ナデ	縦状突起
85	7	S113	P1	深鉢	大木8b	小波状	ナデ調整隆帯	縦位LR縄文		ミガキ	横状把手
85	8	S113	3層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
85	9	S113	P2	深鉢	大木9	平	ミガキ調整隆帯	横位LR縄文		ミガキ	
85	10	S113	P4	深鉢	大木8b	平	ナデ調整隆帯	横位LR縄文		ミガキ	
85	11	S113	P5	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整隆帯			ミガキ	
85	12	S113	P4	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整隆帯			ミガキ	
85	13	S113	P4	深鉢	大木10			縦位LR縄文		ナデ	

表5 縄文土器観察表

国史 番号	国内 番号	遺構	出土位置	器種	型式	口縁	主な埴輪文手法	地文	区画内地文	内面	備考	
	85	14	S 11.3	3層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線		縄文	ミガキ	
	85	15	S 11.3	3層	深鉢	大木9	平	ナリ調整沈線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	85	16	S 11.3	3層	壺状土器	大木9	波状	ミガキ調整沈線		縦位沈線	ミガキ	
	85	17	S 11.3	3層	深鉢	大木8b	平	ナリ調整沈線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	85	18	S 11.3	3層	深鉢	大木8b	平	ナリ調整沈線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	85	19	S 11.3	3層	深鉢	大木8b	平	ナリ調整沈線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	85	20	S 11.3	3層	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整沈線		ミガキ	ミガキ	
	85	21	S 11.3	3層	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整沈線		ミガキ	ミガキ	
	85	22	S 11.3	3層	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整沈線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	85	23	S 11.3	3層	深鉢	大木9・10	平	ミガキ調整沈線		縦位 RL 縄文	ミガキ	
	85	24	S 11.3	3層	深鉢	大木9	小波状	ミガキ調整沈線			ミガキ	
	85	25	S 11.3	3層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線		縦位 RL 縄文	ミガキ	
	85	26	S 11.3	3層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線		縦位 RL 縄文	ミガキ	
	85	27	S 11.3	3層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	86	1	S 11.3	3層	深鉢	大木9・10	平	ミガキ調整沈線		縦位 RL 縄文	ミガキ	
	87	1	S 11.3	切取段	深鉢	大木10	波状	横線		縦位 RL 縄文	ミガキ	
	87	2	S 11.3	3層	深鉢	大木9・10	平	ミガキ調整沈線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	87	3	S 11.3	3層	深鉢	大木9・10	平	横線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	87	4	S 11.3	3層	深鉢	粗製	平	横線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	87	5	S 11.3	3層	深鉢	粗製	平	ミガキ調整沈線		縦位 RL 縄文	ミガキ	
	87	6	S 11.3	3層	深鉢	大木10	横線			縦・横位 LR 縄文	ミガキ	
	87	7	S 11.3	3層	器台					ミガキ	環状孔2 漆 付着?	
	87	8	S 11.3	1・2層	深鉢	大木8b		ナリ調整沈線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	87	9	S 11.3	一括	深鉢	大木8b		ナリ調整沈線		横・斜位 LR 縄文	ミガキ	
	87	10	S 11.3	1・2層	深鉢	大木8b	平	ナリ調整沈線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	87	11	S 11.3	1・2層	深鉢	大木8b	平	ナリ調整沈線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	87	12	S 11.3	1・2層	深鉢	大木8b	平	ナリ調整沈線		横位 RL 縄文	ミガキ	
	87	13	S 11.3	1・2層	深鉢	大木8b		花調整沈線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	87	14	S 11.3	1・2層	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整沈線		ミガキ	ミガキ	
	87	15	S 11.3	1・2層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線		横位 RL 縄文	ミガキ	
	87	16	S 11.3	1・2層	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整沈線		斜角	ミガキ	
	87	17	S 11.3	3層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	87	18	S 11.3	1・2層	深鉢	大木9		和調整沈線		斜角	ミガキ	
	87	19	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10	波状	和調整沈線		縦・横位 LR 縄文	ミガキ	
	87	20	S 11.3	1・2層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	87	21	S 11.3	1・2層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線		縦・横位 LR 縄文	ミガキ	
	87	22	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線		縦・横位 LR 縄文	ミガキ	
	88	1	S 11.3	3層	深鉢	大木10	波状	横線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	88	2	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10	平	横線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	88	3	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10	波状	横沈線		縦位 RL 縄文	ミガキ	
	88	4	S 11.3	3層	浅鉢?	大木10	平	横線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	88	5	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10	波状	横沈線		縦位 RL 縄文	ミガキ	
	88	6	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10	波状	横線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	88	7	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10	波状	横線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	88	8	S 11.3	3層	深鉢	大木10		横線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	88	9	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10	平	横線		ミガキ	ミガキ	
	88	10	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10	波状	横線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
	88	11	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10		横線		縦・横位 RL 縄文	ミガキ	
	88	12	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線		ミガキ	ミガキ	
	89	1	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線		縦位 LR 縄文	刺突	ミガキ
	89	2	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線		縦位 LR 縄文		ミガキ
	89	3	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線		縦位 LR 縄文		ミガキ
	89	4	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線		縦・横位 LR 縄文	刺突	ナリ
	89	5	S 11.3	1・2層	深鉢	大木9・10		ミガキ調整沈線		縦位 LR 縄文		ミガキ
	89	6	S 11.3	1・2層	深鉢	大木9・10	平	ミガキ調整沈線		縦位 LR 縄文		ミガキ
	89	7	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線		縦位 LR 縄文		ミガキ
	89	8	S 11.3	1・2層	深鉢	大木9・10	平	ミガキ調整沈線		縦位 LR 縄文		ナリ
	89	9	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線		縦位 LR 縄文		ミガキ
	89	10	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10	小波状	和調整沈線		斜位 RL 縄文	刺突	ミガキ
	89	11	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線		縦位 LR 縄文		ミガキ
	89	12	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10	平	和調整沈線		縦位 R 横文		ミガキ
	89	13	S 11.3	1・2層	浅鉢	大木10	波状	ミガキ調整沈線		縦位 LR 縄文		ミガキ
	90	1	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10	平	横沈線		縦位 R 横文		ミガキ
	90	2	S 11.3	1・2層	深鉢	粗製	平	横線		縦位 LR 縄文		ミガキ
	90	3	S 11.3	1・2層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線		印刷刺突		ミガキ
	90	4	S 11.3	1・2層	小形鉢	粗製		ミガキ調整沈線		口縁横位 LR 縄文	胴部	ミガキ

表5 縄文土器観察表

国庫 番号	国内 番号	通稱	出土位置	器種	型式	口縁	主な様式文手法	地文	区画内備文	内面	備考
90	5	S113	1・2層	深鉢	大木10	流状	ミガキ調整沈線・梳沈線	刺突		ミガキ	波顶部注口 瘤状突起 精 製 区90-6 と同一
90	6	S113	1・2層	深鉢	大木10	流状	ミガキ調整沈線・梳沈線	刺突		ミガキ	波顶部瘤状孔 瘤状突起 精 製 区90-5 と同一
90	7	S113	1・2層	深鉢	粗製	平		斜位LR縄文		ミガキ	
90	8	S113	1・2層	深鉢	粗製	平	ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
90	9	S113	1・2層	深鉢	粗製	平		縦位LR縄文		ミガキ	
90	10	S113	1・2層	深鉢	粗製	平	ミガキ調整沈線	縦位RL縄文		ナデ	
90	11	S113	1・2層	深鉢	粗製	平		縦位RL縄文		ナデ	
90	12	S113	1・2層	深鉢				縦・斜位LR縄文		ミガキ	
90	13	S113	1・2層	深鉢				ナデ		ナデ	
90	14	S113	1・2層	深鉢				縦位RL縄文		ミガキ	溝飾孔(未穿 孔) 内外面有
90	15	S113	1・2層	深鉢				縦位LR縄文		ミガキ	
90	16	S113	1・3層	蓋				ナデ		ナデ	
91	1	S114	伊壇設	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
91	2	S114	伊	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ナデ	
91	3	S114	伊	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
91	4	S114	伊壇設	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
91	5	S114	伊	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦・横位LR縄文		ミガキ	
91	6	S114	伊	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦・横位LR縄文		ミガキ	区91-6と 同一
91	7	S114	伊2	深鉢	大木9	平	ナデ調整沈線	刺突		ミガキ	区91-5と 同一
91	8	S114	伊4	深鉢	粗製			縦位RL縄文		ナデ?	
91	9	S114	伊8層	深鉢	大木8b	平	ナデ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
91	10	S114	伊8層	小形深鉢	大木8b		粗調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
92	1	S129	伊	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦・斜位LR縄文		ミガキ	区92-3・4, 区92-2と 同一
92	2	S129	伊	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦・斜位LR縄文		ミガキ	区92-3・4, 区92-1と 同一
92	3	S114	1層	深鉢	大木8b	平	ナデ調整沈線			ナデ	
92	4	S114	1層	深鉢	大木8b	平	ナデ調整沈線	刺突		ミガキ	
92	5	S114	2層	深鉢	大木8b		ナデ調整沈線			ミガキ	
92	6	S114	1層	浅鉢	大木10	流状	梳線	縦位LR縄文		ミガキ	精製
92	7	S114	1層	深鉢	大木8b	平	粗調整沈線	円形刺突 縦位LR縄文		ミガキ	
92	8	S114	1層	深鉢	大木10		梳線	斜位LR縄文		ミガキ	
92	9	S114	1層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線	縄文		ミガキ	
92	10	S114	1層	深鉢	大木9・10		ミガキ調整沈線	縦位RL縄文		ミガキ	
92	11	S114	2層	深鉢	大木9		粗調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
92	12	S114	1層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	横位LR縄文		ミガキ	
92	13	S114	1層	深鉢	大木10		粗調整沈線	縦位条線文		ナデ	
92	14	S114	1層	深鉢	曹利			縦位条線文		ミガキ	
92	15	S114	一括	浅鉢	曹利			条線文		ミガキ	精製
92	16	S114	1層	浅鉢	大木9	流状	ミガキ調整沈線	縦位RL縄文		ミガキ	波顶部瘤状孔
93	1	S129	伊壇設	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線・除沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
93	2	S129	伊	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	内面付着物有
93	3	S129	伊	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦・斜位LR縄文		ミガキ	区93-4, 区93-1・2 と同一
93	4	S129	伊	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦・斜位LR縄文		ミガキ	区93-3, 区93-1・2 と同一
94	1	S128	伊	深鉢	大木8b		縦位未調整沈線			ミガキ	
94	2	S128	伊	深鉢	大木8b		ナデ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
94	3	S128	伊	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦・斜位LR縄文		ミガキ	
94	4	S115	伊-1層	深鉢	大木10	平	梳線	縦・横位LR縄文 刺突		ミガキ	
94	5	S115	伊-1層	深鉢	大木10	平	梳線	横位LR縄文		ミガキ	
94	6	S115	伊-1層	浅鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線	斜位LR縄文 刺突		ミガキ	
94	7	S115	伊壇設	深鉢	大木10			縦位LR縄文		ミガキ	
94	8	S115	伊壇設	深鉢	大木10		梳線	縦位・横位LR縄文		ミガキ	
95	1	S115	伊	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位沈線		ナデ	
95	2	S115	伊-1層	深鉢	大木9・10	平	ミガキ調整沈線	横位LR縄文		ミガキ	
95	3	S115	伊-1層	深鉢	大木9	流状	ミガキ調整沈線	縦・横位LR縄文		ミガキ	
95	4	S115	伊-1層	深鉢	大木10		梳線	縦位LR縄文 刺突		ミガキ	外面赤彩
95	5	S115	伊-1層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縄文		ミガキ	

表5 縄文土器観察表

国庫 番号	国内 番号	遺構	出土位置	器種	形式	口縁	主な埴輪文手法	地文	区画内地文	内面	備考
95	6	S115	炉・受皿	深鉢	管形			縦位条線文		ミガキ	
95	7	S115	床流	深鉢	大木9・10		ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
95	8	S115	床流	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
95	9	S115	床流	深鉢	大木10	平	横線	縦・斜位LR縹文		ミガキ	
95	10	S115	床流	深鉢	大木9		北調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
95	11	S115	1~4層	深鉢	大木8b		北調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
95	12	S115	1~4層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線			ミガキ	
95	13	S115	5層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線			ミガキ	
95	14	S115	1~4層	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整沈線			ミガキ	
95	15	S115	2層	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整沈線			ミガキ	
95	16	S115	1~4層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線			ミガキ	
95	17	S115	5層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
95	18	S115	5層	深鉢	大木9	小波状	ミガキ調整沈線	斜突		ミガキ	
95	19	S115	1~4層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
96	1	S115	5層	深鉢	大木9・10	平	ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
96	2	S115	1~4層	深鉢	大木9・10		ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
96	3	S115	1~4層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線			ミガキ	
96	4	S115	1~4層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
96	5	S115	1~4層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	斜突		ミガキ	
96	6	S115	5層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
96	7	S115	1~4層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
96	8	S115	1~4層	深鉢	大木10	波状	横線	ミガキ調整沈線		ミガキ	瘤状突起
96	9	S115	1~4層	深鉢	大木10	平	横線	縦位LR縹文		ミガキ	
96	10	S115	5層	深鉢?	大木10	波状	横線			ミガキ	精製
96	11	S115	1~4層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
96	12	S115	5層	深鉢	大木10	小波状	ミガキ調整沈線	斜突		ミガキ	
96	13	S115	1~4層	深鉢	大木9・10		ミガキ調整沈線	縹文		ミガキ	
96	14	S115	1~4層	深鉢				縦位LR縹文		ミガキ	
96	15	S116	一括	深鉢	大木8b	平	ナリ調整沈線	横位LR縹文		ミガキ	
96	16	S116	一括	深鉢	大木8b	波状	ナリ調整沈線	横位LR縹文		ミガキ	
96	17	S116	一括	深鉢	大木9	平	北調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
96	18	S116	一括	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
96	19	S116	一括	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
96	20	S116	一括	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
96	21	S116	一括	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
97	1	S117	炉壁設	壺形土器	大木10	平	横線			ミガキ	口縁：4単位 中央突起 赤
97	2	S117	炉	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
97	3	S117	床流	深鉢	大木10		横線	斜位LR縹文	斜突	ミガキ	
97	4	S117	1~2層	深鉢	大木8b	平	ナリ調整沈線	縦・斜位LR縹文		ミガキ	
97	5	S117	3層	深鉢	大木8b		ナリ調整沈線・沈線			ミガキ	
97	6	S117	3層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線	横位LR縹文		ミガキ	
97	7	S117	1~2層	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整沈線			ミガキ	
97	8	S117	3層	深鉢	大木8b	↓		縦位LR縹文		ミガキ	
97	9	S117	1~2層	深鉢	大木8b	平	ナリ調整沈線・沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
97	10	S117	1~2層	深鉢	大木8b	平	ナリ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
97	11	S117	1~2層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦・斜位LR縹文		ミガキ	
97	12	S117	1~2層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
97	13	S117	1~2層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線	斜突		ミガキ	
97	14	S117	1~2層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	斜突		ミガキ	
97	15	S117	3層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
97	16	S117	3層	深鉢	大木8b		ナリ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
97	17	S117	3層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
97	18	S117	1~2層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
97	19	S117	3層	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
97	20	S117	1~2層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦・斜位LR縹文		ミガキ	
97	21	S117	1~2層	深鉢?	大木9・10			縦位LR縹文		ミガキ	
97	22	S117	1~2層	深鉢	大木10		横沈線	縦・斜位LR縹文		ミガキ	
98	1	S117	一括	深鉢	大木10	平	横線	縦位LR縹文		ミガキ	外面付着物
98	2	S117	3層	深鉢	大木10	波状	ミガキ調整沈線	横線		ミガキ	
98	3	S117	1~2層	深鉢	大木10	波状	横線	縦位LR縹文		ミガキ	
98	4	S117	1~2層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
98	5	S117	1~2層	深鉢	大木10	波状	横線	縦位LR縹文		ミガキ	
98	6	S117	1~2層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	
98	7	S117	1~2層	深鉢	大木10	波状		縦位LR縹文		ミガキ	波頭部、口縁 化粧
98	8	S117	1~2層	深鉢?	大木10	波状	横線	縦位LR縹文		ミガキ	
98	9	S117	1~2層	深鉢?	大木9・10	平		ミガキ調整沈線		ミガキ	精製
98	10	S117	3層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦位LR縹文		ミガキ	

表5 縄文土器観察表

区画番号	区内番号	通構	出土位置	器種	型式	口縁	主な採掘手法	地文 区画内地文	内面	備考
98	11	S 1 1 7	3層	深鉢	粗製	平		縦位 LR 縄文	ミガキ	
98	12	S 1 1 7	3層	深鉢	大木9		和調整沈堀	縦位 RL 縄文	ミガキ	
98	13	S 1 1 7	1~2層	深鉢	粗製	平		縦位 LR 縄文	ミガキ	
99	1	S 1 2 4	伊壁設	深鉢	大木10	波状	ミガキ調整除堀・隆沈堀	縦位 RL 縄文 刺突	ミガキ	図99-2・100-1と同
99	2	S 1 2 4	伊壁設	深鉢	大木10		ミガキ調整除沈堀	縦位 RL 縄文	ミガキ	図99-1・100-1と同
99	3	S 1 2 4	伊	深鉢				縦位 LR 縄文	ミガキ	
99	4	S 1 2 4	伊	深鉢				縦位 LR 縄文	ミガキ	
99	5	S 1 2 4	伊	深鉢	大木10	横線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
99	6	S 1 2 4	伊	深鉢	大木10	横沈堀		縦位 LR 縄文	ミガキ	
99	7	S 1 2 4	伊	深鉢	大木10		ミガキ調整除沈堀	縦・横位 LR 縄文	ミガキ	
99	8	S 1 2 4	伊	深鉢	大木10	横線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
99	9	S 1 2 4	伊壁設	深鉢	大木10	横線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
99	10	S 1 2 4	伊壁設	深鉢	大木10	横線		縦位 LR 縄文	ミガキ	底部ミガキ
100	1	S 1 2 4	伊壁設	深鉢	大木10		ミガキ調整除沈堀	縦位 RL 縄文	ミガキ	図99-1・2と同
100	2	S 1 2 4	伊	深鉢	大木10		ミガキ調整除沈堀	縦・横位 LR 縄文	ナテ	
100	3	S 1 2 4	伊	深鉢	大木10	波状	横線	縦位 LR 縄文	ミガキ	
100	4	S 1 2 4	伊	深鉢	大木10	波状	横沈堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	
100	5	S 1 2 4	伊	深鉢	大木10	横線		縦位 LR 縄文	ミガキ	精製
101	1	S 1 2 4	凹溝	深鉢	大木9	小波状	ミガキ調整除沈堀	横位 LR 縄文	ミガキ	
101	2	S 1 2 4	凹溝	深鉢	大木9	平	ミガキ調整除堀	縦・横位 LR 縄文	ミガキ	
101	3	S 1 2 4	凹溝	深鉢	大木9		ミガキ調整除沈堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	
101	4	S 1 2 4	床直	深鉢	粗製			縦位 LR 縄文	ミガキ	
101	5	S 1 2 4	3~8層	深鉢	粗製			横位 LR 縄文	ミガキ	
101	6	S 1 2 4	凹溝	深鉢	大木8b		和調整沈堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	
101	7	S 1 2 4	床直	深鉢	大木10		ミガキ調整沈堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	
101	8	S 1 2 4	3~8層	深鉢	大木10		横沈堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	
101	9	S 1 2 4	3~8層	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整沈堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	
101	10	S 1 2 4	3~8層	深鉢	大木10	横線		縦位 LR 縄文	ミガキ	
101	11	S 1 2 4	3~8層	深鉢	粗製			縦位 LR 縄文	ミガキ	
101	12	S 1 2 4	3~8層	深鉢	曹利			縦位系縄文	ミガキ	
101	13	S 1 2 4	3~8層	浅鉢	大木10	平	ミガキ調整沈堀	縦位系縄文	ミガキ	精製
101	14	S 1 2 4	1~2層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	
101	15	S 1 2 4	1~2層	深鉢	大木9・10	平	ミガキ調整除堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	
101	16	S 1 2 4	1~2層	深鉢	大木9・10	平	ミガキ調整除沈堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	
101	17	S 1 2 4	1~2層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	
101	18	S 1 2 4	1~2層	深鉢	大木9		ミガキ調整除堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	
101	19	S 1 2 4	1~2層	深鉢	大木9		ミガキ調整除堀	刺突	ミガキ	
101	20	S 1 2 4	1~2層	深鉢	大木9		ミガキ調整除堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	
101	21	S 1 2 4	1~2層	深鉢	粗製	平	横線	縦位 LR 縄文	ミガキ	
102	1	S 1 2 4	1~2層	深鉢	大木10	波状	横線	横・斜位 RL 縄文 刺突	ミガキ	赤彩
102	2	S 1 1 8	P1	深鉢	大木8b	平	ナテ調整除堀・沈堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	内面付着物有
102	3	S 1 1 8	P1	深鉢	大木9	平	ミガキ調整除堀	刺突	ミガキ	
102	4	S 1 1 8	P1	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	
102	5	S 1 1 8	P1	深鉢	大木10	波状	ミガキ調整沈堀	縦・横位 LR 縄文	ミガキ	
102	6	S 1 1 8	P1	浅鉢?	大木9・10		ミガキ調整除堀・沈堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	
102	7	S 1 1 8	3層	浅鉢	大木10	平	ミガキ調整除堀		ミガキ	内外面赤彩 精製
102	8	S 1 1 8	3層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整除沈堀	横位 LR 縄文	ミガキ	
102	9	S 1 1 8	3層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	
102	10	S 1 1 8	3層	深鉢	大木9		ミガキ調整除堀・沈堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	
103	1	S 1 1 8	2層	深鉢	大木8b	平	ミガキ調整除堀		ミガキ	
103	2	S 1 1 8	2層	深鉢	大木9		ミガキ調整除堀		ミガキ	波瀾部突起
103	3	S 1 1 8	2層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整除堀	横位 LR 縄文	ミガキ	
103	4	S 1 1 8	2層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈堀	縦・斜位 LR 縄文	ミガキ	
103	5	S 1 1 8	2層	深鉢	大木10	横線	横沈堀	縦・横位 RL 縄文	ミガキ	
103	6	S 1 1 8	2層	深鉢	大木9		ミガキ調整除沈堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	
103	7	S 1 1 8	2層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整除沈堀・沈堀	縦・横位 LR 縄文	ミガキ	
103	8	S 1 1 8	2層	深鉢	大木9・10	横線	横線	縦位 LR 縄文	ミガキ	
103	9	S 1 1 8	2層	深鉢	大木9・10		横線	縦位 LR 縄文	ミガキ	
103	10	S 1 1 8	2層	深鉢	大木10		和調整沈堀	斜位 LR 縄文	ミガキ	
103	11	S 1 1 8	2層	深鉢	大木9・10		ミガキ調整沈堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	
103	12	S 1 1 8	2層	深鉢	粗製		ミガキ調整除堀	縦位系縄文	ミガキ	
103	13	S 1 1 8	2層	浅鉢	大木9・10		ミガキ調整除沈堀	円形刺突	ミガキ	
103	14	S 1 1 8	2層	浅鉢	大木9・10		ミガキ調整除沈堀		ミガキ	精製
104	1	S 1 1 8	1層	深鉢	大木8b	平	ナテ調整除沈堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	
104	2	S 1 1 8	1層	深鉢	大木8b	平	ナテ調整除堀	縦位 LR 縄文	ミガキ	



表5 縄文土器観察表

図録番号	図内番号	遺構	出土位置	器種	型式	口縁	主な特殊文手法	地文	区画内地文	内面	備考
104	3	S118	1層	深鉢	大木8b	平	ミガキ調整除縁・沈瀬	縦・斜位LR縹文		ミガキ	
104	4	S118	1層	深鉢	大木8b		ミガキ調整除縁			ミガキ	
104	5	S118	1層	深鉢	大木8b	波状	ミガキ調整除縁	縦位RL縹文		ミガキ	
104	6	S118	1層	深鉢	大木8b		ナリ調整除縁	縦・横位LR縹文		ミガキ	
104	7	S118	1層	深鉢	大木9		ミガキ調整除縁	縦位LR縹文		ミガキ	
104	8	S118	1層	深鉢	大木9		ミガキ調整除縁	縦位LR縹文 刺突		ミガキ	
104	9	S118	1層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整除縁	円形刺突		ミガキ	
104	10	S118	1層	深鉢	大木9		ミガキ調整除縁	縦位LR縹文		ミガキ	
104	11	S118	1層	深鉢?	大木9	平	ミガキ調整除縁	刺突		ミガキ	
104	12	S118	1層	浅鉢?	大木9	波状	横瀬 ミガキ調整除縁	縦・横位LR縹文		ミガキ	図104-15 上同一?
104	13	S118	1層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整除縁	刺突		ミガキ	
104	14	S118	1層	深鉢	大木9		ミガキ調整除縁			ミガキ	
104	15	S118	1層	浅鉢?	大木9	波状	横瀬 ミガキ調整除縁	縦・横位LR縹文		ミガキ	図104-11 上同一?
104	16	S118	1層	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整除縁			ミガキ	
104	17	S118	1層	深鉢	大木9		ミガキ調整除縁	縦位RL縹文		ミガキ	
105	1	S118	1層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈瀬	縦位RL縹文		ミガキ	
105	2	S118	1層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈瀬	縦位RL縹文		ミガキ	
105	3	S118	1層	深鉢	大木9		ミガキ調整除縁	縦・横位LR縹文		ミガキ	
105	4	S118	1層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈瀬	縦位LR縹文		ミガキ	
105	5	S118	1層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈瀬	縦・横位LR縹文		ミガキ	
105	6	S118	1層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈瀬	横位LR縹文		ミガキ	
105	7	S118	1層	深鉢	大木9・10		ミガキ調整沈瀬	縦位RL縹文		ミガキ	
105	8	S118	1層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈瀬	縦位LR縹文 刺突		ミガキ	
105	9	S118	1層	深鉢	大木10	平	横瀬			ミガキ	
105	10	S118	1層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整除縁	縦・横位LR縹文		ミガキ	
105	11	S118	1層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈瀬	縦・横位LR縹文		ミガキ	
105	12	S118	1層	深鉢	大木10	平	横瀬	縦位LR縹文		ミガキ	
105	13	S118	1層	深鉢	大木10	波状	横瀬	縦・横位LR縹文		ミガキ	植付孔有
105	14	S118	1層	浅鉢	大木10	波状	横瀬 ミガキ調整沈瀬	縦・横位LR縹文		ミガキ	
105	15	S118	1層	深鉢	大木10		横瀬	横位刺突		ミガキ	
105	16	S118	1層	浅鉢	大木10		ミガキ調整沈瀬	縦・横位LR縹文		ミガキ	精製
105	17	S118	1層	深鉢	大木10		横瀬	縦・横位LR縹文		ミガキ	
105	18	S118	1層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈瀬	縦位LR縹文		ミガキ	
106	1	S118	1層	深鉢	大木10		横瀬	縦位LR縹文		ミガキ	
106	2	S118	1層	深鉢	大木9・10		横瀬	斜位LR縹文		ミガキ	
106	3	S118	1層	深鉢	大木10		横瀬	縦位LR縹文		ミガキ	
106	4	S118	1層	深鉢	大木10		横瀬	刺突		ミガキ	
106	5	S118	1層	深鉢	大木10	波状	和調整沈瀬	縦位L熱赤文		ミガキ	波頂部環状孔
106	6	S118	1層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈瀬	縦位R熱赤文		ミガキ	
106	7	S118	1層	深鉢	大木10	波状	和調整沈瀬	横・斜位LR縹文 円形刺突		ミガキ	内面付着物有
106	8	S118	1層	深鉢	大木10	平	和調整沈瀬	縦位LR縹文		ミガキ	
106	9	S118	1層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈瀬	縦位R熱赤文 円形刺突		ミガキ	
106	10	S118	1層	深鉢	大木10		和調整沈瀬	縦位LR縹文 刺突		ミガキ	
106	11	S118	1層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈瀬	縦位L熱赤文		ミガキ	
106	12	S118	1層	深鉢	粗製	平	ミガキ調整沈瀬	縦位LR縹文		ミガキ	
106	13	S118	1層	深鉢	粗製	平	ナリ調整沈瀬	縦位RL縹文		ミガキ	
106	14	S118	1層	深鉢	粗製	平	ミガキ調整除縁	縦位RL縹文		ミガキ	
107	1	S118	1層	甕形土器	大木10	波状	横瀬			ミガキ	縦位瘤状突起 胴部下位に熱 成後穿孔 内 外面赤彩
107	2	S118	1層	浅鉢	大木10	波状	ミガキ調整除縁	条縹文		ミガキ	精製 波頂部 環状孔
107	3	S118	1層	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整除縁			ミガキ	ナリ 波頂部環状孔 横状突起
107	4	S118	1層	浅鉢	大木9	波状	ミガキ調整除縁	縦位RL縹文		ミガキ	波頂部注口
107	5	S118	1層	甕形土器	大木9	平		ミガキ		ミガキ	口縁内外露ミ ガキ調整沈瀬
107	6	S118	1層	深鉢	大木8b	波状	ナリ調整除縁			ミガキ	
107	7	S118	1層	圓耳壺	大木10			縦・横位LR縹文 刺突		ミガキ	ナリ 横状把手
107	8	S118	1層	深鉢	大木9・10		ミガキ調整除縁			ミガキ	
107	9	S118	1層	浅鉢	大木9・10		ミガキ調整沈瀬			ミガキ	
107	10	S118	1層	卵台				縦・横位LR縹文		ミガキ	精製 透かし孔1
107	11	S118	1層	深鉢	粗製	平	ミガキ調整沈瀬	縦位条縹文		ミガキ	
107	12	S118	1層	深鉢	粗製	平	和調整沈瀬	縦位LR縹文		ミガキ	
107	13	S118	1層	深鉢	粗製			縦・斜位条縹文		ミガキ	
107	14	S118	1層	深鉢	費利式		筋み付隆帯	縦位未調整沈瀬		ミガキ	ナリ
107	15	S118	1層	深鉢	粗製			縦位LR縹文		ミガキ	

表5 縄文土器観察表

国庫 番号	区内 番号	遺構	出土位置	器種	型式	口縁	主な特殊文手法	地文	区内地文	内面	備考
108	1	S118	1層	深鉢	粗製	平		縦位LR縄文		ケズ刀 上同一	
108	2	S118	1層	深鉢	粗製	平		縦位LR縄文		ミガキ	
108	3	S118	1層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ナテ	
108	4	S118	1層	深鉢	粗製			縦位赤縄文		ミガキ	
108	5	S119	1層	深鉢	大木8b		和調整沈線	縦位RL縄文		ミガキ	
108	6	S119	1層	深鉢	大木8b	平	ミガキ調整沈線	横位LR縄文		ミガキ	
108	7	S119	1層	深鉢	大木10		横線	縦・斜位RL縄文		ミガキ	
108	8	S119	3層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線	縦・横位LR縄文		ミガキ	
108	9	S120	1層	深鉢	大木8b	平	ナテ調整沈線	横位LR赤縄文		ミガキ	
108	10	S120	1層	深鉢	大木8b	平	ナテ調整沈線	横位LR縄文		ミガキ	
108	11	S120	1層	深鉢	大木8b	波状	ナテ調整沈線			ミガキ	
108	12	S120	1層	深鉢	大木8b		和調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
108	13	S120	1層	深鉢	大木8b		和調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	図108-13 上同一
108	14	S120	1層	深鉢	大木8b		ナテ調整沈線	横位赤縄文		ミガキ	図108-12 上同一
109	1	S120	1層	深鉢	大木8b	平	ナテ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	指状突起 透孔有 貫
109	2	S120	1層	深鉢	大木8b	平	ナテ調整沈線・沈線	縦・横位RL縄文		ミガキ	
109	3	S120	1層	深鉢	大木8b	平	ナテ調整沈線・沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
109	4	S120	1層	深鉢	大木8b	平	ナテ調整沈線	縦位RL縄文		ミガキ	
109	5	S120	1層	深鉢	大木8b	平?	ナテ調整沈線			ミガキ	指状突起 透孔有 貫
109	6	S120	1層	深鉢	大木8b		ナテ調整沈線			ミガキ	指状突起 透孔有 貫
110	1	S125	伊壁設	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
110	2	S126	3層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線	斜突		ミガキ	
110	3	S126	別溝	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線	縦位LR縄文 斜突		ミガキ	
110	4	S126	別溝	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線	横位LR縄文		ミガキ	
110	5	S126	3層	深鉢	大木10		横線	縦・斜位LR縄文		ミガキ	
110	6	S126	3層	深鉢	大木9・10	平	ミガキ調整沈線	縦位LR縄文 斜突		ミガキ	
110	7	S130	一括	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
110	8	S130	一括	浅鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	精製
110	9	S132	一括	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位RL縄文		ミガキ	
110	10	S132	一括	深鉢	大木8b		ナテ調整沈線			ミガキ	
110	11	S132	一括	深鉢	大木8b		ナテ調整沈線	横位LR縄文		ミガキ	
110	12	S132	一括	深鉢	大木9・10	平	ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
110	13	S132	一括	深鉢	大木8b		ナテ調整沈線	横位LR縄文		ミガキ	
110	14	S132	一括	小形深鉢	大木8b	波状	和調整沈線	縦位RL縄文		ミガキ	波頭部内面凹 影削突
111	1	2号伊鉢	伊b埋設	深鉢	大木10		和調整沈線	縦位LR縄文		ナテ	
111	2	2号伊鉢	伊a埋設	深鉢	大木10			縦位LR縄文		ミガキ	
112	1	1号伊鉢	確認面	深鉢	大木9	波状	和調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
112	2	1号伊鉢	埋設土器	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
112	3	1号伊鉢	確認面	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線	縦位RL縄文		ミガキ	
113	1	1号伊鉢	埋設土器	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
113	2	3号伊鉢	埋設土器	粗製				横位LR縄文		ミガキ	
113	3	1・2号伊鉢	確認面	浅鉢	大木9・10	小波状	ミガキ調整沈線			ミガキ	精製
113	4	1・2号伊鉢	確認面	深鉢	大木8b	平	和調整沈線			ミガキ	
113	5	1・2号伊鉢	確認面	浅鉢?	大木9	小波状	ミガキ調整沈線 横線	円形削突		ミガキ	精製
113	6	1・2号伊鉢	確認面	深鉢	大木10	波状	横線	縦・斜位LR縄文		ナテ?	
113	7	1・2号伊鉢	確認面	深鉢	粗製	平		縦位付加角2種RL+R 縄文		ミガキ	
113	8	1・2号伊鉢	確認面	深鉢				縦位LR縄文		ミガキ	
113	9	1・2号伊鉢	確認面	注口土器	大木10	波状	横線	縦位LR縄文		ミガキ	波頭部注口付 半円形削突
114	1	SM1	埋設土器	深鉢	粗製	平	横線	横位RL縄文		ミガキ	
114	2	SM2	埋設土器	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
114	3	SM5	埋設土器	深鉢	大木8b		和調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
114	4	SM3	埋設土器	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位RL縄文		ミガキ	
114	5	SM6	埋設土器	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
115	1	SM4	埋設土器	深鉢	大木9		和調整沈線	縦位LR縄文 赤縄文		ナテ	
115	2	SM4	一括	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線	縦・斜位LR縄文		ミガキ	図115-3と 同一
115	3	SM4	一括	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦・斜位LR縄文		ミガキ	図115-2と 同一

表5 縄文土器観察表

図録 番号	図内 番号	通稱	出土位置	器種	型式	口縁	主な特殊文手法	地文	区画内施文	内面	備考
	115	4	SK 1	一拵	深鉢	大木10	横線				ミガキ
	115	5	SK 2	一拵	深鉢	大木9	ミガキ調整沈線	縦位 LR 横文			ミガキ
	115	6	SK 3	一拵	深鉢	大木9	ミガキ調整沈線	縦位 RL 横文			ナデ
	115	7	SK 3	一拵	深鉢	大木9	ミガキ調整沈線	縦位 LR 横文			ミガキ
	115	8	SK 5	一拵	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線・沈線	横位 LR 横文		ミガキ
	116	1	SK 5	一拵	深鉢	大木8b	平	ナデ調整沈線・隆線	縦位 RL 横文		ミガキ
	116	2	SK 5	一拵	深鉢	大木8b	平	調整沈線	縦位 RL 横文		ミガキ
	116	3	SK 5	一拵	深鉢	大木8b	ナデ調整沈線	縦位 LR 横文			ミガキ
	116	4	SK 5	一拵	深鉢	大木10	平	横線	縦位 RL 横文		ミガキ
	116	5	SK 5	一拵	深鉢	大木10	横線	縦位 LR 横文			ミガキ
	116	6	SK 5	一拵	深鉢	大木9・10		ミガキ調整沈線	縦位 LR 横文		ミガキ
	116	7	SK 5	一拵	深鉢	大木9・10		ミガキ調整沈線	縦位 LR 横文		ミガキ
	116	8	SK 6	一拵	浅鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線	縦位 LR 横文		ミガキ
	116	9	SK 6	一拵	深鉢	粗盤		縦位 RL 横文			ミガキ
	116	10	SK 6	一拵	深鉢	大木10	横線	斜交	縦位 LR 横文		ミガキ
	116	11	SK 6	一拵	深鉢	大木9・10		ミガキ調整沈線	縦位 LR 横文		ミガキ
	116	12	SK 6	一拵	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦・横位 LR 横文		ミガキ
	116	13	SK 6	一拵	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線	縦・横位 LR 横文		ミガキ
	116	14	SK 6	一拵	鉢	粗盤		ミガキ調整沈線	縦位 LR 横文		ミガキ 内面付着物有
	116	15	SK 6	一拵	深鉢	大木8b	ナデ調整沈線	縦位 RL 横文			ナデ
	116	16	SK 6	一拵	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線			ミガキ
	116	17	SK 6	一拵	深鉢	大木10	波状		縦位 L 無施文		ミガキ
	116	18	SK 6	一拵	深鉢	曹利式			縦位沈線		ミガキ
	116	19	SK 6	雜設	付付鉢	大木9・10		ミガキ調整沈線	縦位 LR 横文		ミガキ 精製
	117	1	SK 8	一拵	深鉢	大木10	和調整沈線		縦位 RL 横文		ミガキ
	117	2	SK 8	一拵	深鉢	底部					ナデ 底面：ナデ
	117	3	SK 8	一拵	深鉢	大木9・10		ミガキ調整沈線	縦位 RL 横文		ミガキ
	117	4	SK 9	一拵	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線			ミガキ
	117	5	SK 9	一拵	深鉢	大木8b	和調整沈線	縦位 RL・LR 横文			ミガキ
	117	6	SK 9	一拵	深鉢	大木10	横線	縦・横位 LR 横文			ミガキ
	117	7	SK 9	一拵	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦・横位 LR 横文		ミガキ
	117	8	SK 10	一拵	深鉢	大木9		ミガキ調整沈線	縦位 LR 横文		ミガキ
	117	9	SK 7	2層	深鉢	大木8b	ナデ調整沈線	横位 LR 横文			ミガキ 内面付着物有
	117	10	SK 7	1層	深鉢	大木8b	ナデ調整沈線	LR 押し横文			ミガキ
	117	11	SK 7	1層	深鉢	大木8b		ミガキ調整沈線			ミガキ
	117	12	SK 7	1層	深鉢	大木8b	和調整沈線	縦位 LR 横文			ミガキ
	117	13	SK 7	2層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線・沈線	縦位 LR 横文		ミガキ
	117	14	SK 7	2層	深鉢	大木10	波状	ミガキ調整沈線	縦位 RL 横文		ミガキ 図119-2・4 と同一
	118	1	SK 7	2層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線	横線	縦位 RL 横文	ミガキ 図118-1と 同一
	118	2	SK 7	2層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線	横線	縦位 RL 横文	ミガキ 図118-2と 同一
	119	1	SK 7	1層	深鉢	大木10	横線		縦位 LR 横文		ミガキ
	119	2	SK 7	1層	深鉢	大木10		調整沈線	縦位 RL 横文		ミガキ 図117-14・ 119-4と同 一
	119	3	SK 7	2層	深鉢	大木10?		調整沈線	縦位 RL 横文		ミガキ 図117-14・ 119-2と同 一
	119	4	SK 7	1層	深鉢	大木9		調整沈線	横文		ミガキ
	119	5	SK 7	1層	深鉢	大木10	平	調整沈線・沈線	縦位 LR 横文		ミガキ
	119	6	SK 7	1層	深鉢	大木10	平	調整沈線・沈線	縦位 LR 横文		ミガキ
	119	7	SK 7	2層	深鉢	大木10	平	ミガキ調整沈線	縦・横位 RL 横文		ミガキ
	119	8	SK 7	2層	深鉢	大木10	波状		縦位 LR 横文		ミガキ
	119	9	SK 7	2層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦・斜位 LR 横文		ミガキ
	119	10	SK 7	1層	深鉢	大木9・10	平	ミガキ調整沈線			ミガキ
	119	11	SK 7	2層	深鉢	大木9・10		ミガキ調整沈線	縦位 LR 横文		ミガキ
	119	12	SK 7	1層	深鉢	大木9	平	ミガキ調整沈線・隆線	縦位 RL 横文		ナデ
	119	13	SK 7	3層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦位 RL 横文		ミガキ 赤彩
	119	14	SK 7	2層	深鉢	大木9・10		ミガキ調整沈線	縦位 LR 横文		ミガキ
	119	15	SK 7	1層	深鉢	大木10		ミガキ調整沈線	縦位 RL 横文		ミガキ
	120	1	SK 13	一拵	深鉢	大木10	平		縦位 LR 横文		ミガキ
	120	2	SK 18	一拵	深鉢	大木8b	平	ナデ調整沈線	横位 LR 横文		ミガキ
	120	3	SK 18	一拵	深鉢	大木8b		ナデ調整沈線	縦位 LR 横文		ミガキ
	120	4	SK 19	2層	深鉢	大木8b	波状	ナデ調整沈線			ミガキ 環状孔付突起
	120	5	SK 19	1層	深鉢	大木8b	波状	ナデ調整沈線・沈線	縦位 RL 横文		ミガキ
	120	6	SK 19	一拵	深鉢	大木8b		ナデ調整沈線			ミガキ 環状孔付突起
	120	7	SK 19	1層	深鉢	大木8b		ナデ調整沈線	縦位 LR 押し横文		ミガキ
	120	8	SK 19	1層	深鉢	大木8b		ナデ調整沈線	横位 LR 横文		ミガキ
	120	9	SK 19	一拵	深鉢	大木9	波状		縦位 RL 横文		ミガキ

表5 縄文土器観察表

図録番号	図内番号	通稱	出土位置	器種	型式	口縁	主な様式文手法	地名	区画内備文	内面	備考	
	120	10	SK 19	1層	深鉢	大木8b	ナ字調整段縁	縦位LR縄文		ナ字		
	120	11	SK 19	2層	深鉢	大木8b	ナ字調整段縁	縦位LR縄文		ミガキ		
	120	12	SK 19	1層	深鉢	大木8b	ナ字調整段縁	縦位LR縄文		ミガキ		
	120	13	SK 19	2層	深鉢	大木8b	ミガキ調整段縁	縦位LR縄文		ミガキ		
	120	14	SK 19	2層	深鉢	大木8b	ナ字調整段縁	縦位LR縄文		ミガキ		
	120	15	SK 19	2層	浅鉢	大木8b	ナ字調整段縁	縦位LR縄文		ミガキ		
	120	16	SK 19	一括	深鉢	大木10	波状	ミガキ調整段縁	縦位LR縄文	ミガキ		
	120	17	SK 19	一括	深鉢	曹利式	隆帯	縦位沈線		ミガキ		
	120	18	SK 19	一括	浅鉢	大木8b	平	縦位系縄文		ミガキ		
	121	1	SK 21	一括	深鉢	大木8b	ナ字調整段縁	縦位LR縄文		ミガキ	図121-3と同一	
	121	2	SK 21	一括	深鉢	大木8b	平	ナ字調整段縁	縦・横位LR縄文	ミガキ		
	121	3	SK 21	一括	深鉢	大木8b	平	ナ字調整段縁	縦位LR縄文	ミガキ	図121-1と同一	
	121	4	SK 21	一括	深鉢	大木8b	平	ナ字調整段縁	縦位LR縄文	ミガキ		
	121	5	SK 21	一括	深鉢	大木8b	平	ナ字調整段縁	斜位沈線	ミガキ		
	121	6	SK 21	一括	深鉢	大木8b	平	ナ字調整段縁	横位LR押圧縄文	ミガキ		
	121	7	SK 21	一括	深鉢	大木8b	平	ナ字調整段縁	引状沈線	ミガキ		
	121	8	SK 21	一括	浅鉢?	大木8b	小波状	ナ字調整段縁	未調整沈線	ミガキ	精製	
	121	9	SK 24	一括	深鉢	大木8b	ナ字調整段縁	縦位RL縄文		ミガキ		
	122	1	SK 50	一括	深鉢	大木9	ナ字調整段縁	横位LR縄文		ミガキ		
	122	2	SK 50	一括	深鉢	大木10	ナ字調整段縁	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	3	SK 51	一括	深鉢	大木10	横線	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	4	SK 51	一括	深鉢	大木9・10	ナ字調整段縁	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	5	SK 52	一括	浅鉢	大木10	波状	ミガキ調整段縁	縦・横位LR縄文	ミガキ	外面付着物精製	
	122	6	SK 54	一括	深鉢	大木10	横線	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	7	SK 54	一括	深鉢	大木10	ナ字調整段縁	斜突		ミガキ	図122-8と同一	
	122	8	SK 54	一括	深鉢	大木10	ナ字調整段縁	縦位LR縄文		ナ字	図122-7と同一	
	122	9	SK 54	一括	深鉢	大木10	横線	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	10	SK 54	一括	深鉢	大木10	横線	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	11	SK 55	一括	深鉢	大木9	ミガキ調整段縁	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	12	SK 55	一括	深鉢	大木8b	ナ字調整段縁	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	13	SK 56	一括	深鉢	大木8b	未調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ	縦状孔	
	122	14	SK 56	一括	深鉢	大木9	縄文	縄文		ミガキ		
	122	15	SK 58	一括	深鉢	大木8b	未調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	16	SK 58	一括	深鉢	大木8b	未調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	17	SK 59	一括	深鉢	大木9	ミガキ段縁	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	18	SK 59	一括	深鉢	大木9・10	ミガキ段縁	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	19	SK 64	一括	深鉢	大木8b	ナ字段縁	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	20	SK 64	一括	浅鉢	大木10	ミガキ段縁	縦位LR縄文		ミガキ	精製	
	122	21	SK 65	一括	深鉢	大木8b	ミガキ調整段縁	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	22	SK 65	一括	深鉢	大木8b	未調整沈線	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	23	SK 65	一括	深鉢	胎凸	ナ字調整段縁	ミガキ		ミガキ		
	122	24	SK 77	一括	深鉢	大木9	ミガキ調整段縁	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	25	SK 85	一括	深鉢	大木9	ミガキ調整段縁	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	26	SK 87	一括	深鉢	大木9	ミガキ調整段縁	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	27	SK 87	一括	深鉢	大木9	ミガキ段縁	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	28	SK 67	底面	深鉢	大木8b	ナ字調整段縁	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	29	SK 88	一括	深鉢	大木10	横線	縦位LR縄文	斜突	ミガキ		
	122	30	SK 88	一括	深鉢	大木9	ミガキ段縁	横・斜位RL縄文		ミガキ		
	122	31	SK 88	一括	深鉢	曹利	波状隆帯	条線		ミガキ		
	122	32	SK 88	一括	深鉢	大木9	ナ字調整段縁	縦位LR縄文		ミガキ		
	122	33	SK 88	一括	深鉢	大木9	ミガキ調整段縁	横位LR縄文		ミガキ		
	123	1	PG 1-P 72	一括	深鉢	大木9	平	ミガキ調整段縁	縦位RL縄文	ミガキ		
	123	2	PG 1-P 70	一括	深鉢	ミニチュア	平			ナ字		
	123	3	PG 5	一括	深鉢	粗製	ナ字調整段縁	縦位LR縄文		ミガキ		
	123	4	PG 5	一括	深鉢	大木8b	ナ字調整段縁	縦位RL縄文		ミガキ		
	123	5	P 28	一括	深鉢	大木9	平	ナ字調整段縁	縦位LR縄文	ミガキ		
	123	6	P 105	一括	深鉢	大木9	平	ミガキ調整段縁	縦位LR縄文	ミガキ		
	123	7	L IV	一括	深鉢	大木8b	波状	ナ字調整段縁	縦位LR縄文	ミガキ		
	123	8	L IV	一括	深鉢	大木8b	平	ナ字調整段縁	縦位LR縄文	ミガキ		
	123	9	L IV	一括	深鉢	大木8	未調整沈線	縦位RL縄文		ミガキ		
	124	1	L IV	一括	深鉢	大木8b	平	ミガキ調整段縁	未調整沈線	縦位R 胎凸?文	ミガキ	縦状突起
	124	2	L III	一括	深鉢	大木8b	波状	ナ字調整段縁	隆帯	縦位RL縄文	ミガキ	縦状突起
	124	3	L IV	一括	深鉢	大木8b	調整段縁	隆帯		ミガキ		
	124	4	S 14	一括	胎床	深鉢	大木8b	ナ字調整段縁	縦位LR縄文	ミガキ		

表5 縄文土器観察表

国庫 番号	国内 番号	遺構	出土位置	器種	型式	口縁	主な様式手法	地文	区画内地文	内面	備考
124	5	LⅣ		深鉢	大木8b	波状	ナギ調整隆沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
124	6	LⅣ		深鉢	大木8b		ナギ調整隆沈線	縦位LR縄文		ナギ	
124	7	LⅢ		深鉢	大木8b	波状	ナギ調整隆沈線・隆沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
124	8	LⅢ		深鉢	大木8b	平	ナギ調整隆沈線・隆沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
124	9	S12	床直	深鉢	大木8b	平	ナギ調整隆沈線	縦位LR縄文		ナギ	
124	10	LⅣ		深鉢	大木8a		和調整隆沈線 交互削突			ミガキ	
124	11	S123	床直	深鉢	大木8b		和調整隆沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
124	12	LⅣ		深鉢	大木8b		ナギ調整隆沈線	縦位LR縄文		ナギ	底部ミガキ
124	13	LⅣ		深鉢	大木8b	平	ナギ調整隆沈線 隆沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
124	14	LⅢ		深鉢	大木8b		和調整隆沈線	縦位LR縄文		ナギ	
124	15	LⅡ		深鉢	大木8b		和調整隆沈線			ナギ	
124	16	LⅣ		深鉢	大木8b		削突	縦位RL縄文		ミガキ	
124	17	LⅢ		深鉢	大木8b		和調整隆沈線 削突	縦位RL縄文		ミガキ	
125	1	LⅡ		深鉢	大木8b	小波状	ナギ調整隆沈線			ミガキ	
125	2	LⅣ		深鉢	大木8b	小波状	ナギ調整隆沈線・隆沈線	縦位LR縄文		短沈線	ミガキ
125	3	LⅣ		深鉢	大木8b	波状	ナギ調整隆沈線	縦・横位LR縄文		ミガキ	
125	4	LⅢ		深鉢	大木8b	波状	ミガキ調整隆沈線			ミガキ	底部環状孔
125	5	LⅣ		深鉢	大木9	波状	ナギ調整隆沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
125	6	S14	PS	深鉢	大木9		ミガキ調整隆沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
125	7	LⅣ		深鉢	大木9	波状	ナギ調整隆沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
125	8	LⅣ		深鉢	大木9	波状	ミガキ調整隆沈線	縦・斜位LR縄文		ミガキ	
125	9	LⅣ		深鉢	大木9	平	ミガキ調整隆沈線	縦位RL縄文		ミガキ	
125	10	LⅣ		深鉢	大木9	平	ミガキ調整隆沈線	斜位RL縄文		ミガキ	
125	11	LⅣ		深鉢	大木9	平	ミガキ調整隆沈線	縦位RL縄文		ミガキ	
125	12	LⅣ		深鉢	大木9	平	ミガキ調整隆沈線・隆沈線 赤 調整隆沈線	縦位RL縄文		ミガキ	内面付着物有
125	13	LⅡ		深鉢	大木9	波状	調整隆沈線	斜位LR縄文		ミガキ	
125	14	LⅣ		深鉢	大木9	波状	ミガキ調整隆沈線	縦位赤縄文		ミガキ	内面付着物有
126	1	LⅡ		深鉢	大木9	平	ミガキ調整隆沈線	横位RL縄文		ミガキ	
126	2	LⅢ		深鉢	大木9	波状	ミガキ調整隆沈線	横位LR縄文		ミガキ	底部環状孔 赤沈突起
126	3	S14	PS	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整隆沈線	羽状短沈線		ミガキ	精製
126	4	S14	船床	深鉢	大木9		ミガキ調整隆沈線	縦位LR縄文		ミガキ	精製
126	5	LⅣ		深鉢	大木9	波状	ミガキ調整隆沈線	縦位LR縄文		ナギ?	
126	6	LⅣ		深鉢	大木9	波状	ミガキ調整隆沈線 削突	縦位LR縄文		ナギ	
126	7	LⅣ		深鉢	大木9	波状	ミガキ調整隆沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
126	8	LⅢ		浅鉢	大木9	波状	ミガキ調整隆沈線			ミガキ ナギ	精製
126	9	LⅣ		浅鉢	大木9	波状	ミガキ調整隆沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
126	10	LⅣ		深鉢	大木9		ミガキ調整隆沈線	縦・横位赤縄文		ミガキ	
126	11	LⅣ		深鉢	大木9	小波状	ミガキ調整隆沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
126	12	LⅣ		深鉢	大木9	平	ミガキ調整隆沈線	縦位RL縄文		ミガキ	
126	13	S14	船床	深鉢	大木9	波状	ミガキ調整隆沈線	ミガキ調整隆沈線		ミガキ	
126	14	S14	床直	深鉢	大木9	平	ミガキ調整隆沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
126	15	LⅣ		浅鉢	大木9	波状	ミガキ調整隆沈線	縦位LR縄文		ミガキ	精製
126	16	S14	船床	深鉢	大木9	平	ミガキ調整隆沈線	縦位RL縄文		ミガキ	
127	1	LⅢ		深鉢	大木10	平	ミガキ調整隆沈線	縦・横位LR縄文		ミガキ	
127	2	LⅣ		深鉢	大木10	波状	ミガキ調整隆沈線	縦・横位LR縄文		ミガキ	
127	3	LⅣ		深鉢	大木10	波状	ミガキ調整隆沈線	縦・横位LR縄文		ミガキ	
127	4	S11	船床	深鉢	大木10	平	ミガキ調整隆沈線	縄文?		ミガキ	
127	5	S14	船床	深鉢	大木10	平	ミガキ調整隆沈線	縦・横位LR縄文 削突		ミガキ	
127	6	LⅢ		深鉢	大木9・10	波状	ミガキ調整隆沈線 精沈線	縦位RL縄文		ミガキ	
127	7	LⅢ		深鉢	大木9・10	平	ミガキ調整隆沈線	縦位RL縄文		ミガキ	
127	8	LⅢ		深鉢	大木10		ミガキ調整隆沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
127	9	LⅢ		深鉢	大木10		ミガキ調整隆沈線	縦位RL縄文		ミガキ	
127	10	S14	船床	深鉢	大木9・10		ミガキ調整隆沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
127	11	LⅢ		深鉢	大木10		ミガキ調整隆沈線	縦・横位LR縄文		ミガキ	
127	12	LⅣ		深鉢	大木10	波状	和調整隆沈線	縦位LR縄文		ミガキ	精製突起
127	13	LⅣ		深鉢	大木10	波状	精製	縦位LR縄文		ミガキ	
127	14	LⅢ		深鉢	大木10	平	精製	縦位LR縄文		ミガキ	
127	15	LⅢ		深鉢	大木10	平	精製	縦位LR縄文		ミガキ	
128	1	LⅢ		深鉢	大木10	波状	精製	縦位LR縄文		ミガキ	
128	2	LⅣ		深鉢	大木10	波状	精製	縦・斜位LR縄文		ミガキ	底部環状孔
128	3	LⅢ		浅鉢?	大木10	波状	精製			ミガキ	
128	4	LⅣ		深鉢	大木10		他沈線	縦位LR縄文		ミガキ	
128	5	LⅢ		深鉢	大木10		精製	縦・横位LR縄文		ミガキ	
128	6	LⅢ		深鉢	大木10		精製			ミガキ	
128	7	LⅣ		深鉢	大木10		精製	縦・斜位RL縄文 削突		ミガキ	
128	8	LⅣ		深鉢	大木10	波状	精製	縦位LR縄文		ミガキ	

表5 縄文土器観察表

国取番号	区内番号	遺構	出土位置	器種	形式	口縁	主な特殊文手法	地文 区画内施文	内面	備考
128	9	L IV		深鉢	大木10	波状	横線 沈線	縦位LR 縄文	ミガキ	波頂部環状孔 精製
128	10	L IV		鉢	大木10	平	横線	縦位LR 縄文	ミガキ	精製
128	11	L III		深鉢	大木10	波状	和調整沈線		ミガキ	波頂部環状孔
128	12	L IV		深鉢	大木9・10	小波状	ミガキ調整沈線		ミガキ	
128	13	L III		小形鉢	粗製	平	和調整沈線	縦位LR 縄文	ミガキ	
128	14	L III		深鉢	大木10	平	横線	縦位LR 縄文	ミガキ	
128	15	L IV		深鉢	粗製	平		縦位LR 縄文	?	
128	16	L IV		深鉢	粗製	波状	ミガキ調整沈線	縦位LR 縄文	ミガキ	
128	17	S I 4	船床	深鉢				縦位LR・R 羽状縄文	ミガキ	
129	1	L III		浅鉢	大木9・10	平	調整沈線	斜突 縄文	ミガキ	精製
129	2	L III		浅鉢	大木9・10		調整隆帯	縦位LR 縄文	ミガキ	精製
129	3	L IV		浅鉢	大木9・10		ミガキ調整隆帯	縦・横位LR 縄文	ミガキ	精製
129	4	S I 4	P5	深鉢	大木9		ミガキ調整隆帯	横位LR? 縄文	ミガキ	
129	5	L III				平			ミガキ	注口部
129	6	L IV		浅鉢	大木9	波状		斜突	ミガキ	精製
129	7	L IV		深鉢	大木9			口縁ミガキ調整沈線	ミガキ	
129	8	L IV		器台					ミガキ	環状孔1
129	9	L III		器台					ミガキ	環状孔1
129	10	L III		器台					ミガキ	環状孔1
129	11	SK I 2	確認面	深鉢	大木8b		和調整沈線	縦位LR 縄文	ミガキ	
129	12	SK I 2	確認面	深鉢	大木8b		和調整沈線	縦位LR 縄文	ミガキ	
129	13	SK I 2	確認面	深鉢	大木8b		十字調整隆帯	縦位LR 縄文	ミガキ	
129	14	SK I 2	確認面	深鉢	大木9・10		横線	縦位LR 縄文	ミガキ	

表6 土製品観察表

国取番号	国内番号	遺構・出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
130	1	S 15・1・2層	土器片製内腹	3.0	2.7	0.7	周縁部研ぎ
130	2	S 17・床直	土器片製内腹	2.6	2.4	0.9	周縁部研ぎ
130	3	S 18・床直	土器片製内腹	4.0	3.4	0.7	研ぎなし
130	4	S 16・1・6層	土器片製内腹	2.2	2.0	0.7	研ぎなし
130	5	S 16・1・6層	土器片製内腹	2.9	2.8	0.8	周縁部研ぎ 箱み1箇所
130	6	S 16・1・6層	土器片製内腹	3.1	2.7	0.9	周縁部研ぎ
130	7	S 16・1・6層	土器片製内腹	3.5	3.2	0.8	周縁部研ぎ
130	8	S 16・1・6層	土器片製内腹	2.5	2.3	0.8	周縁部研ぎ
130	9	S 16・1・6層	土器片製内腹	3.1	3.0	1.0	周縁部研ぎ
130	10	S 16・1・6層	土器片製内腹	3.7	3.3	0.8	周縁部研ぎ
130	11	S 16・1・6層	土器片製内腹	3.9	3.4	1.0	一部欠損 周縁部研ぎ
130	12	S 16・1・6層	土器片製内腹	2.2	2.1	0.7	周縁部研ぎ
130	13	S 16・1・6層	土器片製内腹	2.3	2.1	0.9	研ぎなし
130	14	S 16・1・6層	土器片製内腹	2.7	(2.1)	0.7	一部欠損 周縁部研ぎ
130	15	S 16・1・6層	土器片製内腹	3.2	3.1	1.1	周縁部研ぎ
130	16	S 16・1・6層	土器片製内腹	2.5	2.5	0.9	周縁部研ぎ
130	17	S 16・1層	土器片製内腹	2.9	2.6	0.7	周縁部研ぎ
130	18	S 16・1b	土器片製内腹	3.0	2.7	0.8	周縁部研ぎ
130	19	S 16・3層	土器片製内腹	2.8	2.7	1.0	周縁部研ぎ
130	20	S 16・3層	土器片製内腹	3.1	2.8	0.8	周縁部研ぎ
130	21	S 16・3層	土器片製内腹	3.1	2.9	0.6	周縁部研ぎ
130	22	S 16・4層	土器片製内腹	3.1	2.9	0.7	周縁部研ぎ
130	23	S 16・7~10層	土器片製内腹	3.4	3.1	0.8	周縁部研ぎ
130	24	S 16・7~11層	土器片製内腹	2.7	2.3	0.7	周縁部研ぎ
130	25	S 16・11層	土器片製内腹	3.6	3.5	0.9	周縁部研ぎ
130	26	S 19・1・2層	土器片製内腹	3.2	2.7	0.9	周縁部研ぎ
130	27	S 19・1・2層	土器片製内腹	4.1	4.0	0.7	研ぎなし
130	28	S 19・1・2層	土器片製内腹	3.4	3.2	0.9	一部欠損 周縁部研ぎ
130	29	S 19・1・2層	土器片製内腹	4.0	3.5	0.6	一部欠損 研ぎなし
130	30	S 19・1・2層	土器片製内腹	3.7	3.6	0.7	一部欠損 周縁部研ぎ
130	31	S 19・1・2層	土器片製内腹	3.1	2.8	0.8	一部欠損 周縁部研ぎ
130	32	S 19・1・2層	土器片製内腹	3.4	2.9	0.8	研ぎなし
130	33	S 19・1・2層	土器片製内腹	2.8	2.6	1.0	一部欠損 周縁部研ぎ
130	34	S 19・1・2層	土器片製内腹	3.1	3.0	0.7	一部欠損 周縁部研ぎ
130	35	S 19・P 1	土器片製内腹	3.3	2.9	0.7	周縁部研ぎ
130	36	S 19・1・2層	土器片製内腹	2.6	2.3	0.8	研ぎなし
130	37	S 19・1・2層	土器片製内腹	3.4	2.6	1.0	方形 周縁部研ぎ
130	38	S 19・1・2層	土器片製内腹	3.3	3.1	0.6	周縁部研ぎ
130	39	S 19・1・2層	土器片製内腹	3.1	3.0	0.7	方形 周縁部研ぎ
130	40	S 19・1・2層	土器片製内腹	4.1	3.9	1.2	方形 周縁部研ぎ
130	41	S 19・1・2層	土器片製内腹	3.5	3.3	0.9	研ぎなし
130	42	S 19・1層	土器片製内腹	3.8	3.8	0.8	周縁部研ぎ
130	43	S 19・1層	土器片製内腹	3.4	3.2	0.8	周縁部研ぎ
130	44	S 19・1層	土器片製内腹	4.3	3.9	0.8	一部欠損 周縁部研ぎ
130	45	S 19・1層	土器片製内腹	4.6	4.3	1.0	一部欠損 研ぎなし
130	46	S 19・1層	土器片製内腹	4.0	(3.5)	0.6	一部欠損 研ぎなし
130	47	S 19・1層	土器片製内腹	4.6	3.7	0.7	方形 研ぎなし
131	1	S 19・1層	土器片製内腹	3.7	3.6	1.1	周縁部研ぎ
131	2	S 19・1層	土器片製内腹	3.8	3.4	1.1	研ぎなし
131	3	S 19・3層	土器片製内腹	3.0	2.8	0.7	周縁部研ぎ
131	4	S 19・3層	土器片製内腹	3.0	2.9	0.7	周縁部研ぎ
131	5	S 19・3層	土器片製内腹	3.3	3.3	1.0	周縁部研ぎ
131	6	S 19・3層	土器片製内腹	3.6	3.5	1.1	周縁部研ぎ
131	7	S 19・3層	土器片製内腹	5.1	5.1	0.8	研ぎなし
131	8	S 19・3層	土器片製内腹	3.5	3.4	1.0	研ぎなし
131	9	S 19・3層	土器片製内腹	2.9	2.7	0.7	周縁部研ぎ
131	10	S 19・a - 印	土器片製内腹	2.5	2.2	0.6	周縁部研ぎ
131	11	S 19・a - 印	土器片製内腹	3.9	3.8	0.7	周縁部研ぎ
131	12	S 19・a - 印	土器片製内腹	3.2	3.0	1.0	研ぎなし
131	13	S 19・P 4	土器片製内腹	2.8	2.4	1.0	周縁部研ぎ
131	14	S 112・印	土器片製内腹	3.3	3.0	1.1	研ぎなし
131	15	S 113・1・2層	土器片製内腹	3.2	3.2	0.9	周縁部研ぎ
131	16	S 113・1・2層	土器片製内腹	3.6	3.5	0.7	周縁部研ぎ
131	17	S 113・1・2層	土器片製内腹	2.4	(2.1)	0.6	一部欠損 研ぎなし
131	18	S 113・1・2層	土器片製内腹	2.7	2.5	0.9	周縁部研ぎ
131	19	S 113・1・2層	土器片製内腹	2.9	2.7	1.0	研ぎなし
131	20	S 113・1・2層	土器片製内腹	2.7	2.7	0.6	周縁部研ぎ
131	21	S 113・1・2層	土器片製内腹	4.2	3.9	1.1	研ぎなし
131	22	S 113・1・2層	土器片製内腹	3.3	3.2	0.9	周縁部研ぎ

表6 土製品観察表

図版番号	図内番号	造形・出土位置	部種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
131	23	S 1 1 3・1-2層	土器片製内盤	35	35	10	周縁部研削
131	24	S 1 1 3・1-2層	土器片製内盤	37	35	12	方形 周縁部研削
131	25	S 1 1 3・1-2層	土器片製内盤	35	34	09	周縁部研削
131	26	S 1 1 3・1-2層	土器片製内盤	35	34	10	研削なし
131	27	S 1 1 3・3層	土器片製内盤	34	32	06	研削なし
131	28	S 1 1 3・3層	土器片製内盤	35	35	10	周縁部研削
131	29	S 1 1 3・3層	土器片製内盤	25	25	09	周縁部研削
131	30	S 1 1 5・1~4層	土器片製内盤	41	34	09	研削なし
131	31	S 1 1 8・1層	土器片製内盤	28	26	06	研削なし
131	32	S 1 1 8・1層	土器片製内盤	31	31	11	研削なし
131	33	S 1 1 8・1層	土器片製内盤	30	29	08	研削なし
131	34	S 1 1 8・1層	土器片製内盤	30	30	08	研削なし
131	35	S 1 1 8・1層	土器片製内盤	24	24	09	周縁部研削
131	36	S 1 1 8・1層	土器片製内盤	38	36	12	研削なし
131	37	S 1 1 8・1層	土器片製内盤	30	27	07	周縁部研削
131	38	S 1 1 8・1層	土器片製内盤	27	25	09	研削なし
131	39	S 1 1 8・1層	土器片製内盤	40	39	08	周縁部研削
131	40	S 1 1 8・1層	土器片製内盤	35	35	08	周縁部研削
131	41	S 1 1 8・1層	土器片製内盤	26	25	07	周縁部研削
131	42	S 1 1 9・1層	土器片製内盤	48	39	08	研削なし
131	43	S 1 2 0・1層	土器片製内盤	32	28	06	研削なし
132	1	S 1 2 3・胎床	土器片製内盤	44	39	11	周縁部研削
132	2	S K 2	土器片製内盤	29	28	09	周縁部研削
132	3	S K 6	土器片製内盤	28	28	08	周縁部研削
132	4	S K 6・# 2	土器片製内盤	41	36	12	研削なし
132	5	S K 7・1層	土器片製内盤	23	21	08	周縁部研削
132	6	S K 7・1-2層	土器片製内盤	94	86	09	研削なし
132	7	S K 7・2層	土器片製内盤	30	28	07	周縁部研削
132	8	S K 9	土器片製内盤	25	22	09	周縁部研削
132	9	S K 1 8	土器片製内盤	25	23	06	周縁部研削
132	10	S K 1 9	土器片製内盤	31	30	06	周縁部研削
132	11	S K 5 5	土器片製内盤	24	21	06	半部欠損 周縁部研削
132	12	S 1 2 4・P 1	土器片製内盤	41	37	10	研削なし
132	13	S 1 2 4・P 1	土器片製内盤	46	41	10	研削なし
132	14	L II	土器片製内盤	28	28	13	周縁部研削
132	15	L III	土器片製内盤	49	42	09	半部欠損 研削なし
132	16	L III	土器片製内盤	20	19	08	周縁部研削
132	17	L III	土器片製内盤	23	21	08	周縁部研削
132	18	L III	土器片製内盤	40	35	08	周縁部研削
132	19	L III	土器片製内盤	36	35	06	周縁部研削
132	20	L III	土器片製内盤	35	40	07	半部欠損 周縁部研削
132	21	L III	土器片製内盤	42	46	06	一部欠損 研削なし 裏面に傷付着
132	22	L IV	土器片製内盤	39	33	07	一部欠損 研削なし
132	23	L IV	土器片製内盤	38	38	09	周縁部研削
132	24	L IV	土器片製内盤	40	38	10	研削なし
132	25	L IV	土器片製内盤	42	42	07	ミニチュア土器の底部 研削なし
132	26	L IV	土器片製内盤	55	50	08	一部欠損 周縁部研削
132	27	L IV	土器片製内盤	36	35	09	方形 周縁部研削 刻み痕1箇所
132	28	L IV	土器片製内盤	34	45	08	半部欠損 周縁部研削
132	29	L IV	土器片製内盤	32	30	07	研削なし
132	30	L IV	土器片製内盤	41	38	09	一部欠損 周縁部研削
132	31	L IV	土器片製内盤	53	45	08	研削なし
132	32	L IV	土器片製内盤	23	40	07	半部欠損 周縁部研削
132	33	L IV	土器片製内盤	30	27	07	周縁部研削
132	34	L IV	土器片製内盤	47	46	09	周縁部研削
132	35	L IV	土器片製内盤	35	32	09	周縁部研削
132	36	L IV	土器片製内盤	32	40	07	半部欠損 周縁部研削
132	37	L IV	土器片製内盤	34	32	07	周縁部研削
133	1	L IV	土器片製内盤	40	45	08	一部欠損 周縁部研削
133	2	L IV	土器片製内盤	48	48	09	研削なし
133	3	L IV	土器片製内盤	29	28	08	研削なし
133	4	L IV	土器片製内盤	37	39	09	周縁部研削
133	5	S 1 3	土器片製内盤	25	43	09	一部欠損 周縁部研削
133	6	確認面	塚状土製品	22	21	21	穿孔なし
133	7	L III	土甕	47	46	51	底部 外側V字状沈線



表7 石器・石製品観察表

区画番号	区内番号	通構	出土位置	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	備考
134	1	S K 6	一括	石鏃	11.1	8.8	2.4	0.2	珉質頁岩	定形 凹基無茶蘆
134	2	S 1 1 8	1層	石鏃	13.2	17.1	4.2	0.4	珉質頁岩	定形 凹基無茶蘆
134	3	S 1 1 8	1層	石鏃	17.0	17.6	3.1	0.6	珉質頁岩	定形 凹基無茶蘆
134	4	S 1 5	床直	石鏃	42.5	19.1	4.8	3.3	珉質頁岩	定形 凹基無茶蘆
134	5	S 1 6	1~6層	石鏃	28.6	12.2	3.9	1.1	珉質頁岩	端部欠損 凹基無茶蘆
134	6	S 1 1 8	1層	石鏃	22.1	10.8	3.1	0.6	珉質頁岩	端部欠損 凹基無茶蘆
134	7	S 1 6	側溝	石鏃	17.4	15.2	3.4	0.7	珉質頁岩	先端部欠損 凹基無茶蘆
134	8	一括		石鏃	10.8	16.6	2.9	0.4	鉄石英	先端部欠損 凹基無茶蘆
134	9	L V		石鏃	19.8	9.7	4.0	0.6	珉質頁岩	凹基無？未製品？
134	10	S 1 1	1層	石鏃	23.1	15.4	4.5	1.2	珉質頁岩	凹基無？未製品？
134	11	S 1 6	側溝	石鏃	22.1	17.6	6.7	2.1	黒曜石	凹基無？未製品？
134	12	L II		石鏃未製品	22.4	22.8	9.0	3.8	珉質頁岩	
134	13	L V		石鏃未製品	38.6	26.2	4.3	1.8	流紋岩	
134	14	S 1 6	1~6層	石鏃未製品	35.0	25.6	11.9	9.0	鉄石英	
134	15	L V		石鏃未製品	35.7	32.1	8.7	9.9	鉄石英	
134	16	L V		石鏃未製品	40.8	38.4	13.7	20.3	頁岩	
134	17	S K 1 9		石鏃未製品	14.8	26.5	5.4	1.6	流紋岩	
134	18	S K 7	1層	石鏃未製品	18.2	28.7	10.2	2.6	頁岩	
134	19	S 1 4	床直	燧状石部	16.0	24.1	5.0	1.2	珉質頁岩	
134	20	L III		石鏃破損品？	23.1	12.7	8.5	1.6	珉質頁岩	
135	1	S 1 2 8	伊	石匙	51.9	28.3	4.6	5.8	珉質頁岩	縦型
135	2	S 1 1 3	1~2層	石匙未製品	53.1	22.1	7.6	8.0	頁岩	
135	3	L V		石匙	63.1	22.6	9.2	12.3	珉質頁岩	端部欠損 縦型
135	4	S 1 6	1~6層	石匙未製品	82.9	35.6	11.8	27.5	珉質頁岩	縦型
135	5	S 1 1 1	5~10層	石匙	74.1	23.6	10.3	15.8	珉質頁岩	先端部欠損 縦型
135	6	S 1 6	1~6層	石匙未製品	53.7	14.3	10.1	7.1	珉質頁岩	縦型
135	7	L V		石匙未製品	69.7	27.9	6.0	10.7	珉質頁岩	縦型
135	8	S 1 9	1~2層	石匙	30.1	59.5	10.1	12.1	珉質頁岩	横型
135	9	S 1 1 5	1~4層	石匙？未製品	26.4	36.4	9.7	6.9	珉質頁岩	
135	10	S K 6 4	一括	石匙？未製品	36.5	46.1	12.5	16.5	珉質頁岩	
136	1	S 1 6	1~6層	石鏃	89.1	18.7	10.6	19.4	珉質頁岩	定形
136	2	S 1 1 1	1~4層	燧状石部	70.3	30.8	16.2	35.8	泥岩	
136	3	S K 6 7	一括	垂物品	20.6	28.5	5.8	5.5	蛇紋岩	
136	4	S 1 1 3	1~2層	垂物品未製品	66.3	31.8	21.9	53.7	凝灰岩	全面研磨 端部に未穿孔
136	5	1~2号伊母	確認面	打製石斧	173.9	58.7	13.3	171.9	粘板岩	刃部欠損
136	6	S 1 1 3	1~2層	打製石斧	112.2	42.2	15.3	126.3	粘板岩	
137	1	S B 1	P3	打製石斧	117.1	84.1	22.9	179.6	粘板岩	
137	2	L III		打製石斧	120.1	77.6	15.7	143.9	粘板岩	
137	3	L V		打製石斧	102.9	87.7	16.2	133.2	粘板岩	
138	1	S 1 1 1	1~4層	打製石斧	111.6	85.4	27.5	234.5	粘板岩	
138	2	S 1 1 1	1~4層	打製石斧	85.8	84.4	19.9	130.4	粘板岩	
138	3	S 1 1 8	1層	打製石斧	101.1	76.1	18.3	143.7	粘板岩	
139	1	S 1 1 1	5~10層	燧状石部	136.6	88.5	15.8	238.0	粘板岩	
139	2	S K 6	一括	燧状石部	74.1	38.5	13.8	43.6	粘板岩	
139	3	L V		燧状石部	80.3	55.9	20.3	107.1	粘板岩	
139	4	S 1 1 3	1~2層	燧状石部	76.2	50.4	16.4	75.6	粘板岩	
139	5	L III		燧状石部	85.2	73.5	16.2	130.2	粘板岩	付着物あり
140	1	S 1 2 4	3~8層	磨製石斧	118.3	58.9	32.2	293.0	安山岩	定形品
140	2	S 1 9	1~2層	磨製石斧	77.5	52.7	22.5	158.0	安山岩	
140	3	S K 1 2	確認面	磨製石斧	98.0	50.1	28.7	220.0	閃緑岩	
140	4	L III		磨製石斧	64.0	44.4	28.9	142.3	安山岩	
140	5	S 1 2 8	伊	磨製石斧	18.4	34.7	8.2	5.1	流紋岩	
141	1	S 1 6	1~6層	磨石・敲石	70.7	18.8	17.9	24.2	砂岩	
141	2	S 1 6	1~6層	磨石・敲石	95.3	27.2	23.7	97.7	砂岩	
141	3	S 1 1 0	1槽	磨石・凹石	164.4	52.7	27.2	377.5	粘板岩	
141	4	S 1 1 3	1~2層	磨石	0.0	0.0	0.0	203.5	凝灰岩	
141	5	S 1 1 3	伊	磨石・敲石	0.0	0.0	0.0	88.7	花崗岩	
141	6	S 1 1 7	1~2層	磨石	169.4	117.6	65.2	177.3	砂岩	
141	7	S 1 2 4	3~8層	磨石	0.0	0.0	0.0	227.5	花崗岩	
141	8	S 1 2 4	3~8層	磨石	112.0	78.3	50.8	630	安山岩	
141	9	S 1 2 4	P2	磨石	106.4	83.9	48.5	648	閃緑岩	
141	10	S 1 1 4	2層	磨石	0.0	0.0	0.0	105.1	安山岩	
141	11	S 1 2 4	3~8層	磨石	95.4	91.2	40.5	539	花崗岩	
142	1	S 1 6	1~6層	磨石	0.0	0.0	0.0	728	泥岩	
142	2	S 1 9	1~2層	磨石・凹石	127.7	108.2	59.3	1444	砂岩	
142	3	S 1 9	2層	磨石	0.0	0.0	0.0	644	アブライト	
142	4	S 1 9	2層	磨石	0.0	0.0	0.0	675	花崗岩	

表7 石器・石製品観察表

区版番号	区内番号	遺構	出土位置	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	備考
142	5	S 1 9	3層	磨石	0.0	0.0	0.0	325	花崗岩	
142	6	S 1 9	3層	磨石	119.4	99.5	62.3	1,117	安山岩	
142	7	S 1 9	掘溝	磨石	0.0	0.0	0.0	862	泥岩	
142	8	S 1 9	3層	磨石	0.0	0.0	0.0	897	花崗岩	
142	9	S 1 9	3層	磨石	0.0	0.0	0.0	716	安山岩	
143	1	S 1 2 4	3～8層	磨石・敲石	0.0	0.0	0.0	351	花崗岩	
143	2	S 1 2 4	3～8層	磨石	0.0	0.0	0.0	800	閃緑岩	
143	3	S 1 2 4	床直	磨石	0.0	0.0	0.0	528	安山岩	
143	4	L III		敲石	53.2	51.4	10.2	42	粘板岩	
143	5	L IV		磨石・凹石・石鏃	84.1	63.1	13.9	103	粘板岩	
143	6	L III		磨石	0.0	0.0	0.0	533	安山岩	
143	7	S 1 9	複式伊石組部	石皿・凹石	0.0	0.0	0.0	5,550	花崗岩	
143	8	S 1 1 3	床直	石皿	0.0	0.0	0.0	5,280	花崗岩	
143	9	S 1 9	3層	石皿	0.0	0.0	0.0	543	凝灰岩?	焼熱
144	1	S 1 1 3	1～2層	石皿・凹石	0.0	0.0	0.0	9,980	花崗岩	
144	2	S 1 1 2	一括	石皿	207.4	115.6	41.8	1,449	安山岩	焼熱
144	3	S 1 2 4	複式伊石組部	石皿	308.2	230.4	71.8	5,530	花崗岩	石組部の石として再利用
145	1	S 1 6	1～6層	浮子	77.1	81.1	49.8	35.9	軽石	ほぼ完形 上部に穿孔
145	2	S 1 6	1～6層	浮子	47.1	49.0	15.7	5.5	軽石	一部欠損 穿孔した痕跡
145	3	S 1 1 8	1層	浮子	37.7	30.3	10.9	1.4	軽石	
145	4	S 1 9	1～2層	浮子	49.5	44.5	19.2	8.3	軽石	
145	5	L IV		浮子?	45.7	30.5	13.6	2.5	軽石	

表8 奈良・平安時代出土遺物観察表

表8 奈良・平安時代出土遺物観察表

図版 番号	国内 番号	器種	通稱	出土 位置	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存率	外面	内面	底部	備考
157	1	土師器杯	S 1 1	床直	124	30	35	100%	口：横ナデ 体：ヘウ割り	ミガキ 黒色処理	丸底 ヘウ割り	
157	2	土師器杯	S 1 1	1層					口：横ナデ 体：ヘウ割り	ミガキ 黒色処理		
157	3	土師器杯	S 1 2	1層					体：下部ヘウ割り	ミガキ 黒色処理		
157	4	土師器杯	S 1 3	一括					ロクロナデ	ミガキ 黒色処理		
157	5	土師器杯	S 1 3	一括					ロクロナデ	ミガキ 黒色処理		
157	6	土師器杯	S 1 3	一括					ロクロナデ	ミガキ		
157	7	土師器杯	S 1 3	一括		60		20%	体：ロクロナデ 下部回転ヘウ割り	ミガキ 黒色処理	平底 回転ヘウ 割り	
157	8	土師器杯	S 1 4	P2	141	66	38	100%	体：ロクロナデ 下部回転ヘウ割り	ミガキ 黒色処理	平底 回転ヘウ 割り	
157	9	土師器杯	S 1 4	7層	130	64	43	70%	体：ロクロナデ 下部回転ヘウ割り	ミガキ 黒色処理	平底 回転ヘウ 割り	
157	10	土師器杯	S 1 4	P2	136	64	43	100%	体：ロクロナデ 下部回転ヘウ割り	ミガキ 黒色処理	平底 ヘウ割り 後ナデ	
157	11	土師器杯	S 1 4	7層	148	76	62	20%	体：ロクロナデ 下部ヘウ割り	ミガキ 黒色処理	平底 ヘウ割り	
157	12	土師器杯	S 1 4	7層	122			100%	体：ロクロナデ 下部ヘウ割り	ミガキ 黒色処理		
157	13	土師器杯	S 1 4	P5					体：ロクロナデ	ミガキ 黒色処理		
157	14	土師器杯	S 1 4	P4					口：横ナデ 体：ヘウ割り	ミガキ 黒色処理		
157	15	土師器杯	S 1 4	P4					体：ロクロナデ	ミガキ 黒色処理		
157	16	土師器杯	S 1 2 3	床直	169	64	40	30%	口：横ナデ 体：ヘウ割り	ミガキ 黒色処理	丸底 ヘウ割り	
157	17	須恵器壺	S 1 4	P2					口：ロクロナデ	ナデ		
157	18	須恵器壺	S 1 4	P2					体：タタキ	ナデ		
157	19	須恵器壺	S 1 4	P2					体：タタキ	ナデ 当て具痕		
157	20	須恵器壺	S 1 4	7層					体：タタキ 下部回転ヘウ割り	ナデ	回転ヘウ割り	
157	21	須恵器壺	S 1 4	7層		136		70%	体：タタキ 下部回転ヘウ割り	ナデ	ナデ	
158	1	土師器杯	L IV		144	56	45	50%	体：ロクロナデ 下部ヘウ割り	ミガキ 黒色処理	回転糸切り	
158	2	土師器杯	L IV		144	59	44	90%	体：ロクロナデ 下部回転ヘウ割り	ミガキ 黒色処理	回転糸切り	
158	3	土師器杯	L III		132	74	41	30%	体：ロクロナデ	ミガキ 黒色処理	回転糸切り後ナ デ	
158	4	土師器杯	L III						体：ロクロナデ 下部回転ヘウ割り	ミガキ 黒色処理	回転糸切り	
158	5	土師器杯	L IV			58		50%	体：ロクロナデ	ミガキ 黒色処理	回転糸切り	墨書
158	6	土師器杯	L IV						体：下部ヘウ割り	ミガキ 黒色処理	ヘウ割り	墨書
158	7	土師器杯	L IV						体：ロクロナデ 下部回転ヘウ割り	ミガキ 黒色処理		墨書
158	8	土師器壺	L III		200			25%	口：横ナデ 体：タタキ後ナデ 刷 毛目	体ナデ 下部ヘウ 割り	ナデ	
158	9	土師器瓶	L II			73		100%	瓶いへう割り			
158	10	須恵器壺	L IV						ロクロナデ	ロクロナデ		
158	11	須恵器壺	P G 3	一括					タタキ	ナデ		
158	12	土師器杯	一括		142	59	40	100%	体：ロクロナデ 下部ヘウ割り	ロクロナデ 黒色 処理無し	ヘウ割り	
158	13	土師器壺	一括		162	72	126		口・体：ロクロナデ 下部回転ヘウ 割り	ロクロナデ	回転糸切り	
158	14	須恵器壺	S B 5	P1					タタキ	当て具痕		
158	15	須恵器壺	一括						ロクロナデ	ロクロナデ		



写真1 遺跡遠景(南東から)



写真2 全景(南東から)



写真3 全景(西から)



写真4 全景(北西から)



写真5 全景(南から)



写真6 遺構検出状況全景(北から)



写真7 SI5複式炉(南から)



写真8 SI6(南から)



写真9 SI5複式炉(南西から)



写真10 SI5土層断面(南西から)



写真11 SI5複式炉(東から)



写真12 SI5複式炉土層断面(東から)



写真13 SI6覆土集石出土状況(北東から)



写真14 SI7土層断面(南から)



写真15 SI6土層断面(東から)



写真16 SI6堆積状況(南から)





写真17 SI6土器出状況(南から)



写真18 SI6土器出状況(南東から)



写真19 SI6土器出状況(南から)



写真20 SI6土器出状況



写真21 SI6土器出状況



写真22 S19完掘(南から)



写真23 S19(南から)



写真24 S16複式炉土器埋設部(東から)



写真25 S16複式炉(南から)



写真26 S16複式炉(東から)



写真27 S16複式炉(南東から)



写真28 S16複式炉断面(南東から)



写真29 SI9複式炉集石出土状況(北から)



写真30 SI9複式炉土層断面(東から)



写真31 SI9複式炉a(南西から)



写真32 SI9複式炉a(南から)



写真33 SI9複式炉a土層断面(南西から)



写真35 SI9複式炉b埋設土器



写真34 SI9複式炉b土層断面(西から)



写真36 SI9複式炉b(南西から)



写真37 SI9P5



写真38 SI9P4土器出土状況(南から)



写真39 SI9P4土器出土状況(南から)



写真40 SI9P4土層断面(南から)



写真41 SI9焼土(東から)



写真42 SI9複式炉検出状況(南から)



写真43 SI9北東部集石検出状況(北から)



写真44 SI9土層断面(東から)



写真45 SI10(南から)



写真46 SI10土層断面(南東から)



写真47 SI10(南から)



写真48 SI11 (南から)



写真49 SI11 焼土範囲 (南から)



写真50 SI11 土層断面 (東から)



写真51 SI11 北西部集石 (東から)



写真52 SI11 埋設土器出土状況 (北から)



写真53 SI11複式炉土層断面(南から)



写真54 SI11複式炉土器埋設部(東から)



写真55 SI12土層断面(北東から)



写真56 SI12P3・SK88土層断面(東から)



写真57 SI12複式炉土層断面(西から)



写真58 SI12複式炉埋設土器(東から)



写真59 SI12複式炉(東から)



写真60 SI12P1土層断面(東から)





写真61 SI12 (南から)



写真62 SI12複式 (南から)



写真63 SI13 (南から)



写真64 SI13複式炉(東から)



写真65 SI13 (南東から)



写真66 SI13複式炉検出状況(南西から)



写真67 SI13土層断面(東から)



写真68 SI13複式炉土層断面(南から)



写真69 SI13複式炉(南から)



写真70 SI13複式炉(南から)



写真71 SI13土層断面(南東から)



写真72 SI13複式炉土器埋設部(北東から)



写真73 S113複式炉土器埋設部(東から)



写真74 S113複式炉完掘(南から)



写真75 S128複式炉土層断面(北西から)



写真76 S128複式炉(南から)



写真77 S128複式炉(南から)



写真78 SI13・14・28・29 (南西から)



写真79 SI13・14・28・29 (南から)



写真80 SI14土層断面(南東から)



写真81 SI14複式炉土層断面(東から)



写真82 SI14複式炉土層断面(東から)



写真83 SI14複式炉土器埋設部(東から)



写真84 SI29複式炉土層断面(南東から)



写真85 SI29複式炉土(南東から)



写真86 SI29複式炉土器埋設部(南東から)



写真87 SI14P1土層断面(南から)



写真88 SI29複式炉埋設土器(南西から)



写真89 SI29複式炉(西から)



写真90 SI29複式炉土層断面(西から)



写真91 SI14・29複式炉埋設土器(西から)



写真92 SI29複式炉土器(南西から)



写真93 SI14・29壁溝土層断面(東から)



写真94 SI29北端壁柱穴土層断面(東から)



写真95 SI14・29複式炉完掘(南から)



写真96 SI13・14・28・29 (南東から)



写真97 SI13・14・24・28・29 (東から)





写真98 SI15 (南東から)



写真99 SI15 (南東から)



写真100 SI15 複式炉検出状況(南から)



写真101 SI15 複式炉(西から)



写真102 SI15 複式炉(南から)



写真103 SI15 複式炉(南西から)



写真104 SI15 複式炉土層断面(南東から)



写真105 SI15 複式炉(東から)



写真106 SI15複式炉土器埋設部(南東から)



写真107 SI15複式炉(東から)



写真108 SI15複式炉土層断面(南東から)



写真109 SI15複式炉完掘(東から)



写真110 SI15複式炉完掘(南から)



写真111 SI15 (南から)



写真112 SI15複式炉(南東から)



写真113 SI16 (南東から)



写真114 SI16 (北東から)



写真115 SI17土層断面(南から)



写真116 SI17 (南西から)



写真117 SI17複式炉(南東から)



写真118 SI17 (南から)



写真119 SI17複式炉(南から)



写真120 SI17複式炉埋設土器(南から)



写真121 SI17複式炉埋設土器(東から)



写真122 SI18 1層除去状況(南東から)



写真123 SI18土器出土状況(北西から)



写真124 SI18土層断面(地山断割)(東から)



写真125 SI18 (南東から)



写真126 SI18土層断面(南東から)



写真127 S118土器出土状況(北西から)



写真128 S118土器出土状況(北から)





写真 129 SII18 土器出土状況(北から)



写真 130 S119 土層断面(南東から)



写真 131 S119P1 土層断面(南から)



写真 132 S119P3 土層断面(南から)



写真 133 S120 (南西から)



写真 134 SI19 (南東から)



写真 135 SI20 (南西から)



写真 136 SI20P2土層断面(南から)



写真 137 SI20P6土層断面(南から)



写真 138 SI24 (南から)



写真139 SI24 (北から)



写真140 SI24 (南東から)



写真141 SI24 複式炉 (南から)



写真142 SI24 複式炉土層断面 (東から)



写真143 SI24 複式炉土層断面 (南から)



写真 144 SI24 複式炉土層断面 (南東から)



写真 145 SI24 複式炉土器埋設部 (東から)



写真 146 SI24 複式炉 (北東から)



写真 147 SI24 複式炉土器埋設部 (南から)



写真 148 SI24 複式炉埋設土器 (南東から)



写真 149 SI24 複式炉完掘 (南から)



写真 150 SI24P7 (東から)



写真 151 SI24P3 土層断面 (南西から)



写真 152 SI24P7 土層断面 (西から)



写真 153 SI24P7 土層断面 (東から)



写真 154 SI25 (南東から)



写真 155 SI25 土層断面 (南から)



写真 156 SI25 複式炉 (西から)

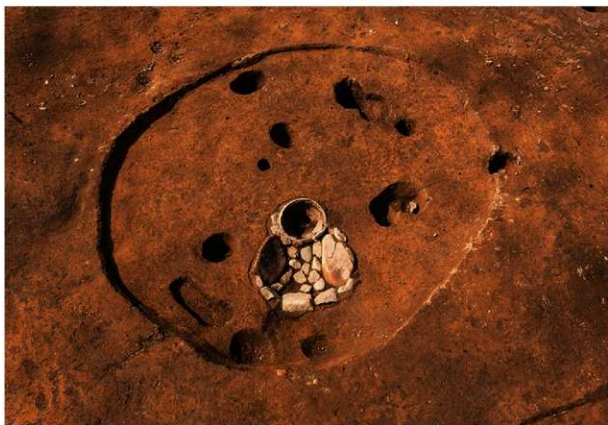


写真157 SI25 (南から)



写真158 SI25 複式炉 (南から)



写真159 SI25複式炉(土層断面)(東から)



写真160 SI25作業風景(東から)



写真161 SI25複式炉完掘(南から)



写真162 SI5・26・27(南から)



写真163 SI5・26・27(東から)



写真165 SI5・26・27(北から)



写真164 SI26土層断面(南東から)



写真166 SI30 (北東から)



写真167 SI30P1 (東から)



写真168 SI30P2 (東から)



写真169 SI32 焼土範囲 (南から)



写真170 SI32 (南から)





写真171 SI32土層断面(南西から)



写真172 1・2号炉跡検出状況(南から)



写真173 1号炉跡隣接地点土器出土状況(南から)



写真174 1号炉跡(南東から)



写真175 SI32土層断面(南東から)

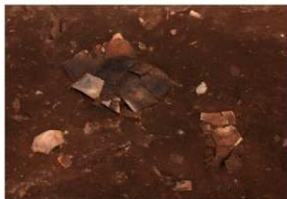


写真176 1号炉跡隣接地点土器検出状況



写真177 1・2号炉跡検出状況(南西から)



写真178 1号炉跡(南西から)



写真179 1号炉跡石組部(南から)



写真180 1号炉跡土層断面(南から)



写真181 1号炉跡石組部土層断面(東から)



写真182 1号炉跡土器埋設部土層断面(東から)



写真183 1号炉跡土層断面(東から)



写真184 1号炉跡完掘(南東から)



写真185 1号炉跡隣接地点土器出土状況



写真186 2号炉跡(新)(南から)



写真187 2号炉跡(新)(南から)



写真188 2号炉跡(新・旧)(東から)



写真189 2号炉跡(新・旧)(南東から)



写真190 2号炉跡(新・旧)(北から)



写真191 2号炉跡(旧)土層断面(東から)



写真192 2号炉跡(新・旧)土層断面(東から)



写真193 2号炉跡(旧)完掘(南東から)



写真194 2号炉跡(新)完掘(東から)



写真195 SM1(東から)



写真196 SM1完掘(東から)



写真197 SM1(東から)



写真198 3号炉跡土層断面(南から)



写真199 SM2土層断面(南東から)



写真200 SM3土層断面(南西から)



写真201 SM2土層断面(東から)



写真202 SM3土層断面(西から)



写真203 SM5(北西から)



写真204 SM5土層断面(西から)





写真205 SM4土層断面(南東から)



写真206 SM4土層断面(南から)



写真207 SM4完掘(南東から)



写真208 SM5検出状況(西から)



写真209 SM5断割り状況(西から)



写真210 SM6 (西から)



写真211 SM6検出状況(西から)



写真212 SM6土層断面(西から)



写真213 SM6完掘(西から)



写真214 PG1-P73 (東から)



写真215 SK1・2・3土層断面(北から)



写真216 SK5・6土層断面(北から)



写真217 SK5・6土層断面(南東から)



写真218 SK5・6完掘(北東から)



写真219 SK5・6土器出土状況(東から)



写真220 SK7土層断面(東から)



写真221 SK7土器出土状況(東から)



写真222 SK7完掘(北東から)



写真223 SK08・11土層断面(東から)



写真224 SK09土層断面(南東から)



写真225 SK10土層断面(北から)



写真226 SK11土層断面(西から)



写真227 SK13土層断面(南から)



写真228 SK14土層断面(南東から)



写真229 SK15土層断面(東から)



写真230 SK16土層断面(東から)



写真231 SK17土層断面(南東から)



写真232 SK18土層断面(東から)



写真233 SK19・55土層断面(南東から)



写真234 SK19・55(南から)



写真235 SK19・55土器出土状況(南から)



写真236 SK21土層断面(南東から)



写真237 SK21完掘(南から)



写真238 SK25・26土層断面(南東から)



写真239 SK24土層断面(北東から)



写真240 SK24(南から)



写真241 SK44土層断面(東から)



写真242 SK47(北から)



写真243 SK46土層断面(西から)



写真244 SK46(西から)



写真245 SK48(東から)



写真246 SK49土層断面(南から)



写真247 SK50土層断面(北東から)



写真248 SK53土層断面(東から)



写真249 SK51・52土層断面(南東から)



写真250 SK51・52(東から)



写真251 SK54土層断面(東から)



写真252 SK54土器出土状況(東から)



写真253 SK54土器出土状況(東から)



写真254 SK56土層断面(北東から)



写真255 SK57土層断面(東から)



写真256 SK58土層断面(南から)



写真257 SK59・60土層断面(南から)



写真258 SK61土層断面(東から)



写真259 SK62土層断面(南から)



写真260 SK62土層断面南(東から)



写真261 SK64土層断面(東から)



写真262 SK64(東から)





写真263 SK66土層断面(西から)



写真264 SK67・68土層断面(南から)



写真265 SK67土層断面(西から)



写真266 SK67(北東から)



写真267 SK67土器出土状況(北東から)



写真268 SK69土層断面(北東から)



写真269 SK70土層断面(北から)



写真270 SK71土層断面(北西から)



写真271 SK72土層断面(北から)



写真272 SK72(北西から)



写真273 SK73土層断面(南から)



写真274 SK74土層断面(南から)



写真275 SK75土層断面(北から)



写真276 SK76土層断面(南東から)



写真277 SK77土層断面(南から)



写真278 SK78土層断面(南から)



写真279 SK79土層断面(南から)



写真280 SK80土層断面(南西から)



写真281 SK81土層断面(北西から)



写真282 SK82土層断面(南から)



写真283 SK85・86土層断面(東から)



写真284 SK85・86(南東から)



写真285 SK85土層断面(東から)



写真286 SK87(東から)



写真287 SI1土器出土状況(東から)



写真288 SI1土器出土状況(東から)



写真289 SI1(北から)



写真290 SI3(北西から)



写真291 SI2(北西から)



写真292 SI4(北から)



写真293 SI4P1土層断面(北西から)



写真294 SI4P5土層断面(東から)



写真295 SI4土層断面(南から)



写真296 SI23(北西から)



写真297 SB1柱穴列(北東から)



写真298 SB2検出状況(西から)



写真299 SB2(北から)



写真300 SB2 (北から)



写真301 SB2 (北西から)



写真302 SB3 (北から)



写真303 SB3 (西から)



写真304 SB3検出状況(北から)



写真305 SB4 (北東から)



写真306 SB4検出状況(北から)



写真307 SB4 (北から)



写真308 SB5土層断面(北西から)



写真309 SB5 (北西から)



写真310 SI9作業風景



写真311 SI6作業風景



写真312 3号炉跡3作業風景



写真313 SI18周辺作業風景



写真314 1・2号炉跡作業風景



写真315 SI24周辺作業風景



写真316 SI18作業風景



写真317 SI13作業風景





写真318 SI1作業風景



写真319 1・2号炉跡作業風景



写真320 SI24作業風景



写真321 SI6作業風景



写真322 技術支援(奈良文化財研究所ほか)



写真323 技術支援(二本松市職員)



写真324 技術支援(二本松市職員)



写真325 技術支援(白河市職員)



写真326 技術支援(奈良文化財研究所職員)



写真327 技術支援(奈良文化財研究所職員)



写真328 技術支援(奈良文化財研究所職員)



写真329 技術支援(奈良文化財研究所職員)



写真330 技術支援(奈良文化財研究所職員)



写真331 技術支援(茨城県職員)



写真332 文化庁・福島県教育委員会現地視察



写真 333 現地説明会



写真334 原可第一小学校生徒見学風景



写真335 現地説明会



写真336 縄文土器(1)



写真337 縄文土器(2)



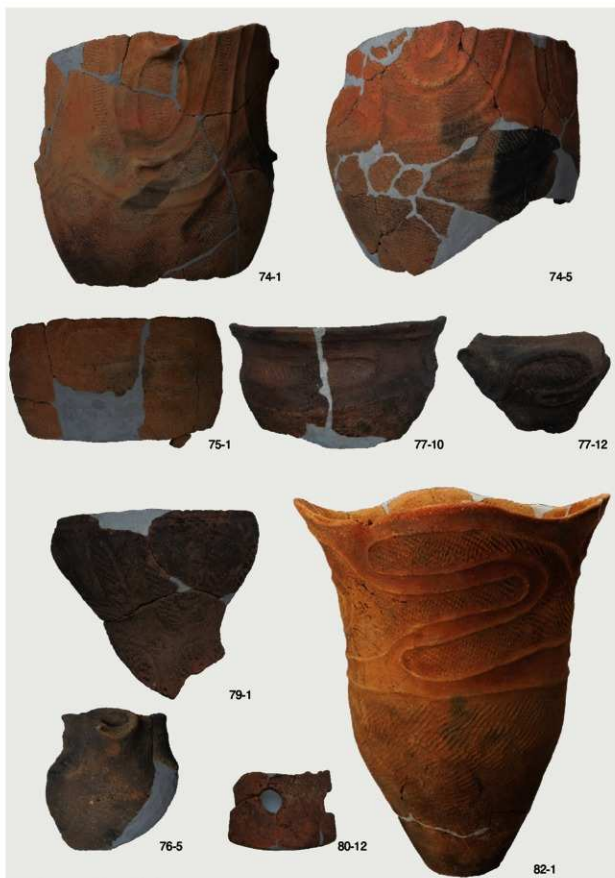


写真338 縄文土器(3)



写真339 縄文土器(4)



写真340 縄文土器(5)

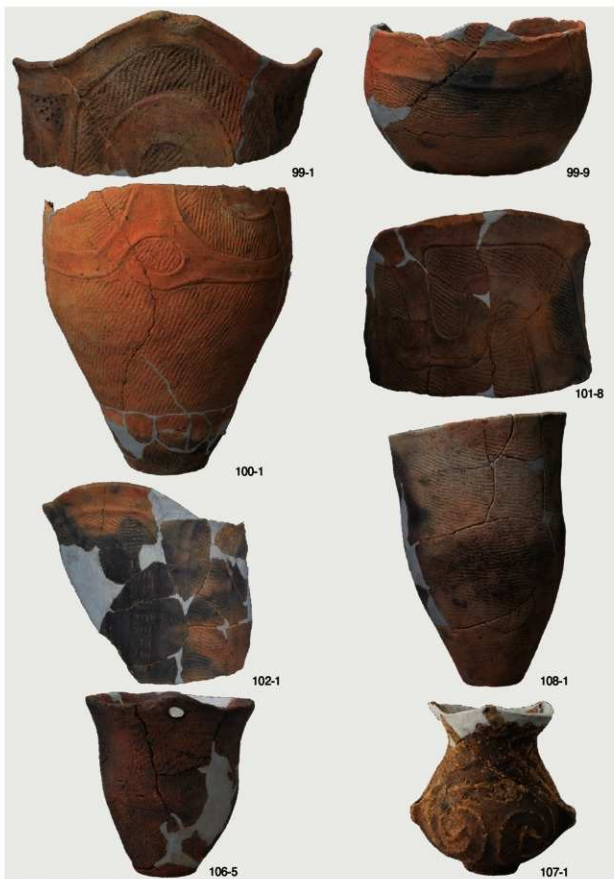


写真341 縄文土器(6)



写真342 縄文土器(7)



写真343 縄文土器(8)

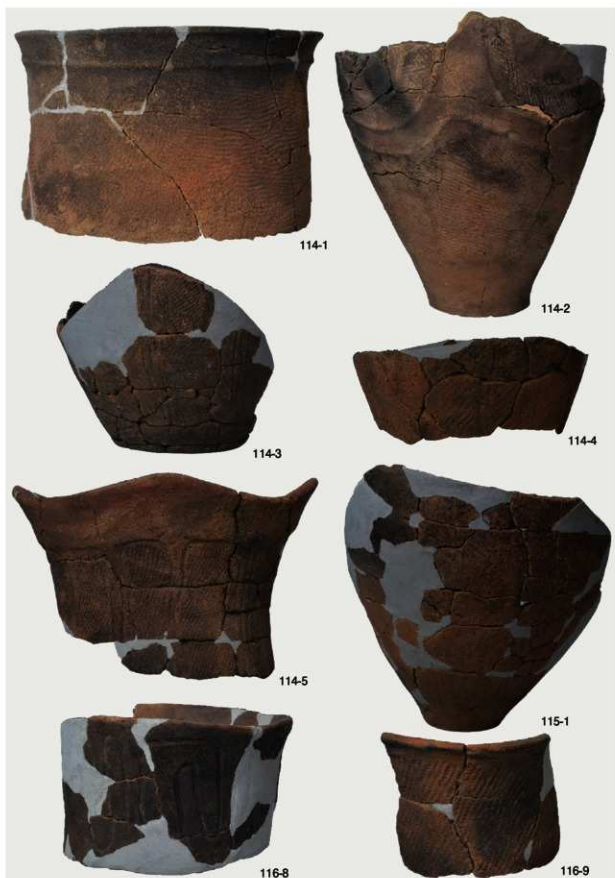


写真344 縄文土器(9)



写真345 縄文土器(10)





写真346 石器(1)





写真348 奈良・平安時代遺物、土製品

## 報告書抄録

ふりがな	あずまちょういせき（2じちょうさ）						
書名	東町遺跡（2次調査）						
副書名	防災集団移転促進事業（小川町地区）に伴う発掘調査						
シリーズ名	南相馬市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第36集						
編著者名	川田 強・荒 淑人・齋藤貴史・山崎孝盛・松本 茂						
編集機関	福島県南相馬市教育委員会文化財課						
所在地	〒975 - 0062 福島県南相馬市原町区本陣前一丁目70 TEL 0244-24-5284						
発行年月日	西暦 2021（令和3）年3月26日						
所収遺跡	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯		調査期間	面積 (㎡)	調査 原因
			東経				
あずまちょう 東町遺跡	福島県南相馬市 原町区東町3丁目地内	212500170	37° 38' 36"		20140407	832	防災集団 移転促進 事業
			140° 57' 54"		20140729		
所収遺跡	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
あずまちょう 東町遺跡	集落	縄文	竪穴住居跡・ 土坑（墓坑・ 貯蔵穴）・土 器埋設遺構	縄文土器・石鏃・石 匙・磨石・敲石・石皿・ 嘴状石器・打製石斧・ 腕状石器・石槍・磨 製石斧・垂飾品・土 器片製円盤・		縄文時代中期後半か ら末葉（大木8b式・ 大木9式・大木10 式）にかけての竪穴 住居跡29軒。複式 炬を伴うものが主 体。	
	集落	奈良 ・ 平安	竪穴住居跡・ 掘立柱建物・ 土坑	土師器・須恵器		8～9世紀の集落。 竪穴住居跡5軒、掘立 柱建物柱建物5棟。	

---

印刷 2021年3月26日

発行 2021年3月26日

南相馬市埋蔵文化財調査報告書 第36集

東町遺跡（2次調査）

～防災集団移転促進事業（小川町地区）に伴う発掘調査～

編集 南相馬市教育委員会文化財課

発行 南相馬市教育委員会

〒975-0062 福島県南相馬市原町区本陣前一丁目70番地

印刷 有限会社 ライト印刷所

〒975-0073 福島県南相馬市原町区北新田字信田370番地の1

---